

名護市文化財調査報告書 -18

# 屋部前田原貝塚

2007（平成 19）年 3 月 名護市教育委員会

やぶめいだばるかいづか  
**屋部前田原貝塚**

—国道449号（名護バイパス工区）道路整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

2007（平成19）年3月  
名護市教育委員会

## あいさつ

本書は国道449号(名護バイパス工区)道路整備事業に伴い、平成14年度から平成17年度に実施された屋部前田原貝塚の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、名護市には約80ヶ所の遺跡及び遺物散布地が確認されています。屋部前田原貝塚もその中の一つの遺跡ですが、これら埋蔵文化財は地上で目にすることのできる天然記念物や建造物、民俗芸能などの文化財とは異なり、地下に埋蔵されているためその存在と価値が認知されにくい性質をもっています。しかし、他の文化財と同様にその地域の成り立ちや文化を考える上で必要不可欠なものなのです。今回の調査においても、地中を掘り起こして初めて分かったことがあります。想定した年代を越る遺物の出土、炉跡や住居跡、埋葬人骨の発見など私たちの祖先の生活を考察する多くの貴重な発見がありました。

これらの成果をまとめた本書が屋部地域や名護市の歴史を知る上で貴重な資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深める一助になれば幸いです。

末尾に、本事業を実施するにあたり多くの方々にご協力をいただきました。

特に、埋蔵文化財の記録保存にご理解・ご協力をいただきました沖縄県北部土木事務所、屋部区の皆様には大変お世話になりました。深く感謝を申し上げ、刊行のあいさつとします。

平成19年3月  
名護市教育委員会  
教育長 稲嶺 進

## 例　言

1. 本報告書は、平成14年度から平成17年度にかけ実施した屋部前田原貝塚緊急発掘調の内容を記録したものである。
2. 発掘調査は、国道449号（名護バイパス工区）道路整備事業に伴うもので、事業主体者である沖縄県北部土木事務所より名護市が委託を受け、名護市教育委員会が実施した。
3. 現場における発掘調査は平成14年7月2日から平成18年1月11日まで行った。
4. 発掘調査体制については、第Ⅱ章第4節に記す。
5. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行1/50,000、1/25,000地形図と名護市役発行の地形図を使用した。
6. 屋部前田原貝塚の発掘調査にあたり、現場における遺構解釈や資料整理作業における遺物の同定など、下記の方々のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表す。

朝岡康二、安里 進、五十嵐俊雄、上原 静、宇田津徹朗、江上幹幸、大城逸朗、小田静夫、岸本義彦、金武正紀、国吉房次、島袋利恵子、新里貴之、瀬戸哲也、竹中正巳、知名定順、樋泉岳二、土肥直美、中村 愿、藏田真一、宮城弘樹、盛本 熱（敬称省略、五十音順）
7. 本書の作成にあたり、執筆は下記のように分担した。

仲宗根禎（第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章第1節、第Ⅴ章第1節、第Ⅵ章第1節、第Ⅷ章）  
赤嶺信哉（第Ⅳ章第2節、第Ⅴ章第2節）  
比嘉史子（第Ⅵ章第2節）  
宮城智浩（第Ⅵ章第2節）  
樋泉岳二（第Ⅶ章第1節）  
土肥直美（第Ⅶ章第2節）  
株式会社古環境研究所（第Ⅶ章第3～9節）  
パリノ・サーヴェイ株式会社（第Ⅶ章第10節）  
宇田津徹朗、藏田真一（第Ⅶ章第11節）
8. 発掘調査において得られた出土資料及び実測図・写真などの記録は、すべて名護市教育委員会にて保管している。
9. 本報告書に掲載した遺物の掲載番号は、地区毎に連番を付した。なお、Ⅰ地区は1001番、Ⅱ地区は2001番、Ⅲ地区は3001番からとしている。図、図版とともにこれを掲載番号としている。
10. 図版については、紙幅の都合掲載を省略している。

# 目 次

あいさつ	i
例言	iii
目次	v
報告書抄録	vi
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
第1節 名護市の位置と概要	1
第2節 名護市の地理的・歴史的環境	3
第3節 屋部前田原貝塚の位置と環境	5
第Ⅱ章 調査経過	
第1節 調査に至る経緯	8
第2節 調査区の設定	9
第3節 調査経過	10
第4節 調査体制	12
第Ⅲ章 試掘調査の報告	15
第Ⅳ章 I 地区の調査報告	
第1節 層序と遺構	20
第2節 出土遺物	22
第Ⅴ章 II 地区の調査報告	
第1節 層序と遺構	31
第2節 出土遺物	44
第VI章 III 地区の調査報告	
第1節 層序と遺構	81
第2節 出土遺物	95
第VII章 自然科学分析の報告	
第1節 屋部前田原貝塚から出土した脊椎動物遺体群	142
第2節 屋部前田原貝塚出土の人骨	163
第3節 屋部前田原貝塚の土層とテフラ	168
第4節 屋部前田原貝塚における放射性炭素年代測定	174
第5節 屋部前田原貝塚における植物珪酸体分析	176
第6節 屋部前田原貝塚における花粉分析	183
第7節 屋部前田原貝塚における樹種同定	190
第8節 屋部前田原貝塚における種実同定	193
第9節 屋部前田原貝塚出土黒曜石の産地推定分析	194
第10節 くびれ平底底部の圧痕観察	198
第11節 屋部前田原貝塚出土土器および遺跡土壤のプラント・オパール分析	203
第VIII章 総括	213
図版	219

# 報告書抄録

ふりがな	やぶめーだばるかいづか							
書名	屋部前田原貝塚							
副書名	国道449号(名護バイパス工区)道路整備事業に伴う緊急発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	名護市文化財調査報告書							
シリーズ番号	18							
編著者名	仲宗根禎、赤嶺信哉、比嘉史子、宮城智浩、樋泉岳二、土肥直美、株式会社古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、宇田津徹朗、藏田真一							
編集機関	名護市教育委員会 文化課 文化財係							
所在地	〒905-0014 名護市港二丁目1番1号 名護中央公民館内 電話:0980-53-3012							
発行年月日	2007(平成17)年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
屋部前田原 遺跡	沖縄県 名護市	名護市 47209	屋部地区 5-7	26度 36分 23秒	127度 56分 51秒	20020702 ↓ 20060111	I 地区 約500m <sup>2</sup> II 地区 約550m <sup>2</sup> III 地区 約600m <sup>2</sup>	一般国道449号 道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
屋部前田原 貝塚	集落跡	沖縄貝塚時代 前～中期	住居跡 埋葬遺構	土器、石器、石 鏃	近世の炉跡が検出さ れ、残りの良い遺構に ついて剥取り処置を行 い保存を図った。			
		沖縄貝塚時代 後期	住居跡	土器、石器、弥 生土器、管玉				
		グスク時代初期 (11-12世紀)	住居跡	グスク土器、カ ムイヤギ、玉縁 白磁、滑石製石				
		近世琉球 (17-18世紀)	炉跡					
要約	III地区では貝塚時代の住居跡と思われる遺構が発掘され、また埋葬人骨が検出された。 II地区ではグスク時代初期の掘立柱建物跡が検出された。							

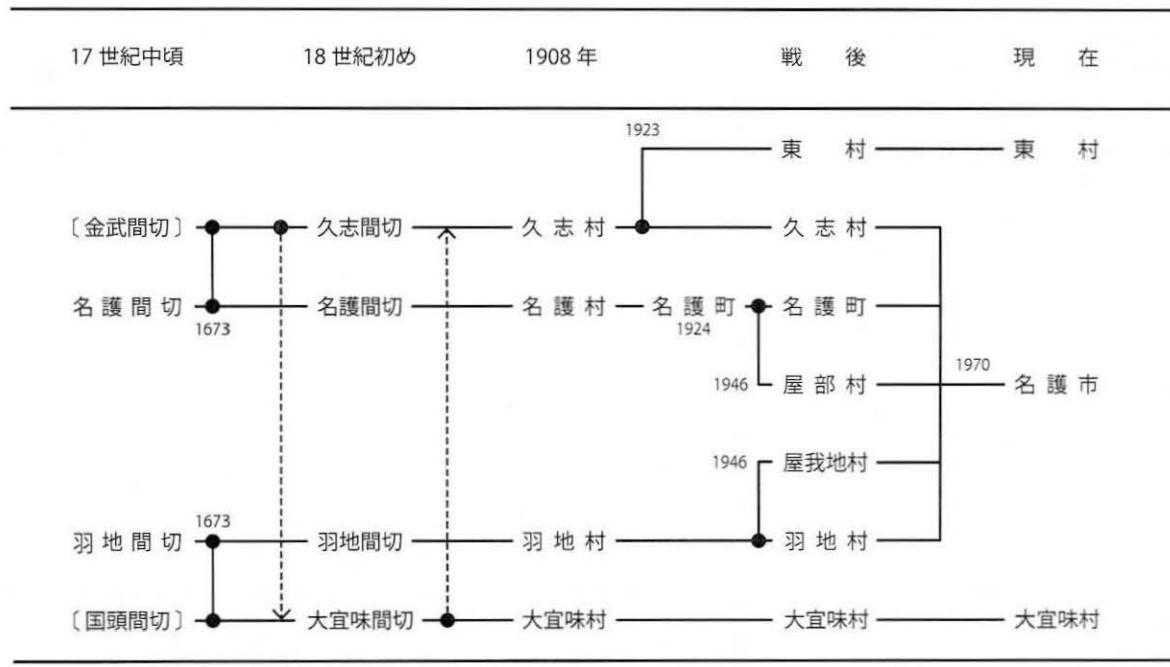
# 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

## 第1節 名護市の位置と概要

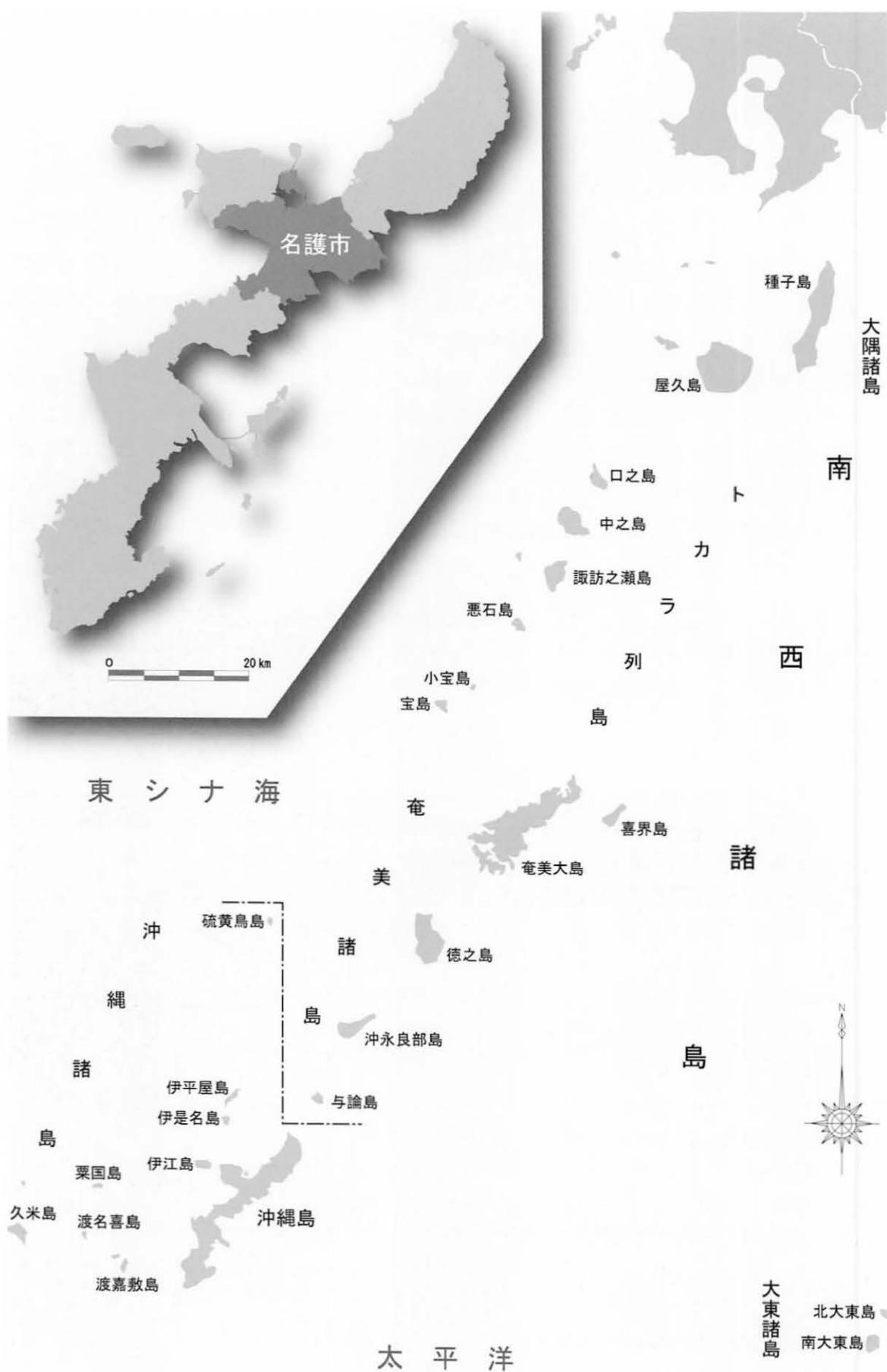
名護市は、沖縄本島北部に位置し、昭和45（1970）年8月1日に旧名護町・屋部村・羽地村・屋我地村・久志村の1町4村が合併し誕生した（第1図）。市域の北東部は大宜味村と東村、西部は今帰仁村と本部町、南部は恩納村と宜野座村の1町5村に隣接している。県都那覇市から北に約64kmの距離があり、国道58号、国道329号及び沖縄自動車道によって結ばれている。沖縄の空の玄関口である那覇空港からは、沖縄自動車道を使用して車で約1時間を使う。

総面積は210.33km<sup>2</sup>で、県内でも竹富町（334.02km<sup>2</sup>）、石垣市（229km<sup>2</sup>）に次ぐ面積を誇り、その約60%を山林が占める。市域の西部は険しい山々を有する屋部地区、北部は稻作で知られた羽地地区や塩田で知られた屋我地地区、東部は山間部が美しい久志地区、中央部には平野と丘陵が広がる名護地区と変化に富んだ景観を有する地域からなる自然豊かな市である。市域の中央には、名護岳（標高345.2m）を中心に標高300m級の山々が連なり起伏の大きい丘陵地を構成し、そこに降った雨を集めて源河川、羽地大川、我部祖河川、汀間川、大浦川等の中小の多くの川が流れる。山間部から流れてきた川の河口付近には沖積平野が形成され、そこに集落が形成される。この集落の後背湿地は、近世以降水田として利用され、山、海とともに個性豊かな山原型の土地利用が形作られてきた。

人口は約58,725人、世帯数は約29,319世帯を数え（平成18年3月31日現在）、55行政区から構成されている。



第1図 名護地区の間切から名護市への変遷



第2図 沖縄本島及び名護市位置図

## 第2節 名護市の地理的・歴史的環境

名護市の地形は大きく①本部半島部、②脊梁山地部、③両者に挟まれた丘陵地域と屋我地地域の3つに分けることができる（第3図）。

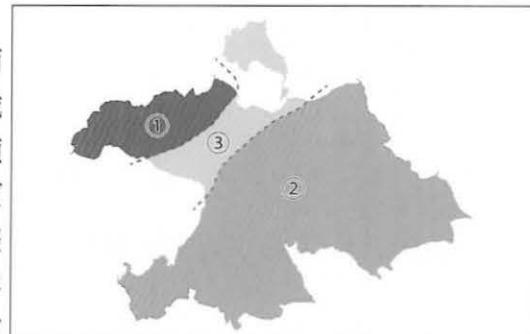
本部半島部は、嘉津宇岳（標高448m）、八重岳（標高453m）、安和岳（標高432m）等の本部半島にある高い山々を含む地域である。この地域は、表層地質が古い時代の地層で構成されるため、谷が発達し山々の傾斜が大きい地形を形成する。表層地質は、灰色石灰岩、チャート、黒色千枚岩～黒色頁岩を主体とした古生代二疊紀～中生代末期の本部層や与那嶺層、湧川層が分布する。

脊梁山地部は、名護岳（標高345.2m）、多野岳（標高385.2m）、久志岳（標高335m）、辺野古岳（標高332m）等の沖縄島の脊梁山地を形成する地域である。辺野古区もこの地域に含まれる。この脊梁山地を形成する沖縄島の島軸は、北東一南西の軸を持ち、山々や丘陵の高さにおいて北側に高く、南側に低い傾向がある（第4図）。この地域は国頭層群（名護層、嘉陽層）からなる地形であるが、局部的に国頭礫層で構成される段丘面の発達が見られる。その傾向は東海岸において顕著である。段丘面より海側では、山地が海岸へ急角度で接するが、この高さも北側では急斜面をなし、南側に行くほど傾斜は弱くなる。表層地質は、黒色頁岩～黒色千枚岩、緑色岩類、褐色砂岩層や黒色頁岩層を主体とする名護層や嘉陽層が分布する。

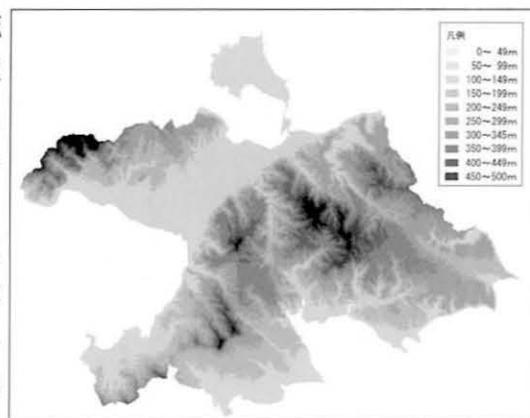
本部半島部と背梁山地部に挟まれた丘陵地域は、市の西部に広がるなだらかな低い丘陵を形成している。丘陵地域は、本部半島部の古い時代の岩石と脊梁山地部を作る国頭層群との間を埋めるように堆積した礫層を中心としたなだらかな低い丘陵で名護地峡を形成している。我部祖河～振慶名～田井等に広がる平野は、古くから人工的な土地の平坦化が行われ、水の豊かな水田地帯として「ハネジターブックワ」と呼ばれた。表層地質は、呉我礫層や国頭礫層が表層地質の主体となって分布し、局所的に仲尾次砂層、琉球層群の那覇石灰岩や石灰質砂層等が見られる。さらには与那嶺層と見られる千枚岩や石灰岩が宇茂佐に見られる。また、屋我地地域では、与那嶺層の千枚岩や石灰岩、チャート等が見られる。

名護市の歴史概況は、前述のように昭和45（1970）年に1町・4村が合併によって誕生した。市内には55の集落（行政区）があり、名護市を構成する行政の基本単位となっている。これらの集落は、屋部地区や羽地地区及び名護地区の現市街地等の平野部を控えている地域では、近世以前に起源をもつ集村をなす「平地百姓村」が分布し、山がちな地域では、近世以降に成立した散村形態をなす「屋取村」が分布している。

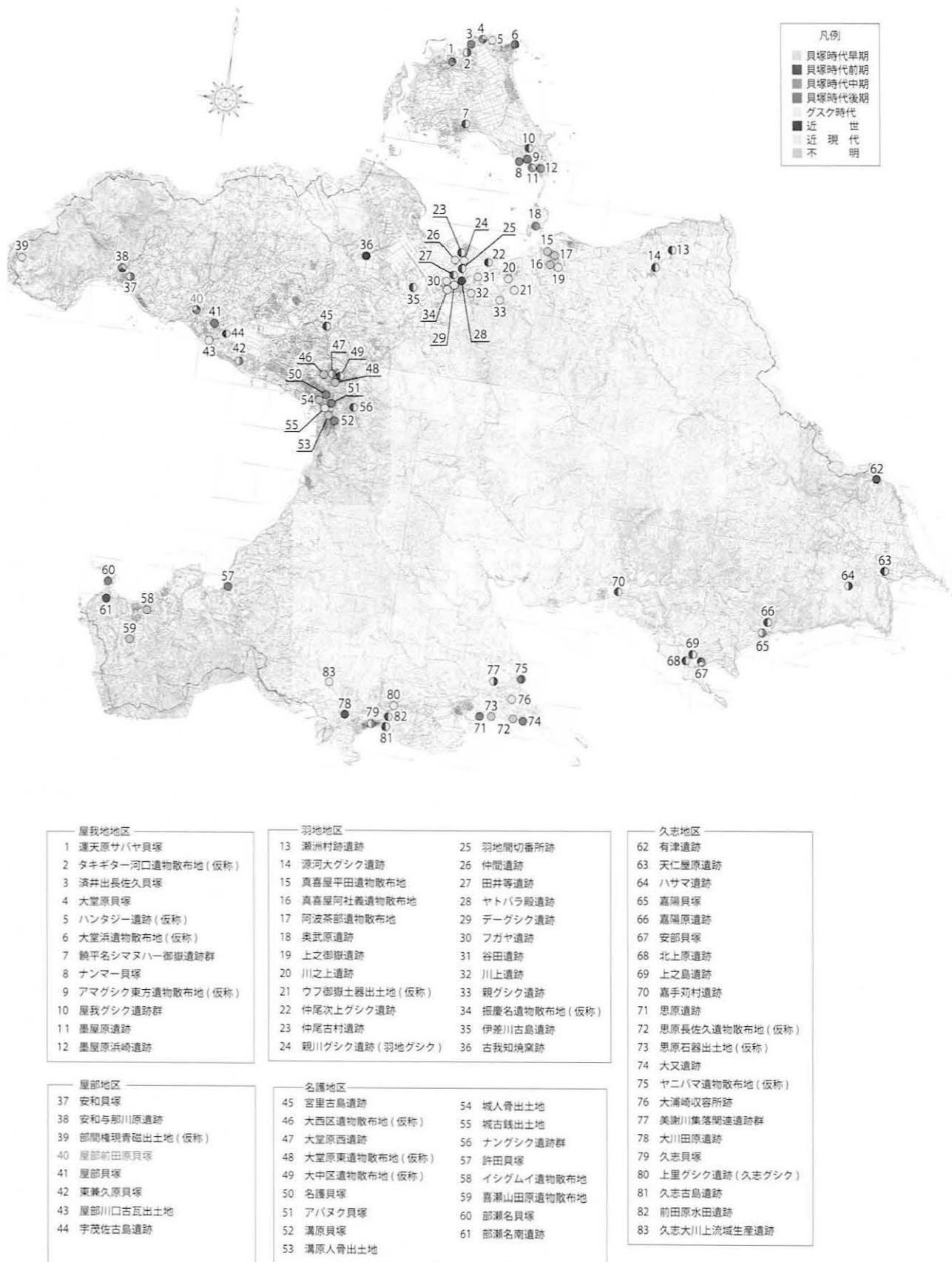
市内には、これまでの遺跡分布調査や発掘調査等によって約80箇所の遺跡の存在が確認され、その殆どが複数の時期に跨る複合遺跡である。これらの遺跡の調査成果から、貝塚時代早期から現代に至るまで人間活動の場となっていたことが分かっている。市内における遺跡のうち、先史時代（貝塚時代）に属する遺跡は約30箇所である。



第3図 名護市における地形大区分



第4図 名護市の標高分布高度



第5図 名護市の遺跡分布図

### 第3節 屋部前田原貝塚の位置と環境

屋部前田原貝塚の所在する屋部区は、名護市55区の内の1区（字）である。名護市の西側、名護湾に面した本部半島の付根に位置し、旧屋部村の中心地で役場や郵便局などがおかれた。

集落の東側を東屋部川が流れ、南は名護湾に面する。国道449号が集落を東西に横切り、西屋部川沿いを山手に向けて、県道114号線（名護運天港線）が分かれる。北の山地に源を発する西屋部川は中山・旭川区を下って屋部の集落の中を通り、河口で東屋部川と合流して名護湾に注ぐ。その河口はかつて山原船などが出入りした天然の良港であった。

屋部は、『おもろさうし』には「やぶ」、『絵図郷村帳』には「屋ぶ村」、『琉球国高究帳』には「屋ふ村」と記され、田32石余、畠9石余とある。『琉球国由来記』で屋部村の御嶽として「セジアラノ嶽」と「富盛之嶽」が記されている。現在の集落の背後にある「フシヌウタキ」がそのどちらに対応するかは不明である。フシヌウタキのある丘陵の東には屋部寺、そこから南下する神道は集落を抜けてトワヤにつながる。屋部川の河口近くにユアギムイという拝所があり、そこは宇茂佐区と合同の拝所だと伝えられる。

現在の屋部は、屋部川のほとりにあるプルジマ（古島）から移ってきたという伝承がある。仲北山が落城した際、屋部川沿いに逃げ延びた者がこの古島に住み着き、世が落ち着いたころに、1軒は宇茂佐に、他6軒は屋部に移り、それぞれ集落を形成したという。そのプルジマが「宇茂佐古島遺跡」である。

「宇茂佐古島遺跡」は、宇茂佐の区画整理に伴い緊急発掘調査が行われ（名護市教委1992、1999）、15世紀から17世紀を主体とするグスク時代～近世の遺物が出土しており、上記の伝承を裏付けている。また、中国産の陶磁器や高麗系瓦も出土しており、屋部川の河口を港とした交易の地としても注目されている。

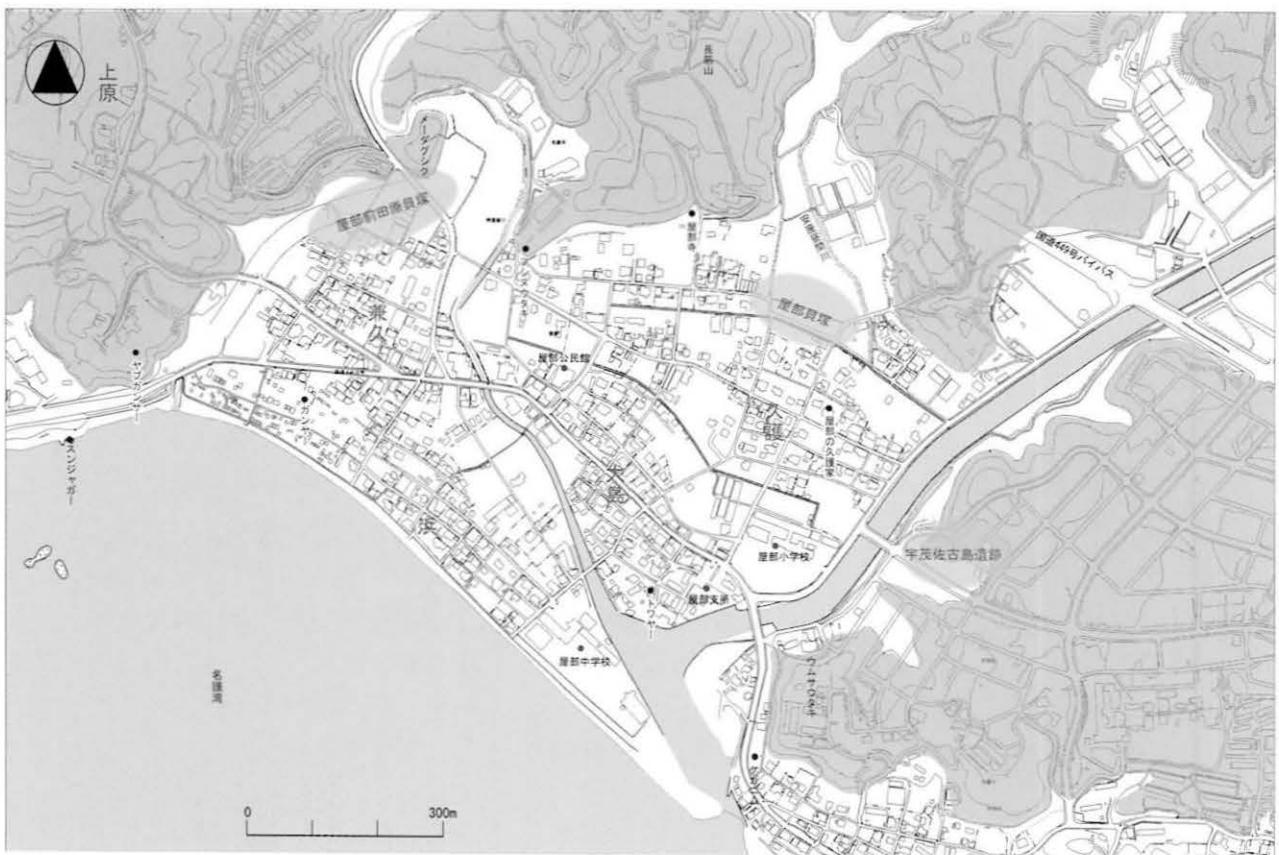
屋部前田原貝塚から東に約600m行った低地には「屋部貝塚」がある。その貝塚は、沖縄貝塚時代後期からグスク時代及び近世にかけての遺跡で、くびれ平底土器などが出土している（名護市教委2008）。本貝塚とあわせて屋部地域の歴史を考える上で、貴重な遺跡となっている。

集落は現在11班からなるが、伝統的には大島・久護・兼久・浜・上原の5つに分けられている。大島・久護が古く、兼久・浜の集落は新しいと言われ、上原は廃藩置県後に士族が寄留して形成された集落である。明治13年（1880）の統計資料によると、戸数263戸、人口1,426名。終戦直後の昭和21年（1946）に名護町から独立した屋部村の中心地で、役場や郵便局、小学校や中学校などが存在した。昭和45年（1970）、名護市市制施行に伴い名護市に合併して現在に至る。集落と集落の間の低地や河川沿いには、かつて水田が広がっていたが、今はその水田も埋められサトウキビや野菜畑に変わっている。

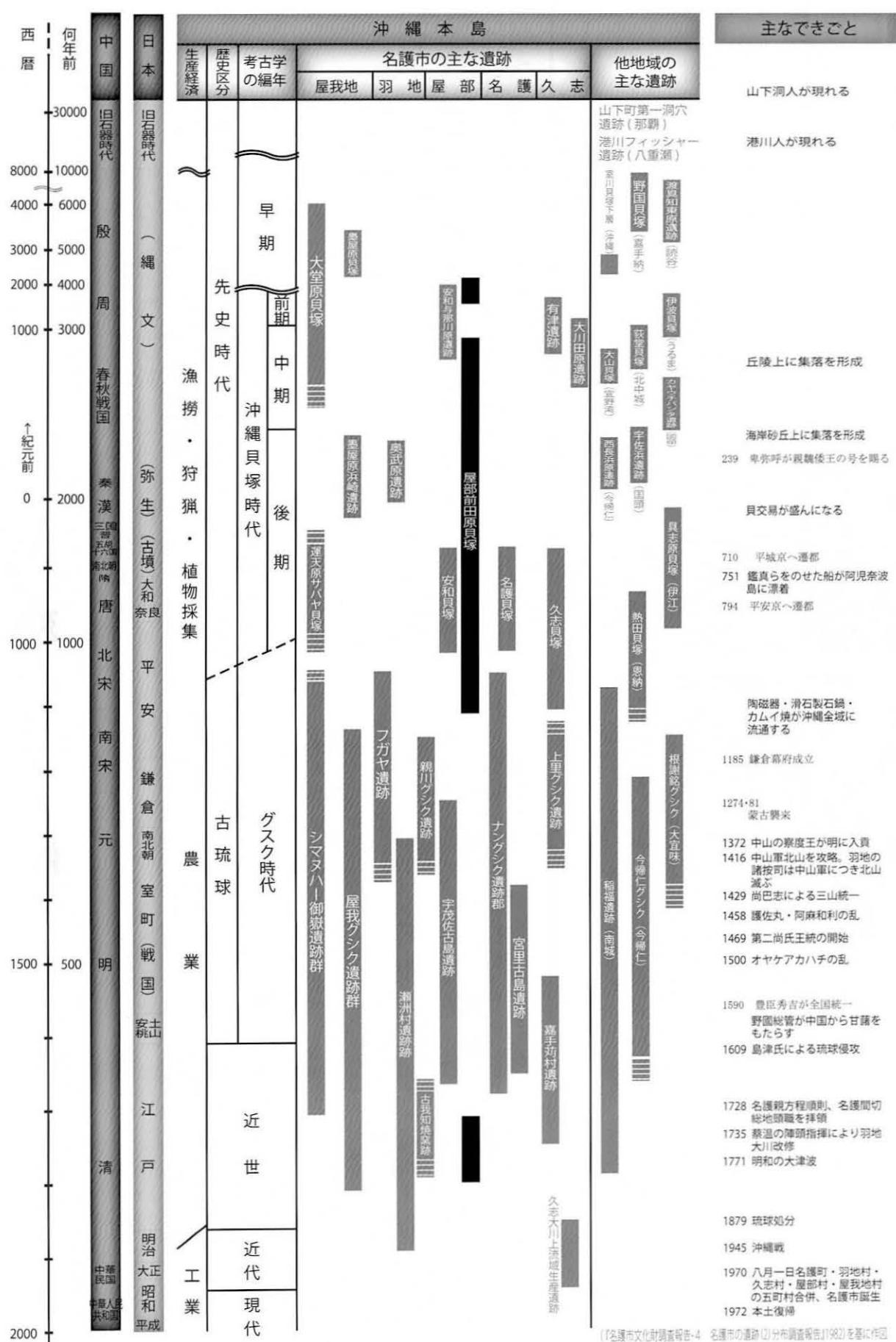
屋部前田原貝塚の所在する沖縄県名護市字屋部422番11、457番5、469番5、470番3の一帯には、小字では前田原に所在することから遺跡名はこれに由来する。現在の名護湾の海岸から直線で約500m内陸にあり、標高3m前後の低地に位置する。遺跡東側を西屋部川が流れ、南側の名護湾に注ぐ。北側には前田グスクが立地し、東側には屋部貝塚が所在するなど先史時代以来、今まで遺跡一帯は住宅地や畑に利用されるが、昭和30年代までは水田として利用されていたという。遺跡周辺の丘陵地の地層には、与那嶺層（チャート・石灰岩・千枚岩・緑色岩類他）と本部層（石灰岩）と国頭礫層（礫層・非石灰質砂泥層・泥炭層）が見える。植生は、畑地とホルトノキ低地林、リュウキュウマツニンジンが遺跡周辺を取り巻く。



図版1 屋部前田原貝塚周辺の航空写真



第6図 屋部前田原貝塚と周辺の遺跡位置図



第7図 名護市の主な遺跡年表

## 第Ⅱ章 調査経過

### 第1節 調査に至る経緯

屋部前田原貝塚は、昭和61年（1986）2月16日、屋部の前田原にて屋部字誌づくりのメンバーによる現地踏査にて発見される。その際に地表面から採集された遺物から、沖縄貝塚時代後期後半からグスク時代の遺跡であると予想された。

遺跡発見後、平成4年（1992）に国道449号（名護バイパス）道路整備事業区域内における埋蔵文化財等の照会がなされたのをきっかけに、平成5～8年は国道449号のルート変更等の開発協議や埋蔵文化財の取扱いについて協議が行われる。平成9年（1997）3月5日付け北土第3628号にて北部土木事務所からの試掘調査依頼を受け、名護市教育委員会は同年5月15日～20日にかけ埋蔵文化財の存在を明らかにすることを目的とする試掘調査を実施した。平成13年（2001）12月から翌14年3月にかけ、前回の試掘調査を補うため調査を実施する。

当初、屋部前田原貝塚は沖縄貝塚時代後期後半の遺跡と考えられていたが、平成13年度の調査では貝塚時代後期後半の土器が出土した層よりも下の層において貝塚時代後期前半の土器が出土した。さらにその下、標高0.25mの層位より面縄前庭式土器が出土した。このことにより、屋部前田原貝塚の時期は当初の予測時期を大きく遡り、貝塚時代早期末からグスク時代初期の時期が存在することが確認された。

その結果を受け、平成14年3月26日に沖縄県（北部土木事務所）と名護市教育委員会間において屋部前田原貝塚の記録保存に関する協定書を締結し、平成14年度から本発掘調査の事業が開始される。

平成15年4月1日、沖縄県北部土木事務所と名護市教育委員会間において業務委託契約が締結され、2年目の本発掘調査を実施。同年10月27日、沖縄県北部土木事務所と名護市教育委員会間の協議により、平成14年3月26日に締結した協定書の内容について、「第5条（発掘調査の期間）」を見直し変更協定を締結する。

平成16年度には、4月1日～平成17年3月25日までを調査期間とする業務委託契約を締結し調査に着手する。平成16年度の発掘調査は4月1日から開始するが、前年度から引き続きⅡ地区の調査から着手した。Ⅱ地区は前年度の調査において沖縄貝塚時代後期後半の住居跡や柱穴群、17世紀末～18世紀頃の炉跡遺構が確認され注目された調査区である。その遺構を一般市民に公開するために、4月17日に現場説明会を行った。その後、記録を取り遺構面に黒砂を撒き埋め戻し作業を行なう。

5月27日よりⅠ地区の調査を再開。A-17グリットからD-18グリット（128m<sup>2</sup>）へ調査範囲を広げた。8月25日にはⅠ地区の埋め戻し作業を行い、8月中にてⅠ地区及びⅡ地区の調査を終了する。9月1日よりⅢ地区の調査を開始している。

また、前年度のⅡ地区の調査で注目された近世期の炉跡遺構がⅢ地区においても検出された。前年度は9基の炉跡が検出されたが、記録保存を目的とする調査であるため埋め戻しを行った経緯があり、今年度検出された10号・11号炉跡は従来の実測図や写真記録に加え、炉跡の型を記録する立体記録の作製を行った。

## 第2節 調査区の設定

調査区は道路工事区域を対象範囲とした。調査グリッドは工事に用いられている20mピッチのセンター杭No.117 (X=66738.475, Y=44671.050) からNo.116 (X=66744.601, Y=44690.088) までの直線ラインを基準とし、東西南北に一辺4m四方の升目 (16m<sup>2</sup>) を単位とするグリッドを設け実施した。グリッド名は西から東へ二桁の算用数字を昇順に付し、南北にアルファベットを付し、A-11、A-12・・・のようにアルファベットと算用数字を用いてグリッド名としている。

試掘調査の成果などに基づいて、I地区は470番3、469番5（計2,008.56m<sup>3</sup>）。II地区は422番11（計2,287.13m<sup>3</sup>）、III地区は457番5・ほか14筆（約4,600m<sup>3</sup>）を調査対象地域としている。実際の調査はI地区約560m<sup>3</sup>、II地区約530m<sup>3</sup>、III地区610m<sup>3</sup>、総計約1,700m<sup>3</sup>の記録保存調査を実施した。



第8図 調査地区の設定

## 第3節 調査経過

### ①平成13年度（2001）

本発掘調査に先駆け平成13年度（2002年1月7日～3月15日）に試掘調査を実施した。試掘調査の目的は、平成9年度（1997年5月15日～同月20日）に実施した範囲確認調査を補い、平成14年度以降に実施される本発掘調査の全体計画を明らかにすることを目的とした。

試掘調査は、H-9グリッドからH-13、H-18、C-11、B-23、C-33の順で実施した。H-9、H-13、H-18グリッドでは、当初から予想されていた沖縄貝塚時代後期後半頃の土器片が出土するものの、比較的出土数が少ない地点であった。また、C-33グリッドも自然遺物の貝類の出土が多く、土器の出土は1点のみであった。これに対し、C-11グリッドでは多くの土器片が検出され、とりわけⅧ層ではその密度が高く保存状態も良好と判断された。

B-23グリッドでは湧水を防ぎ遺物包含層の堆積深度を確認するため、鋼矢板を打ち込み十分な安全対策を行ったうえで試掘調査を実施した。その結果、沖縄貝塚時代後期の遺物包含層よりも250cm下位の地点において沖縄貝塚時代早期末の面縄前庭式土器の検出が確認された。

試掘調査の結果、平成14年度の本調査ではC-11グリッドを中心とする地区から調査を実施するとともに、用地の制約により範囲確認を行えなかった地区においても引き続き試掘調査を行う必要性が課題として残った。

### ②平成14年度（2002）

平成14年度の発掘調査は7月2日から実施した。本年度からは本発掘調査と位置づけ調査を実施するが、昨年度の試掘調査において用地買収済みの土地にて花卉栽培が行われているなど、試掘調査が調査対象範囲の一部に限られたため、試掘ポイントを設け範囲確認調査を第一の目的とした。

7月2日から9月27日にかけA-11～14グリッド、B-11～14グリッドの本発掘調査を実施した後、9月30日より422-11番地の用地が確保されたため、H-25グリッドからH-28、H-36、H-41、E-40、Z-37、A-34グリッドの順に試掘調査を行った。その結果、これら7地点のうちE-40、Z-37、A-34グリッドにおいて地表下70cmから堆積層の厚い場所では150cmの深度にわたり土器片や石器、炉跡遺構が確認された。

11月17日からは県道72号線（名護・運天港線）を東側に超えた467-4番地内にてC-46、C-49グリッドでの試掘調査を開始する。両試掘調査区では、地表下90～160cmの砂礫層より沖縄貝塚時代中期に属する土器群がこれまでにない密度で確認された。この結果により、467-4番地に隣接する457-1、457-2番地における試掘調査が急務となるが、457-1番地での調査は年明け2003年2月28日のサトウギビ収穫終了を待っての実施となった。

2003年1月7日から2月28日までの期間は、調査の対象を本調査区のI地区へと戻し、A-15～D-16グリッドへと調査区を拡大した。その後の3月3日から457-1番地内のG-60、D-57、A-54グリッドで試掘調査を行った。

### ③平成15年度（2003）

平成15年度の発掘調査は5月8日から実施した。屋部前田原貝塚の発掘調査対象範囲を便宜上、I、II、III地区の3つに区分しているが、3つの地区の中で比較的調査範囲の小さいII地区より調査を開始し、I地区の調査へ戻る予定であった。

II地区での調査は、昨年度の試掘調査により埋蔵文化財が確認されたZ-37グリッドを起点とし、南

側へ調査区を拡大していった。調査面積は約400m<sup>2</sup>であるが、沖縄貝塚時代後期後半からグスク時代初期頃にあたるⅦ層では建物の柱跡と考えられる堅穴が約200基確認され、Ⅷ層の上位層より掘り込まれた近世期の炉跡が数基確認された。

11月27日から2004年1月20日までは、調査体制を二分しⅠ地区のA-17～D-18グリッド（128m<sup>2</sup>）の調査を並行して行うものの、終始Ⅱ地区の調査に時間を費やすこととなった。

#### ④平成16年度（2004）

平成16年度の発掘調査は4月1日から開始するが、前年度に引き続きⅡ地区の調査から着手した。Ⅱ地区では前年度の調査においてグスク時代初期の住居跡や柱穴群、17～18世紀頃の炉跡遺構が確認され注目された調査区である。その調査内容を市民に公開する現場説明会を4月17日に行った。その後、記録を取り遺構面に黒砂を敷き埋め戻し作業を行った。

5月27日よりⅠ地区の調査を再開し、A-17グリッドからD-18グリッドへ調査範囲を拡大した。

8月25日にはⅠ地区の調査を終了し、埋め戻し作業を行い、8月末にてⅠ地区およびⅡ地区の調査を終了した。

9月1日よりⅢ地区の調査を実施する。

#### ⑤平成17年度（2005）

平成17年度の発掘調査は、前年度に引き続きⅢ地区を対象とし4月11日より開始した。Ⅲ地区は沖縄貝塚時代中期の土器を主体とし、土器や石器など多くの遺物・遺構が検出されるなか、当初の計画では9月末を現場における発掘調査の終了と位置づけていたが、住居跡の検出に伴い調査区を南東方向に拡張し記録保存を行った結果、12月まで調査期間を延長した。

発掘調査の終了を目前とした12月には、地元屋部地域の小中学生を対象とした遺跡見学会を開催した。12月8日は屋部小学校の5年生。翌9日には屋部小学校6年生、屋部中学校1年生が遺跡見学に訪れた。同月10日には地元屋部区や一般市民を対象に現地説明会を開催。さらに、15日には安和小学校の6年生の遺跡見学を受け入れることができた。

発掘調査の最終日である12月16日は、発掘調査面の保護のため碎石砂を敷き詰める作業を行い、その日で調査を終了する予定であった。ところが、その作業の最中に埋葬人骨が発見された。そのため、嘱託調査員だけで埋葬人骨の検出作業を行い、実測・写真撮影等の記録作業を行った。同月27日には埋葬人骨の公開をメインとした現地説明会を開催した。その後も多くの見学者が訪れたが、年明けの2006年1月11日をもって発掘調査を終了するに至った。

#### ⑥平成18年度（2006）

平成18年4月1日から平成19年3月30日の期間は、これまでの発掘調査において出土した資料の整理作業を行い、調査内容をまとめた調査報告書の作成を行った。

## 第4節 調査体制

調査主体は名護市教育委員会である。調査体制は以下のとおりで年度ごとに記す。

### 平成13年度

業務名称：国道449号（名護バイパス工区）道路整備事業に伴う事前確認調査

調査期間：平成14年1月7日から平成14年3月15日

事業主体：名護市教育委員会

調査機関：名護市教育委員会

調査体制：調査責任者：教育長 山里全用

調査総括：社会教育課長 上地圭子

調査担当：社会教育課文化財係長 島福善弘

：文化財係主事 仲宗根禎

：文化財係嘱託調査員 新城卓也

：文化財嘱託調査補助員 仲村美代子・平貢・大城洋平

調査事務：総務課 比嘉文子

：文化財係臨時職員 神谷祐子

調査作業員：岸本 勝 山城 正則 比嘉 善助 德嶺 朝暉

渡口京子 大城 哲郎 稲嶺 盛功 山城キヨ子

桑江 勇 具志堅 心 菅谷 茂利 岸本 亮

### 平成14年度

業務名称：国道449号（名護バイパス工区）道路整備事業に伴う緊急発掘調査業務

調査期間：平成14年7月2日から平成15年3月31日

事業主体：沖縄県北部土木事務所

調査機関：名護市教育委員会

調査体制：調査責任者：教育長 稲嶺 進

教育次長 具志堅満昭

調査総括：文化課長 並里早智子

調査担当：文化課主管兼文化財係長 島福善弘

：文化財係主査 比嘉 久

：文化財係主事 仲宗根禎

：文化財係嘱託調査員 真栄田義人

：文化財嘱託調査補助員 宮里 牧・新城 司・岸本卓巳

調査事務：文化課事務主事 新垣みのり

調査補助員：赤嶺 信哉 比嘉 史子 仲村 美代子 平 貢

親川 秀樹 石川 マサミ 神谷 祐子

調査作業員：伊藤 圭 稲嶺 盛功 丑野 隆史 岸本 勝

岸本 静子 桑江 勇 平良 昌也 津波 米子

渡口 京子 德嶺 朝暉 比嘉 善助 山城 キヨ子

山城 正則 菅谷 茂利 古藤 光彦 玉城 麻紀子

宮城 智浩

## 平成15年度

業務名称：国道449号（名護バイパス工区）道路整備事業に伴う緊急発掘調査業務

調査期間：平成15年5月8日から平成16年3月31日

事業主体：沖縄県北部土木事務所

調査機関：名護市教育委員会

調査体制：調査責任者：教育長 稲嶺 進

教育次長 具志堅満昭

調査総括：文化課長 並里早智子

調査担当：文化課主管兼文化財係長 島福善弘

：文化財係主査 比嘉 久

：文化財係主事 仲宗根禎

調査事務：文化課事務主事 新垣みのり

調査補助員：赤嶺 信哉 比嘉 史子 宮城 智浩 仲村 美代子

平 貢 親川 秀樹 石川 マサミ 神谷 祐子

調査作業員：安仁屋 浩貴 池宮城 秀也 伊藤 圭 大嶺 真人

翁長 利江 小原 麻子 岸本 勝 岸本 静子

岸本 祐 桑江 勇 小橋川 弥生 島袋 旬

諸喜田 あかね 諸喜田 京子 瑞慶山 良元 平良 昌也

平良 幸雄 津波 米子 渡口 京子 德嶺 朝暉

徳嶺 朝直 根路銘 国也 野口 恵 比嘉 善助

港川 和哉 山城 キヨ子 山城 正則

## 平成16年度

業務名称：国道449号（名護バイパス工区）道路整備事業に伴う緊急発掘調査業務

調査期間：平成16年4月1日から平成17年3月31日

事業主体：沖縄県北部土木事務所

調査機関：名護市教育委員会

調査体制：調査責任者：教育長 稲嶺 進

教育次長 具志堅満昭

調査総括：文化課長 並里早智子

調査担当：文化課主管兼文化財係長 島福善弘

：文化財係主査 比嘉 久

：文化財係主事 仲宗根禎

調査補助員：赤嶺 信哉 比嘉 史子 宮城 智浩 仲村 美代子

平 貢 親川 秀樹 石川 マサミ 神谷 祐子

調査作業員：丑野 隆史 大嶺 真人 大嶺 真彦 小原 麻子

岸本 勝 岸本 静子 岸本 祐 桑江 勇

島袋 旬 新城 甘奈 平良 昌也 平良 幸雄

棚原 明子 玉城 瞳美 津波 米子 渡口 京子

渡口 政治 徳嶺 朝暉 徳嶺 朝直 仲井間 千代子

仲井間 宗孝 野口 美奈子 野口 恵 比嘉 善助

比嘉 達也 真喜屋 長 松田 和雄 山城 キヨ子  
山城 正則

### 平成17年度

業務名称：国道449号（名護バイパス工区）道路整備事業に伴う緊急発掘調査業務

調査期間：平成17年4月11日から平成18年3月31日

事業主体：沖縄県北部土木事務所

調査機関：名護市教育委員会

調査体制：調査責任者：教育長 稲嶺 進

教育次長 具志堅満昭

調査総括：文化課長 並里早智子

調査担当：文化課主管兼文化財係長 島福善弘

調査事務：文化課事務主事 新垣みのり

：文化財係臨時職員 神谷祐子・松田のぞみ

調査補助員：赤嶺 信哉 比嘉 史子 宮城 智浩 仲村 美代子

平 貢 石川 マサミ 神谷 祐子

調査作業員：伊波 敏夫 小原 麻子 岸本 静子 岸本 祐

桑江 勇 平良 昌也 津波 米子 渡口 京子

渡口 政治 徳嶺 朝暉 徳嶺 朝直 仲井間 千代子

仲井間 宗孝 比嘉 善助 松田 和雄 山城 正則

比嘉 和美

### 平成18年度

調査期間：平成18年4月1日から平成19年3月30日

事業主体：沖縄県北部土木事務所

調査機関：名護市教育委員会

調査体制：調査責任者：教育長 稲嶺 進

教育次長 具志堅満昭

調査総括：文化課長 並里早智子

調査担当：文化課主管兼文化財係長 島福善弘

：文化財係主査 比嘉 久

：文化財係主事 仲宗根禎

調査補助員：赤嶺 信哉 比嘉 史子 宮城 智浩 仲村 美代子

平 貢 石川 マサミ 神谷 祐子 小原 麻子

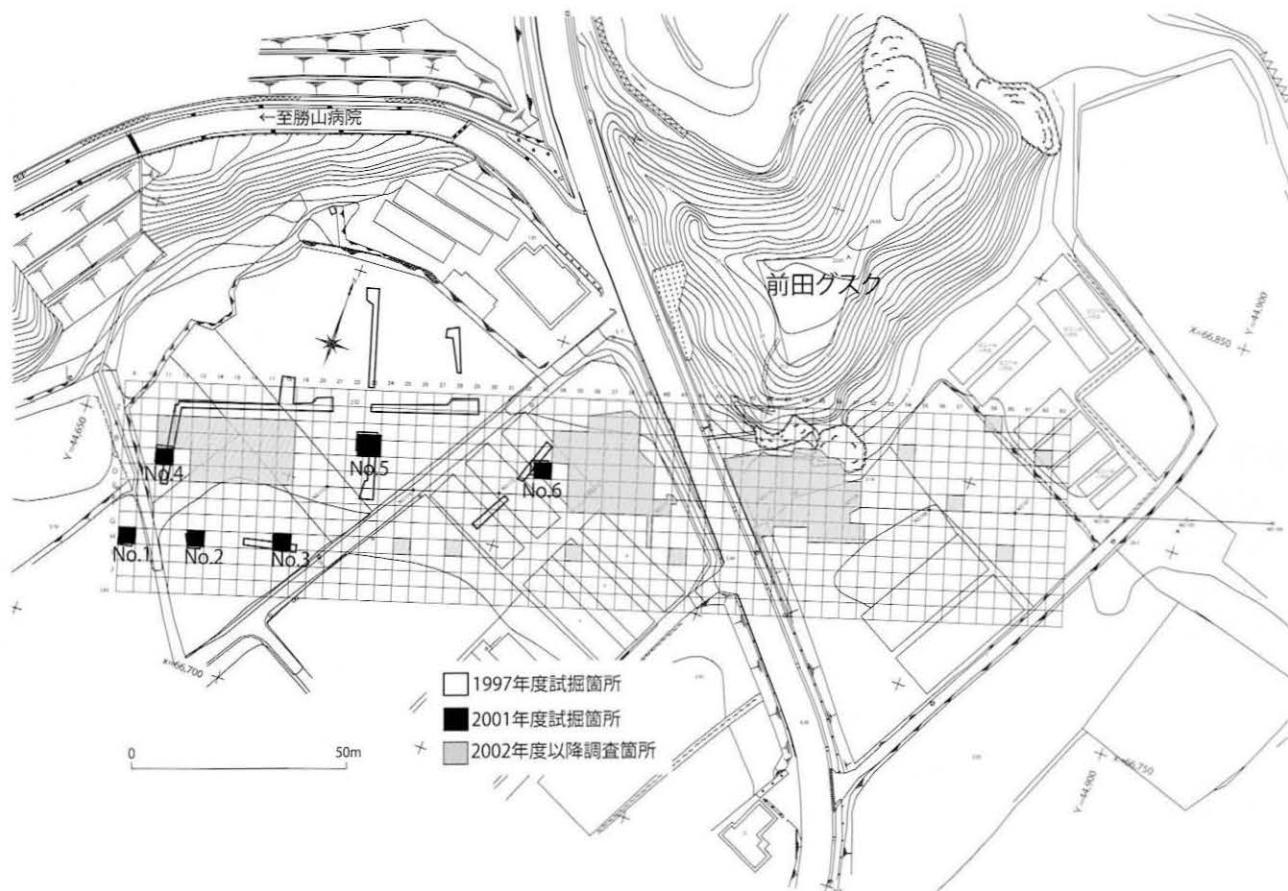
資料整理員：島袋 章子 津波 米子 徳嶺 朝直 新城 京美

## 第Ⅲ章 試掘調査の報告

平成13年（2001）12月から翌14年3月にかけ、前回の調査を補うための試掘調査を実施した。

試掘坑No.1・No.2・No.3では当初から予想されていた貝塚時代後期後半頃の土器片が出土するものの相対的に数が少なかった。試掘坑No.6に関しては自然遺物の貝類のみの出土であり、土器片の出土は確認されなかった。これに対し、試掘坑No.4地区では最も多くの土器片が検出され、とりわけV層では土器が多出し保存状態も良好である。傾向としては、北側の丘陵斜面下に近い所での出土が多いように推定された。

No.5では遺物が出土する深度が深く、標高0.25mでも出土が確認された。数は少ないが、No.5地区のIV層で貝塚時代後期前半頃の時期の土器片が確認され、更にV層・VI層では貝塚時代前期頃の土器に類似するものが出土している。



第9図 平成13年度試掘調査箇所位置図

今回の調査の結果から、平成14年度の本発掘調査について、試掘坑No.4を中心とする地区から調査を行うとともに、今回調査を行うことの出来なかった東側の菊畠においても数か所のポイントを設け、さらに範囲確認調査を行う必要性があると判断された。当初屋部前田原貝塚は沖縄貝塚時代後期後半の遺跡と考えられていたが、今回の試掘調査によって、貝塚時代後期後半の土器が出土した層位よりも下の層位において貝塚時代後期前半の土器が出土することが明らかとなった。さらにその下、標高0.25mの層位より貝塚時代早期末の面縄前庭式土器が出土したことにより、屋部前田原貝塚の時期は当初の予測時期を大きく遡り、貝塚時代早期末からグスク時代初期の複数の時期の遺物包含層が存在することが確認された。以下、各試掘坑の調査結果と主な出土遺物について紹介する。

試掘坑No.1（H-9）は、I層が表土層、II層が黄褐色混礫土層（客土）、IIIa層が赤褐色混礫土層（部分的に下位の白砂が混じる攪乱層）、IIIb層が暗茶褐色混礫土層（No.2・No.3グリッドのI層に相当する。攪乱層）で、I層から28点、IV層白砂層より土器片が3点出土した。

試掘坑No.2（H-13）は、I層が暗茶褐色混砂土層（耕作土）、II層が白砂層（礫が出土する面から砂の粒子が粗くなる）、I～II層より65点の土器片が回収されている。

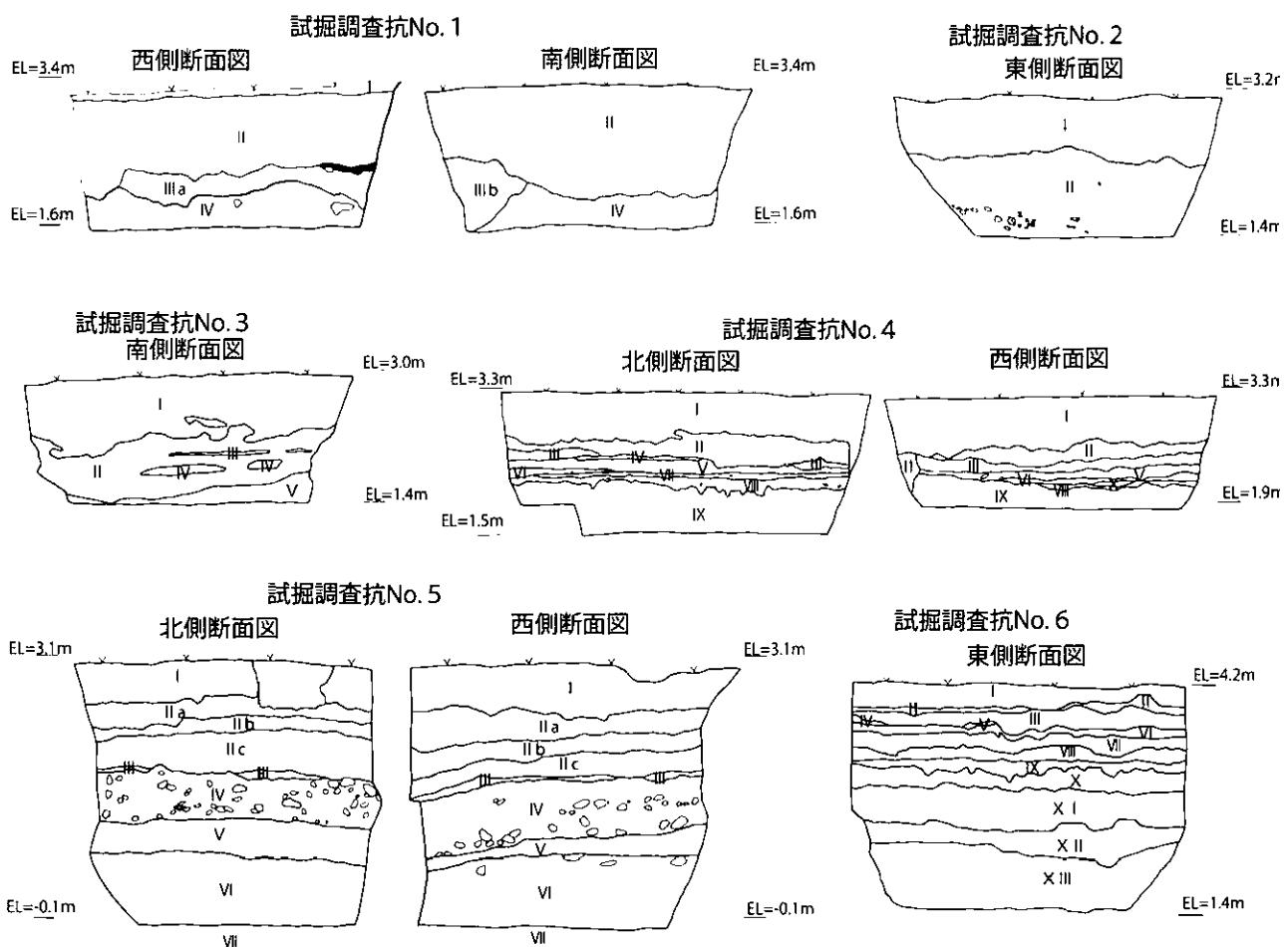
試掘坑No.3（H-18）は、I層が暗茶褐色混砂土層（耕作土）、II層が白砂層（細粒子）、III層が白色砂利層、IV層が白砂層（枝サンゴ等の混入の度合いが強い白砂層）で、V層が白色砂利層（III層よりも粒子が粗く、河川石や枝サンゴ等礫の混入が多くなる）で地山になると目される。III・IV層では土器は回収されておらず、I・II層から42点、V層から1点の土器片が回収されている。

試掘坑No.4（C-11）は、10層に分層される。I層は赤褐色土層（部分的にII層の土が混ざる客土層）、II層は黄褐色土層（3～4cm程の礫が混ざる攪乱層）、III層は青灰色粘土層（礫の混入あり）でI～III層は40点の土器片が回収されている。IV層は灰色粘土層（礫の混入が全く無い）無遺物層。V層は灰色粘土層で188点、VI層は灰色粘土層で109点、VII層は赤灰色粘土層（礫の混入無し）で147点、VIII層は褐色粘土層で154点の土器片が回収される遺物包含層である。IX層は黄色砂層で上面に軽石が混入、X層は明褐色砂利層で東側断面に見られる堆積層である。IX層から19点、X層から62点の土器片が回収された。

試掘坑No.5（B-23）は、7層に分層される。I層は暗茶褐色混砂土層（耕作土）。土器片と共に陶磁器が出土する）より土器が76点出土しており。II層では、土器の出土はほとんど見られず、貝類のみである。さらに細分し、IIa層明赤褐色砂層（細砂層）、IIb層白色砂層（IIaよりも粒子が粗く、礫や枝サンゴの混入あり）、IIc層白色砂層（細砂層）として分層した。II層からは土器片が2点出土している。III層は黒色砂層で土器の出土は少なく1点のみであった。IV層は白色の混礫砂層（白色は粗く、大きな礫の出土が目立つ）貝塚時代後期前半と考えられる土器が出土、17点の土器片が出土している。V層は黄白色混礫砂層、IV層で出土する大きな礫がなく若干土が混ざり、砂は粘性を持つ。V層は土器2点が出土している。VI層は茶褐色砂利層（角の丸い砂利が主体を占め、貝類が減少）で38点の土器片が出土する。VII層は泥岩層（軟質の千枚岩）で碎いて掘ることは可能だが、土器・貝類の出土は見られない無遺物層。

試掘坑No.6（C-33）は、I層黄褐色土層（表土層）、II層コンクリート瓦礫層、III層淡黄土色砂利層、IV層明褐色土層（礫混じり）、V層白色砂層（粗粒子）、VI層灰色礫層（石灰岩）、VII層明褐色粘土層、VIII層黄褐色土層（礫混じり）、IX層暗黄褐色土層（礫の混入が多い）、X層茶褐色砂層、XI層白色砂層、XII層砂利層、XIII層は白色混礫砂層で枝サンゴ混じりの無遺物層で基盤と考えられる。本調査区からは土器の出土はほぼ皆無であった。

今回の調査の結果から、平成14年度の本発掘調査について、試掘坑No.4を中心とする地区から調査を行うとともに、今回調査を行うことの出来なかった東側の菊畑においても数か所のポイントを設け、更に範囲確認調査を行う必要性があると判断された。当初屋部前田原貝塚は沖縄貝塚時代後期後半の遺跡と考えられていたが、今回の試掘調査によって、貝塚時代後期後半の土器が出土した層位よりも下の層位において貝塚時代後期前半の土器が出土することが明らかとなった。さらにその下、標高0.25mの層位より貝塚時代早期末の面縄前庭式土器が出土したことにより、屋部前田原貝塚の時期は当初の予測時期を大きく遡り、貝塚時代早期末からグスク時代初期の複数の時期の遺物包含層が存在することが確認された。以下、各試掘坑の調査結果と主な出土遺物について紹介する。



第10図 試掘調査土層図

第11図に出土遺物の中から代表的なものを掲載して報告する。0001は面縄前庭式土器の口縁で口径13.2cmを測る（試掘坑No. 5 VI層）。0002は平底の底部資料で石英やチャートなどの混和材を多く含むことから貝塚時代前期相当の土器と推される（試掘坑No. 5 VI層）。

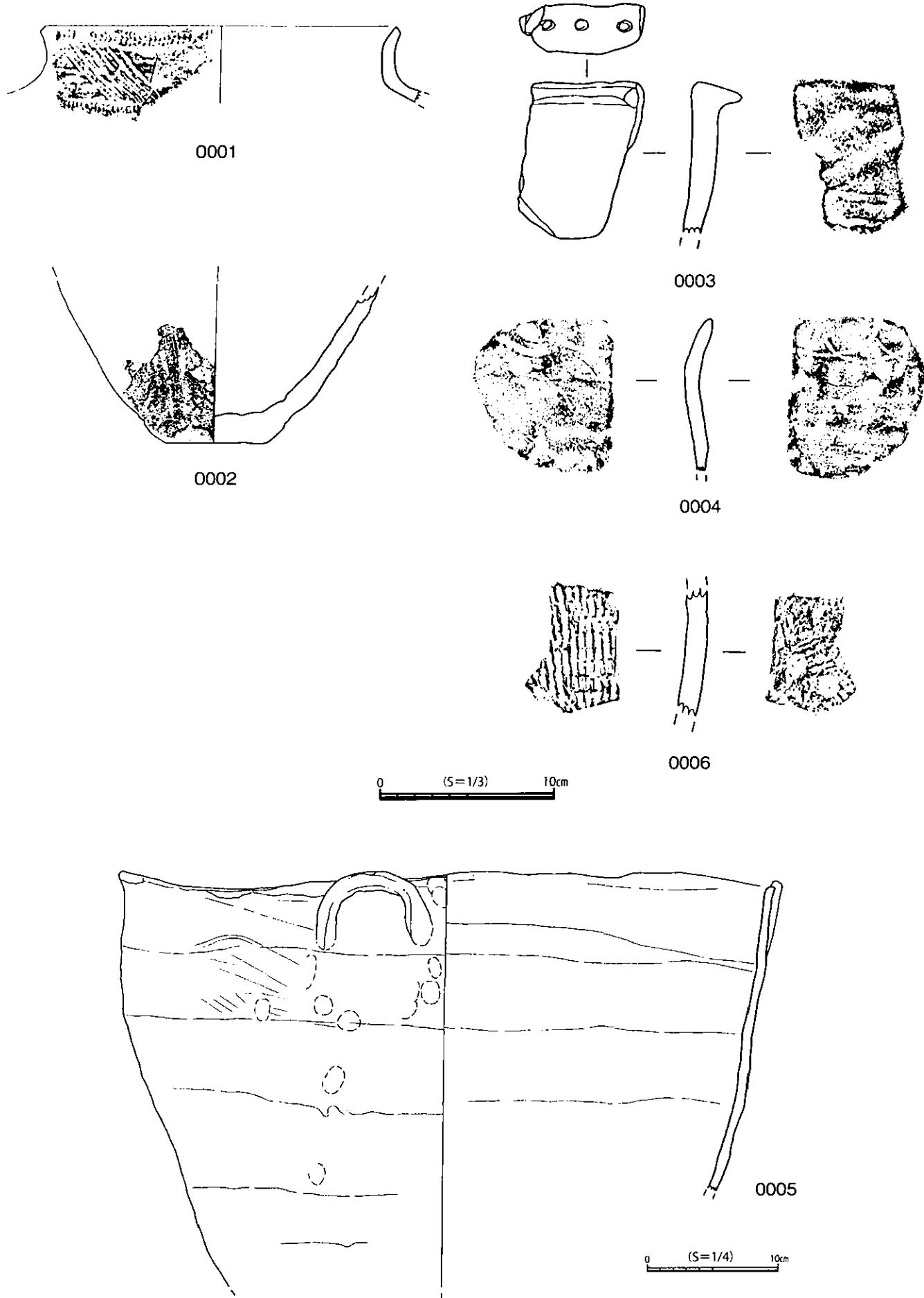
0003・0004は貝塚時代後期の土器で、前者は口縁部をL字状に屈曲する甕（深鉢）形土器で、口縁上面に棒状工具による刺突文を施す（試掘坑No. 5 IV層）。後者は表裏面に円弧状の文様を連続的に施す土器で破片左側に焼成後穿孔が2つ観察され、1つは貫通し紐ズレ痕とみられやや楕円形を呈し補修穴としての利用を認めるが、裏面からの1つは貫通せず途中までとなっている。文様の施文具は3mm程度の幅で浅く施す（試掘坑No. 5 IV層）。

0005は貝塚時代前期の典型的な在地土器で、既往の型式名ではいわゆる大当原式として把握される土器である。直立する口縁に逆U字状の突帯文を3つ配する。口唇は断面舌状で、器壁の厚さは4mm前後と薄造りで、器表面の調整はナデ調整を主とするが徹底せず粗放、口径は37.4cmを測る深鉢形土器で試掘坑No. 4 IX層よりつぶれた状態で出土した。0006は外面格子状のタタキ痕内面にあて具痕が認められる須恵器胴部片でカムィヤキと考えられる（試掘坑No. 4 II層）。

以上から、貝塚時代前期（縄文時代中期並行期）からグスク時代にわたる複合遺跡であることが想定された。試掘坑No. 5はその下層から貝塚時代早期末、その上位層より貝塚時代後期の遺物が出土。試掘坑No. 4はその下層から貝塚後期の前半、その上位層からグスク時代初期相当の遺物が出土することが確認された。

第1表 試掘調査箇所及び調査結果の概要

試掘 No.	グリッド	調査面積 (m <sup>2</sup> )	出土土器 破片数	遺物が回収された層
1	H-9	16	31	I・IV
2	H-13	16	65	I・II
3	H-18	16	43	I・II・V
4	C-11	16	719	I・II・V・VI・VII・VIII・IX・X
5	B-23	16	136	I・IIa～c・III・IV・V・VI
6	C-33	16	1	X～XIII



第11図 試掘調査出土遺物(縮尺1/3・1/4)

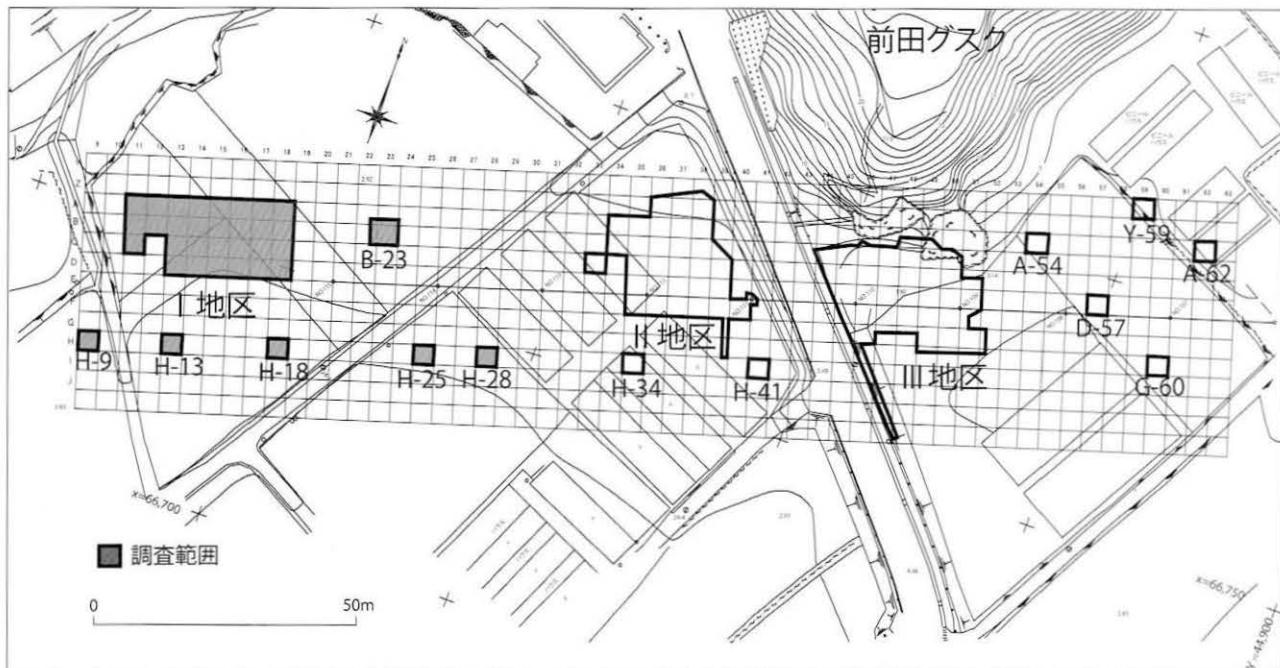
## 第IV章 I 地区の調査報告

### 第1節 層序と遺構

#### 1. はじめに

屋部前田原貝塚の発掘調査対象地が広範囲にわたることから、調査対象地を分断する県道117号線（名護運天港線）とそれに連結する農道を境に便宜上3地区に区分し調査を行なった。I地区は、屋部470-6、470-7、470-8、469-4番地を調査対象地とする。

平成14年度より実施した本発掘調査に先駆け、平成13年度末に実施した試掘調査の結果、C-11グリッドで比較的良好な遺物包含層が確認されたことから、調査区をA-11グリッドからD-18グリッドへと東方向へ拡大していった。



第12図 屋部前田原貝塚 I 地区調査箇所位置図

#### 2. 層序

I地区の調査で確認した層はI～XⅠ層を基本とするが調査地全域に共通する堆積層は、I層、II層、III層、VI層、XⅠ層である。I層は耕作土として搬入された客土であるため、バックホーにより除去した後、II層から手堀りによる発掘調査を進めた。本地区で上から順にI、II層・・・と名づけており、層序は各地区で統一していない。標準的な堆積層としてA-15、B-15西壁の土層図を第13図に図示した。

### I層：表土層・耕作土〔赤褐色土（2.5YR4/6）〕

客土。褐色土に明褐色を呈する赤土や黄褐色を呈するシルト質土が混入する。近・現代の造成によって持ち込まれたと思われる土である。多数の土器・石器とともにガラス製品・陶磁器・瓦類・プラスチック・金属など後世の遺物が出土する。

### II層：遺物包含層〔褐色混礫土層〕〔暗褐-褐色土（5Y4/3）〕

土器を少量含む遺物包含層。II～X層も同じ。

### III層：遺物包含層〔灰褐-褐色土（5Y5/3）〕

### IV層：遺物包含層〔灰色土（7.5Y4/1）に、にぶい黄褐色土（10YR4/3）が混じる。〕

### V層：遺物包含層〔灰色土（7.5YR4/1）〕

### VI層：遺物包含層〔にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、にぶい赤褐色土（5YR4/4）が混じる。〕

C-15・16ではVI層上面で土坑と溝が確認されている。

### VII層：遺物包含層〔にぶい黄褐色土（10YR4/3）〕

### VIII層：遺物包含層〔黄褐色シルト層〕

### IX層：遺物包含層〔オリーブ褐色土層（2.5Y4/3）〕

土器を少量含む遺物包含層、粘性強いオリーブ褐色土層。

### X層：遺物包含層〔黒褐色混土砂層〕

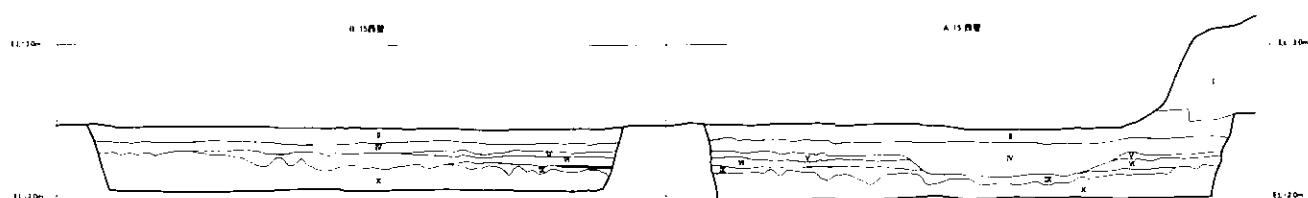
土器を多量含む遺物包含層。なお、X I層は旧X層（白砂層）とし回収したが、C・D-17・18グリッドにて確認された黒褐色砂層をX層に変更している。注記のC・D-17・18グリッド外のX層はこれに由来する。

### X I層：地山〔黄白色砂層〕

下位に深度を増すにつれて白色度が増す砂層であり、サンゴ片や貝殻を含むことから海岸砂丘に由来する白色砂層である。

## 3. 遺構

本地区ではC-15・16で土坑、C-15のV層を覆土とする溝が確認されている。



第13図 I 地区土層図 (S=1/50)

## 第2節 出土遺物

I 地区からは、土器、石器、陶磁器、カムィヤキなどの遺物が出土している。以下個別の資料について報告する。

第2表 I地区出土遺物集計表

種別 層序	土器					石器	カムィヤキ	白磁	土製品
	口 縁 部	胴 部	底 部	有 文	小 計				
不明・搅乱	4	669	5	2	680		6		1
I 層		55			55				
II 層	22	1177	9		1208	1	11	1	1
III 層	15	666			681				
IV 層	6	804	8	3	821	3	4		2
V 層	17	637	10	2	666	1	12		
VI 層	12	478	10		500		5	1	
VII 層	25	1010	8	1	1044	1	9		
VIII 層	5	501	2		508	1	1		
IX 層	6	334	1	2	343				
X 層	139	3019	21	8	3187	4	8	3	1
X I 層	34	3	11	5	53	2	5		
土坑・溝/遺構内		76			76	2			
計	285	9429	85	23	9822	15	61	5	5

### 1. 土器

I 地区では平成13年度の試掘坑No.4から貝塚時代後期土器、大当原式土器（0005）の胴上半部がほぼ完全な形で出土したため当時期のまとまった資料の出土が期待されたが、今回得られた土器片はほとんどが器形のうかがえない破片資料である。

土器の総破片数は9822点で、内訳は口縁部285点、胴部9452点、底部85点の出土である。層序ごとの出土状況を第2表に示した。

器種は口縁部片の形状から推定して、貝塚後期土器はほとんどが深鉢形と甕形で、グスク土器では甕形と鍋形である。底部資料では尖底・くびれ平底・底形の広い平底が得られている。分類は遺跡全体を通して行っておりI～VII群に大別分類、底部に関しては別にA～H群に分類している。報告では各土器について紹介するためⅧ章の総括で、土器分類についてまとめることとする。沖縄貝塚時代後期に相当するV群土器、グスク時代に相当するVI群土器が本調査区より出土している。残念ながらX・X I層ともそれらの時期の遺物が混在する状況であったが、貝塚時代後期前半期土器では大当原式が主体を占めていた。貝塚時代後期後半期土器では有文資料が少なく、そのほとんどが無文のくびれ平底土器が出土。グスク系土器では滑石製石鍋模倣土器とされる方形肥手を口縁外面に貼付する資料が得られ、混入物に滑石を混入するものも見受けられた。

以下、各出土土器について第14・15図に図示し詳述する。

#### 口縁部資料

V群：沖縄貝塚時代後期に属すと考えられるもので、器形・胎土・混入物、器面調整などの諸特徴がいわゆる沖縄後期土器前半期とされるものに含まれるもの。器形・混入物などから3類に種別する。

V群1類（1001～1013）：1001は器形・混入物等の特徴から阿波連浦下層式の範疇に収まると考えられる土器である。内側に屈曲する胴部片で、外面屈曲下に3.5mm幅の沈線が一条廻る。混入物には

石英・黒色鉱物等を含む。1002～1013は器形・混入物等の特徴から大当原式土器の範疇になると考えられる土器である。有文土器はさらに、口縁外面に突帶を貼付・口唇部に沈文を施文するものを「a類」、口唇部に沈文を施文するものを「b類」として細別する。

有文土器は1002～1009のように口縁部外面・口唇部に沈文を施文するものがある。1002は口縁部外面に逆U字状に突帶を貼付し、突帶上に刺突文を施す。口唇部にも突帶上と同じ施文具で刺突文を施す。1003～1009は口唇部に刺突による刻日文、沈文を施文するもので1003・1004・1007・1008は幅広の施文具で長めに強く刺突文を施すため口唇部は波状を呈する。1005は約3mm幅の刺突を施し、1006・1009は幅広の施文具で斜位に刺突を施す。1009の刺突は表面からみて左側の6条の刺突と右側の3条の刺突はそれぞれ規則的であるものの角度・間隔が異なっている。

1010～1017はV群1類の無文土器である。1010・1011は口縁部内外に指頭圧痕がみられる。1010は内面に穿孔途中かと思われる跡が確認できる。混入物には黒色鉱物等を含む。1012は三角形状の肥厚部を有するものである。表面には横位の擦痕が明瞭に残る。1013はミニチュア土器の胴部～底部である。底部は丸底。ナデは比較的丁寧である。

1014～1017は沖縄貝塚時代後期前半期に分類されるものと考えられるが土器型式が判然としないものである。1014は口縁外面から約4mmの孔が穿たれる。器面調整はやや丁寧であるが内面には指頭痕が確認できる。1015・1016・1017は丸みを持って立ち上がる口縁部片で1015は内外面から約4mm孔が穿たれる。1015は非常にもろくなってしまっており横位や斜位の擦痕が明瞭に残る。1016・1017は指頭圧痕が確認できるものの1010のように明瞭ではない。混入物には黒色鉱物等を含む。これらの土器型式は判然としてないもののその多くが浜屋原式及び大当原式に相当する可能性が高いと思われる。

V群2類（1018～1022）：器形・胎土・混入物、器面調整などの諸特徴がいわゆる沖縄後期土器後半期とされるものに含まれるもの。有文土器は口縁部外面・口唇部に沈文を施文するもの。口唇部上に小突起を有するものや口縁外面に突帶を貼付するものに類別できる。

1018口縁部外面・口唇部に沈文を施文するもので、外反する口縁部の口唇部に縦位に刺突を施し、口縁外面に横位に沈線を二条廻らすものである。

1019・1020・1021口唇部上に小突起を有するものや口縁外面に突帶を貼付するもので、1019・1020は口唇部にツノ状の突起を貼付するもので器表面には横位の擦痕が確認できる。1021は外反する口縁部に口唇部からU字上の突帶を貼付するもので突帶は口縁内面には及ばない。1022は突帶が貼付される胴部片で、突帶上には幅約4mmの刺突が施される。突帶の断面間は三角形状である。

III群orV群（1023～1026）：1023は三角形状の肥厚部を有する土器である。1024・1025は大きく外反する土器で1024は口縁部が肥厚し、中央には内・外面両面から約4mmの孔が穿たれ、混入物には石英が含まれる。1025は混入物に微砂粒を少量含む。1026は器厚4mmと薄い土器である。

VI群（1027～1033）：グスク系土器と呼称されるものである。1027・1028・1029・1030・1031は甕形になると思われる無文口縁で1028は口径推算約18.4cm、1030は18.6cmを計る。1032・1033は鍋形になると思われ、口唇部に接するように肥手を付すもので、肥手は方形がやや崩れた形になっている。

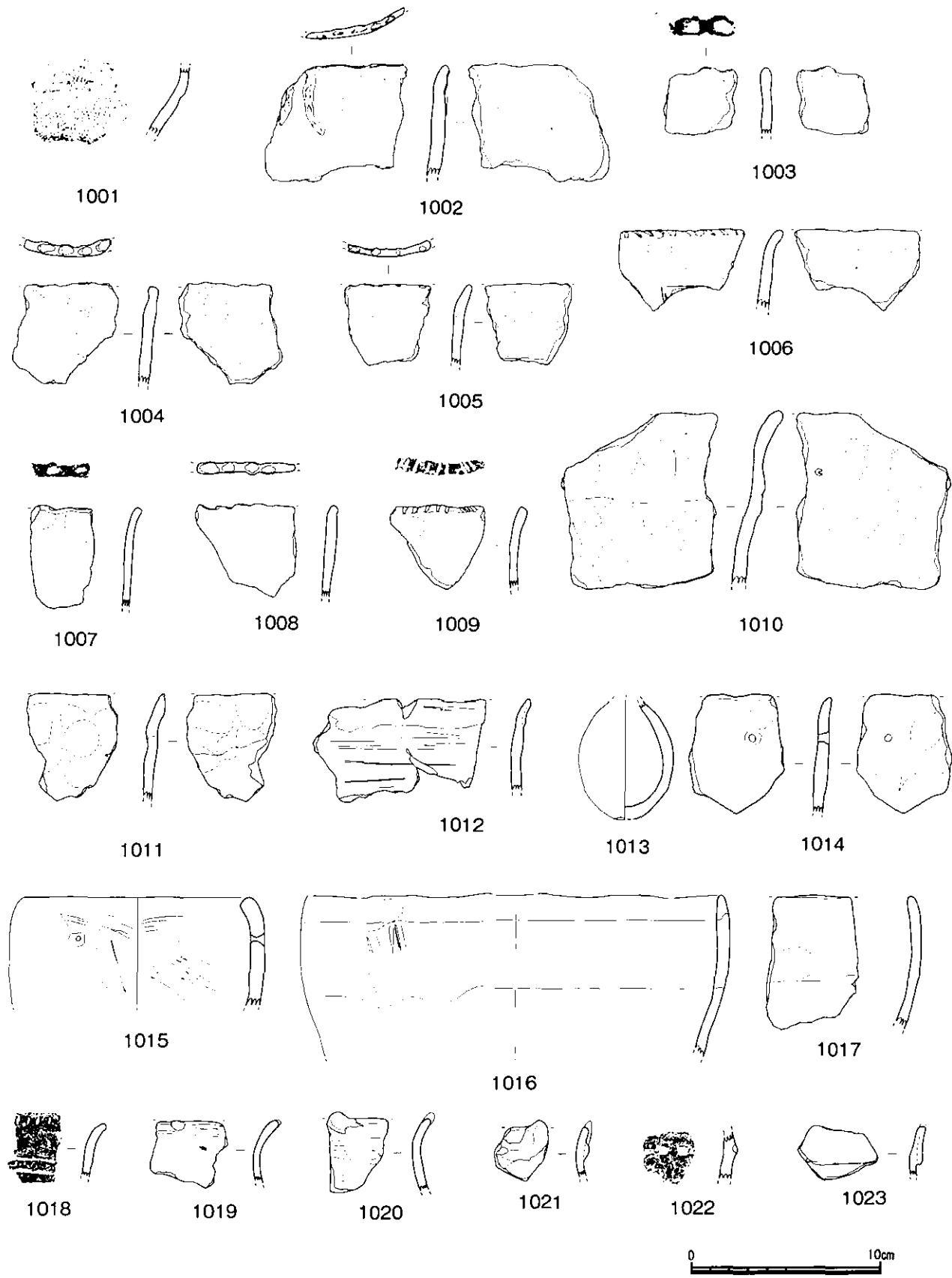
## 底部資料

F種尖底（1034～1038）、B種くびれ平底（1039～1048）、F種類底径の広い平底土器（1049～1052）が出土。それぞれV群1類とF種が、V群2類にB種が、VI群土とF種が相関するものと考えられる。

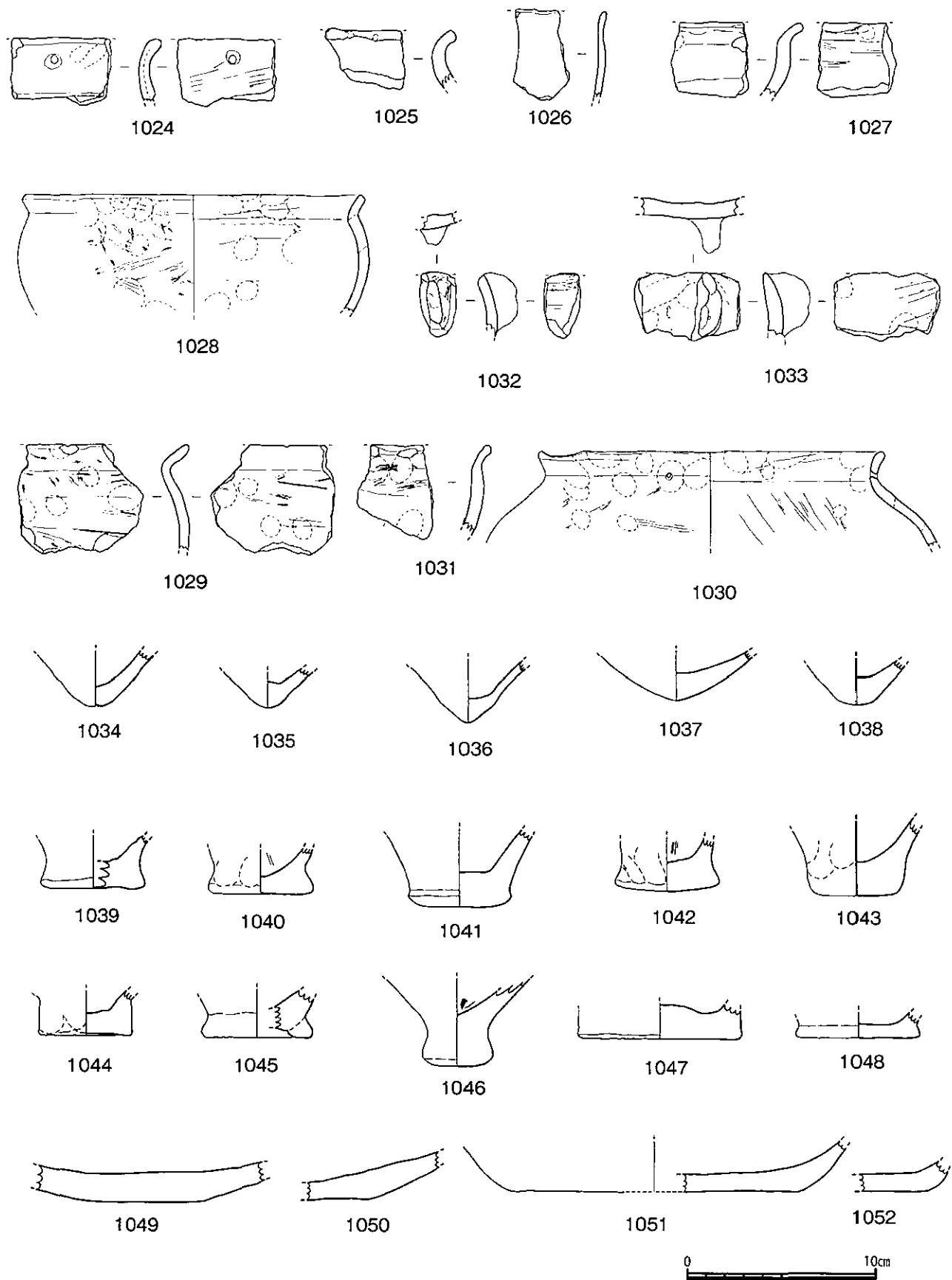
F種はその多くがいわゆる尖底の土器で、丸底や乳房状尖底の土器は少ない。ただし、後述する1046は外観だけなら乳房状尖底だが胎土などの特徴からG種に含めて分類している。

第3表 I 地区出土遺物観察表 (土器)

掲載 No.	グリット	層	層編考	種別	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	重量 (g)	観察事項	
											(土器: 艶色、混和材、ほか: 観察所見等)	
1001	不明	V		土器	口縁	V群			0.5		表: 明赤褐色5YR5/6、裏: 明黄褐色10YR7/6	石英・赤色粒を多量、黒色鉱物・微砂粒を少量含む
1002	C-14	X I	EL=222.6 ~219.5	土器	口縁	V群			0.6		にぶい赤褐色5YR5/4	黒色鉱物・微砂粒を少量含む
1003	C-16	X I	EL=217.3 ~205.8	土器	口縁	V群			0.5		にぶい赤褐色5YR4/4	黒色鉱物を少量含む
1004	A-12	VII	EL=197~ 186.8	土器	口縁	V群			0.6		褐灰7.5YR5/1	黒色鉱物を少量含む
1005	C-17	X		土器	口縁	V群			0.5		明赤褐色5YR5/6	石英・赤色粒を少量含む
1006	C-17	X		土器	口縁	V群			0.55		にぶい褐7.5YR5/4	微砂粒を少量含む
1007	D-18	X I	西側削除去	土器	口縁	V群			0.45		にぶい赤褐色5YR5/4	黒色鉱物を少量含む
1008	D-17	X I	西側削除去	土器	口縁	V群			0.5		にぶい赤褐色5YR4/4	2mm程度の石灰質粒を多量、黒色鉱物を少量含む
1009	C-15	X I		土器	口縁	V群			0.4		にぶい黄褐色10YR6/4	黒色鉱物を多量、微砂粒を少量含む
1010	B-17	X		土器	口縁	V群			0.7		明黄褐色10YR7/6	石英・黒色鉱物を少量含む
1011	B-12	VII	EL=207~ 189	土器	口縁	V群			0.7		灰白2.5YI8/1	黒色鉱物を多量含む
1012	C-14	X I		土器	口縁	V群			0.5		にぶい黄褐色10YR5/4	黒色鉱物を中量、微砂粒を少量含む
1013	B-14	VI		土器	口縁	V群			0.4		黄褐色10YR6/6	微砂粒を少量含む
1014	B-16	X I	EL=229.6	土器	口縁	V群			0.7		褐7.5YR7/6	赤色粒・石灰質粒を多量、黒色鉱物を中量、石英を少量含む
1015	D-18	X	EL=225~ 214.2	土器	口縁	V群	約 12		0.8		にぶい黄褐色10YR4/3	赤色粒を多量含む
1016	D-17	X I	東側削除去	土器	口縁	V群	約 22		0.6		明赤褐色2.5YR5/6	微砂粒・赤色粒を多量、黒色鉱物を中量含む
1017	C-17	X I	EL=224.3	土器	口縁	V群			0.6		褐5YR6/6	黒色鉱物を微量含む
1018	D-18	X I	EL=212.8 ~206.4	土器	口縁	V群			0.5		にぶい赤褐色5YR4/4	赤色粒を多量、黒色鉱物を少量含む
1019	D-17	X I		土器	口縁	V群			0.4		明黄褐色5YR5/6	微砂粒・赤色粒を少量含む
1020	D-18	X I	EL=220.3 ~223.1	土器	口縁	V群			0.4		にぶい赤褐色5YR5/4	微砂粒を中量、黒色鉱物を微量含む
1021	C-18	X I	EL=230~ 225.3	土器	口縁	V群			0.5		明黄褐色5YR5/6	赤色粒を少量含む
1022	D-17	X I	EL=208.2 ~204.2	土器	口縁	V群			0.6		褐灰7.5YR4/1	赤色粒・黒色鉱物を中量含む
1023	D-18	X I		土器	口縁	V群			0.4		明赤褐色5YR5/8	黒色鉱物を少量含む
1024	D-18	X I	EL=223.1 ~212.8	土器	口縁	V群			0.5		黒褐色10YR3/1	石英・微砂粒を普通、黒色鉱物・赤色粒を少量含む
1026	D-17	X		土器	口縁	VI群			0.7		明黄褐色5YR5/6	微砂粒を少量含む
1025	D-17	X		土器	口縁	V群			0.4		赤褐色5YR4/6	赤色粒を多量、粒の大きな石灰質粒・黒色鉱物を少量含む
1027	D-17	X	EL=220.7 ~213.7	土器	口縁	VI群			0.7		褐7.5YR4/4	石英・微砂粒を少量含む
1028	A-16	X I	EL=222.6 ~215.9	土器	口縁	VI群	約 18.4		0.5		褐7.5YR4/4	赤色粒を多量、黒色鉱物・滑石を少量含む
1029	C-18	X		土器	口縁	VI群			0.5		褐7.5YR4/4	滑石を中量、黒色鉱物を少量含む
1030	A-15	X I		土器	口縁	VI群	約 18.6		0.6		褐7.5YR5/6	粒の大きい砂粒を中量、赤色粒を少量含む
1031	C-18	X	EL=234.7 ~225.5	土器	口縁	VI群			0.7		表: 灰褐色5/2、裏: 褐7.5YR4/3	石英・微砂粒・赤色粒を少量含む
1032	C-17	X		土器	口縁	VI群					暗褐色7.5YR3/4	微砂粒・赤色粒を少量含む
1033	D-18	X	EL=217.4 ~206.9	土器	口縁	VI群			0.8		暗褐色7.5YR3/4	微砂粒・赤色粒を少量含む
1034	D-18	X I	EL=206.4~ 200.5	土器	底部	C種					にぶい赤褐色5YR5/4	微砂粒・黒色鉱物を少量、赤色粒を中量含む
1035	C-15	V	埋込み構内	土器	底部	C種					にぶい黄褐色10YR7/4	石英・微砂粒を少量、赤色粒・黒色鉱物を中量含む
1036	B-13	VII	EL=220.4~ 213	土器	底部	C種					表: にぶい褐5YR6/3、裏: 暗褐色10YR4/1	2mmほどの粒の大きい石灰質粒を少量含む
1037	C-17	X I		土器	底部	C種					表: 褐5YR6/6、裏: 暗灰10YR4/1	微砂粒・黒色鉱物を中量含む
1038	C-17	X I	EL=217.3~ 206.1	土器	底部	C種					表: にぶい褐5YR6/4、裏: 暗褐10YR4/1	石英・赤色粒を少量、黒色鉱物を中量含む
1039	C-18	X I	EL=234.7~ 225.5	土器	底部	B種	約 5.5				明赤褐色5YR5/6	微砂粒・赤色粒を少量含む
1040	B-17	VI	EL=192.6~ 185.0	土器	底部	B種	約 5.6				褐7.5YR6/6	微砂粒・赤色粒を中量含む
1041	C-18	X	EL=234.7~ 225.5	土器	底部	B種	約 5.5				表: 浅黄2.5YI7/4、裏: 灰白2.5I7/1	微砂粒・赤色粒を微量、黒色鉱物を中量含む
1042	C-18	X I	EL=224.4~ 220.3	土器	底部	B種	約 5.6				にぶい黄褐色10YR6/3	微砂粒・赤色粒を中量含む
1043	B-15	X I	EL=220.5~ 206.6	土器	底部	B種	約 4.6				浅褐2.5YI7/4	石英・微砂粒を少量含む
1044	B-16	V	EL=232.7	土器	底部	B種	約 5.0				褐2.5YR6/6	微砂粒を少量
1045	B-16	V	EL=219.6	土器	底部	B種	約 6.0				褐2.5YR6/6	石英・黒色鉱物を少量含む
1046	C-14	X I	EL=223.1~ 213	土器	底部	B種	約 3.1				表: にぶい褐5YR6/4、裏: 暗褐10YR4/1	微砂粒・赤色粒を多く含む
1047	B-12	VII	中間壁	土器	底部	B種	約 8.8				表: 褐2.5YR6/6、裏: 暗褐10YR5/1	石英を少量、微砂粒を中量含む
1048	B-12	VII	EL=207~ 189	土器	底部	B種	約 6.6				褐2.5YR6/6	石英を少量、微砂粒・2mmほどの石灰質粒を中量含む
1049	B-17	X I	EL=204.2~ 196.3	土器	底部	F種					表: 褐5YR6/6、裏: 暗褐10YR4/1	石英・黒色鉱物を少量、微砂粒を中量含む
1050	A-16	VI	EL=231	土器	底部	F種					表: にぶい褐5YR7/4、裏: 暗褐10YR4/1	微砂粒・2mm程度の石灰質粒を少量含む
1051	A-16	VI	EL=231	土器	底部	F種	約 15				表: にぶい赤褐色5/4、裏: 暗褐10YR4/1	滑石を多量に含む
1052	C-17	X		土器	底部	F種					にぶい褐5YR6/3	赤色粒・石灰質粒を少量、滑石を多量含む



第14図 I地区土器(1) (縮尺1/3)



第15図 I 地区土器 (2) (縮尺1/3)

G種にはいくつかバリエーションがあり、底径が5cm程度になるもので、接地面が平たくなるもの(1039・1040)、丸くなるもの(1041・1042)、明確なくびれを有しないもの(1043・1044)上げ底状になるもの(1045)。底径が3cm程度のもの(1046)、底径が6cm以上になるもの(1047・1048)などがある。

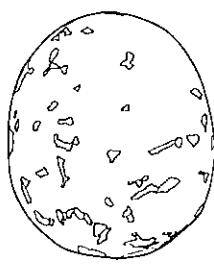
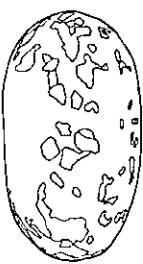
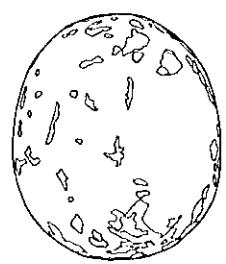
E種には1051のように底形推算15cmを計るものがあり底径は広い。混入物に滑石を含むもの(1050・1052)などがある。

土器の層ごとの出土量を見ると、X層からの出土量が最も多く、次いでVII層、II層が続く。土器各群の出土傾向としてはX層・VII層ともに口縁部資料ではV・VI群が混在する状況で、底部資料でもF・G・E種が混在する状況となっている。

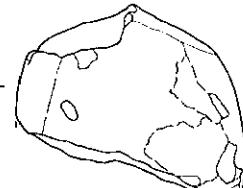
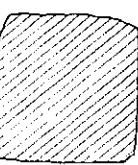
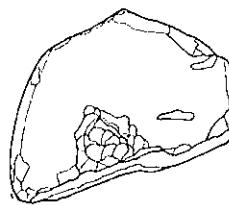
## 2. 石器・石製品

I地区より検出された石器及び石製品は15点と少なく、その内訳は磨石5点、敲石1点、砥石片1点、円盤状石器1点及び不明石器片である。そのうち実測図を作成した石器は、第16図に掲載した6点である。

1053・1054・1055は円礫の磨石である。1053はチャートを材とし平滑面を有するが、長軸端部には敲打痕が認められる資料。1054は敲石で、斑岩を材とする。平滑な磨面中央部には敲打による凹みが認められる。1055は花崗斑岩表裏面とともに平滑な磨面を有するが、平坦面及び縁辺部には微細な敲打痕が認められる資料。1056は砂岩の磨石として利用したと考えられる平滑面とともに、長軸端部には敲打痕も認められる。1057は砥石で、砂岩を材とする。全形を窺うことはことはできないが、緩やかな傾斜を持つ平滑面を有することから砥石や石皿の一部と推察される。1058は円盤状石器で、砂岩を材とする。用途不明の石器であるが、縁辺部を敲打により円盤状に仕上げる資料である。



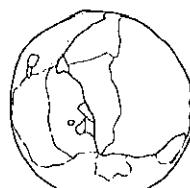
1053



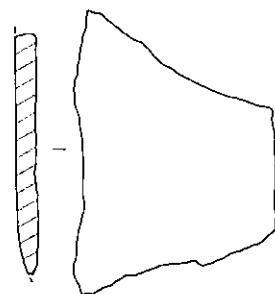
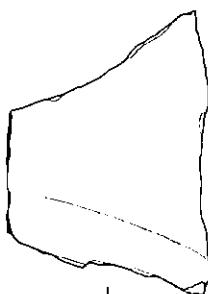
1054



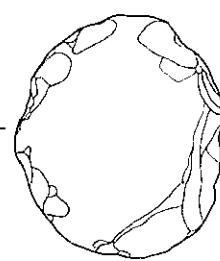
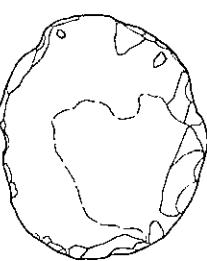
1055



1056



1057



1058



第16図 I 地区石器 (縮尺1/3)

### 3. カムィヤキ

I 地区より検出されたカムィヤキは52点を数える。その部位別の内訳は口縁部7点、胴部36点、底部9点となる。出土状況は第4表にまとめた。いずれの資料も小片であり、図化した資料は少ない。しかし、口縁部の形態に注目すると少なくとも4つの型式が窺える。これらは時間的な型式差と考えられるがI地区の出土状況からは層位に基づく新古関係を確認することはできない。

1059・1060は口縁部の整形が精緻な壺で、口縁部下部の突起が大きい。1059は口径14.2cm、C-13 X I 層出土。1060は口径13.2cm、C-14 V 層出土。

1061・1062は断面観において口縁部上部が突起状にせり出した形態をなす。1063は口縁部の内側に凹みが見られるが、口唇部全体が丸くなる（台帳No.545）A-15出土。1064～1066は底部資料である。

1064内外器面の色合いが茶褐色を呈す。

1065外器面には叩き跡が認められる。

10662点接合。内外面ともにロクロと叩きの整形痕が認められる。

### 4. 陶磁器類

I 地区において検出された陶磁器類は産地別に大別すると、中国産陶磁器、沖縄産陶器、本土産磁器に分けることができる。中国産陶磁器には白磁（玉縁碗）、青磁、青花、褐釉陶器が含まれ、沖縄産陶器には施釉陶器（上焼）、無釉陶器（荒焼）、陶質土器（アカムン）と赤瓦が含まれる。また、本土産磁器には肥前地方で製作されたと思われる染付に加え、「スンカンマカイ」と称される類の近代磁器が存在する。しかし、いずれの資料も小破片であり、実測図の作成に耐え得る資料が乏しいことから、本項目において「陶磁器類」としてまとめて取り扱った。出土状況は第4表に示すが、白磁以外の陶磁器類については、その詳細および実測図の掲載は割愛した。

#### 中国陶磁（白磁）

ここで取り上げる中国陶磁は白磁で、玉縁碗が出土している。検出総数は6点。その内訳は口縁部が5点、胴部が1点と少ない。他の陶磁器に比べ実測可能な資料が相対的に多い口縁部資料5点を図化した。玉縁碗は金武氏の分類（金武1989）によると次の2種類に分けられ、概ね12世紀から13世紀に位置づけられることが知られている。

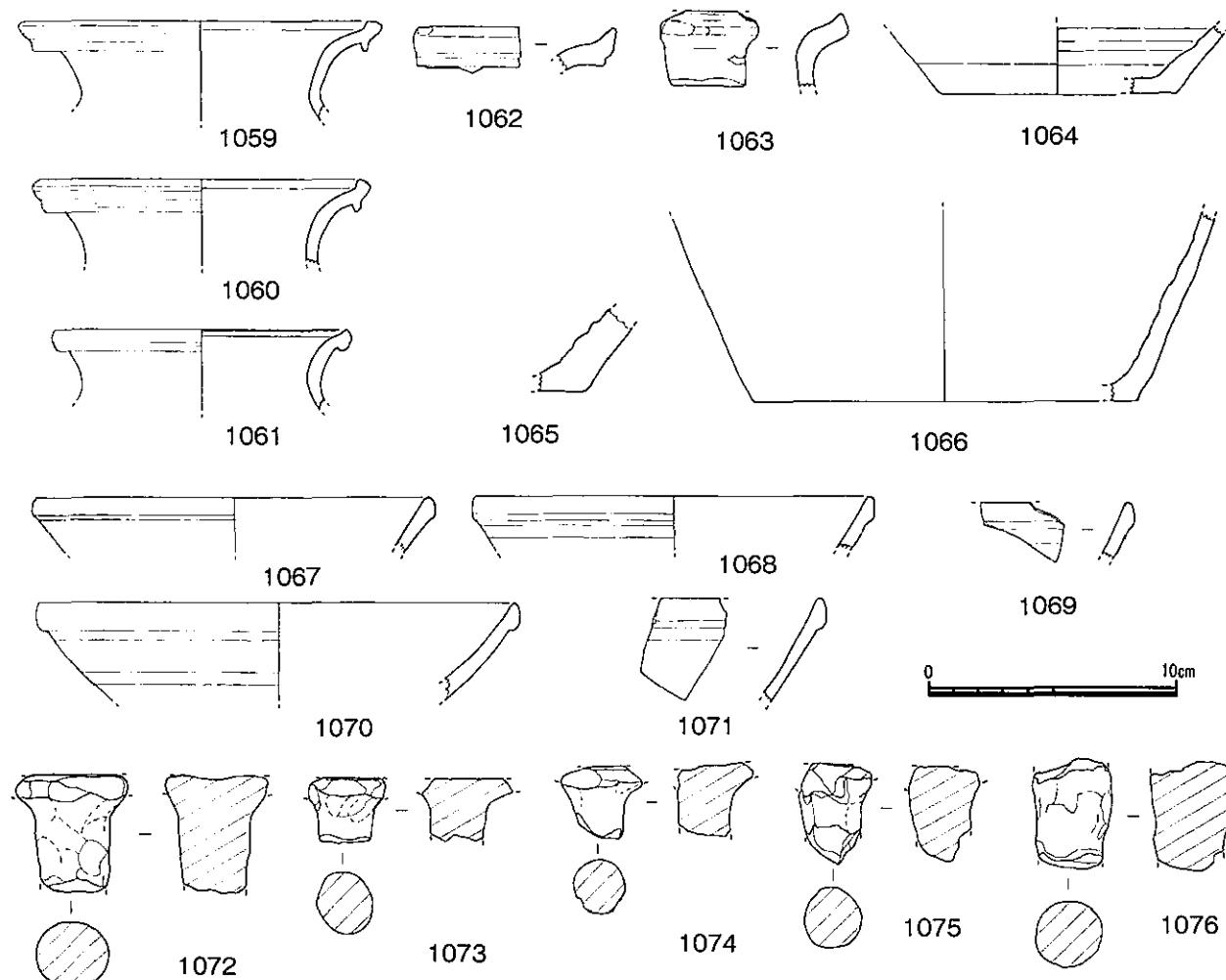
1059～1061は比較的薄手で口縁部の玉縁が小さく、胴部がわずかに膨らむ器形になる。1062・1063は前者に比べ厚手で口縁部の玉縁が大きく、胴部から口縁部へ逆ハの字状に開く器形となる。

### 5. 土製品

I 地区において、棒状の手づくねで製作された土製品が5点出土している。用途不詳の土製品だがII地区でも類品が出土しており、県内では銘苅原遺跡でも出土することなどから、本遺跡の出土層からは時期的に該当する可能性は貝塚後期とグスク時代及び近世以降であるが、本遺跡II地区や銘苅原遺跡などとの共通点を鑑みればグスク時代初期の遺物に該当する可能性が高い。1072（A・B-11・12層序不明）、1073（A-15IV層）、1074（A-14IV層）、1075（B-17 II層）、1076（D-14IV層）。

第4表 I地区出土遺物観察表（石器・カムイヤキ・白磁）

出典 No.	グリット	崩	崩偏考	種別	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	重量 (g)	観察事項	
											(上器：器色塗、混和材、ほか観察所見等)	
1053	C-13	IV	-	石器	磨石	チャート	98.0	82.5	5.5	673.4	No.536. 磨石として利用したと考えられる平滑面を有するが、長軸端部には敲打痕も認められる。	
1054	C-15・16	土坑内	-	石器	敲石	斑岩	78.0	91.0	62.5	591.8	No.195. 平滑な磨面中央部には敲打による凹みが認められる。	
1055	C-15	V	-	石器	磨石	花崗斑岩	85.0	89.0	49.0	610.2	No.517. 及裏面ともに平滑な磨面を有するが、平坦面及び縁辺部には微細な敲打痕が認められる。	
1056	D-17	X	-	石器	磨石	砂岩	76.0	74.0	54.5	427.0	No.91. 磨石として利用したと考えられる平滑面を有するが、長軸端部には敲打痕も認められる。	
1057	C-15・16	土坑内	-	石器	敲石	砂岩	113.0	81.0	15.0	144.7	No.196. 全形を窪うことはことはできないが、穂やかな傾斜を持つ平滑面	
1058	B-12	VII	-	石器	円盤状 石器	砂岩	97.0	84.5	21.0	247.2	No.10。用途不明の石器であるが、縁辺部には敲打による剥離痕が認められる。	
1059	C-13	X I	鉢付	口縁	-	-	14.2	-	-	-	口縁部の整形が精緻で、口縁部下部の突起が著しい。	
1060	C-14	V	鉢付	口縁	-	-	13.2	-	-	-	口縁部の整形が精緻で、口縁部下部の突起が著しい。	
1061	B-12	V	鉢付	口縁	-	-	11.8	-	-	-	上記の2点に比べ口縁部下部の突起が縮退し丸みを帯びる。	
1062	C-14	V	鉢付	口縁	-	-	-	-	-	-	断面観において口縁部上面が突起部にせり出した形態をなす。	
1063	A-15	V	鉢付	口縁	-	-	-	-	-	-	口縁部の内側に凹みが見られるが、口縁部全体が丸くなる。	
1064	C-16	不明	鉢付	底部	-	-	-	-	-	-	内外器面の色合いが茶褐色を呈す。	
1065	B-17	II	鉢付	底部	-	-	-	-	-	-	外器面には唯き跡が認められる。	
1066	B-12	V・VII	鉢付	底部	-	-	15.6	-	-	-	2点接合。内外面ともにクロと叩きの整形痕が認められる。	
1067	B-16	II	白磁	口縁	I類1種	-	15.8	-	-	-	玉縁部の整形が丸みを持ち、後縁と後刃が戦やかになる。	
1068	B-18	X	白磁	口縁	I類2種	-	16.0	-	-	-	玉縁部の整形がシャープで明確な後縁と後刃を有する。	
1069	C-18	X	白磁	口縁	I類2種	-	-	-	-	-	玉縁部の整形がシャープで明確な後縁と後刃を有する。	
1070	A-16	VI	白磁	口縁	I類2種	-	19.2	-	-	-	玉縁部の整形がシャープで明確な後縁と後刃を有する。	
1071	B-17	X	白磁	口縁	I類2種	-	-	-	-	-	玉縁部の整形がシャープで明確な後縁と後刃を有する。	



第17図 I地区カムイヤキ・白磁・土製品（縮尺1/3）

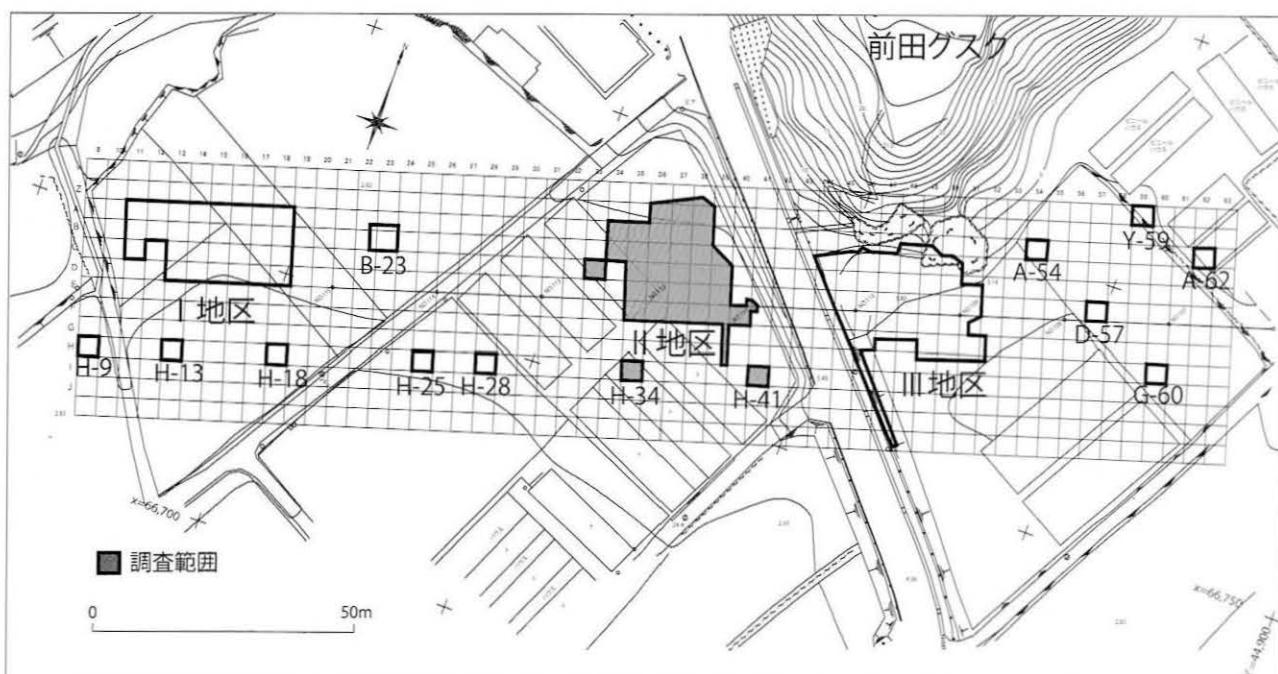
# 第V章 II地区の調査報告

## 第1節 層序と遺構

### 1. はじめに

屋部前田原貝塚の発掘調査対象地が広範囲にわたることから、調査対象地を分断する県道117号線（名護運天港線）とそれに連結する農道を境に便宜上3地区に区分し調査を行なった。II地区は、屋部422-11、469-5、470-3番地とする。

平成14年度に実施した試掘調査の結果の成果を参考にH-25グリッドから、H-41、E-40、Z-37、A-34の順で試掘調査を行った。その結果E-40、Z-37グリッドを中心に確認された遺物包含層約450m<sup>2</sup>を調査範囲として絞り込み本調査を実施した（第18図）



第18図 屋部前田原貝塚II地区位置図

### 2. 層序

遺物包含層はおおまかに分けて3つの文化層に分類でき、XII～XIV層を沖縄貝塚時代中期に、IX～X層を沖縄貝塚時代後期前半期に、VII層を沖縄貝塚時代後期後半期～グスク時代に比定できると考えられる。XII～XIV層とIX～X層は調査区でも北東部（Z・A-36・37・38グリッド）からのみの出土であり、遺跡の中心部は未調査の道路下にある可能性があり、VII層も西側・南側に行くにしたがい薄くなっていく（第19図）。

I層～IV層：表土層・耕作土〔I層：褐色（7.5YR 4/4）。客土。II層：赤褐色（5YR 4/6）。客土。

III層：褐色（7.5YR 4/6）。客土。IV層：褐色（7.5YR 4/6）。客土。〕客土、褐色土が互層となって遺跡を覆う。近・現代の造成によって持ち込まれたと思われる土である。

V層：無遺物層〔明黄褐色（2.5Y6/6）〕質が細かく、粘質の強い。無遺物層。

VI層：遺物包含層〔オリーブ褐色（2.5Y4/3）〕。1～2cmの礫混じりの土層で、近世、近・現代の遺物が出土する。

VII層：遺物包含層〔褐色（10YR4/4）〕わずかに1～2cmの礫、焼土、土器がみられる。

VIII層：遺物包含層〔褐色（10YR4/4）〕調査区全面に確認された。2～3cmの礫、土器を多く含む土層。

IX層：遺物包含層〔褐色（10YR4/6）〕調査区北東部でのみ確認された。平成14年度試掘時には下面に集石が確認された。

X層：遺物包含層〔褐色（10YR4/6）と黄褐色（10YR5/6）が混じる。〕調査区北東部でのみ確認された。2～3cmの礫、土器を含む。

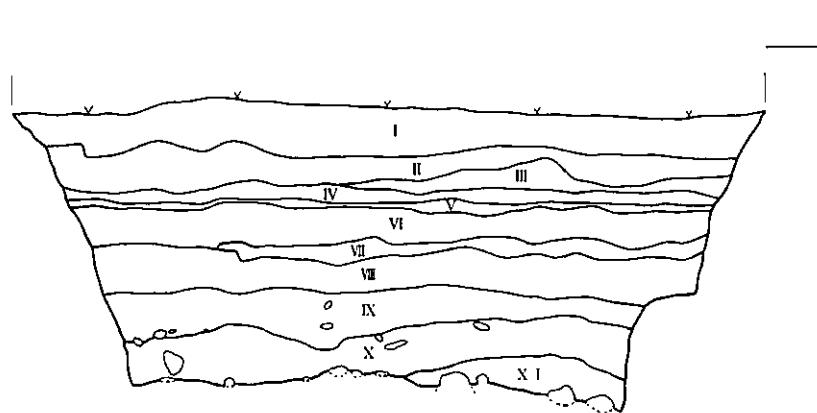
第XⅠ層 無遺物層〔褐色（10YR4/6）〕サンゴを多量に混入する層で調査区のグリッドのAライン以南で確認された。第IX層・第X層・第XⅡ層とはほとんど重ならないものの、平成14年度試掘時に第X層と第XⅡ層の間にに入ることが確認されている。基本的に遺物包含層ではないが部分的に直上の層であるVII層の遺物が混じる。

第XⅡ層 褐色10YR4/4と暗褐色10YR3/4が混じる。遺物包含層。調査区北東部でのみ確認された。

第XⅢ層 遺物包含層〔褐色（7.5YR4/6）〕調査区北東部のZ-37・38、A-38グリットで確認された。

第XIV層 遺物包含層〔褐色（10YR4/4）と暗褐色（10YR3/4）が混じる。〕1～2cmの礫含む。

第XV層 地山（褐色砂（7.5YR4/6））



第19図 II地区Z-37東壁土層図 (S=1/25)

### 3. 遺構

II地区の主な遺構として、グスク時代と近世の遺構が検出された。グスク時代の遺構には、平地住居跡・高床式建物跡と推される掘立柱建物跡。近世の遺構として炉跡が検出されている（第20図）。

#### (1) グスク時代の遺構

##### 1) ピット群及び掘立柱建物跡

VII層除去後にXⅠ層（枝サンゴ無遺物層）およびXV層（砂層地山）上面に182基余のピット群が検出された。特にA-36・37、B-37はピットが集中しておりいくつか重複していた。ピット覆土は暗褐色、褐色を基調とし、直径30cm程度のものと直径50cm程度の大型のものがある。各ピットの計測値は別表に示した（第5表）。中には柱痕の確認できるものや、基底部または内側面・底面に礫を配置したようなものも見られたが、ほとんどのピットからは柱痕を確認することができなかった。

第5表 II 地区検出遺構属性表

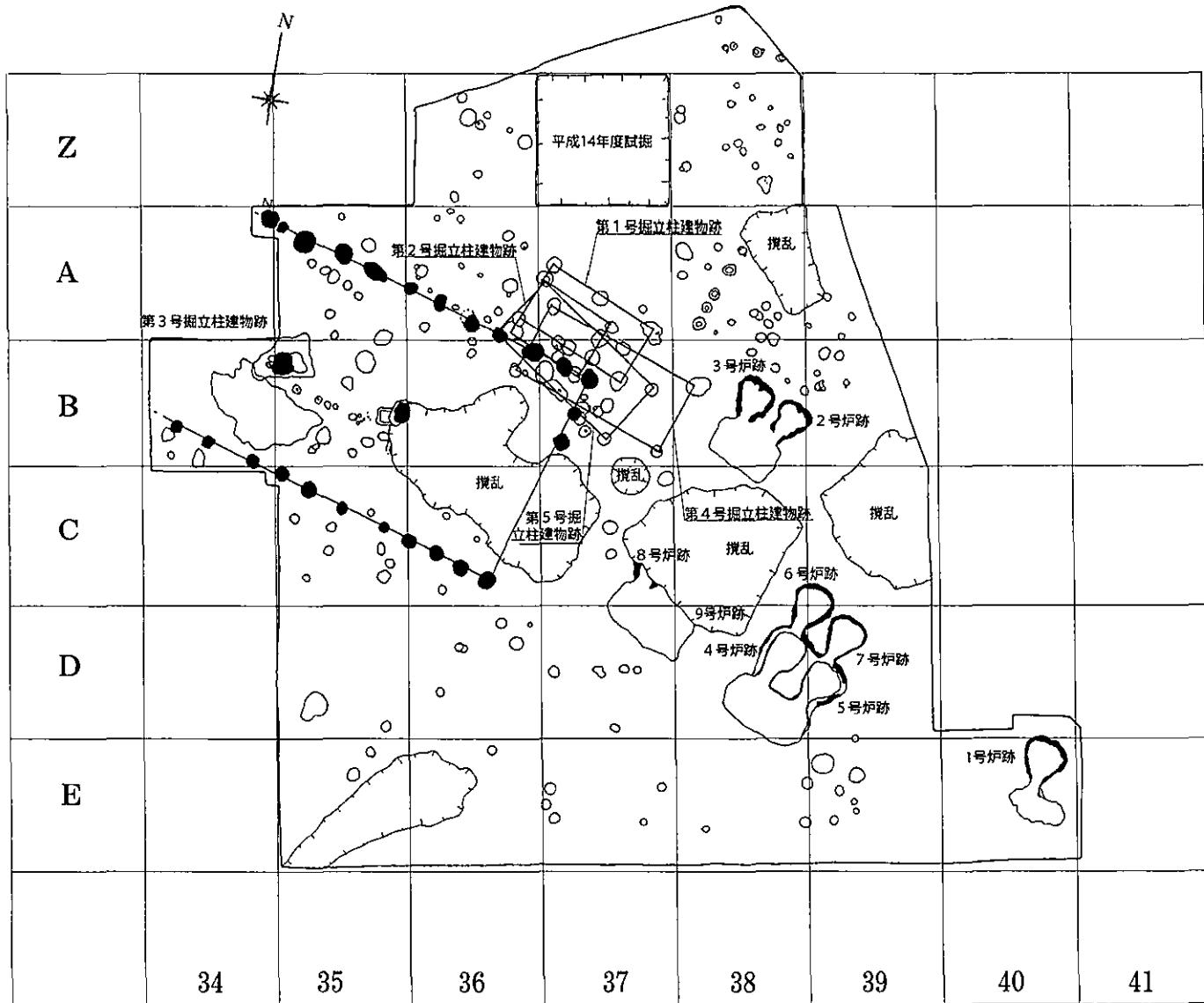
Pit No	グリッド	径(cm)		標高(cm)	土色	形状	備考	Pit No	グリッド	径(cm)		標高(cm)	土色	形状	備考
		長径	短径							長径	短径				
1	A - 35	50.0	42.0	294.9	10YR褐色4/4	円形	第3号柱穴1	92	A • B - 35	20.0	18.0	297.1	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴19
2		35.0	33.0	298.7	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴2	93		38.0	34.0	298.4	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴20
3		50.0	40.0	304.6	10YR暗褐色3/4	円形	第2号柱穴4	94		20.0	20.0	308.6	10YR褐色4/4	円形	柱穴21
4		15.0	12.0	297.5	10YR暗褐色3/4	不定形		95		26.0	23.0	295.6	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴22
5		19.0	19.0	296.3	10YR褐色4/4	円形	柱穴2	96		33.0	25.0		10YR褐色4/4	椭円形	柱穴23
6		27.0	21.0	295.4	10YR褐色4/4	不定形	柱穴3	97		25.0	19.0	294.6	10YR褐色4/4	椭円形	柱穴24
7		37.0	31.0	297.3	10YR褐色4/4	円形	柱穴4	98		19.0	19.0	294.4	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴25
8		19.0	18.0	294.1	10YR褐色4/6	円形	柱穴5	99		41.0	27.0	290.4	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴26
9		21.0	21.0	299.7	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴5	100		20.0	20.0	293.7	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴27
10		43.0	39.0	307.0	10YR褐色4/4	円形	柱穴6	101		25.0	24.0	293.9	10YR褐色4/4	円形	柱穴28
11		15.0	14.0	306.0	10YR褐色4/4	円形	柱穴7	102		30.0	19.0	295.5	10YR褐色4/4	柱穴29	
12		13.0	10.0	301.3	10YR褐色4/4	椭円形	柱穴8	103		31.0	21.0	297.7	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴30
13		20.0	18.0	301.2	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴9	104		32.0	27.0	297.8	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴31
14		39.0	31.0	304.5	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴10	105		51.0	48.0	288.2	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴18
15		17.0	15.0	303.8	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴11	106		53.0	50.0	278.7	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴19
16		14.5	12.0	306.1	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴12	107		51.0	43.0	275.3	10YR褐色4/4	椭円形	第3号柱穴20
17		18.0	13.0	306.5	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴13	108		51.0	45.0	275.6	10YR暗褐色3/4	椭円形	第3号柱穴21
18		28.0	25.0	309.6	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴14	109		44.0	40.0	280.0	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴22
19		53.0	41.0	306.0	10YR暗褐色3/3	円形	第3号柱穴7	110		29.0	25.0				柱穴1
20		50.0	34.0	304.2	10YR暗褐色3/3	不定形	第3号柱穴8	111		30.0	26.0	273.3			柱穴2
21		46.0	41.0	304.3	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴6	112		50.0	42.0				柱穴3
22	A - 37	55.5	51.0	301.4	10YR暗褐色3/4	円形	第1号柱穴1	113		34.0	33.0				柱穴4
23		49.0	41.0	304.5	10YR暗褐色3/4	円形	第1号柱穴2	114		31.0	30.0				柱穴5
24		53.0	47.0	304.5	10YR暗褐色3/4	円形	第1号柱穴3	115		28.0	25.0	275.1			柱穴6
25		49.0	43.0	303.1	10YR暗褐色3/4	円形	第2号柱穴1	116		19.0	18.0	275.9	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴7
26		32.0	27.0	307.1	10YR暗褐色3/4	円形	第2号柱穴2	117		39.0	27.0	273.7	10YR褐色4/4	椭円形	柱穴8
27		44.0	40.0	303.4	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴9	118		43.0	42.0	278.4	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴23
28		64.0	60.0	308.8	10YR暗褐色3/4	円形	第5号柱穴2	119		54.0	51.0	277.7	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴24
29		50.5	34.5	309.9	10YR暗褐色3/4	椭円形	第4号柱穴1	120		56.0	51.0	277.2	10YR暗褐色3/4	椭円形	第3号柱穴25
30		30.0	28.0	303.7	10YR褐色4/4	円形	柱穴1	121		45.0	42.0				柱穴1
31		32.5	27.5	203.8	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴2	122		22.0	22.0				柱穴2
32	A - 38	22.0	22.0	201.3	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴3	123		39.0	21.0	278.5	10YR褐色4/4	不定形	柱穴3
33		26.0	24.0	304.1	10YR褐色4/4	円形	柱穴4	124		20.0	19.0	279.8	10YR褐色4/4	円形	柱穴4
34		22.0	18.0	299.4	10YR褐色4/4	円形	柱穴5	125		20.0	18.0	280.0	10YR褐色4/4	円形	柱穴5
35		27.0	23.0	302.6	10YR褐色4/4	円形	柱穴6	126		32.0	31.0	300.2	10YR暗褐色3/4	柱穴1	
36		35.0	30.0	303.6	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴7	127		45.0	45.0	302.0	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴2
37		26.0	22.0	315.3	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴8	128		58.0	46.0	307.5	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴3
38		36.0	32.0	307.1	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴9	129		27.0	23.0	274.4	10YR褐色4/4	円形	柱穴1
39		30.0	26.0	305.0	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴10	130		116.0	58.0	276.9	10YR褐色4/4	椭円形	土坑1
40		38.0	33.0	302.7	10YR褐色4/4	円形	柱穴11	131		33.0	31.0	286.8	10YR褐色4/4	円形	第6号柱穴1
41		41.0	34.0	304.3	10YR褐色4/4	円形	柱穴12	132		32.0	28.0	267.8	10YR褐色4/4	円形	第6号柱穴4
42	B - 36	32.0	30.0	299.0	10YR褐色4/4	円形	柱穴13	133		41.0	32.0				柱穴1
43		48.0	45.0	302.3	10YR暗褐色3/4	土坑1		134		48.0	44.0	287.3	10YR褐色4/4	円形	柱穴2
44		21.0	17.0	273.5	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴1	135		34.0	31.0	286.0	10YR褐色4/4	円形	第6号柱穴2
45		33.0	25.0	296.1	10YR暗褐色3/4	椭円形	柱穴2	136		33.0	32.0	286.8	10YR褐色4/4	円形	第6号柱穴3
46		32.0	30.0	297.2	10YR暗褐色3/4	円形	第4号柱穴6	137		28.0	24.0	287.9	10YR褐色4/4	円形	柱穴2
47		48.0	45.0	305.7	10YR褐色4/4	円形	第1号柱穴5	138		29.0	23.0	287.1	7.5YR明褐色5/6	柱穴3	
48		60.0	49.0	303.6	10YR褐色4/4	円形	第1号柱穴6	139		31.0	28.0	271.4	10YR褐色4/4	円形	柱穴1
49		36.0	29.5	302.7	10YR暗褐色3/4	円形	第2号柱穴4	140		41.0	39.0	271.4	10YR褐色4/4	円形	柱穴2
50		56.0	54.0	310.1	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴10	141		29.0	27.0	260.4	10YR褐色4/4	円形	第6号柱穴5
51		45.5	44.5	299.0	10YR暗褐色3/4	円形	第3号柱穴11	142		28.0	24.0	276.3	10YR褐色4/4	円形	第6号柱穴6
52	B - 37	70.0	56.0	302.7	10YR暗褐色3/4	不定形	第3号柱穴12	143		18.0	18.0	280.0	7.5YR暗褐色3/3	円形	柱穴1
53		54.0	46.0	307.0	10YR暗褐色3/4	椭円形	第3号柱穴14	144		24.0	22.0	287.8	10YR褐色4/4	円形	柱穴2
54		46.5	31.0	309.0	10YR暗褐色3/4	円形	第4号柱穴2	145		30.0	28.0	276.8	10YR褐色4/4	円形	柱穴3
55		38.0	37.0	303.0	10YR暗褐色3/4	円形	第5号柱穴3	146		35.0	31.0	276.8	10YR褐色4/4	円形	柱穴4
56		41.0	29.0	301.6	10YR暗褐色3/4	椭円形	第5号柱穴5	147		24.0	21.0	286.0	10YR褐色4/4	円形	柱穴1
57		42.5	37.0	303.5	10YR褐色4/4	円形	第5号柱穴6	148		19.0	19.0	290.9	10YR暗褐色3/4	柱穴1	
58		35.0	32.0	305.5	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴1	149		35.0	34.0	289.5	7.5YR暗褐色3/3	柱穴2	
59		48.5	39.0	301.9	10YR暗褐色3/4	柱穴2		150		24.0	23.0	288.9	10YR褐色4/4	柱穴3	
60		34.0	31.0	303.6	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴3	151		24.0	18.0	285.8	7.5YR褐色4/4	椭円形	柱穴3
61		33.0	31.0	308.2	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴7	152		62.0	56.0	292.9	10YR暗褐色3/4	柱穴4	
62	B - 38	60.0	60.0	301.5	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴8	153		32.0	27.0	270.7	7.5YR暗褐色3/4	円形	柱穴6
63		38.0	43.0	307.0	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴9	154		36.0	33.0	290.0	10YR褐色4/4	円形	柱穴7
64		37.0	40.0	307.1	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴10	155		20.0	16.0	296.2	10YR褐色4/4	円形	柱穴8
65		71.0	52.0	315.2	10YR暗褐色3/4	椭円形	第4号柱穴3	156		62.0	56.0	292.9	10YR暗褐色3/4	柱穴3	
66		60.0	44.0	307.5	10YR暗褐色3/4	円形	第4号柱穴4	157		32.0	27.0	295.6	10YR暗褐色3/4	円形	柱穴1
67		30.0	24.5	305.1	10YR褐色4/4	椭円形	柱穴1	158		54.0	54.0	296.0	10YR褐色4/4	円形	柱穴2
68		23.0	17.5	304.6	10YR褐色4/6	円形	柱穴2	159		21.0	18.0	295.6	10YR褐色4/6	円形	柱穴3
69		20.0	19.0	306.8	10YR褐色4/4	円形	柱穴3	160		29.0	28.0	293.3	10YR褐色4/6	円形	柱穴4
70		24.0	24.0	307.9	10YR褐色4/4	円形	柱穴4	161		44.0	43.0	293.9	10YR褐色4/6		

## 2) 挖立柱建物跡

ピットの配置から5棟の建物プランが想定できた(第20図27本の柱からなる大型建物が1棟(第3号掘立柱建物跡)、6本柱の小型建物が3棟(第1・4・5号掘立柱建物跡)、4本柱が1棟(第2号掘立柱建物跡)である(第6表)。いずれも長軸はほぼ南西に面している。小型建物はA-37、B-37グリットに集中しており重複が見られ、プランの中には同一の場所にピットがあったと思われるものもある。地区の南半部においてもプランの想定を試みたが後世の搅乱によりピットの残存状況が悪く、プランの想定には至らなかった。各プランの時期の把握にあたってはピット覆土からの出土遺物、切りあい関係などを検討材料として各時期への帰属を求めた。

建物跡	サイズ (長軸×短軸)	柱数	中柱
第1号掘立柱建物跡	360 cm × 200 cm	6本	-
第2号掘立柱建物跡	240 cm × 180 cm	4本	-
第3号掘立柱建物跡	1000 cm以上 × 700 cm以上	25本	2本
第4号掘立柱建物跡	475 cm × 230 cm	6本	-
第5号掘立柱建物跡	470 cm × 230 cm	6本	-

第6表 挖立柱建物跡サイズ一覧



第20図 II地区遺構配置図 (S=1/200)

## ①第1号掘立柱建物跡（第21図・第6・7表）

第1号掘立柱建物跡は大きさ長軸約360cm、短軸約200cmの6本柱で、ピットの大きさは平均長径約52.5cm、短径約45.5cm、深さ約55cmを計る。建物サイズを他遺跡の同様の遺構と比較してみると、タシーモー北方遺跡が（読谷村教委2001）平均約342.6×227.8cm、伊佐前原第一遺跡（沖縄県埋文2001）が約320×230cm、吹出原遺跡（読谷村教委1990）が平均約380×257cmでほぼ同様のサイズであるといえる。

ピット1の下部には5～10cm程度の礫が集中して見られ当初根固め石的なものかと考えられたがそれらは柱穴の範囲外にも広がっておりこの柱穴由来のものではないと判断した。ピット4は第2号掘立柱ピット3と切り合っており、ピット4が第2号掘立柱ピット3を切っている。

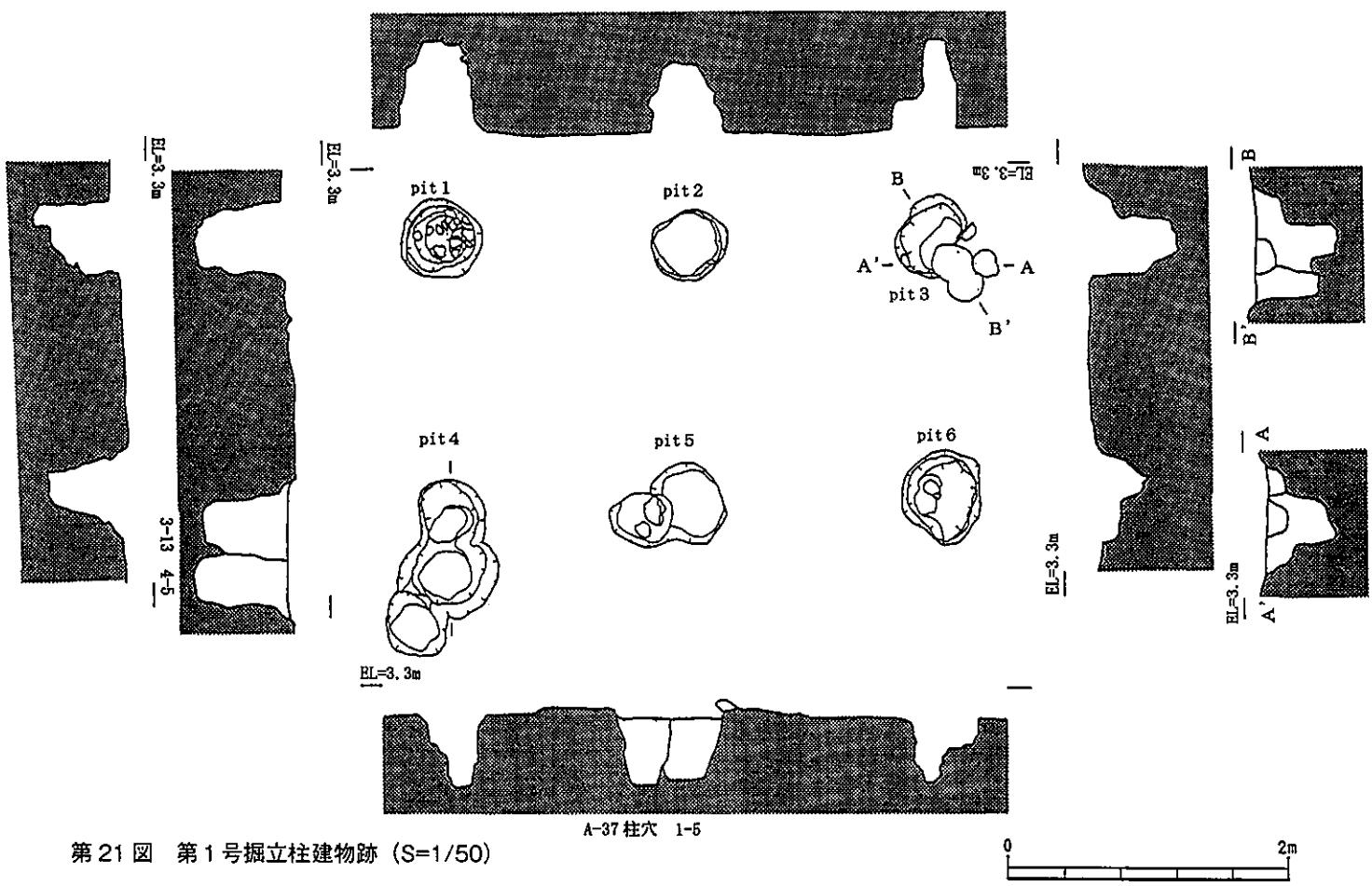
## ②第2号掘立柱建物跡（第22図・第6・7表）

第2号掘立柱建物跡は大きさ長軸約240cm、短軸約180cmの4本柱でピットの大きさは平均長径約43.7cm、短径約36cm、深さ約57cm（第7表）を計る。建物サイズを他遺跡の同様の遺跡と比較してみると、喜友名貝塚・喜友名グスク（沖縄県教委1999）が平均約223×180cm、タシーモー北方遺跡（読谷村教委2001）が約280×220cmでほぼ同様のサイズである。

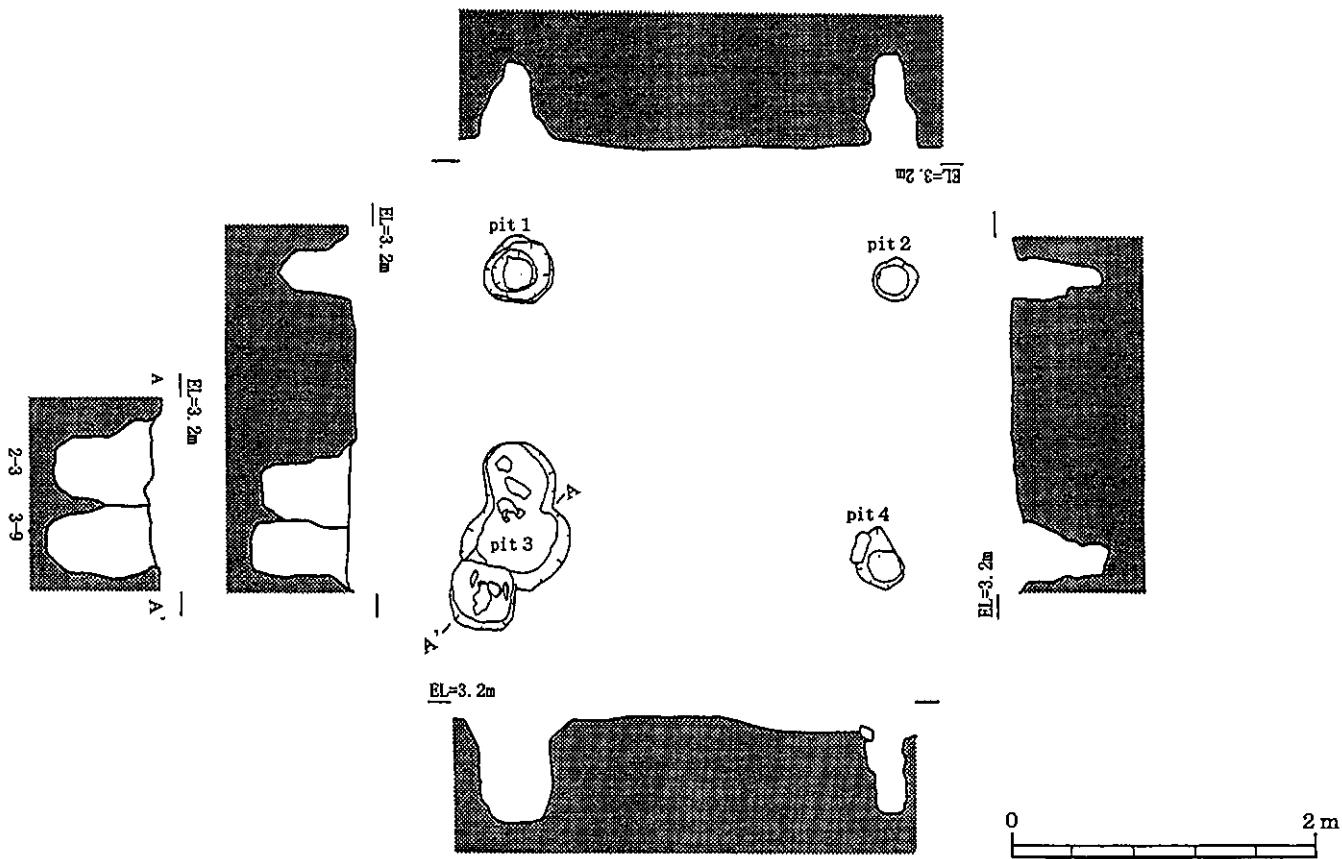
ピット3は第1号掘立柱ピット4と第3号掘立柱ピット9と切り合っており、そのどちらにも切られている。したがって第2号掘立柱は第1号掘立柱・第3号掘立柱より古いということになる。またピット1は第5号掘立柱建物跡ピット1と同位置のものである。

遺構番号 No.	pit No.	グリット 長径 短径	径(cm) 長径 短径	深さ (cm)	標高 (cm)	形状	遺物
第1号掘立柱	1	A-37	55.5 51.0	64.0	301.1	円形	
第1号掘立柱	2	A-37	49.0 41.0	50.0	304.5	円形	
第1号掘立柱	3	A-37	53.0 47.0	63.0	304.5	円形	
第1号掘立柱	4	A-36	50.0 40.0	60.0	304.6	円形	
第1号掘立柱	5	B-37	48.0 45.0	50.0	305.7	円形	
第1号掘立柱	6	B-37	60.0 49.0	52.0	303.6	円形	
第2号掘立柱	1	A-37	49.0 43.0	44.0	303.1	円形	
第2号掘立柱	2	A-37	32.0 27.0	63.0	307.1	円形	
第2号掘立柱	3	A-36	58.0 45.0	65.0	304.6	円形	
第2号掘立柱	4	B-37	36.0 29.5	56.0	302.7	円形	
第3号掘立柱	1	A-35	50.0 42.0	65.0	294.9	円形	土器（傳）
第3号掘立柱	2	A-35	35.0 33.0	27.0	298.7	円形	
第3号掘立柱	3	A-35	76.0 67.0	63.0	301.0	円形	
第3号掘立柱	4	A-35	67.0 60.0	64.0	300.0	円形	
第3号掘立柱	5	A-35	87.0 45.0	73.0	298.0	楕円形	
第3号掘立柱	6	A-36	46.0 41.0	80.0	304.3	円形	土器口縁（グスク）、石鍋模倣底部（平底）
第3号掘立柱	7	A-36	53.0 41.0	84.0	306.0	円形	土器口縁（グスク）、カムイサキ（有文）、敲打器
第3号掘立柱	8	A-36	63.0 60.0	76.0	304.2	不定形	
第3号掘立柱	9	A-37	44.0 40.0	70.0	303.4	円形	
第3号掘立柱	10	B-37	56.0 54.0	75.0	310.1	円形	土器口縁（グスク）、底部（くびれ）
第3号掘立柱	11	B-37	45.5 44.5	75.0	299.0	円形	
第3号掘立柱	12	B-37	70.0 56.0	63.0	302.7	不定形	上器口縁（グスク）、蝶蓋製敲打器
第3号掘立柱	13	B-37	56.0 35.0	85.0	304.0	円形	
第3号掘立柱	14	B-37	54.0 46.0	86.0	307.0	楕円形	土器口縁（グスク）
第3号掘立柱	15	B-34	40.0 38.0	38.0	275.0	円形	
第3号掘立柱	16	B-34	36.0 40.0	50.0	280.0	楕円形	
第3号掘立柱	17	B-34	36.0 46.0	52.0	276.0	円形	敲打器
第3号掘立柱	18	C-35	51.0 48.0	63.0	288.2	円形	
第3号掘立柱	19	C-35	53.0 50.0	46.0	278.7	円形	
第3号掘立柱	20	C-35	51.0 43.0	52.0	275.3	楕円形	
第3号掘立柱	21	C-35	51.0 45.0	64.0	375.6	楕円形	白磁（玉縁）、貝飾
第3号掘立柱	22	C-35	44.0 40.0	60.0	280.0	円形	
第3号掘立柱	23	C-36	43.0 42.0	59.0	278.4	円形	
第3号掘立柱	24	C-36	54.0 51.0	51.0	277.7	円形	
第3号掘立柱	25	C-36	56.0 51.0	45.0	277.2	楕円形	上器口縁（突唇）、底部（丸底、乳房状）、磨石、木片
第4号掘立柱	1	A-37	50.5 34.5	50.0	309.9	楕円形	
第4号掘立柱	2	B-37	46.5 31.0	60.0	309.0	円形	
第4号掘立柱	3	B-38	71.0 52.0	66.0	315.2	楕円形	
第4号掘立柱	4	B-38	60.0 44.0	29.0	307.5	円形	
第4号掘立柱	5	B-37	40.0 37.0	53.0	304.0	円形	
第4号掘立柱	6	B-36	32.0 30.0	59.0	297.2	円形	
第5号掘立柱	1	A-37	49.0 43.0	41.0	303.1	円形	第2号掘立柱建物跡柱穴上同
第5号掘立柱	2	A-37	64.0 60.0	56.0	308.8	円形	
第5号掘立柱	3	B-37	38.0 37.0	48.0	303.0	円形	
第5号掘立柱	4	B-37	75.0 40.0	74.0	302.0	楕円形	
第5号掘立柱	5	B-37	41.0 29.0	46.0	301.6	楕円形	
第5号掘立柱	6	B-37	42.5 37.0	46.0	303.5	円形	

第7表 掘立柱建物跡柱穴観察一覧



第21図 第1号掘立柱建物跡 (S=1/50)



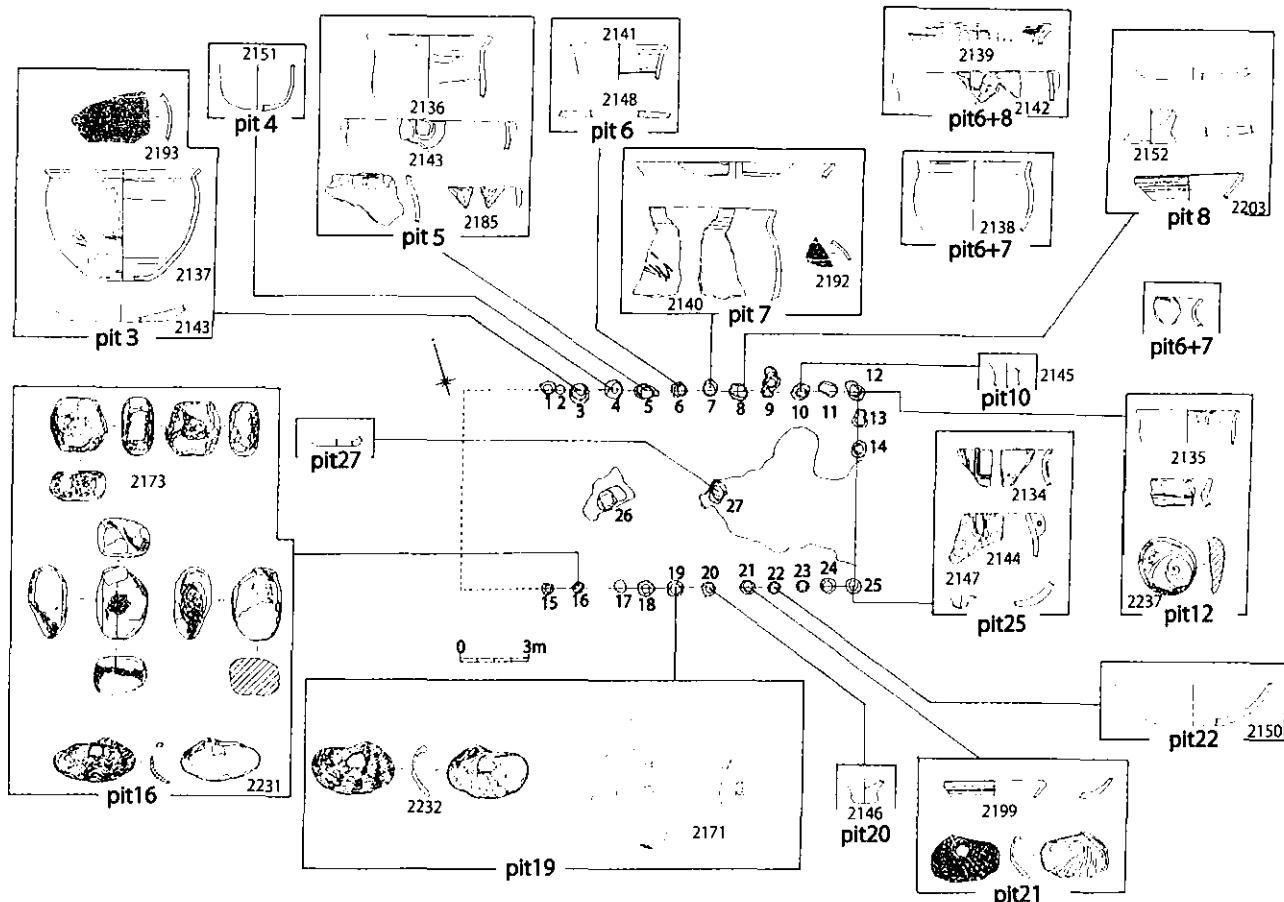
第22図 第2号掘立柱建物跡 (S=1/50)

### ③第3号掘立柱建物跡（第23・24図・第6・7表）

第3号掘立柱建物跡は出ている範囲で大きさ長軸1,000cm以上、短軸700cm以上で中央に2本の太い中柱を持ち、周辺にいくつかの柱をめぐらす大型建物である。建物の東側は現代の搅乱を受けており、西側は現在も使用されている道路のため未発掘であるが、中柱の周りに25本の柱が確認されている。ピットのサイズは平均長径約52.7cm、短径約46.3cm、深さ約62.6cm（第7表）を計る。建物サイズを他遺跡と比較すると、伊佐前原第一遺跡（沖縄県埋文2001）では約640×390cm、タシモー北方遺跡（読谷村教委2001）が平均約852×486cmで、第3号掘立柱はそれらに比べて長・短軸ともに大きいようである。またピットの大きさもタシモー北方遺跡が長径約24cm、短径平均約21cmであるのに対し、第3号掘立柱は平均長径約52.7cm、短径約46.3cmとそのサイズは大きいようである。第3号掘立柱建物跡は他遺跡に比べて建物自体のサイズとピットサイズともに大きいようである。ただし、ピットのサイズの違いはその建物跡の残存状況によるものである可能性もある。

ピット9は第2号掘立柱建物跡ピット3と、ピット13は第4号掘立柱ピット5と切りあい関係がある。ピット9は第2号掘立柱建物跡を切っており、ピット13は第4号掘立柱ピット5によって切られている。したがって、第3号掘立柱建物跡は第2号掘立柱建物跡より新しく、第4号掘立柱建物跡より古いということになる。新旧関係を、古→新で略すると、第2号掘立柱建物跡→第3号→第4号と想定される。

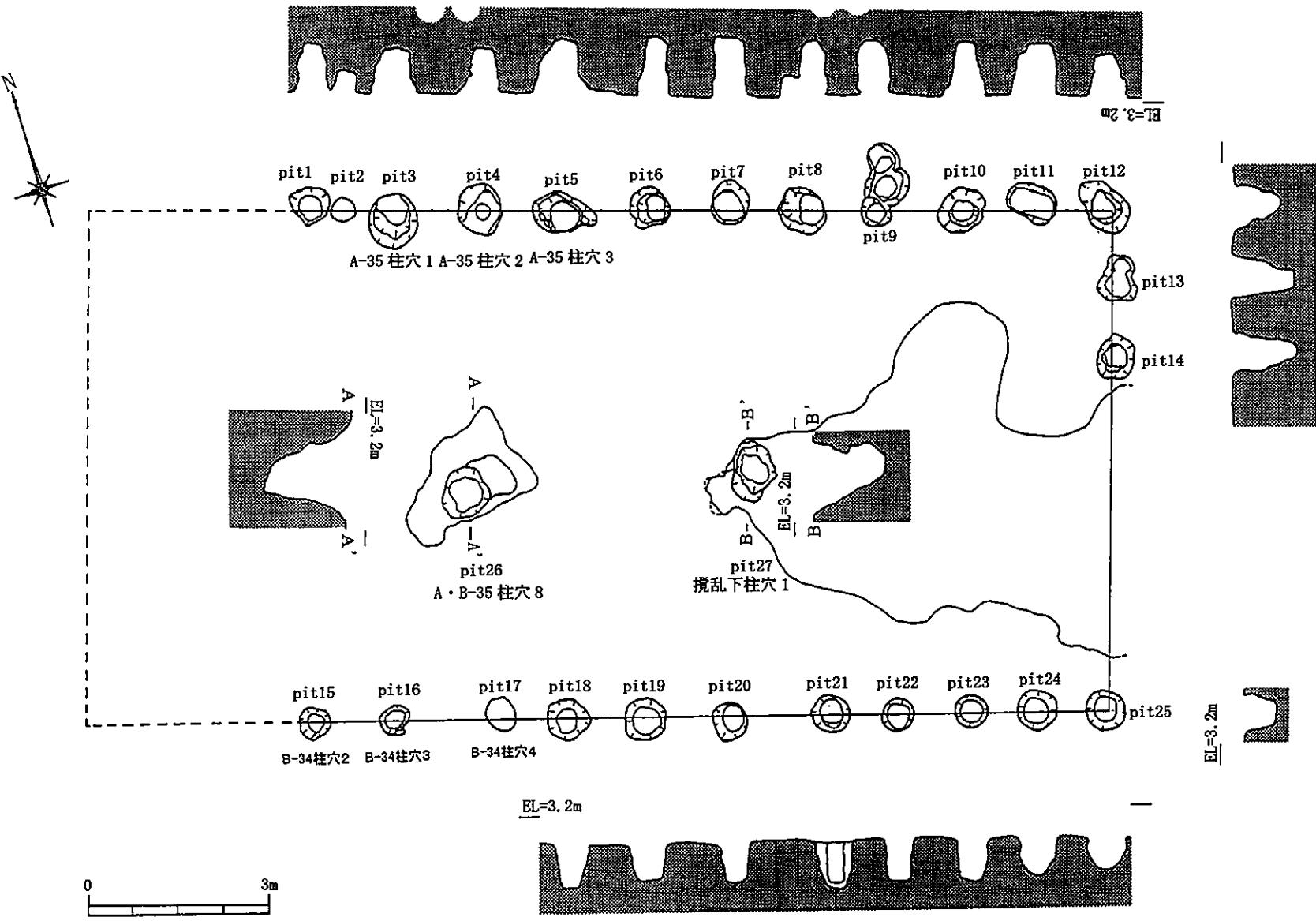
なお、第3号掘立柱出土遺物は土器ではフェンサ下層式、グスク系土器など。陶磁器では白磁（玉縁口縁碗）。その他にカムィヤキ、石器（磨石、敲打器）、貝製品（貝錘、螺蓋製敲打器）などが出されている。出土状況を第23図に示した。これらの遺物から第3号掘立柱はグスク時代の前半期に位置づけることができそうである。

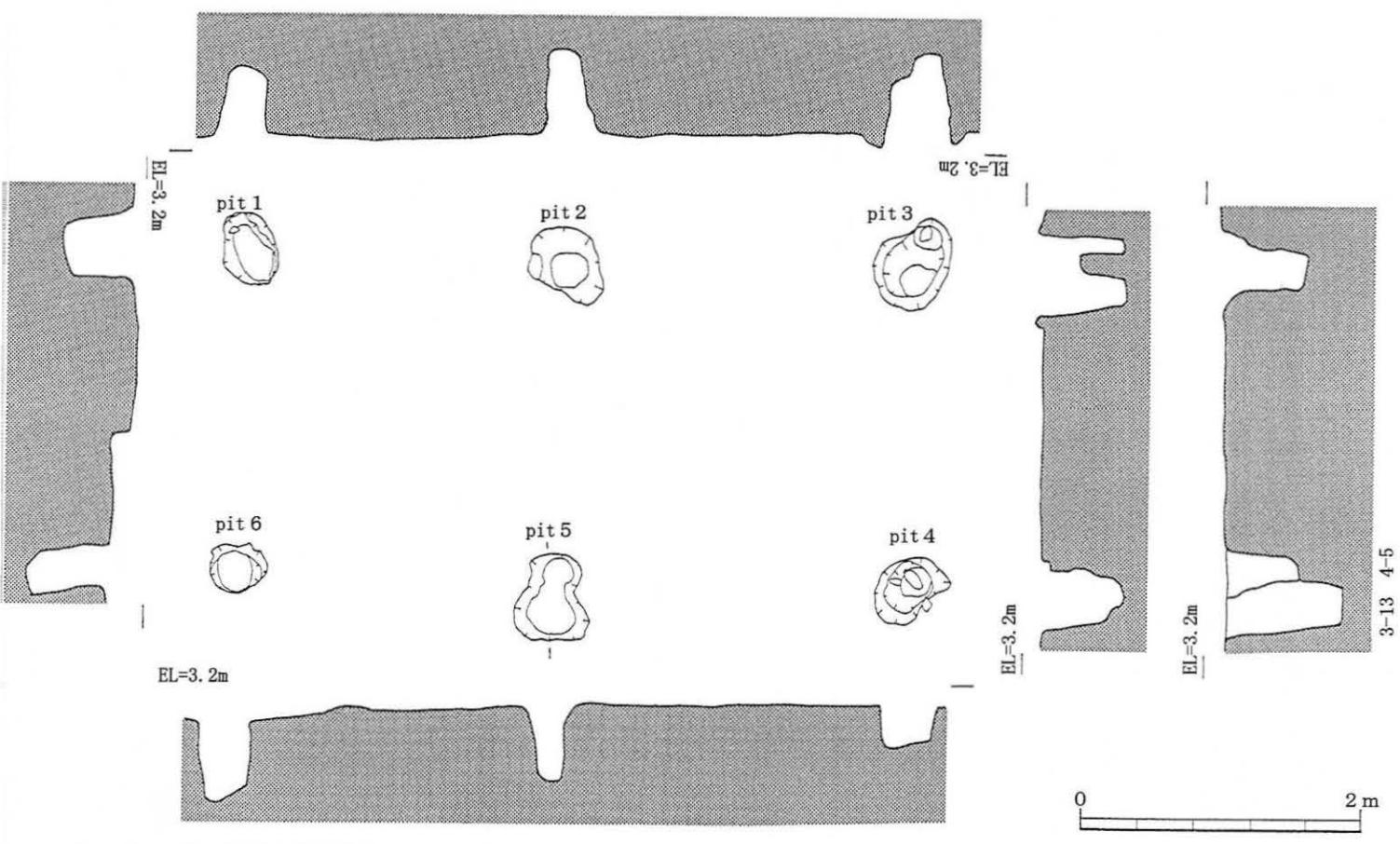


第23図 第3号掘立柱建物跡出土の主な遺物

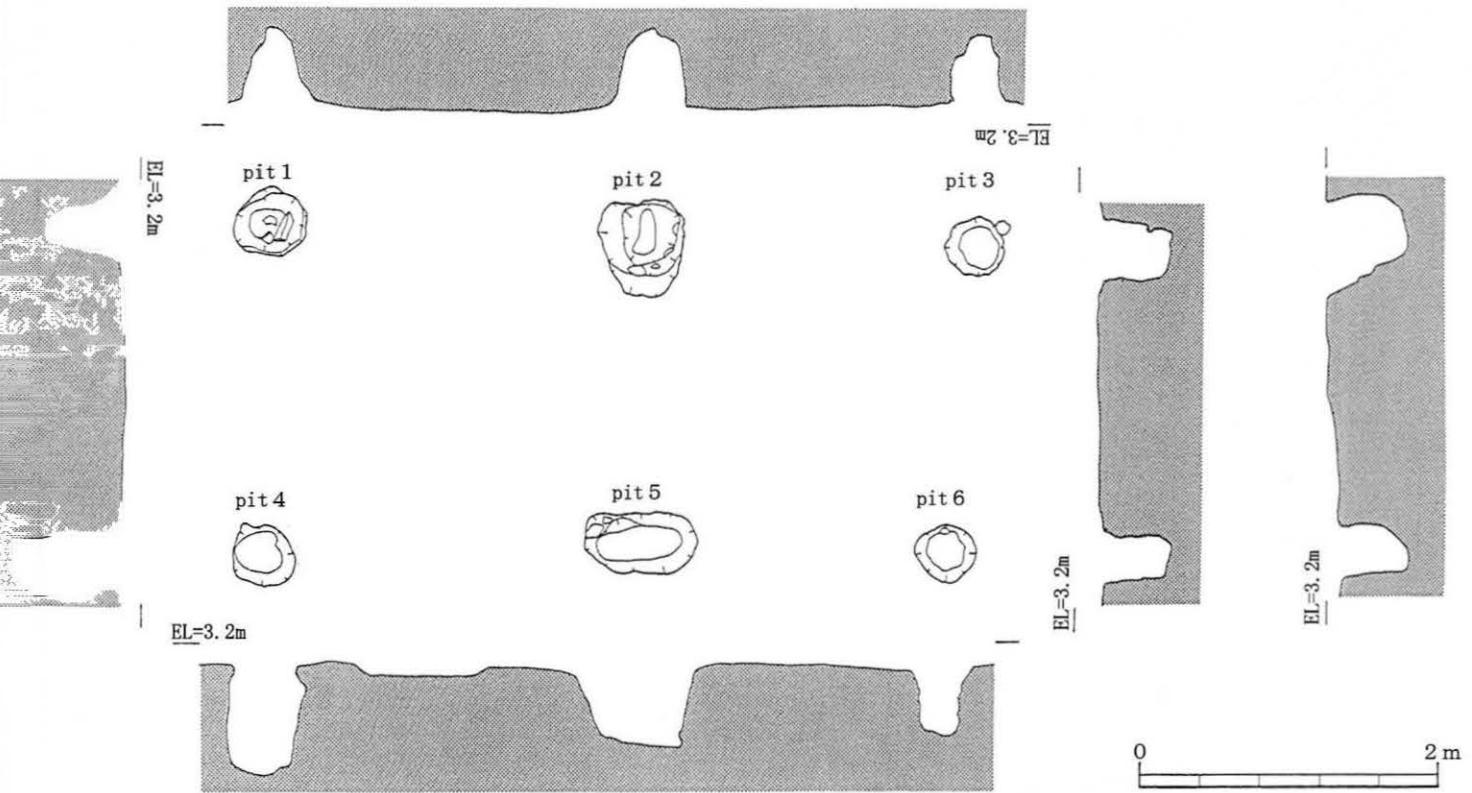
遺物縮尺任意

第24図 第3号掘立柱建物跡 (S=1/100)





第25図 第4号掘立柱建物跡 (S=1/50)



第26図 第5号掘立柱建物跡 (S=1/50)

#### ④第4号掘立柱建物跡（第25図・第6・7表）

第4号掘立柱建物跡は長軸約475cm、短軸約230cmの6本柱でピットの大きさは平均長径約50cm、短径38cm、深さ52.8cmを計る。建物サイズは第1号掘立柱と比べると短軸はほぼ同じ長さであるが、長軸は100cmほど長くなっている。

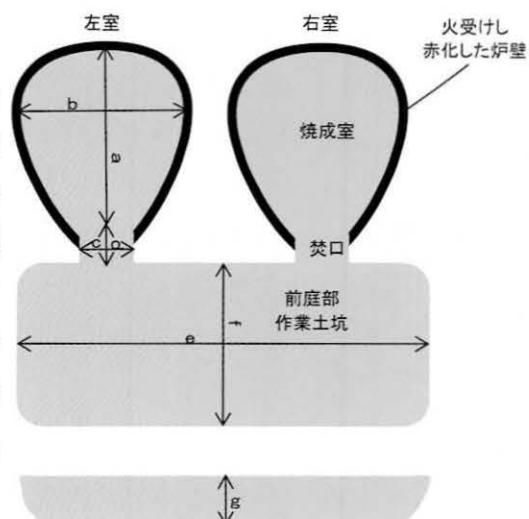
ピット5は第3号掘立柱ピット9を切っており、よって第4号掘立柱は第3号掘立柱より新しいことがわかる。

#### ⑤第5号掘立柱建物跡（第24図）（第7・8表）

第5号掘立柱建物跡は長軸約470cm、短軸約230cmの6本柱でピットの大きさは平均長径約52cm、短径40.6cm、深さ54cmを計り、第4号掘立柱とほぼ同じ大きさである。ピット1は第2号掘立柱ピット1と同位置のものである。

#### (2) 近世期の遺構

II地区において、4群の近世期の遺構が確認されている。全体では9基の炉跡が確認され、以下に示すような切り合ひ関係をもって、5基に整理可能と考えられる。類似する遺構としては、城間遺跡B地点で検出されたA遺構、B遺構が存在する（浦添市教委1989）。高温で長時間にわたり火を受けたと考えられ、炉壁は硬化し赤褐色に変色している。用途は不明だが、城間遺跡の事例については、泡盛等の蒸留釜との類似性が指摘され（安里1996）、その他にも炭窯や石灰窯などが想定可能である（仲宗根2005）。



#### ①1号炉跡（第28図・第8表）

第27図 炉跡計測箇所

E-40グリッドで検出されたイチジク形の方形土坑炉と方形の前庭部に作業土坑が一対で連結する炉跡である。方形土坑の部分とイチジク形の土坑炉部分は壁面が赤化し変色硬化している。燃焼材と考えられる炭が炉跡内に堆積する。長軸約175cm、短軸約105cmの炉に長軸残存部150cm、短軸約50cmが残存する。前庭部土坑の深さは約30cmを計る。焚口は幅約30cmである。なお、炭素14年代測定の結果は1号炉西部炭化物が暦年代（交点）でAD1670、AD1640年の値が得られており、近世期の遺物の出土状況と整合的である。

#### ②2・3号炉跡（第29図）

B-38グリッドで検出されたイチジク形の土坑炉が2基対で並列し平面観方形の土坑が前庭部作業場として連結する炉跡である。2号炉は長軸約130cm、短軸約100cm、3号炉は長軸約130cm、短軸90cm。前庭部作業土坑は長軸210cm、短軸約115cm、深さは約30cmを計る。焚口の幅は約20cmを測る。なお、3号炉の炭化木片の炭素14年代測定法の結果では、暦年代で交点でAD1650の結果が得られている。

### ③ 4・5号炉跡・6・7号炉跡（第30図）

D-38・39グリッドで検出されたイチジク形の土坑炉が2基対で並列し平面観方形の土坑が前庭部作業場として連結する炉跡が2基重複する。遺構は連房式の炉跡もしくは、6・7号炉を切る形で4・5号炉が構築された重複する遺構と推される。6・7号炉の作業土坑内に4・5号炉跡が構築されている。検出時はまず、6・7号炉が検出されその後4・5号炉が検出されており後者の方が一段下がって構築されている。

4号炉は長軸約115cm、短軸約95cm、5号炉跡は長軸約105cm、短軸100cm。前者が約30cm、後者が約40cm幅の焚口で前庭部の土坑と連結する。6・7号の前庭部作業土坑は4・5号炉跡によって壊されており形状は不明。6号炉は長軸約110cm、短軸約100cm、7号炉跡は長軸約100cm、短軸100cm。両者とも約35cm幅の焚口で前庭部の土坑と連結する。前庭部の土坑は長軸270cm、短軸約135cm、深さは約約30cmを計る。

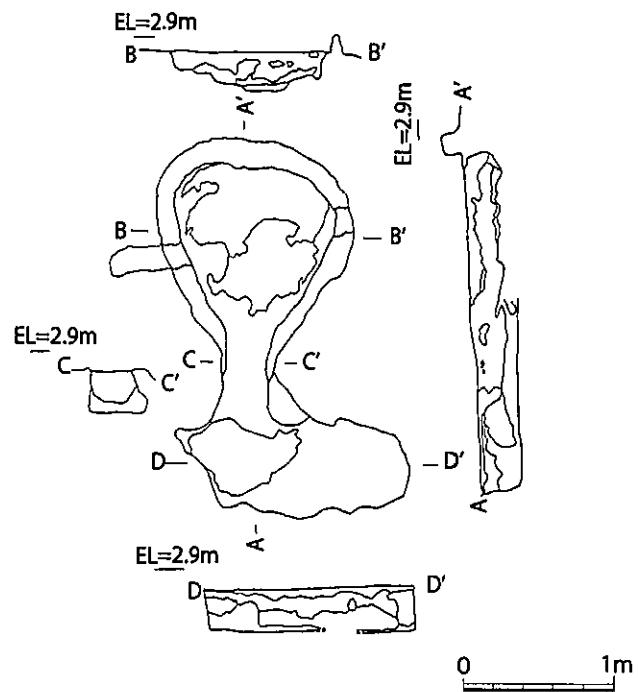
### ④ 8・9号炉跡（第31図）

C-38グリッドで検出されたイチジク形の土坑炉が推定2基対で並列し平面観方形の土坑が前庭部作業場として連結する炉跡である。8号炉は火受けした部分の土が焼化するが北側に搅乱坑があるため、残存部分からのみでは、炉跡形状をうかがうことはできない。方形の作業土坑は長軸約250cm、短軸約140cm、深さは約30cm、焚口の幅は約40cmを測る。

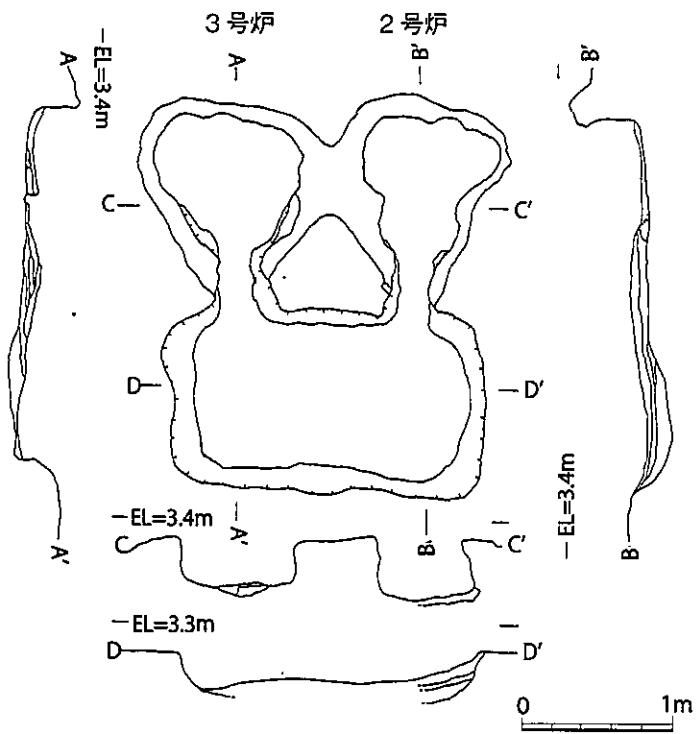
第8表 II地区炉跡サイズ一覧

単位：cm

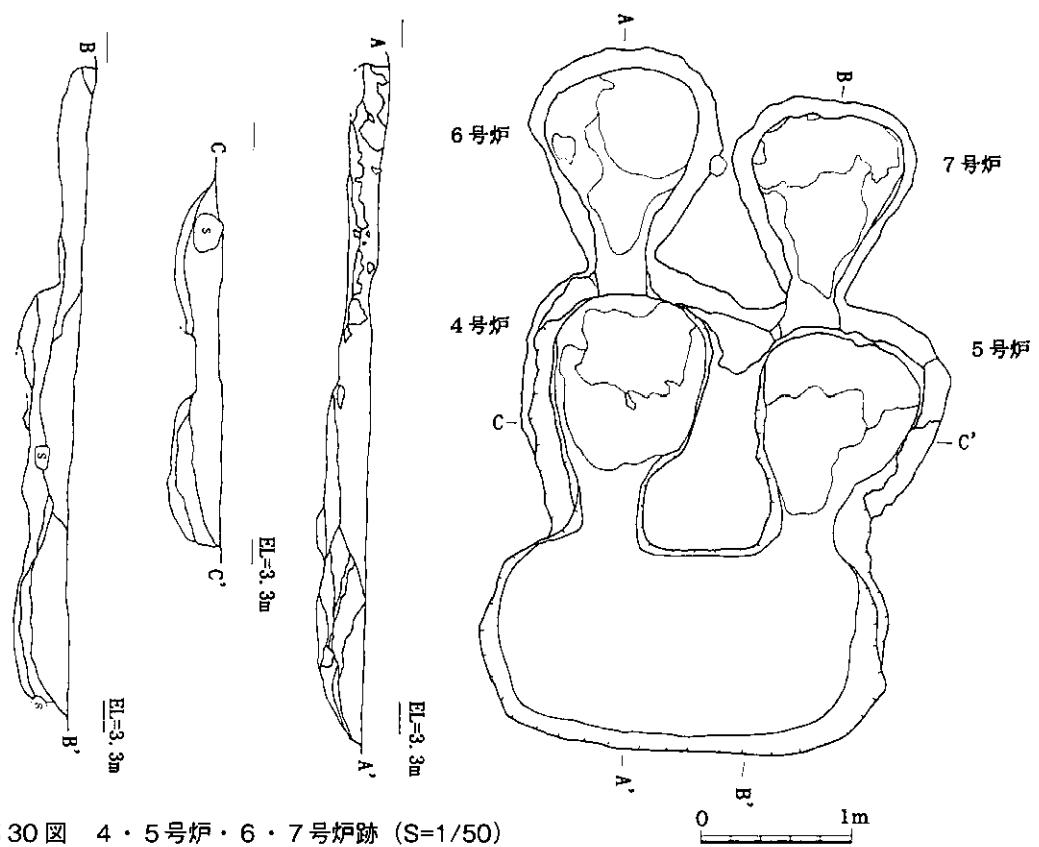
		焼成室		焚口		作業土坑		深さ(g)
		長軸(a)	短軸(b)	長軸(c)	短軸(d)	長軸(e)	短軸(f)	
1号炉		105	105	70	25	—	—	30
2号炉	右室	90	90	40	20	210	115	40
3号炉	左室	100	90	40	20	—	—	—
4号炉	左室	115	95	45	35	270	135	30
5号炉	右室	105	—	100	40	—	—	—
6号炉	左室	110	—	100	40	30	—	—
7号炉	右室	100	—	100	40	25	—	—
8号炉	左室	—	—	45	40	250	140	30
9号炉	右室	—	—	—	—	25	—	—
平均		104	97	45	28	243	130	43



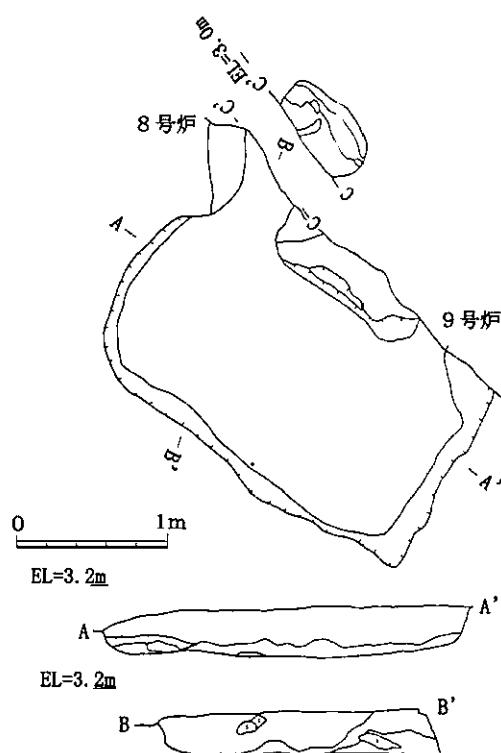
第28図 1号炉跡 (S=1/50)



第29図 2・3号炉跡 (S=1/50)



第30図 4・5号炉・6・7号炉跡 (S=1/50)



第31図 8号炉跡 (S=1/50)

## 第2節 出土遺物

II地区からは、土器、石器、陶磁器、カムィヤキなどの遺物が出土している（第9表）。以下個別の資料について報告する。

### 1. 土器

II地区から出土した土器は、ほとんどが器形の窺えない破片の資料であるが、ピット中より約半分が口縁部から底部まで接合して全体器形を見るものが1点得られている。土器の総破片数は12,093点で総重量は90,856gを計る。その破片を部位ごとに分けると、口縁部415点、胴部11,503点、底部175点になる。器種は口縁部片の形状から推定してほとんどが深鉢形と甕形で、数点壺形が見られる。分類の概念としては沖縄貝塚時代中期に相当するものをII・III群、沖縄貝塚時代後期に相当するものをV群、グスク時代に相当するものをVI群、搬入の弥生（弥生系）土器をVII群と大別し、さらに各群の中で細分した。

II地区出土土器を各層ごとに略述すると、これらの土器はかなり時期幅があるが、おおまかにみてそれぞれの時期はXII～XIV層が仲原式の特徴を有するIII群土器を主体とする縄文晚期相当期。IX～X層は口縁部で浜屋原C式の特徴を有する無文土器（V群1類）+底部F種：乳房状尖底を主体にし、弥生土器やその影響を受けたと思われる弥生系土器（VII群）を少量含むこととから、沖縄貝塚時代後期前半期に相当すると考えられる。VIII層は口縁部がフェンサ下層式の範疇になると思われるV群2類+底部B種：くびれ平底を主体とし、グスク系土器と呼ばれる口縁部に接するように方形状の把手を付されたものや胎土に滑石粒を混入したもの（VI群）+G種平底を混在することから沖縄貝塚時代後期後半期～グスク時代に比定できると考えられる。

出土した破片数はVIII層出土土器が48%で主体となすが、IX層より下の層はII地区北側のグリットでその端がわずかに得られた程度で、その中心はIII地区にあるようである。IX層より下の層の破片数は少量であるものの、縄文晚期→尖底の沖縄貝塚時代後期前半期→くびれ平底の沖縄新石器時代後期後半期からグスク時代への各土器群の出土状況をおさえることができた。VIII層においてはフェンサ下層

第9表 II地区出土遺物集計表

種別 層序	土器				石 器	滑 石	不 明 土 器	カ ム イ ヤ キ	中国産陶磁				本土産陶磁			沖縄産陶器			土 製 品	金 屬 製 品	貝 製 品	骨 製 品		
	口 縁	胴 部	底 部	小 計					白 磁	青 磁	青 花	褐 釉	染 付	陶 器	施 釉	無 釉	陶 質							
不明 搅乱 I層	23	733	10	766	4			4	1		1	4	19	4	44	65	3	1		4				
II層																								
III層					1																			
IV層																								
V層	17	1	18																					
VI層	13	671	19	703		1		8	4	4	6	4	16	5	75	83	17		4	1				
VII層	13	442	12	467					3					1		1	2							
VIII層	190	5571	81	5842	8	3	1	22	6	1		1	2		10	12		4	1	1				
IX層	86	2036	26	2148	2													8	4					
X層	35	587	10	632					1															
X I層	21	512	12	545				6			3							8	4					1
X II層	4	39		43																				
X III層	7	247		254																				
X IV層	18	598	4	620	1													1						
X V層	5	50		55														10		3	6	1		
遺構内					12	2		7	4		1													
計	415	11503	175	12093	28	6	1	50	16	5	11	9	38	9	139	176	20	5	8	13	1			

式土器とグスク系土器が混在する状況で出土しており、それは熱田貝塚などで報告されている。残念ながらそれらの面的な出土状況をおさえることはできなかった。

層ごとの各土器群の出土状況はいくらか混在が認められるものの口縁部資料はⅢ群がXIV層、V群1類がIX～X層、V群2類・VI群がVIII層。底部資料はF種がIX～X層、G種がVIII層から主体的に出土している。以下、個別の土器資料について、分類概念を示し、各分類及び層ごとに詳述する。

### (1) X II～X IV層の土器

X II～X IV層はY-37、Y-38、Z-38グリットなど発掘区の北東側でのみ確認された。総破片数は915点、総重量は5941.1gを計る。

#### 口縁部資料

Ⅲ群：X II～X IV層の土器はほとんどが第Ⅲ群：沖縄貝塚時代中期に属すと考えられるものである。小破片で全体の器形が判然としないが、比較的薄手で、焼成が良好で硬質なものと焼成が悪く器壁が摩滅しているものがある。口縁形態は平口縁、山形口縁で口縁に肥厚部を形成するものなどがある。胎土は粒子が細かく手に触ると細かい微細粒やパウダー状の粉末がつくものなどがあり、混和材は微石英粒、微砂粒、千枚岩などが見られる。

2001～2007は縦に長い肥厚口縁を有する無文土器である。2001・2007は直口で肥厚部に指頭痕を残し、2002～2004・2006は口縁部が僅かに外反する。2005は肥厚口縁部のみの資料で肥厚部は比較的丁寧に成形される。2008・2009は直口で肥厚部の断面の形状が三角形状を呈するものである。2009は内面に指頭痕を残す。2008は口唇部を欠し、器表面には1～2mmの小孔がみられる。2010は口縁上端部に肥厚部を有する山形口縁である。胎土は粒子が細かく手に触ると細かい微細粒やパウダー状の粉末がつき、混入物はほとんどみられない。

2011・2012は同一個体と思われる胴部資料である。2011は断面三角形状の凸帯を有する胴部で、破損部には9mm程度の補修孔と思われる二次穿孔がみられる。2012は底部を欠する胴部である。

V群：沖縄貝塚時代後期に属すると思われるものは、X II～X IV層から4点得られている。

V群1類に該当する資料を第32図に示した。2013は口縁が外反し、肩部に屈曲を持ちいわゆる「くの字」状になる甕・鉢形の土器で、阿波連浦下層式の範疇に入るかと思われるものである。口唇はやや丸みを帯びる。内外面ともに丁寧なナデを施し、器面保持は比較的よく、硬質である。器色は赤褐色で器壁の厚さは6mmでほぼ均一である。2014は口縁がやや外反する甕・鉢形の土器で、口唇は直角に縁取られる。器面調整は内面にやや成形時の指頭の痕を残すものの比較的丁寧なナデである。器壁の厚さは9mmで口唇近くは5mmになり薄くなる。2015は口縁が内傾する甕・鉢形の土器で、口唇は丸みを帯びる。内外面ともに丁寧なナデを施す。器壁の厚さは6mmでほぼ均一である。2016は補修孔と思われる二次穿孔を有する甕・鉢形の土器である。口縁は直口し、口唇はやや尖る。内外面ともに丁寧なナデを施す。器壁の厚さは8mmでほぼ均一である。

2017はVII群に属すと思われる胴部資料で、断面が三角形状になる凸帯を1条有する。器面調整はナデで胎土は質が粗く砂質で混入物に白色鉱物、雲母を多量、微砂粒を含む。器色は黒褐色。あるいはII・III群の口縁部の可能性もある。

## (2) IX～X層の土器（第32図2018～2031・第33図・第34図2053～2067・第10表）

IX層～X層はAラインから北側のグリットにおいて確認された。土器総数は2766点、総重量は23172.3gを計る。

### 口縁部資料

III群：III群に属すると思われるものは2018と2019の2点である。2018は縦に長い肥厚口縁を有する無文土器である。口径推算19cm、器厚7mmを計る。焼成は脆弱で胎土は粒子が粗く粘性が無くもろい。混入物は石英粒、微砂粒を多く含み、雲母片を少量含む。2019は口縁下に粘土帯をめぐらし肥厚口縁状にしている無文口縁である。胎土は粒子が細かく粘質で、混入物は石英粒、砂粒を多く含む。

VII群：IX～X層から出土したVII群土器は1類の他所から持ち込まれたと考えられるものが2点、2類の他からの影響を受けたと考えられるものが3点と少量である。

2020、2021はVII群1類に属すると思われる口縁部資料で、2020は若干内傾し、口縁端部には刻目を施す。器面調整はナデで混入物に微細な雲母や石英粒を多く含む。入来式と思われる。2021は内湾して立ち上がる口唇端部に断面三角状の突帶を貼り付けるもので、突帶直下には成形時についたと思われる爪の先のような弧状の凹みが列なる。器色は橙色で石英、黒色鉱物、石灰質砂粒を含む。搬入の弥生土器と推される。2026～2027も1類に属すると思われる胴部資料で、2025は突帶を有する胴部片で突帶の断面観は三角形状で器色は浅黄橙色で混入物に石英、黒色鉱物を多く含む。2026は1条の凸帶を有し凸帶中央部は凹み断面ではM字状を呈する。器色は褐灰色で混入物に石英粒を多量、雲母を含む。2027は補修孔と思われる二次穿孔がみられ、器色は浅黄橙色である。

2022～2024はVII群2類に属すると思われる口縁部資料である。2022は幅広の口唇部に細沈線により鋸歯文を施す。器色は褐色で混入物に石灰質砂粒、雲母を多く含む。2023は口縁端部が凹み頸部に断面感は丸みを帯びる細い凸帶を有する。器色は外面がにぶい黄橙色、内面が明赤褐色で、器面調整はナデ調整で胎土は細かく泥質で混入物に微砂粒を多く、黒色鉱物、石英粒、千枚岩を少量含む。2028は2類に属すると思われる胴部資料で、微弱な凸帶を1条有し、凸帶の断面は三角形状を呈する。

V群：V群1類沖縄後期土器前半期を主体に2類沖縄後期土器後半期が少量認められる。2029・2030はV群で口縁部外面に突帶文を貼り付けるものである。口唇部直下に逆U字状の凸帶を貼り付けている。2030は直口した口縁外面に粘土帯を貼り付け、2029はやや崩れた逆U字になっている。器面調整はナデ調整で内面には指頭痕が残る。胎土は粘質で微砂粒を少量含む。2031は口縁部内外に沈文を施文するもので、器壁の厚さが4.5mmで薄い土器である。器色は橙色で混入物に黒色鉱物を少量含む。2024は山形の外反する口縁部資料である。胎土は細かく粘質で混入物に雲母を多量、石英粒、砂粒を含むみ器色は黄褐色であるVII群ないしはIII群と推量される。

第33図（2034～2052）に示したものは直口もしくはやや外反する土器で口唇部は平坦に成形される。混入物に黒色鉱物を含み、胎土は比較的粗く器面の手触りはザラザラし、器面調整は両面ナデ調整を行うが、外面が比較的入念なに対し、内面には指頭痕が明瞭に残るものである。それらの諸特徴からこれらの土器は浜屋原C類土器の範疇に含まれるものと思われる。以下はV群に含まれるが型式は判然としないものである。2032・2033は口縁がやや内湾し、口唇はやや尖り、内外面ともに丁寧なナデを施す。2032は器表面に混入物の剥落した痕をもつが器面保持は比較的よく、硬質である。器色は赤褐色で器壁の厚さは7mmでほぼ均一である。混入物には微石英粒、黒色鉱物、白色鉱物、赤色粒を含む。2033は器色が橙色で石灰質砂粒を多く、黒色鉱物を少量含む。

2034～2038は外反する口縁部である。2034は口唇が丸みを帯びる。器面調整は内外面ナデを施し、外面には横方向の擦痕を残す。胎土は比較的粗く粘性が無く、混入物には微石英粒、石灰質砂粒を多

く含む。器色は外面黒褐色、内面赤褐色である。2035・2037は厚さが10mmを超えるもので、2037は最も厚い部分で13mmを計る。2035は器色が橙色で混入物に石灰質砂粒、黒色鉱物を少量含み、2037は石灰質砂粒、赤色粒を少量含む。2036、2038は口径推算可能なもので2036は13.2cm、2038は25cmを計り、ともに焼成はよく硬質で、混入物に黒色鉱物を少量含む。2047・2048は壺形になると思われる口縁部である。すべて小破片で全体の器形は判然としない。2047は口縁が外反し、口唇は舌状である。内外面ともナデ調整を施し、外面は特に入念である。器色は外面橙色、内面にぶい橙色を呈し、器壁の厚さは9mmでほぼ均一である。混入物には黒色鉱物を多量、白色鉱物を少量含む。2048は口縁が外反し、口唇は丸くなる。内外面ともナデ調整を施すが、内面は雑で指頭痕が残り、凹凸がみられる。器色は赤褐色を呈し、器壁の厚さは6mmでほぼ均一である。混入物には黒色鉱物、白色鉱物を少量、赤色粒、石灰質砂粒を含む。

V群口縁部資料有文：2049は口縁外面に凸帯を貼付するものである。口縁部下に横位に1条の凸帯をめぐらし、同凸帯状に重ねて縦位に2条の凸帯を貼り付ける。縦位の凸帯は口唇近くでまた横位に走り口唇内面には及ばない。器面調整は比較的丁寧なナデで混入物に白色鉱物、微砂粒、赤色粒を少量含む。2050は口縁外面に斜位に凸帯を貼り付けるもので、凸帯上に刻文を施文する。器面調整はナデで混入物に微砂粒を少量含む。

無文：2051はやや外反し肥厚する口縁部である。器壁は6mmで肥厚部では9mmを計る。胎土は泥質で混入物に黒色鉱物、白色鉱物、赤色粒を少量含む。2052は口径推算18cmを計るもので、胴上半部に最大径がくる。口縁部は外反し口唇部は平坦に成形される。器色は赤褐色で器壁の厚さは5mmと薄く焼成がよく硬質である。混入物は白色鉱物、微砂粒を少量含む。

## 底部資料

IX層～X層の土器底部資料はA種平底、B種くびれ平底、C種尖底、D種乳房状尖底、分類不明の5つがあり、乳房状尖底が主体を占める。乳房状尖底の中には底面の中央部が凹み上げ底状になるものと、つぶれて尖底状やくびれ平底状になるものがある。

A種：平底になるものは2053の1点である。器色は黄橙色で混入物は黒色鉱物、白色鉱物、微砂粒を含む。

C種：尖底になるものは2054の1点である。胎土は粗く砂質で混入物に石英粒、微砂粒を多量、千枚岩を少量含む。

D種：乳房状尖底になるものは2055～2064である。2054は底面がつぶれ尖底状に、2064はくびれ平底状、2062、2063はやや上げ底状になるものである。混入物は基本的に石英粒、黒色鉱物、白色鉱物、微砂粒を含み、2056は千枚岩、粒の大きな砂粒を含み、2064は黒色鉱物、白色鉱物を多量、雲母を少量含む。

B種：くびれ平底になるものは2065の1点である。くびれ部がそれほど明瞭には作られない。胎土は細かく泥質で混入物に白色鉱物、赤色粒を含む。2066、2067の2点は分類不明ながらも、仮にくびれ平底状を呈するB種とする。ただし、胎土、混入物の点で異なる。2066は全体的に雑なつくりで底面からくびれ部への成形も雑できれいな稜を有しない。器面調整はナデで胎土は粗く砂質で混入物に黒色鉱物、微砂粒、赤色粒含む。2067は比較的丁寧に成形されている。器面調整は丁寧なナデで内面には縦位の擦痕が残る。胎土は泥質だが混入物には黒色鉱物を比較的多く含む。

### (3) VIII層の土器

VIII層からは第V群第2類：他からの影響を受けたと考えられるもの、第3類：沖縄後期土器前半期に属するものと、第4類：沖縄後期土器後半期に属すると思われるもの、第VI群グスク系土器が得られている。破片総数5,842点、総重量40,548.1gを計る。

#### 口縁部資料

VII群：2068・2069はVII群2類に属すと思われるものである。2068は口唇直下に縦位に沈線文を施し、中央の沈線間には刺突文が施される。はっきりはしないが口縁部端には刻目も3条確認できる。2069は沈線により横線文を施した後に鋸歯文を描き、混入物には雲母を多く含む胴部片である。

V群：2070～2073、2075～2082は沖縄後期土器前半期に属すると思われるものである。有文2070～2073はV群1類口縁外面に凸帯を貼り付けるものである。2070は粘土帯を口縁部外面から縦位に内面まで口唇を挟み込むように貼り付けるいわゆる鞍状凸帯のもので粘土帯を1条貼り付け、口縁は直口し、器壁は5mmと薄い。2071はU字状に粘土帯を貼り付けるもので粘土端部は口唇を挟み込むように内面にまで及び、凸帯上には規則的に刺突文が施されている。粘土帯は比較的厚く、丁寧に成形されている。器壁は6mmと薄い。2072は直口、2073はやや外反する口縁の外面に逆U字状に粘土帯を貼り付けるものである。2072は凸帯の半分を発掘時に破損している。2074は直口する口縁部で、縦位に幅広の凸帯を貼り付けるもので、凸帯が貼り付けられた部分の内面は凹んでいる。凸帯は口唇直下に貼り付けられ口縁内面には及んでいない。破損部には補修孔と思われる二次穿孔がみられる。2075・2076は口縁が強く外反し、肩部に屈曲を持つ甕・鉢形の土器である。2075は口唇が丸みを帯びる。器面調整は丁寧なナデを施し、内面には横位の擦痕を有する。器色は暗褐色で器壁の厚さは胴部近くが9mm、口縁部近くが6mmでやや薄くなる。混入物には白色鉱物、赤色粒を含む。2076は口唇が平坦に成形され、内外面ともに丁寧なナデを施し、器面保持は比較的よく、硬質である。器色は赤褐色で器壁の厚さは6mmでほぼ均一である。混入物には赤色粒を少量含む。2077は口縁が直口する甕・鉢形の土器で、口唇は平坦に成形される。器色は明褐色で器壁の厚さは7mmでほぼ均一である。胎土は粗く砂質で、器面調整はナデ調整で器内面は指頭痕が明瞭に残る。混入物は黒色鉱物、白色鉱物、細砂粒を含む。2078は口唇部を折るように外反する甕・鉢形の土器で、口唇は丸くなる。器色は黄橙色で器壁の厚さは7mmでほぼ均一である。胎土は粗く砂質で、器面調整はナデ調整で器内面は指頭痕が明瞭に残る。混入物は黒色鉱物、白色鉱物、石英粒、細砂粒を含む。2079は口縁が外反し、口唇は丸みを帯びる。内外面ともナデ調整を施し、外面は特に入念である。器色は橙色を呈し、混入物は赤色粒、微砂粒を含む。2080はやや内湾する甕・鉢形の土器で、口唇は尖る。器外面は丁寧なナデで、器内面は指頭痕が残る。混入物は黒色鉱物、微砂粒を少量含む。2081は外反し、口唇はやや尖る。器面調整は外面が丁寧なナデであるのに対し、内面には指頭痕、幅5mm程度の工具による調整痕が残る。混入物は黒色鉱物、微砂粒を含む。2082は口縁が外反する甕・鉢形の土器で、口唇は平坦に成形される。器外面、口唇内面は丁寧なナデで、器内面は指頭痕が残る。混入物は黒色鉱物、白色鉱物を少量、赤色粒、石灰質砂粒を多く含む。2083・2084は補修孔と思われる二次穿孔を有する甕・鉢形の土器である。口縁は直口し、口唇は平坦に成形される。内外面ともに丁寧なナデを施す。器色は橙色で器壁の厚さは2083が8mm、2084が7mmでほぼ均一である。混入物には黒色鉱物、赤色粒、微砂粒を含む。

第4類口縁部資料有文土器：第4類に属すると思われる有文土器は口唇部または口唇直下に小突起を有するものと、口縁外面に凸帯を貼付するものなどが得られている。胎土は泥質のものが多く、混入物には赤色粒、砂粒を含む。小突起を有するもの：2085・2086は口唇部に小突起を有するもので2085

は粘土帶が内面にまで及び、それらが単独で存在するのかいくつか連なるのかは判断できないが2086は対応する部分に突起部が破損した痕が見られる。器面調整はナデ調整で内外面に薄く横位の擦痕が残る。2087・2088は口縁直下にツノ状の小突起を有するものである。器面調整はナデ調整で内外面に横方向の擦痕がみられる。

**口縁外面に凸帯を貼付するもの**：2089～2092は口縁外面に凸帯を貼付するものである。2089は口縁部下に横位に1条の凸帯をめぐらし、同凸帯状に重ねて縦位に2条の凸帯を貼り付け、縦位の凸帯は口唇を挟み込むように口唇内面に及ぶ。2090・2091も縦位の凸帯が1条口縁内面にまで及ぶ。2092は口縁部下に凸帯をめぐらす。器面調整は比較的丁寧なナデで2091は横方向の擦痕がみられる。2093は外面の口唇直下に幅広の縦位の凸帯を貼り付けるもので、凸帯には3mm程度の小孔が両側から穿たれている。凸帯は器内面までは及んでなく、小破片のため全体の器形は判然としないが、真栄里貝塚の縦耳貼付土器に類似すると思われる（糸満市教委1999）。

口縁形態は外反するもの、肥厚部を有するもの、内湾するものがある。2094～2097は口縁部が外反するものである。ナデ調整で器壁の厚さは7mm程度。2098・2099は口縁部に肥厚部を有するものである。どちらも縦に長い肥厚部を有し、2098は肥厚部資料で薄く、2099も肥厚部は下端では薄くなり、段も明瞭でなく微弱である。2100は口縁部が内湾するもので、口唇は丸くなる。器面調整は内外面ナデ調整であるが外面は入念でなく、指頭痕を残し凹凸がある。内面には横方向の擦痕が薄くみられる。

**第VI群**：いわゆるグスク系土器と呼称されるものである。特徴的なものを、2103～2112に示した。小破片のため判然としないが、鉢形・鍋形・碗形の資料が得られている。胎土は泥質で混入物には赤色粒、砂粒を含み、滑石を含むものもある。

2103～2107は胴部から口縁部にかけて外傾し、頸部でややしまる鉢形になると思われるものである。2103・2105は器内外に横位の擦痕がみられ、2104の口頸外面はよりきれいに成形されている。器面調整はナデで2105は内外面に横位の擦痕がみられ、2106は滑石を多く含み手触りが滑らかになる。2108は口唇直下に肥手を有する鍋形で、肥手は縦長できれいに成形され、正面・断面ともに長方形を呈する。口径推算23cmで器面調整は比較的丁寧にナデでられ、内面は特に入念である。肥手の周りには指頭痕も確認できる。混入物には滑石、砂粒を含む。

2109は口縁がわずかに内湾する浅鉢形になると思われるものである。口径推算22cmを計り、口縁部のつくりはやや雑で波状になり、厚さもわずかに厚くなる所とそうでない所があり、口唇部が厚く成形されている。器面調整はナデ調整。2110～2112は小型で、口縁が内湾する碗形である。口唇部は、2111がやや平坦で内面に張り出し、2112は尖る。比較的丁寧にナデられる。

### 胴部資料（有文）

2101・2102は凸帯を有する胴部資料で、断面が三角形状の凸帯を1条有し、凸帯はきれいに成形されている。器面調整はナデで胎土は泥質。

### 底部資料

VII層からはB種を主体とし、D種、G種が得られている。D種は乳房状尖底に属するもので2113～2116の4点である。混入物に黒色鉱物、赤色粒を含む。

**B種**：くびれ平底はVII層の主体となるもので、胎土は基本的に泥質で混入物に微砂粒、赤色粒を含む。その形態・底径・内底の器厚などからさらに細分できる。a、底面が平たいもの：2117～2120は底径が3cm以上6cm以下で底面が平たくなるものである。2117は内底の器厚が7mmで薄く、2118は

18mm、2119は26mm、2120は20mmとやや厚い。2117～2119は外面が比較的丁寧にナデられ内面には擦痕がみられる。2120は内外面ともに擦痕がみられる。b、底面が丸くなるもの：2121～2123は底径が3cm以上6cm以下で底面が丸くなるものである。底面の外側への張り出しが大きくなり、くびれがきつくなる。内器厚は2121が27mm、2122が12mm、2123が13mm。底面の張り出し部は2123が尖り、2122が丸く、2121はやや丸くめくれるようになる。c、明瞭なくびれを有しないもの：2124・2125は底径3cm程度で小さく明瞭なくびれを有しないものである。底部から直線的に外側に開いて胴部に移行するようである。2125の外面はナデ調整であるが丁寧でなく凹凸が見られ、内面は6mm幅の工具による擦痕がみられる。2124は外面が比較的丁寧にナデられ、内面には擦痕が見られる。

d、底径が小さくなるもの：2126・2127・2129は底径が3cm程度もしくはそれ以下のものである。2128は底部の張り出しが弱くくびれがなだらかで、2129はほとんどくびれを有さず乳房状になる。2127も一見すると乳房状であるが、内底面が広く底面も張り出しきびれ部を有する。e、底面がやや上げ底状になるもの：2128は底面中央部に向かってやや上げ底状になるもので、底部から直方向に胴部に向かう器形になるようである。f、底径が大きくなるもの：2130・2131は底径が6cm以上で大きくなるものである。2131は底径64mmを計る。底面の張り出し部は尖り、外面には指頭痕が並立するように残され、内面は丁寧にナデされている。2130も底径が7.5mmと大きくなるものであるが、内外面ともアバタ状の小孔がみられる。内底の器厚は5mmと薄い。

G種：2132・2133は底径の広い平底である。2133は底面から胴部へ直接立ち上がり、立ち上がり際で底面との境に稜を作り、2132は底面からの立ち上がりが緩やかで稜を作らない。器面調整はナデで2133は外面に指頭痕がみられる。混入物には微砂粒、赤色粒を含む。

#### (4) 堀立柱建物跡出土の土器

堀立柱建物跡出土の土器はV群の口縁外面に凸帯を貼付するものやVI群の口唇部に接するように方形状の肥手を付されたものや、胎土に滑石粒を混入したものなどが得られている。

##### 口縁部資料

V群：有文口縁外面に凸帯文を貼付するもの：2134は縦位に2条の凸帯を貼り付け、凸帯は口唇内面に及ぶ。縦位の凸帯は直角に横位の凸帯に重なり、横位の凸帯は重なるところで止まり、全体にめぐらすものではないようである。凸帯は比較的きれいに成形されており、凸帯と器面の接着面には凸帯を強調するように凸帯にそって擦痕が明瞭に残る。

無文土器：2135・2136はやや外反し、口唇は平坦に成形される。2136は口径推算18cmを計る。器面調整はナデで2135は口縁外面に指頭痕が残る。

VI群：第VI群になるものは鉢形と鍋形が得られている。2137～2140は鉢形になるものである。2137は接合して全形がうかがえるものである。最大径が口縁部にくる鉢形で、口径推算22cm、器高約16cm、底径約8cmを計る。器面調整はナデで横位の擦痕（刷毛目？）もみられる。口縁近くは比較的丁寧であるが、胴・底部近くは雑になる。2138は口径推算17cmを計り口縁部の外反の度合いはやや弱い。器面調整はナデで内面には横位の擦痕がみられる。2139は鉢形になると思われる外反する口縁部資料である。口径は約22cmを計る。器面調整は雑で内外に横位の擦痕が見られ内面には指頭痕も残る。2140は口縁部から胴下半部までの資料である。器面調整はナデで口縁外面、内面は特に丁寧であるが外面口縁部下はやや雑で斜位の擦痕が残る。2141は胴部から強く外傾して開く鉢形で口径は約15cmである。口唇部は平坦に成形される。内面には4mm程度の孔が深さ2mm程度穿たれている。

器面調整はナデで比較的丁寧であるが内外面ともに横方向の擦痕がみられる。

2142～2144は口唇直下に肥手を有する鍋型になる資料である。2142は肥手がやや縦長できれいに成形され、正面・断面ともに長方形を呈する。口径推算22cmで器面調整は丁寧にナデでられ、内面は特に入念である。肥手の周りには指頭痕も確認できる。混人物には滑石粒を多く、また石英粒、赤色粒を少量含む。2143は肥手部を破損している。口径約23cmを計り、器面調整は比較的丁寧なナデで混入物に滑石粒を多く含む。2144は肥手がやや縦長で、正面・断面とも丸みを帯び、側面には両側から5mm程度の孔を穿つ。器面調整は外面が雑にナデられ、内面はやや丁寧である。

## 底部資料

掘立柱柱穴内からはB種、G種、分類不明が得られている。B種2145～2147はくびれ平底になるものである。2145・2146は底径約4cmを計り、2147は約2.5cmと小さくなるものである。器面調整はナデでやや雑である。2145・2146は縦位、2147は横位に擦痕が見られる。第5類：2148～2149はG種底径の広い平底になると思われるものである。2148・2149は底面から胴部へ直接立ち上がり、立ち上がりは緩やかで稜を作らない。2150は底部からややきつく立ち上がった後、緩やかに胴部に向かう。器面調整はナデで入念でなく外面に指頭痕が残る。混入物には微砂粒、赤色粒、滑石粒を多量含む。

分類不明：2151は底部から緩やかに垂直に立ち上がる土器である。器厚は5mm程度と薄く、混入物に5mm程度の貝殻片？を含む。器形、器厚、混入物の点から第5類と差異が見られるためここに含めた。2152はくびれ部を有し底径が8cmと大きく、内器厚も4.5cmと厚い重厚な底部である。底面には網代圧痕が薄くみられる。器面調整はナデ調整で器色は赤褐色、混入物には赤色粒、微砂粒を含む。

## (5) その他の土器

その他の土器は前述の層以外出土の土器である。それぞれの特徴を記述する。有文第2153～2155はV群に属するもので口縁内外面に沈線文を施すものと、2156の外面に凸帯を貼り付けるものがある。沈線文を施すもので2153～2155は第3類2種a。外反させた口縁の内外面に沈線文を施すものである。2153は外面には縦位の直線文と曲線文を組み合わせ、内面は幅広の凹線でやや不規則な曲線文と斜位の直線文を施す。器面調整はナデで焼成はよく、混入物に黒色鉱物と石英を含む。2155は内外面ともに曲線文を組み合わせるもので外面は格子目状になっている。ナデ調整で焼成はよく混入物に黒色鉱物、白色鉱物、赤色粒を含む。B-38グリット2・3号炉跡出土。2154は外面に幅広の弧文を、内面に横位と斜位の直線文を施す。ナデ調整で焼成はよく、混入物に微石英粒、黒色鉱物、白色鉱物、赤色粒を含む。これら3点ともプライマリーの層からの出土ではないが、外反させた口縁部の内外面に沈線文を施す資料は、奄美の弥生時代中期後半～後期並行の頸部を屈曲させ、内外面に文様を施文する土器群との並行関係が指摘されている（宮城1998）。凸帯を貼付するもの：2156は外面の口唇直下に逆U字状に粘土帯を貼り付けるものである。直口した口縁外面に粘土帯を貼り付け、胎土が粘質で微砂粒を少量含む。口唇直下に縦長の肥手を有する壺形になると思われる土器で口径推算36cmを計る。器内面には穿孔の途中と思われる痕が見られる。器面調整はナデ調整で外面は比較的入念にナデされるが内面には指頭痕が残る。1号炉跡出土。

無文：2157は口縁が外反し、口唇は舌状で丸みを帯びる壺形？土器である。内外面ともナデ調整を施し、外面は特に入念である。底部資料：2158は第3類：乳房状尖底の底部資料である。1号炉跡出土。2159は底面に種子圧痕のあるB種の底部資料である。底径が約3cmと小さく、内底の器厚が約4cmで厚い。器面調整はナデで入念でなく、縦位の擦痕が残る。器色は赤褐色で胎土は泥質で混入物に砂粒を少量含む。圧痕については自然科学分析を行った（第VII章10節参照）。

第10表 II 地区土器観察表 (1)

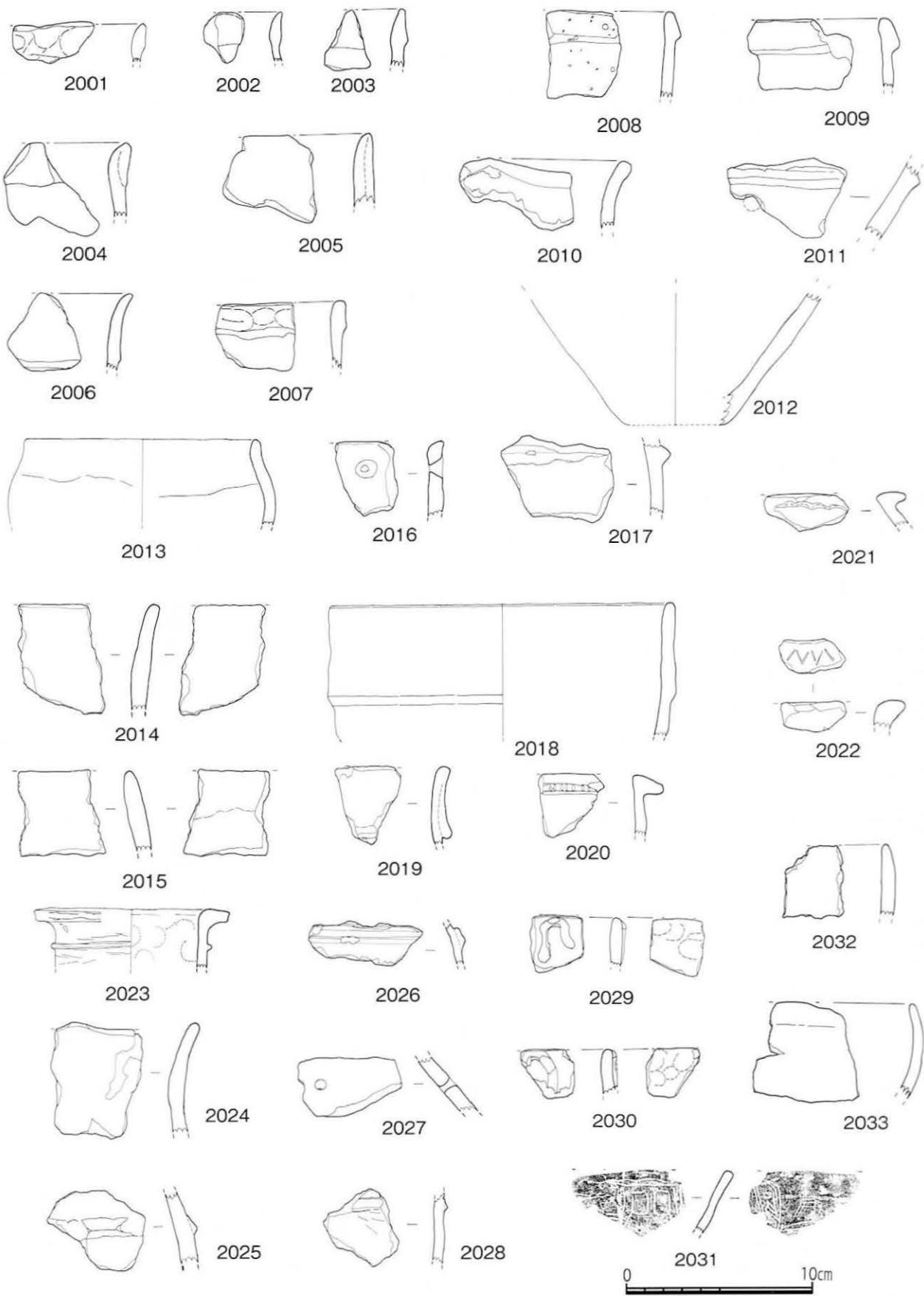
掘藏 No	グリッド	層	層位考	種別	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	器高 (cm)	観察事項 (器色、混和物)	
											明赤褐色5YR5/6	微石英粒、微砂粒、千枚岩を混入
2001	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.4		明赤褐色5YR5/6	微石英粒、微砂粒、千枚岩を混入
2002	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.7		明赤褐色5YR5/6	微石英粒、微砂粒、千枚岩を混入
2003	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.5		褐色7.5YR4/3	微石英粒、微砂粒、粒の大きな砂粒を多く含む
2004	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.6		明赤褐色5YR5/6	微石英粒、微砂粒、千枚岩を混入
2005	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			1.0		明褐色7.5YR5/6	微石英粒、黑色鉱物、微砂粒を混入
2006	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.4		明赤褐色5YR5/6	微石英粒、微砂粒を多量混入
2007	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.6		明赤褐色5YR5/6	器表面からはほとんど見られない。白色鉱物、微砂粒が僅か
2008	Y-38	XIV	309.6~274.5	土器	口縁	III群			0.6		褐色7.5YR6/6	褐色7.5YR4/3
2009	Y-38	XIV	309.6~274.5	土器	口縁	III群			0.6		明黄褐色10YR7/6	ほとんど見られない。白色鉱物を微量
2010	A-39	XII	302~287	土器	口縁	III群			0.6		にぶい黄褐色10YR6/4	黒色鉱物、微砂粒、赤色粒を含む
2011	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.9		にぶい黄褐色10YR6/4	黒色鉱物、微砂粒、赤色粒を含む
2012	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	III群			0.9		赤褐色5YR4/6	黒色鉱物、微砂粒、白色鉱物含む
2013	Y-37	XIII		土器	口縁	V群	12.0		0.6		表: 黒褐色7.5YR3/2 裏: 褐色7.5YR4/3	黒色鉱物、白色鉱物、白色鉱物含む
2014	Z-38	XIII		土器	口縁	V群			0.9		にぶい黄褐色10YR6/4	黒色鉱物、白色鉱物、白色鉱物含む
2015	A-29	XII		土器	口縁	V群			0.6		表: 明赤褐色5YR5/8 裏: にぶい黄褐色10YR5/3	黒色鉱物、白色鉱物、微砂粒含む
2016	Y-37	XIII	295.6~288.8	土器	口縁	V群			0.8		黒褐色10YR3/1	白色鉱物、黒色鉱物、白色鉱物含む
2017	Y-38	XIV	309.6~274.4	土器	口縁	V群			0.7		にぶい黄褐色10YR5/3	石英粒、砂粒を多く、雲母を少
2018	Y-38	XII	280.4~264.5	土器	口縁	III群	18.7		0.7		黒褐色10YR3/1	石英粒、砂粒を多く、雲母を少
2019	Y-37	XIV	280.4~263.3	土器	口縁	III群			0.7		褐色7.5YR1/3	石英粒、砂粒を多く含む
2020	Z-38	IX	311.6	土器	口縁	VII群			0.6		にぶい黄褐色10YR5/3	石英粒、雲母、微砂粒を多く含む
2021	Z-37	IX	296.0~287.1	土器	口縁	VII群			0.7		褐色5YR6/8	石英、黒色鉱物、石灰質砂粒を含む
2022	Z-37	IX	302.9~296	土器	口縁	VII群			1		褐色5YR1/3	石灰質砂粒、雲母を多く含む
2023	A-37	IX	309.3~301.9	土器	口縁	VII群			0.5		表: にぶい黄褐色10YR6/4 裏: にぶい黄褐色10YR5/6	微砂粒を多量、黒色鉱物、石英粒、千枚岩を少量含む
2024	Y-37	X	263.3~256	土器	口縁	III群			0.9		表: にぶい黄褐色10YR5/4 裏: 單灰黄色2.5Y4/2	雲母を多量、石英粒、砂粒を含む
2025	Z-37	IX	308.6~302.9	土器	口縁	VII群			0.7		表: 浅黄褐色10YR8/4 裏: 單灰10YR5/1	石英、黒色鉱物を多く含む
2026	A-39	VII最下	308.3~302	土器	口縁	VII群			0.5		褐色5YR7/6	石英粒を多量、雲母含む
2027	Z-37	IX	296.0~287.1	土器	口縁	VII群			0.8		浅黄褐色5YR8/6	白色鉱物を少量含む
2028	A-39	XV	IX崩落ち込み	土器	口縁	VII群			0.7		にぶい黄褐色10YR6/4	石英粒、石灰質砂粒を多量、白
2029	Z-37	IX	壁除去	土器	口縁	V群			0.7		にぶい赤褐色5YR4/4	色鉱物を少量
2030	A-38	IX	304.8~300.5	土器	口縁	V群			0.6		黒褐色10YR3/2	微砂粒を少量
2031	Z-37	IX	302.9~296	土器	口縁	V群			1.5		褐色5YR6/6	黒色鉱物を少量含む
2032	Z-36	IX		土器	口縁	V群			0.7		にぶい赤褐色5YR5/4	微石英粒、黒色鉱物、白色鉱物、赤色粒含む
2033	Z-37	IX	296.0~287.1	土器	口縁	V群			6.5		褐色2.5YR6/8	石灰質砂粒を多く、黒色鉱物を少
2034	Y-37	X		土器	口縁	V群			0.7		表: 黒褐色10YR3/1 裏: 明赤褐色5YR5/6	量含む
2035	Z-37	IX	296.0~287.1	土器	口縁	V群			1.1		褐色5YR7/6	石灰質砂粒、黒色鉱物を少量含む
2036	Z-37	IX	296.0~287.1	土器	口縁	V群	13.2		0.8		褐色5YR7/6	黒色鉱物を少量含む
2037	Z-37	IX	295.0~287.1	土器	口縁	V群			0.1		褐色2.5YR6/8	石英、石灰質砂粒、赤色粒を少
2038	Z-37	IX	302.9~296	土器	口縁	V群	25.0		0.8		表: 暗褐色5YR4/1 裏: 明赤褐色5YR5/6	量含む
2039	Z-37	IX	302.9~296	土器	口縁	V群			0.9		表: 赤灰2.5YR5/1 裏: 赤2.5YR6/8	黑色鉱物を多く含む
2040	Z-37	IX	302.9~296	土器	口縁	V群			0.8		明赤褐色2.5YR5/8	黑色鉱物を含む
2041	Z-38	IX	311.6	土器	口縁	V群			0.7		褐色5.5YR5/8	黒色鉱物、白色鉱物、細砂粒
2042	Z-37	IX	壁除去	土器	口縁	V群			0.7		明赤褐色5YR5/6	黒色鉱物、白色鉱物多く含む
2043	A-38	IX	304.8~300.5	土器	口縁	V群	18.0		0.7		黒褐色10YR3/1	黒色鉱物
2044	Z-36	IX	304.8~295.1	土器	口縁	V群	14.0		0.9		表: 暗褐色5YR6/6 裏: にぶい黄褐色10YR5/3	黒色鉱物、白色鉱物、細赤色粒
2045	Y-37	X	284.5~277.1	土器	口縁	V群			0.5		褐色5YR6/6	黒色鉱物、白色鉱物、石英粒
2046	Z-38	IX	311.6	土器	口縁	V群	28.0		0.7		にぶい黄褐色10YR5/3	黒色鉱物、白色鉱物、石英粒、細砂粒
2047	A-37	IX	301.9~294	土器	口縁	V群			0.9		表: 暗褐色5YR5/6 裏: にぶい黄褐色10YR5/4	黒色鉱物を多く、白色鉱物を少
2048	Z-38	IX	311.6	土器	口縁	V群			0.9		明褐色2.5YR5/6	量含む
2049	Z-38	X	319.7~311.6	土器	口縁	V群			0.5		表: 暗褐色5YR3/3 裏: にぶい黄褐色10YR4/3	白色鉱物、微砂粒、赤色粒を少
2050	Z-38	IX	311.6~295	土器	口縁	V群			0.5		にぶい褐色2.5YR5/4	量
2051	A-37	IX	301.9~294	土器	口縁	V群			0.6		褐色5YR6/6	微砂粒を少量
2052	Y-38	X	308.4	土器	口縁	V群	18.0		0.5		赤褐色5YR4/6	黑色鉱物、白色鉱物を少量

第11表 II 地区土器観察表 (2)

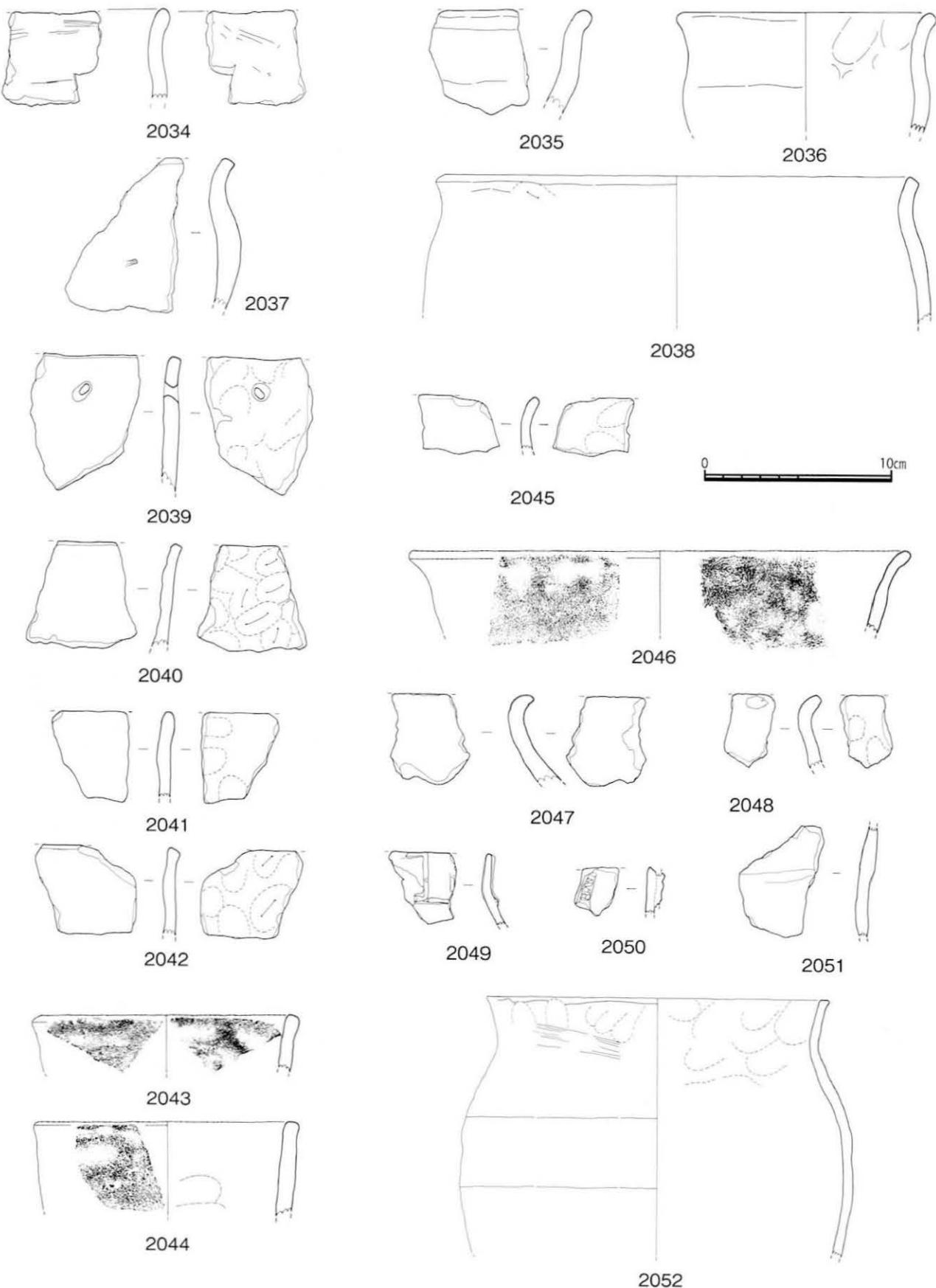
揭露 No.	グリッド No.	層	層番考	種別	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	器角 (cm)	觀察事項 (器色、混和物)	
											内壁	外壁
2053	A-37	IX	301.9~294	土器	底部	A種		約5.0	0.6		17.5~18.5 黄褐色10YR6/4	黑色鉛物、白色鉛物、微砂粒を含む
2054	Y-37	X	263.3~256	土器	底部	C種			0.7		17.5~18.5 褐色7.5YR5/4	石英粒、微砂粒を多量、手板岩を少量含む
2055	A-38	IX	304~300.5	土器	底部	D種		約3.0	1.0		表面赤褐色5YR5/8、裏 褐色10YR4/1	黑色鉛物、微砂粒を少量
2056	A-38	IX	304.8~300.5	土器	底部	D種		約3.0	0.6		に赤い赤褐色5YR4/4	黑色鉛物、白色鉛物、粒の大きさを細粒、手板岩含む
2057	Z-38	X	319.7~311.6	土器	底部	D種		3.0	1.0		表に赤い黄褐色10YR 6/3、裏褐色10YR4/1	黑色鉛物、白色鉛物、赤色粒、微砂粒含む
2058	Y-37	IX	295.9~281.5	土器	底部	D種		約5.0	0.7		表に赤い黄褐色10YR 6/4、裏灰黃2.5YR7/2	石英粒、黑色鉛物、白色鉛物を含む
2059	A-37	IX	301.9~294	土器	底部	D種		3.0	0.7		表面赤褐色5YR5/6、裏 褐色10YR4/1	黑色鉛物、微砂粒、赤色粒を含む
2060	A-38	IX	304.8~300.5	土器	底部	D種		3.0	0.6		表褐色10YR6/6、裏に赤 い黄褐色10YR7/3	黑色鉛物、微砂粒を少量含む
2061	A-37	IX	301.9~294	土器	底部	D種		2.0	1.0		明赤褐色5YR5/8、	黑色鉛物、赤色粒、粒の大きさを細粒含む
2062	A-38	IX	304.8~300.5	土器	底部	D種		3.0	0.6		褐色7.5YR7/6	石英粒、黑色鉛物、白色鉛物含む
2063	Y-38	X	325.3~309.6	土器	底部	D種		約3.0	0.6		表褐色5YR6/6、裏灰黃 色2.5YR6/2	石英粒、黑色鉛物、白色鉛物含む
2064	Z-38	X	311.6	土器	底部	D種		約6.0	0.5		表褐色5YR6/6、裏に赤 い黄褐色10YR7/3	黑色鉛物、白色鉛物を多量、雲母を少量含む
2065	Y-37	IX	316.4~308.6	土器	底部	B種		4.0	0.7		褐色7.5YR6/6	白色鉛物、赤色粒含む
2066	A-37	IX	301.9~294	土器	底部	B種		6.0	0.6		表黃灰色2.5YR6/1、裏 黒褐色2.5YR3/1	黑色鉛物、微砂粒、赤色粒含む
2067	Z-36	IX	304.8~295.1	土器	底部	B種			0.6		表面赤褐色5YR5/6、裏 に赤い褐色7.5YR5/4	黑色鉛物、微砂粒含む
2068	A-36	VII	307.7~304.0	土器	口縁	V群			0.6		赤褐色2.5YR4/6	石英質砂粒を多量、石英粒を少 量含む
2069	A-37	VII	313.8~309.3	土器	口縁	V群			0.9		明赤褐色5YR5/6	石英質砂粒、黑色鉛物、雲母を多 く含む
2070	D-39	VII	314.2~309.5	土器	口縁	V群			0.5		明赤褐色5YR5/6	黑色鉛物、赤色粒含む
2071	A-39	VII最下	308.3~302	土器	口縁	V群			0.6		明黃褐色10YR6/6	微砂粒を少量
2072	B-38	VII	317.4~314.9	土器	口縁	V群			0.9		褐色5YR6/8	微砂粒を多く、黑色鉛物、粒の 大きさを少鼠含む
2073	A-39	VII最下	308.3~302	土器	口縁	V群			0.7		褐色7.5YR4/3	黑色鉛物、白色鉛物を少量、赤 色粒、粒の大きさを少鼠含む
2074	A-38	VII	313.3~304.8	土器	口縁	V群			0.7		表: 明赤褐色5YR5/6 裏: に赤い赤褐色5YR 6/3	黑色鉛物、白色鉛物を少鼠、赤 色粒、粒の大きさを少鼠含む
2075	D-38	VII		土器	口縁	V群			0.9		暗褐色10YR3/3	白色鉛物、赤色粒含む
2076	A-39	VII	323~319.3	土器	口縁	V群			0.8		表: に赤い赤褐色5YR5/4 裏: 明赤褐色5YR5/6	赤色粒を少鼠
2077	A-39	VII最上	308.3~302	土器	口縁	V群	18.0		0.7		明褐色10YR7/9	黑色鉛物、白色鉛物、微砂粒 黒色鉛物、白色鉛物、石英粒、 細砂粒
2078	A-39	XV	293.4~280.7	土器	口縁	V群			0.7		に赤い黄褐色10YR6/4	黒色鉛物、白色鉛物、石英粒、 細砂粒
2079	A-38	VII		土器	口縁	V群			0.6		褐色5YR6/8	赤色粒、微砂粒を含む
2080	D-37	VII		土器	口縁	V群			0.9		表: 黑褐色10YR3/1 裏: に赤い黄褐色10YR6/4	黑色鉛物、微砂粒を少鼠含む
2081	C-35	VII		土器	口縁	V群			0.9		褐色2.5YR6/8	黑色鉛物、微砂粒を含む
2082	A-39	VII		土器	口縁	V群			1		褐色5YR6/6	黑色鉛物、赤色粒、微砂粒を含 む
2083	A-38	VII	313.3~304.8	土器	口縁	V群			0.8		褐色5YR6/6	黑色鉛物、赤色粒、微砂粒を含 む
2084	A-38	VII	313.3~304.8	土器	口縁	V群			0.7		褐色5YR6/6	黑色鉛物、赤色粒、微砂粒を含 む
2085	A-38	VII	313.3~304.8	土器	口縁	V群			0.7		表: に赤い褐色5YR5/4 裏: 明赤褐色5Y5/6	黑色鉛物、赤色粒、微砂粒を少 量
2086	B-38	VII	314.7~304.5	土器	口縁	V群			0.6		褐色5YR4/3	赤色粒、微砂粒を少量
2087	Z-36	VII	319~310.7	土器	口縁	V群			0.5		に赤い褐色5YR5/4	微砂粒を少量
2088	A-37	VII	319.2~313.8	土器	口縁	V群			0.4		褐色2.5YR6/8	赤色粒を少量
2089	A-37	VII	313.8~309.3	土器	口縁	V群			0.5		褐色2.5YR6/8	白色鉛物、微砂粒、赤色粒を少 量
2090	Z-36	VII	319~310.7	土器	口縁	V群			0.7		褐色5.5YR4/1	白色鉛物、赤色粒を少量
2091	A-38	VII	313.3~304.8	土器	口縁	V群			0.7		褐色2.5YR6.8	黑色鉛物、微砂粒、赤色粒を少 量
2092	B-38	VII	317.4~305.1	土器	口縁	V群			0.5		褐色2.5YR6.8	白色鉛物、微砂粒、赤色粒を少 量
2093	A-36	VII		土器	口縁	V群			0.5		に赤い褐色7.5YR6/4	白色鉛物、赤色粒を少量含む
2094	Z-36	VII	310.7~304.8	土器	口縁	V群			0.7		明赤褐色5YR5/6	白色鉛物、微砂粒、赤色粒を少 量含む
2095	E-40	VII	273.9~279.3	土器	口縁	V群			0.7		に赤い褐色5YR5.4	白色鉛物、微砂粒、赤色粒を少 量含む
2096	Y-38	VII	339.8~332.3	土器	口縁	V群			0.7		明赤褐色5YR5.6	白色鉛物、赤色粒を少量含む
2097	B-39	VII	321.9~314.7	土器	口縁	V群			0.6		に赤い褐色5YR4.3	微砂粒を少量
2098	D-39	VII	324.5~310	土器	口縁	V群			0.5		褐色5YR6.6	微砂粒、赤色粒を少量
2099	A-39	XV	埋蔵部分の落 ち込み	土器	口縁	V群			0.7		明赤褐色2.5YR5.6	白色鉛物を少量、微砂粒を多く 含む
2100	Z-37	VII		土器	口縁	V群			0.5		明赤褐色2.5YR5/8	微砂粒を少量
2101	Z-38	VII	點除去	土器	口縁	不明			0.5		赤褐色5YR4/6	赤色粒を多量、微砂粒を少量
2102	B-38	VII	2・3号の側面	土器	口縁	不明			0.4		褐色5YR6/8	微砂粒を少量

第12表 II 地区土器観察表 (3)

掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	器高 (cm)	観察事項 (器色、混和材)	
											表記	説明
2103	B-36	X I	298.2~287.5	土器	口縁	VI群			0.7		明褐色7.5YR5/6	白色鉱物を少量、石灰質砂粒含む
2104	B-37	X I	307.6	土器	口縁	VI群	13.0		0.7		表: 明褐色7.5YR5/6 裏: にぶい黄褐色10YR6/4	赤色粒、砂粒を少量
2105	E-35	VII	283~279.6	土器	口縁	VI群			0.9		表: 褐灰7.5YR4/1 裏: 明赤褐色5YR5/6	赤色粒多く、微砂粒を少數含む
2106	Z-36	VII	327.5~321.4	土器	口縁	VI群			0.9		褐色5YR6/6	滑石を多く、微砂粒を少數含む
2107	E-35	X I	264.4	土器	口縁	VI群	20.0		0.4		にぶい褐色7.5YR5/4	赤色粒多く、微砂粒を少數含む
2108	C-35	X V	VII層落ち込み	土器	口縁	VI群	23.0		0.6		明黄褐色10YR6/6	滑石、微砂粒を少數含む
2109	D-36	X V	VII層落ち込み	土器	口縁	VI群	22.0		0.5		にぶい褐色7.5YR6/4	白色鉱物、石英粒、砂粒少量
2110	B-38	X I	317.4~305.1	土器	口縁	VI群			0.5		明赤褐色5YR5/6	赤色粒、微砂粒を少量
2111	D-39	VII	324.5~310	土器	口縁	VI群			0.6		にぶい黄褐色10YR5/4	微砂粒を少量
2112	Z-38	VII	325.9~321.1	土器	口縁	VI群			0.7		褐色5YR6/8	微砂粒、赤色粒を少量
2113	A-38	VII	313.3~304.8	土器	底部	D種			約2.5	0.9	褐色2.5YR6/6	黒色鉱物、千枚岩含む
2114	B-38	VII	2・3号炉側面	土器	底部	D種			約3.0	0.9	明赤褐色5YR5/6	黒色鉱物、赤色粒含む
2115	B-38	VII	2・3号炉側面	土器	底部	D種			約3.5	0.7	褐色2.5YR7/8	黒色鉱物、赤色粒含む
2116	A-36	VII	307.7~304.0	土器	底部	D種			約4.0	0.6	褐色2.5YR7/8	黒色鉱物、白色鉱物、赤色粒含む
2117	B-38	VII	317.4~305.1	土器	底部	B種			約6.2	0.5	褐色2.5YR6/6	赤色粒を少量含む
2118	A-38	VII	313.3~304.8	土器	底部	B種			約5.5	0.8	褐色2.5YR7/8	赤色粒、粒の大きな砂粒含む
2119	A-36	VII	319.2~313.8	土器	底部	B種			約5.3	0.9	褐色2.5YR6/8	微砂粒を少量含む
2120	A-37	VII	291.3~283	土器	底部	B種			約4.0	0.7	褐色2.5YR6/8	微砂粒、白色鉱物を少量含む
2121	E-36	VII	291.3~283	土器	底部	B種			約5.0	0.6	にぶい赤褐色5YR5/4	赤色粒、粒の大きな砂粒含む
2122	B-39	VII	321.9~314.7	土器	底部	B種			約5.4	0.6	褐色2.5YR6/6	微砂粒、赤色粒を多量、黒色鉱物を少量含む
2123	A-37	VII	313.8~309.3	土器	底部	B種			約4.2	0.7	灰赤2.5YR5/2	赤色粒を多量、微砂粒、石英粒を少量含む
2124	A-37	VII	313.8~309.3	土器	底部	B種			約3.3	0.5	褐色2.5YR6/8	微砂粒、赤色粒を少量
2125	B-38	VII	317.4~314.9	土器	底部	B種			約4.7	0.5	褐色2.5YR6/6	石英粒、粒の大きな砂粒を少量含む
2126	A-37	VII	325.5~319.2	土器	底部	B種			約3.0	0.4	赤10R5/8	石英粒、微砂粒を少量
2127	D-39	VII	324.5~310	土器	底部	B種			約2.8	0.6	褐色2.5YR6/8	微砂粒、赤色粒を少底
2128	D-37	VII	308~303.3	土器	底部	B種			約6.0	0.8	褐色2.5YR6/8	微砂粒を少數含む
2129	A-36	VII	315.1~307.7	土器	底部	B種			約2.5	0.3	表褐7.5YR7/4、真柏	微砂粒を少數含む
2130	Y-37	VII	333.5~323.7	土器	底部	B種			約7.3	0.6	褐色2.5YR6/8	微砂粒含む
2131	Z-36	VII	295.1	土器	底部	B種			約6.5	0.5	褐色2.5YR6/6	微砂粒、赤色粒含む
2132	Y-37	VII	333.5~323.7	土器	底部	G種				0.8	にぶい赤褐色5YR5/3	微砂粒、赤色粒含む
2133	A-36	VII	315.1~307.7	土器	底部	G種				0.9	7/4、真10YR7/8	微砂粒、赤色粒含む
2134	C-36	第3号掘立	pit25	土器	口縁	V群				0.7	暗赤褐色5YR3/3	白色鉱物を少量、赤色粒、砂粒を含む
2135	B-35	第3号掘立	pit12	土器	口縁	V群				0.5	明赤褐色5YR5/6	石英粒、赤色粒含む
2136	A-35	第3号掘立	pit5	土器	口縁	V群	18.0		0.8		褐色2.5YR6/8	赤色粒、砂粒含む
2137	A-35	第3号掘立	pit3	土器	口縁	VI群	22.0	8.0	0.7	16cm	暗赤褐色2.5YR3/2	赤色粒、滑石粒、チャート、製陶を少量
2138	A-36	第3号掘立	pit6, 7, 8	土器	口縁	VI群	17.0		0.7		にぶい褐色7.5YR5/3	黒色鉱物、滑石粒、赤色粒、砂粒含む
2139	A-36	第3号掘立	pit6, 8	土器	口縁	VI群	22.0		0.7		褐色2.5YR6/8	赤色粒、砂粒含む
2140	B-37	第3号掘立	pit12	土器	口縁	VI群			0.7		褐色5YR7/8	赤色粒、砂粒含む
2141	A-36	第3号掘立	pit6	土器	口縁	VI群	15.0		0.6		褐色5YR6/6	赤色粒、滑石粒、砂粒含む
2142	A-36	第3号掘立	pit6, 7	土器	口縁	VI群	22.0		0.6		にぶい褐色7.5YR5/4	滑石粒多く、石英粒、赤色粒少底
2143	A-35	第3号掘立	pit5	土器	口縁	VI群	23.0		0.6		にぶい褐色7.5YR5/4	滑石粒多く、砂粒少底
2144	C-36	第3号掘立	pit25	土器	口縁	VI群			0.8		褐色5YR7/8	赤色粒、砂粒含む
2145	B-36	第3号掘立	pit10	土器	底部	B種			約4.0	0.6	表褐色5YR6/6、裏褐色7.5YR4/1	微砂粒、赤色粒含む
2146	C-35	第3号掘立	pit20	土器	底部	B種			約4.0	0.7	表面赤褐色5YR5/8、裏褐色10YR4/1	微砂粒、赤色粒含む
2147	C-36	第3号掘立	pit25	土器	底部	B種			約2.5	0.6	褐色5YR4/2	微砂粒、赤色粒含む
2148	A-36	第3号掘立	pit6	土器	底部	G種			約16.0	0.8	表面赤褐色5YR5/8、裏褐色10YR4/1	砂粒、赤色粒含む
2149	A-35	第3号掘立	pit3	土器	底部	G種			約14.0	0.8	褐色5YR4/2	石英粒、赤色粒、微砂粒含む
2150	C-35	第3号掘立	pit22	土器	底部	G種			約10.0	0.5	表面褐色5YR5/8、裏褐色10YR4/1	滑石粒多量、赤色粒、砂粒含む
2151	A-35	第3号掘立	pit4	土器	底部	不明			約8.0	0.4	表面にぶい黄褐色10YR6/3、裏明褐色7.5YR5/6	貝殻片?微砂粒、赤色粒含む
2152	A-36	第3号掘立	pit8	土器	底部	不明			約8.0		明赤褐色5YR5/6	赤色粒、微砂粒含む
2153	B-38	2・3号炉		土器	口縁	V群			0.8		にぶい黄褐色10YR5/3	赤色粒、微砂粒含む
2154	C-39		焼乱	土器	口縁	V群			0.7		にぶい黄褐色10YR5/3	赤色粒、微砂粒含む
2155	A-36		南壁除去	土器	口縁	V群			0.7		表面5YR6/6 裏にぶい黄褐色10YR5/3	赤色粒、微砂粒含む
2156	E-40	1号炉		土器	口縁	VI群	36.6		0.9		表面茶褐色2.5YR5/6 裏にぶい黄褐色10YR5/3	角閃石、石英とチャート微量
2157	D-36	X I	294.9~280.5	土器	口縁	V群			0.8		明赤褐色5YR5/6	微砂粒、赤色粒含む
2158	E-40	1号炉跡		土器	底部	D種			1.3		明赤褐色2.5YR5/6	微砂粒、赤色粒含む
2159	A-36		pit10	土器	底部	B種			約3.0	0.6	褐色5YR6/6	微砂粒、赤色粒含む

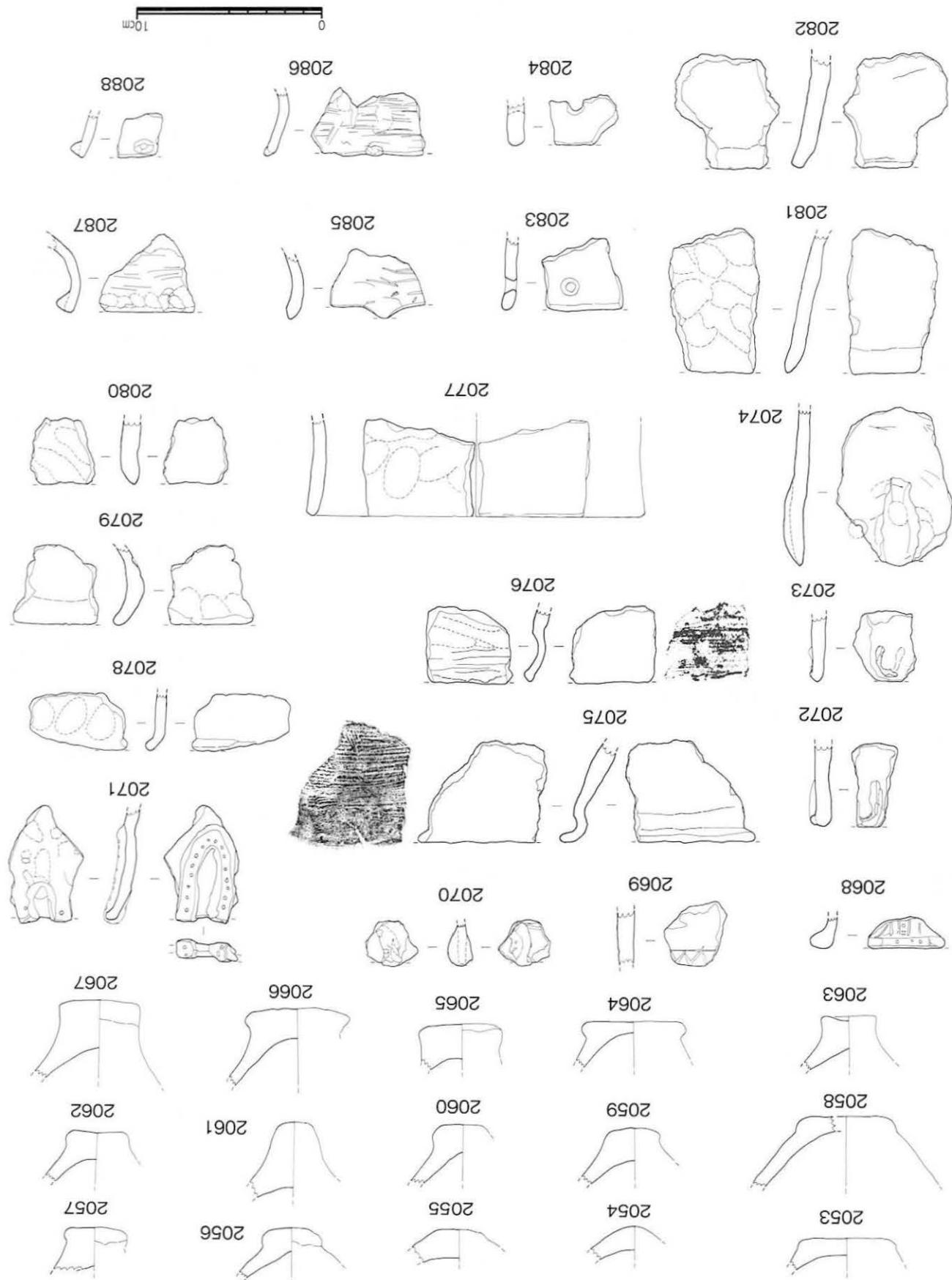


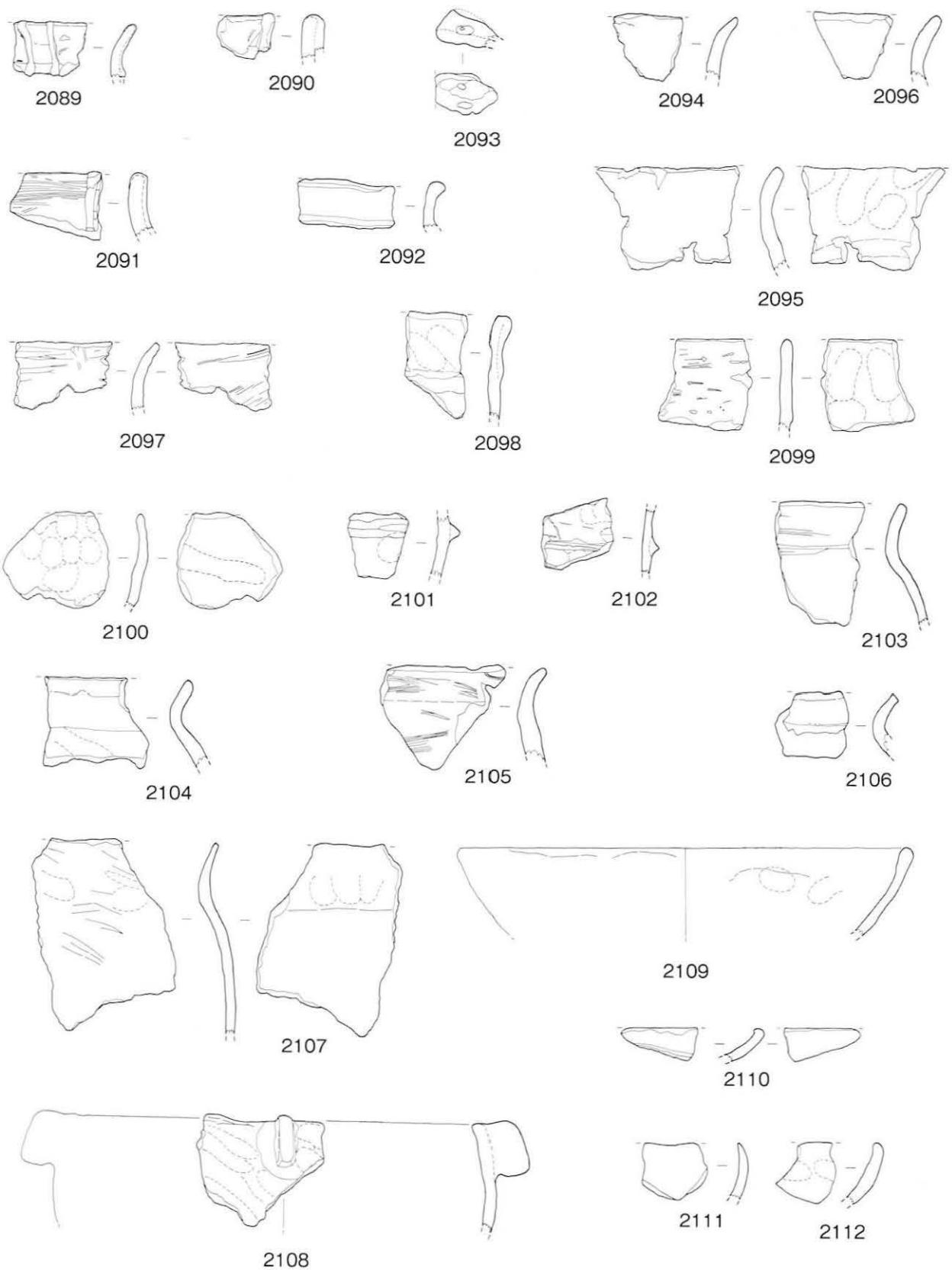
第32図 II地区土器(1) (縮尺1/3)  
2001~2017 : XⅡ~XIV層      2018~2033 : IX~X層



第33図 II地区土器(2) (縮尺1/3)  
2034~2052 : IX~X層

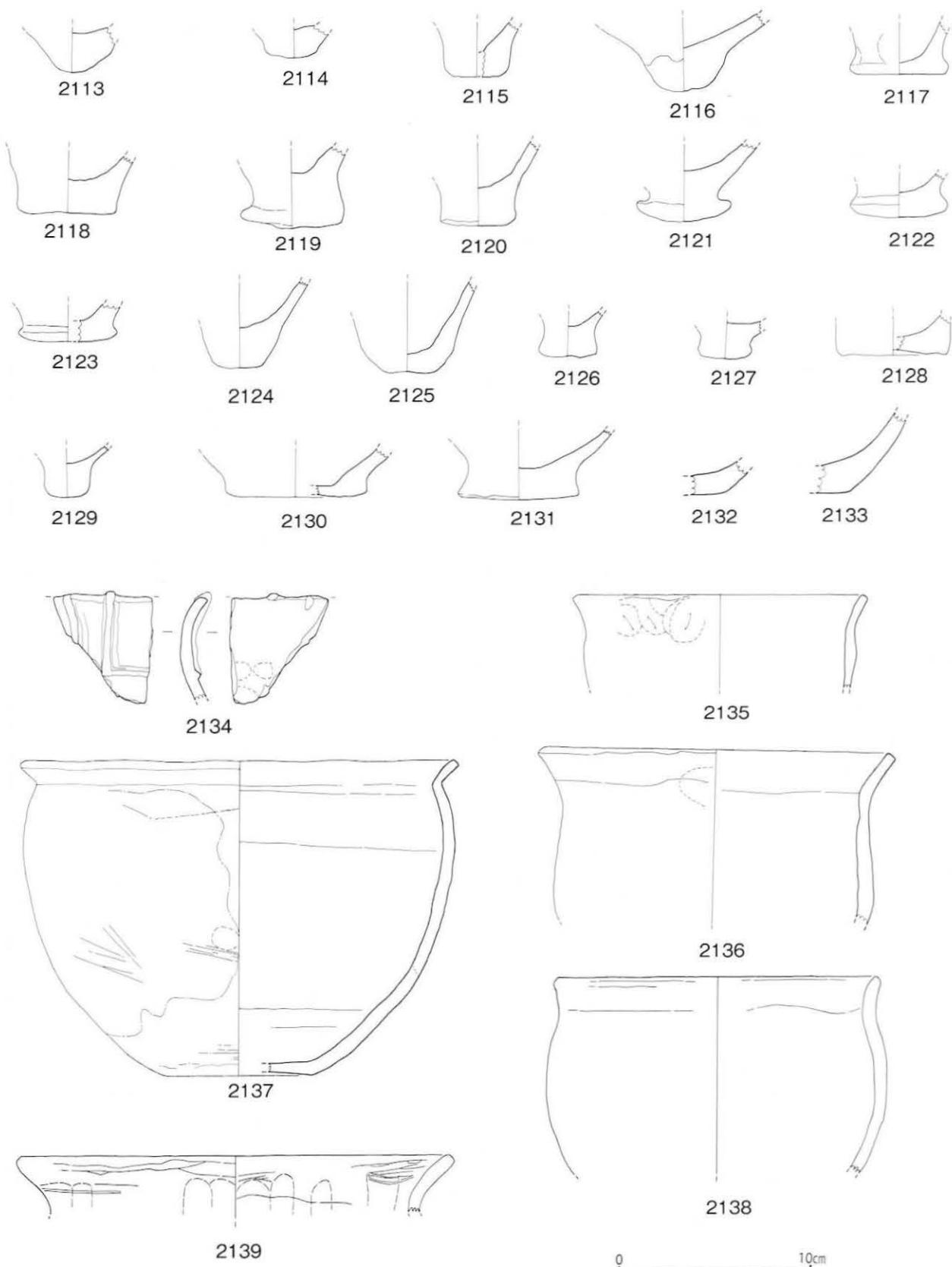
第34图 II地区土器(3) (縮尺1/3)  
2053~2067 : IX~X型 2068~2088 : V型  
2053~2067 : IX~X型 2068~2088 : V型



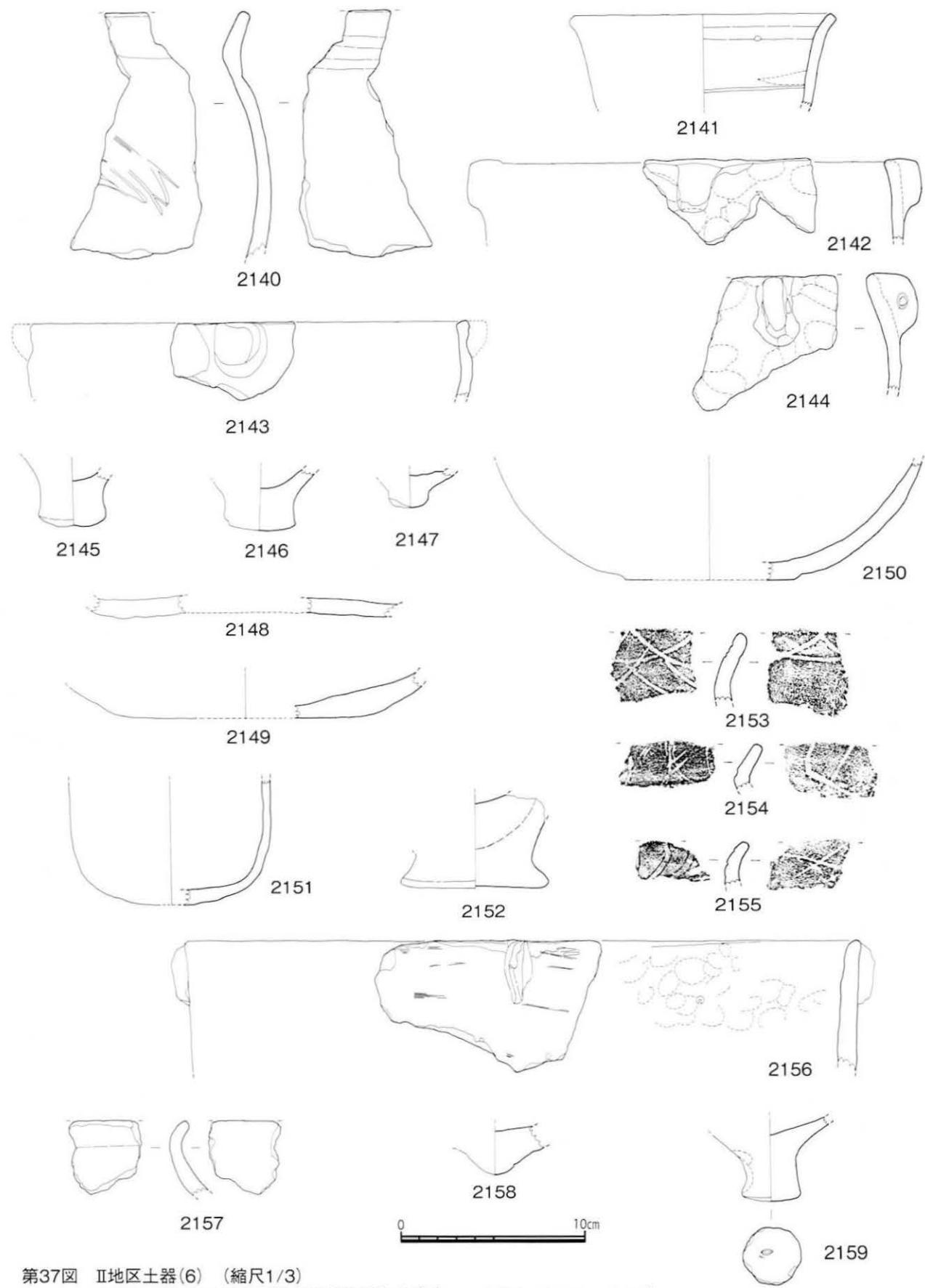


第35図 II地区土器(4) (縮尺1/3)  
2089~2112:VIII層

0 10cm



第36図 II地区土器(5) (縮尺1/3)  
2113~2133:Ⅷ層 2134~2139:遺構内



第37図 II地区土器(6) (縮尺1/3)  
2140~2152: 第3号掘立柱建物跡柱穴跡内 2153~2159: その他

## 2. 石器

Ⅱ地区からは25点の石器が確認された。その内訳としては石斧3点、磨石・敲石類16点、石皿類5点、その他1点である。種類別では磨石・敲石類が最も多く、全体の64%を占めている。層序別ではⅢ層からの出土が多く、掘立柱遺構の柱穴内からも多く出土している。石質では砂岩が多く用いられている。各器種の分類は形態、使用痕などの特徴から以下のように分類した。器種別に記述するが、個々の詳細については第13表を参照いただきたい。

### (1) 石斧

石斧は3点得られた。刃部が残っているものは2160の1点だけで側面・上面とも研磨され面取りされている。2161は刃部が欠損、2162は敲打痕が残る敲石に転用されたと思われる製品である。

### (2) 磨石・敲石類

これらは同時使用または転用されたものが多く同じ項目で扱った。磨面を有するもの、敲打痕を有するもの、凹みを有するもの、またそれらの組み合わせで構成されるものなどがある。

磨石・敲石類として総括し、a：磨面のみのもの（2163～2167・2175）。b：敲打痕のみのもの。

c：磨面および敲打痕を有するもの（2167～2168）。d：磨面および凹みを有する。e：敲打痕および凹みを有する。f：磨面・敲打痕・凹みを有する（2174・2176）。

### (3) 石皿類

中央が磨られ凹むものと、細かい敲打痕がみられ凹むものがある。

a、磨られ凹みを有するもの（2177・2179）。c、敲打痕がみられ凹みを有するもの（2178）。

### (4) 剥片石器

スクレイパーが3点得られている（2181～2183）。2181・2183は黒曜石、2182はチャートを石材とする。

### (5) その他

不明の有孔の石が1点得られている（2180）。摩耗しているためか、明瞭な加工の痕跡は認められず自然か、人工品かの判別は分かれるところである。

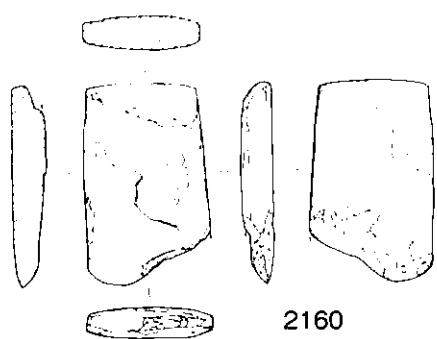
2184は管玉で変質流紋岩を材とする緑色の精巧な資料である。石質等から搬入品と目される。

## 3. 滑石製石鍋

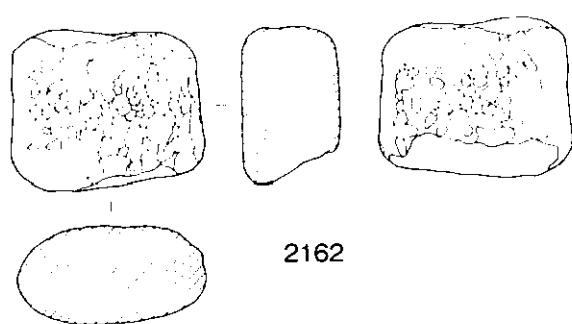
滑石製石鍋及びその破損品を加工した製品は口縁部片が1点、底部片が3点、胴部片と目されるものが2の計6点出土しており、すべて石鍋の形状を保持している。口縁部、底部を図化した。2185は口唇部を舌状に整形する滑石製石鍋の口縁部破片である。2186～2188は底部の破片資料で、内面に擦痕を有す、底部には煤の付着が観察される。

第13表 II 地区石器等観察表

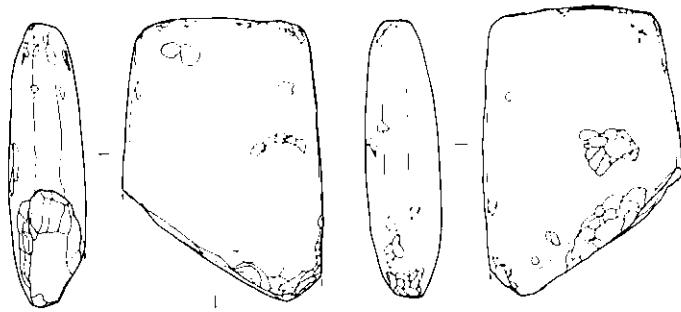
掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	分類	分類 材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	観察
2160	Z-37	VII		石器	石斧	輝緑岩	7.9	4.9	1.4	101.1	刃部の一部と基部の一部を欠するものは全形を窺える資料で、全面を丁寧に研削し扁平なつくりとなっており、特に両側面と上面はきれいに面取りされ滑面を有する。刃部の研ぎ出しは一部に強く研ぎだす片刃石斧である。
2161	A-39	VII		石器	石斧	斑れい岩	11.1	8.0	3.1	465.2	成形時の打痕を全面に残し、上面・側面には研磨が見られるが丁寧ではない。刃部は欠損し、敲石への転用と見られる。
2162	A-37	IX		石器	石斧	片状砂岩	6.2	7.7	4.0	320.6	全面に敲打痕がみられ敲石へ転用したとみられる。刃部は欠損するが左側面には石斧時の研磨面が見られる。
2163	E-40	III		石器	磨石敲 石類a	砂岩	7.7	6.9	4.7	399.5	ほぼ球状で表面と右側面部に磨面が見られ、表面と右側面の磨面には浅い凹みが見られる。側縁には細かな敲打痕がみられる。
2164	B-38	第4号掘立	pit3	石器	磨石敲 石類a	石英斑岩	6.9	8.8	5.5	565.9	半分は欠損する。平面観は方形で表面は入念に磨かれ滑面を有し、両面とも丸みを帯びる。側縁には細かな敲打痕がみられる。
2165	B-39	4・5号跡 内		石器	磨石敲 石類a	輝緑岩	4.1	7.7	5.3	302.7	半分は欠損する。表面は入念に磨かれ滑面を有し、表面は平坦で裏面は丸みを帯びる。側縁には細かな敲打痕がみられる。
2166	A-37	第1号掘立	pit1	石器	磨石敲 石類a	ピン岩	10.4	9.5	6.2	898.0	半分を欠損する。表面は自然面で側面に磨面が見られる。
2167	Y-38	XIV		石器	磨石敲 石類c	輝緑岩	9.9	2.8	3.2	159.4	棒状の製品で断面観はほぼ円形。裏面には磨面が見られ、下側面に敲打痕が見られる。
2168	B-37	第4号掘立	pit5	石器	磨石敲 石類c	砂岩	10.7	13.0	4.0	934.7	半分を欠損する。裏面と右側面に磨面が見られる。下側面には敲打痕が明瞭に残り敲石として使用されたと思われる。
2169	不明	不明		石器	磨石敲 石類b	砂岩	14.0	8.7	3.9	673.1	半分を欠損する。下側面に敲打痕が見られる。
2170	Y-37	VII		石器	磨石敲 石類	流紋岩	8.3	4.4	1.8	94.6	裏面は磨られており、断面観は台形である。下半部を欠損する製品であり、敲石としての可能性がある。
2171	C-35	第3号掘立	pit19	石器	磨石敲 石類e	砂岩	11.0	6.5	4.6	513.7	断面観が三角状を呈する完形品である。裏面は磨られており、一部に敲打痕がみられ、右側面部には凹み、上下端には敲石に使用したとみられる敲打痕が見られる。
2172	B-38	VII		石器	磨石敲 石類e	輝緑岩	11.0	7.9	5.3	832.8	表面裏面に凹み、上下左右側面に敲打痕を有する製品である。凹みは浅めで断面観は横円形である。
2173	B-34	第3号掘立	pit125	石器	磨石敲 石類e	砂岩	8.0	8.6	4.3	516.3	表面裏面に凹み、下側面・左右側面に敲打痕を有する製品で、敲打によるわざが目立つ。平面観は六角形状で断面観は方形である。
2174	B-34	第3号掘立	pit16	石器	磨石敲 石類f	砂岩	10.8	7.3	5.6	645.9	表面に凹み、左側面に磨面、上下側面・右側面は敲石を使用したとみられ上下にはそれによって破損したとみられる。断面観は方形である。
2175	C-36	第3号掘立	pit16	石器	磨石敲 石類a	砂岩	19.7	11.7	8.9	2,962.5	断面観は三角形状である。左上面・右側面に磨面が見られ、右側面は面を持っていて。その他は自然面。
2176	不明	—		石器	磨石敲 石類f	砂岩	13.1	9.4	7.6	1,502.0	断面観は三角形状である。前面に敲打痕が見られ上下端部以外には研磨が加えられている部分がある。中央と右側面、上下端部は平坦になるまで敲打され下端部は浅く凹んでいる。
2177	Y-38	XIV		石器	石皿a	輝石安山岩	16.0	16.5	3.7	1,201.6	表面に滑らかな凹みがみられる。
2178	B-37	第3号掘立	pit14	石器	磨石敲 石類c	—	26.0	22.0	10.0	5,900.0	完形品。表面中央部に凹みがみられる。
2179	A-37	第2号掘立	pit1	石器	磨石敲 石類a	砂岩	25.3	5.9	5.9	2,114.6	大部分を破損している。表面裏面、右側面は磨られており滑らかになっている。
2180	Z-36	VII		石器	その他	黒色片岩	3.2	3.6	0.7	9.8	形は不定形であるが、中心部に1cmの孔が開き、それを閉むように5つ2mm~4mm程度の小孔が開いている。小孔は裏にまで抜けっていない。
2181	A-39	VII		石器	剥片石 器	黒曜石	2.5	1.8	0.7	1.9	不定形ではあるが表面観は台形を呈するスクレイパーである。裏面の自然面上面に刃部が確認される。断面観は三角形状である。
2182	不明	不明		石器	剥片石 器	チャート	2.3	3.5	1.0	9.5	不定形のスクレイパーである。刃部は左側面から下端部に付される。断面観は三角形状を呈する。
2183	Y-37	IX		石器	剥片石 器	黒曜石	1.8	1.0	0.2	0.3	不定形のスクレイパーである。刃部は左側面に確認される。断面観は三角形状を呈する。上面には自然面が残る。
2184	A-37	IX		管玉	その他	変質 流紋岩	2.1	0.6	0.6	1.4	外径6mmの断面円形、丁寧に整形された管状の玉である。沖縄諸島では産出しない石材を用いており、嵌入品と推される。
2185	A-35	第3号掘立	pit3	滑石製 石鍋	口縁	鍋			0.95	13.53	口縁部はやや内湾し、内面には斜めに擦痕が残る
2186	Y-38	VII	EL=332.3~ 325.3	滑石製 石鍋	胴~底	鍋			1	39.12	内面に横向と斜め方向に切込みがみられる。外底面には火然作用による煤付着が黒色を呈する。
2187	Z-36	VII	EL=310.7~ 304.8	滑石製 石鍋	胴~底	鍋			0.7	14.36	内面に横向と斜め方向に擦痕がみられる。外底面は黒色を呈し、煤が付着する。
2188	Z-38	VII	EL=325~ 319.7	滑石製 石鍋	底	鍋			0.8	9.54	ベタ底で外底面に煤が付着する。



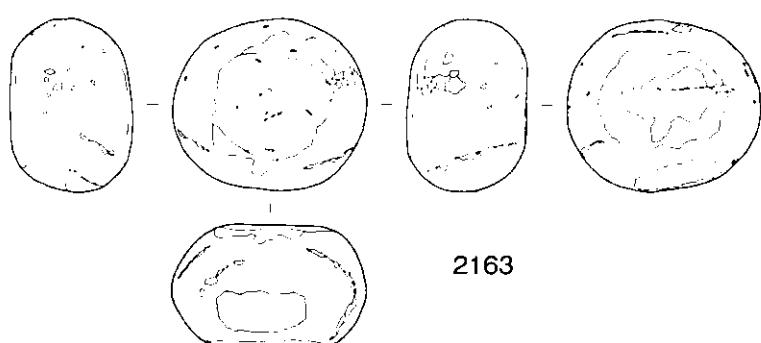
2160



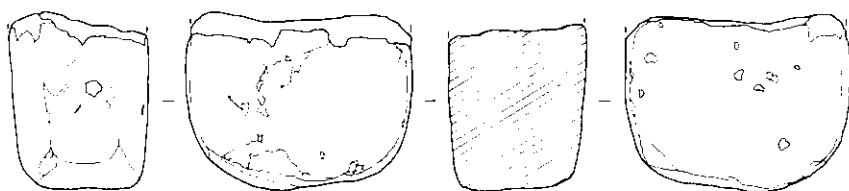
2162



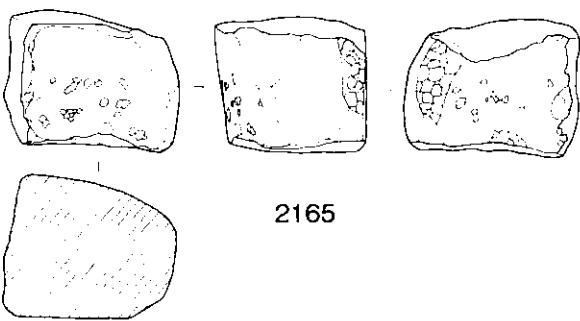
2161



2163



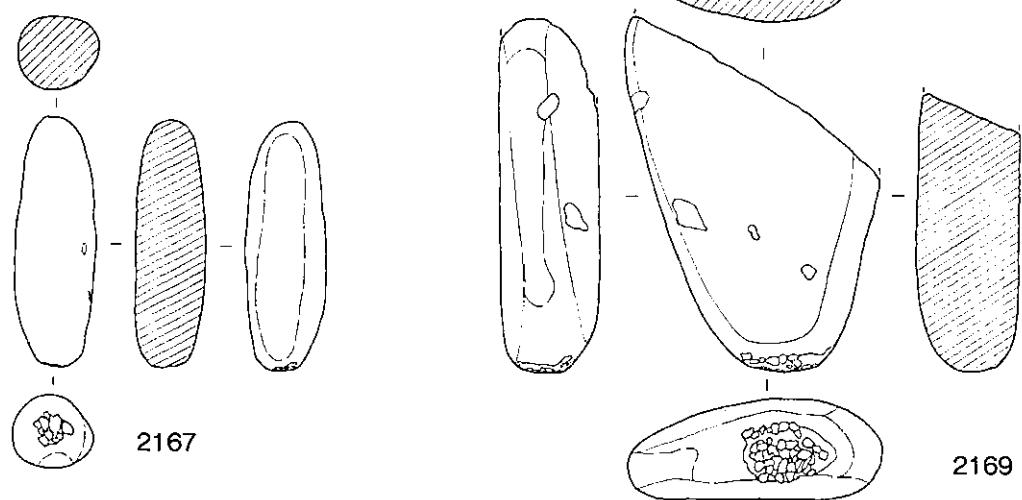
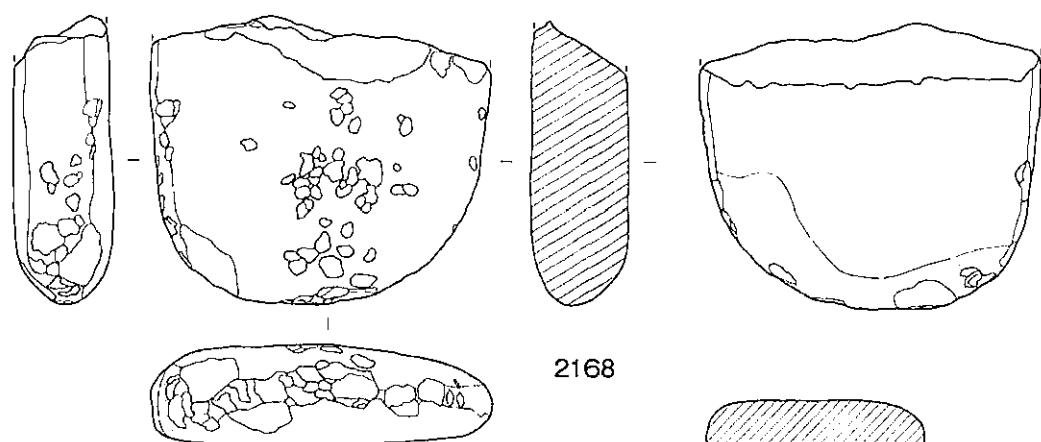
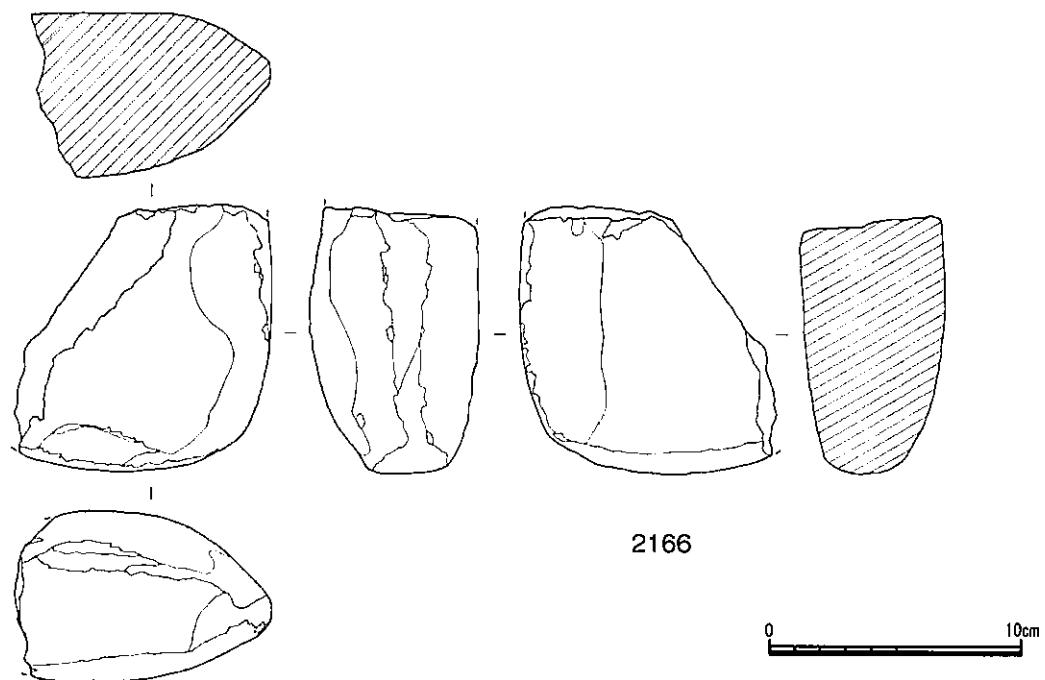
2164



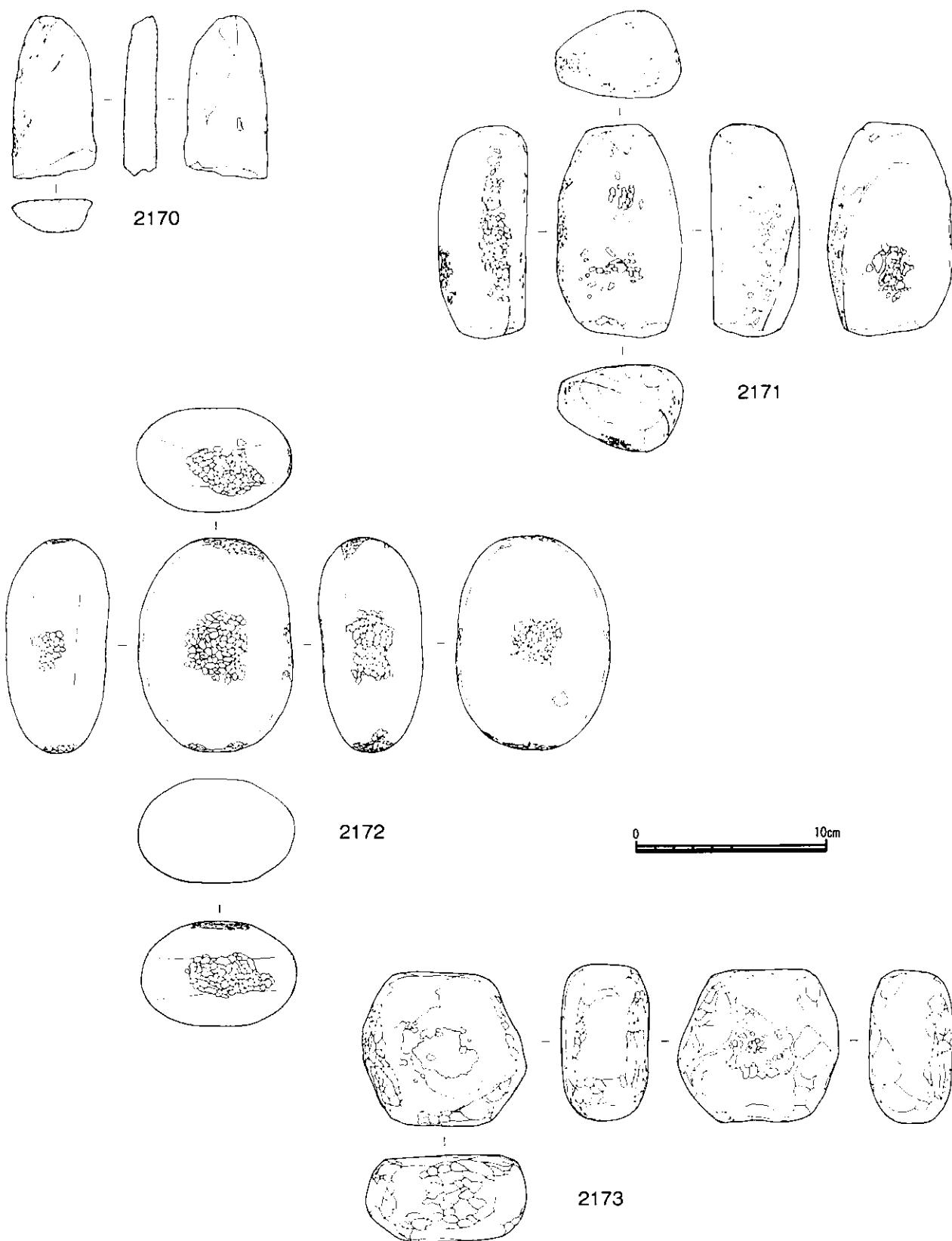
2165

0 10cm

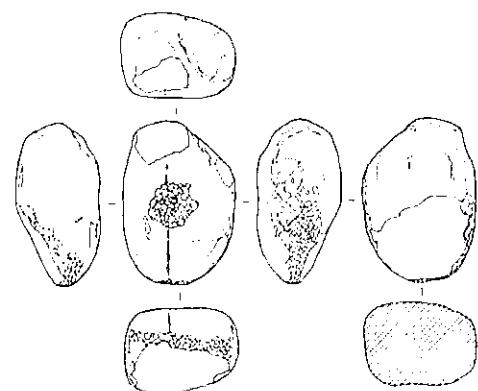
第38図 II地区石器(1) (縮尺1/3)



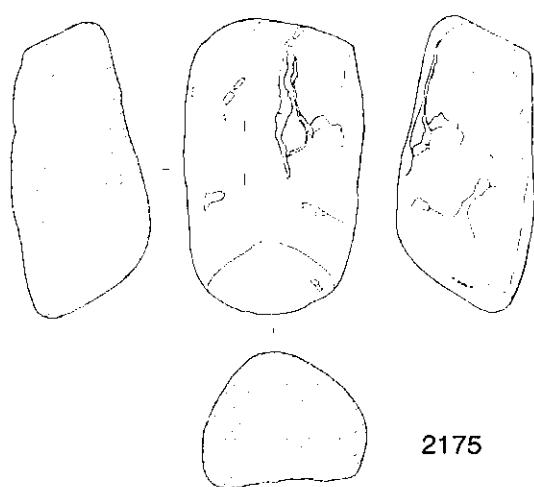
第39図 II地区石器(2) (縮尺1/3)



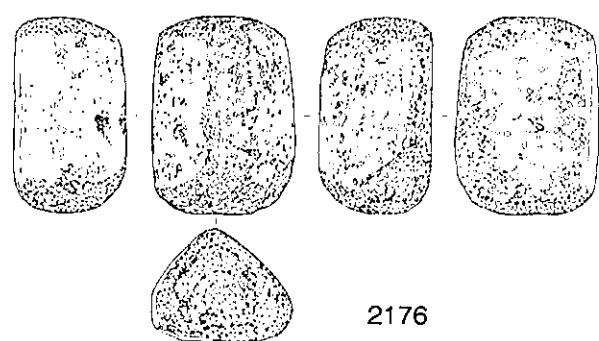
第40図 II地区石器(3) (縮尺1/3)



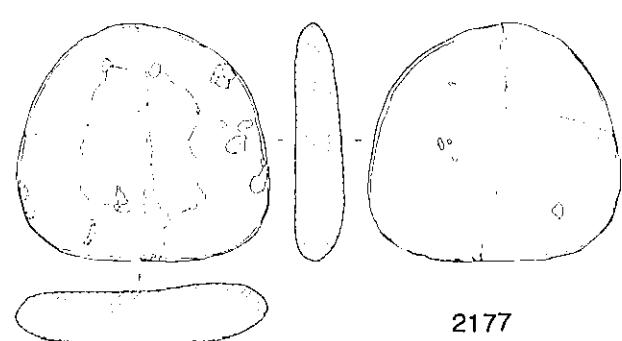
2174



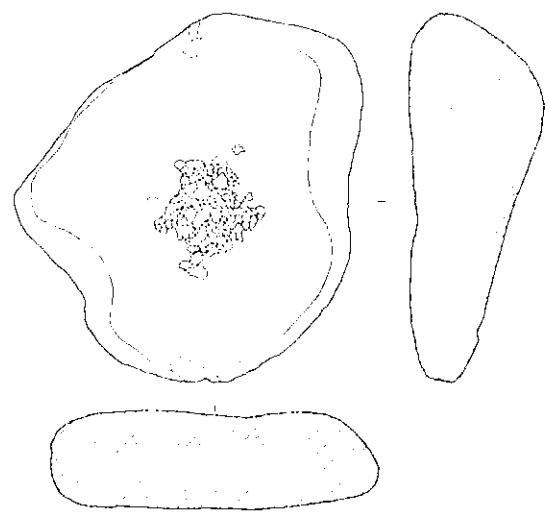
2175



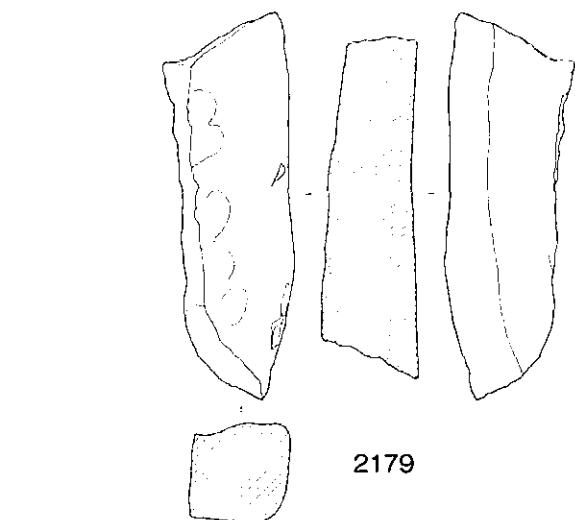
2176



2177



2178

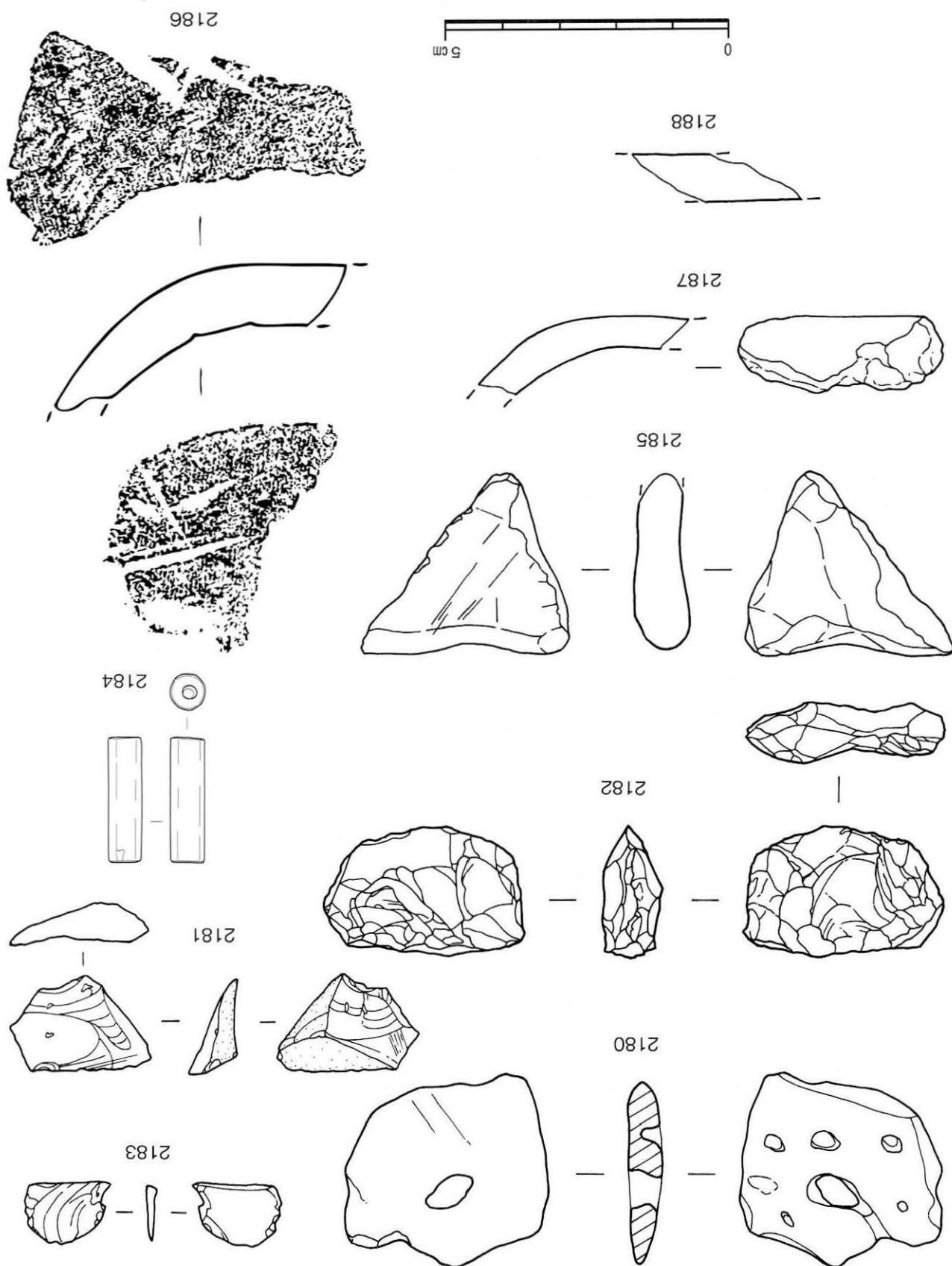


2179

0 10cm

第41図 II地区石器(4) (縮尺1/5)

第42图 II地区石器(5)·石制品·滑石製石鏟 (編目1/1)

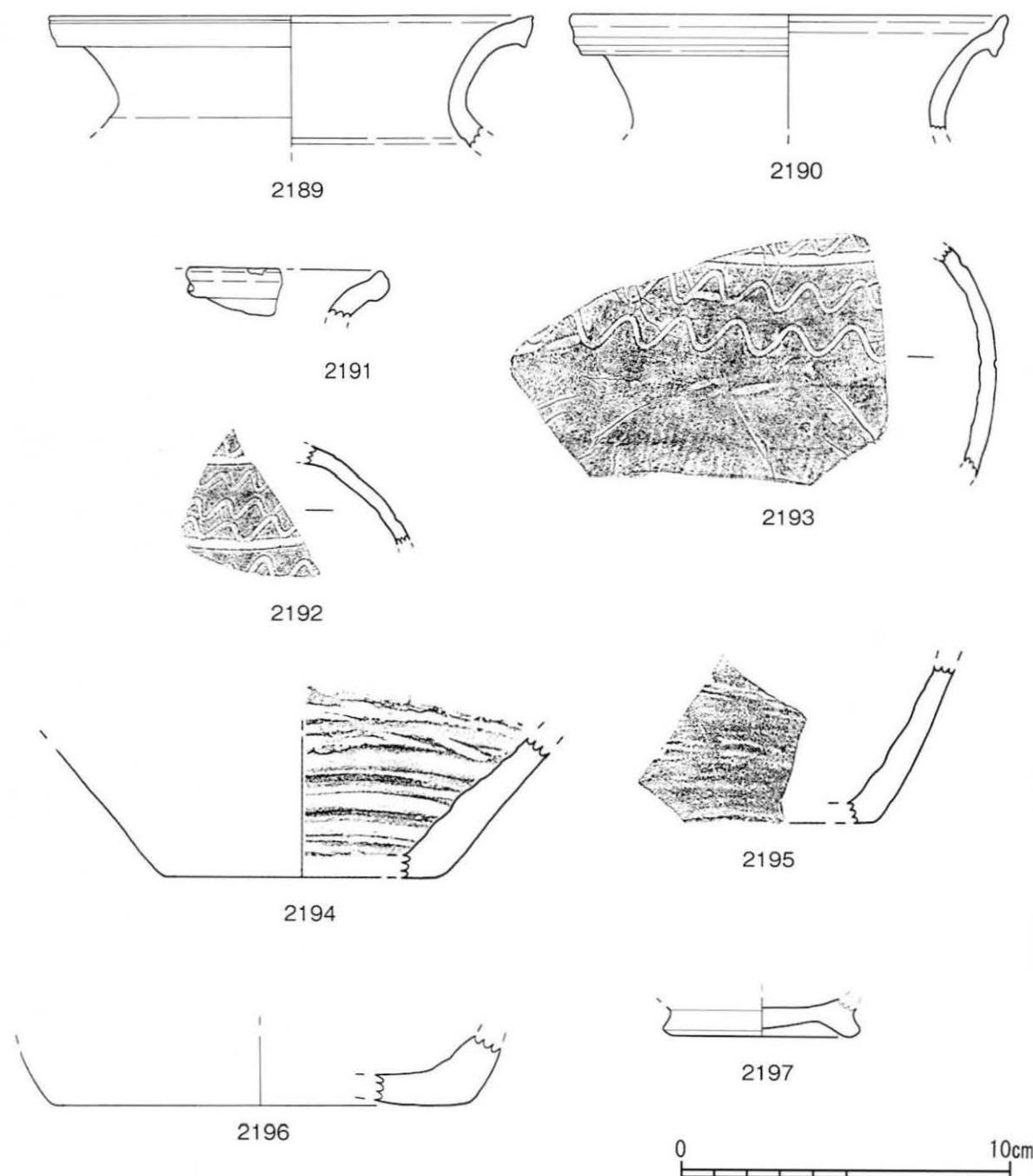


#### 4. カムイヤキ

II地区から出土したカムイヤキは破片総数50点で総重量は846gを測る。その破片を部位ごとに分けると、口縁部4点、胴部40点、底部6点で、器形を窺えない小破片が多いが、ほとんどが壺形になると思われる。

口縁部では口唇の内外端を強調するもの2190と強調しないもの2189・2191があり、胴部では波状文を施すものと波状沈線を施すもの2192・2193がある。器面調整では器面のロクロ痕をナデ消すものや格子状の叩き目が残るものがみられた。

出土層位ではVII層からの出土が多く、近世との混在であるVI・VII層、無遺物砂層であるXI層へのVII層からの落ち込みなどがみられる。遺構からは第3号掘立柱建物跡から3点得られている。



第43図 II地区カムイヤキ等 (S=1/2)

第14表 II 地区カムイヤキ等観察表

掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	観察事項 (器色、混和材)
2189	B-38	2・3号炉 跡内	323.6~303.9	かみやけ	口縁	壺	14.6				両面ともヘラ削りの後ナデ調整。口唇部に1mm幅の沈線がめぐる。灰N5/5
3290	D-35	東畦	—	かみやけ	口縁	壺	13.2				両面ともヘラ削りの後ナデ調整。口唇部内外端を強調する。灰N6/6
2191	D-39	VII	305.4	かみやけ		壺					両面ともヘラ削りの後ナデ調整。口唇部内外端を強調しない。オーバーグレー2.5GY5/1
2192	A-36	第3号掘 立	pit7	かみやけ		壺					外面に波状文を3条施し沈線で囲む文様を施す。青灰10BG5/1
2193	A-35	第3号掘 立	pit3	かみやけ		壺					外面に波状文を施し沈線で囲む文様を施す。内面は横沈線の印き目が残る。青灰10BG5/1
2194	Z-38	VII	345.7~339.4	かみやけ	底部	壺		8.6			外面ナデ、内面ロクロ痕。青灰5BG5/1
2195	B-37	X I	307.6	かみやけ		壺					外面ナデ、内面ロクロ痕。オーバーグレー2.5GY5/1
3296	B-38	VII	317.4~305.1	かみやけ	底部	壺		12.8			外面ナデ、内面ロクロ痕。暗オーバーグレー2.5GY4/1
2197	B-37	X I	311.4~307.6	不明土器		壺					外面ナデ、内面ロクロ痕。オーバーグレー2.5GY6/1
2198	E-35	VI		白磁	口縁	碗I類1	16				器内面に明瞭な稜が確認できる。素地：灰白色2.5Y8/2。釉色：にぶい黄橙色10YR7/4
2199	Z-38	X		白磁	口縁	碗I類1	14				外面玉縁部に軸垂れ、玉縁下部に箆状工具による稜がみられる。素地：灰白色10YR8/2。釉色：灰白色10YR7/1。
2200	C-39	VII		白磁	口縁	碗I類1					玉縁は略三角形形状で最大肥厚部に稜が見られる。素地：浅黄橙色10YR8/3。橙色7.5YR7/6。
2201	B-38	VII		白磁	口縁	碗I類1					玉縁下部に箆状工具による稜が明瞭にみられる。素地：灰白色2.5Y8/1。釉色：灰白色。
2202	D-39	4号炉跡		白磁	口縁	碗I類1					玉縁下部に箆状工具による稜が明瞭にみられる。素地：灰白色2.5Y8/1。灰白色5Y7/1。
2203	A-36	第3号掘 立	pit8	白磁	口縁	碗I類2	15.9				玉縁下部に箆状工具による稜、外器面には回転箆削り痕が比較的明瞭に現存。内外器面ともに軸垂れが見られ、外器面下部には施釉されず露胎になっている。素地：灰白色5Y8/1。釉色：灰白色10YR7/1。
2204	C-35	第3号掘 立	pit21柱痕部	白磁	口縁	碗I類2	14.6				玉縁は略三角形形状で最大肥厚部に稜が見られ、玉縁下部に箆状工具による稜がみられる。素地：灰白色5Y8/1。釉色：灰白色：10YR7/1。
2205	C-36	畦		白磁	口縁	碗I類2					玉縁下部に箆状工具による稜が2条みられ、段を有するようになっている。素地：灰白色10YR8/2。釉色：にぶい黄橙色10YR7/3。
2206	C-35	VII		白磁	口縁	碗I類2					玉縁下部に箆状工具による稜がみられる。素地：灰白色10YR8/2。釉色：にぶい黄橙色10YR7/4。
2207	Z-36	VII		白磁	口縁	碗II類					器厚は薄く口縁は外反。外器面には回転箆削り痕が比較的明瞭に残る。素地：灰白色2.5Y8/2。釉色：灰白色5Y8/1。
2208	C-35	VI		青磁	口縁	碗					口縁は外反。素地：灰白色2.5Y7/1。釉色：オリーブ灰色10Y6/2。
2209	B-35	VI		青磁	耳	不明					素地ににぶい黄橙色10YR7/4。釉色オリーブ灰色10Y5/2。
2210	B-34	第3号掘 立	pit5	青花	口縁	碗					口縁は外反し、器表面に幅広の回線をめぐらす。素地：にぶい黄橙色10YR7/4。釉色：淡黄色2.5Y8/3。
2211	E-37	搅乱		青花	口縁	碗					器表面に菊花文を施す。素地：灰白色5Y7/1。釉色：灰白色5Y7/1。
2212	E-39	VI		青花	胴部	碗					器表面にくずれた蓮弁文。内面に2本回線を廻らす。素地：灰白色5Y8/1。釉色：灰白色10Y7/1。
2213	B-36	VI		楕軸	口縁	壺					軸は内側は薄く、外側は厚い。素地：淡黄色2.5Y8/3。釉色：黒褐色10YR2/2。
2214	E-36	VI		沖縄産 施釉陶器	口-底部	碗	13	6.45	5.8		高台脇から口縁部にかけてストレートに移行する直口口縁碗。施釉方法はフジガキーで高台は露胎になる。素地：灰色5Y5/1。灰オリーブ色7.5Y5/2。
2215	D-38	VII		沖縄産 施釉陶器	口-底部	碗	13.3	7	5.1		高台脇から口縁部にかけて丸みのある立ち上がり。施釉は腰部まで高台は露胎。見込み部にも施釉される。素地：淡黄色2.5Y8/3。釉色：灰白色10Y7/2。
2216	E-37	VI		沖縄産 施釉陶器	口縁	碗					丸みのある立ち上がりで口縁で外反する。白化粧は口唇～内面。素地：にぶい黄橙色10YR7/3。釉色：灰オリーブ色5Y4/2(裏透明釉)
2217	B-36	X I		沖縄産 施釉陶器	底部	碗		6.8			外面は高台脇まで施釉。見込みの軸を蛇の目状に描き取る。素地：浅黄橙色10YR8/4。釉色：灰オリーブ色5Y4/2。
2218	Z-36	VI		沖縄産 施釉陶器	口縁	甕or鍋					口頸部を「く」の字状に折り曲げ、横耳を貼り付ける。素地：灰色5Y6/1。釉色：オリーブ黒色5Y3/1。
2219	C-35	VI		沖縄産 施釉陶器	口縁	ランプー					口縁が逆L字状に屈曲される。素地：浅黄橙色10YR8/4。釉色：(表) 黒褐色10YR8/1、(裏) 透明釉
2220	B-38	VI		沖縄産 施釉陶器	底部	香炉or 急須					底面に三角錐状の突起を貼り付ける。素地：灰白色5Y7/1。釉色：(表) 無釉、(裏) 暗褐色10YR3/3
2221	E-36	表面		沖縄産 無釉陶器	口縁	すり鉢					肩部は「く」の字状に成形させ、口縁を外側にきつく外反させる。器色：にぶい赤褐色2.5YR4/4。
2222	D-39	4・5号炉 跡		沖縄産 無釉陶器	底部	すり鉢					内面に7条一組の摺り目を入れる。器色：にぶい橙色2.5YR6/3。
2223	D-38	VI		沖縄産 無釉陶器	口縁	水鉢					口縁は肥厚し、断面感がくずれた三角形状。胴上部に4本一組で櫛描きの波状沈線文を描く。器色：にぶい赤褐色
2224	D-35	VI		沖縄産 無釉陶器	底部	壺					外面に回転箆削り痕、内面にロクロ痕あり。器色：にぶい赤褐色2.5YR5/3。
2225	D-38	VI		沖縄産 無釉陶器	胴部	瓶					外面上に圓線、回転擦痕。内面にロクロ痕あり。器色：赤褐色10R5/4。
2226	D-39	表面		沖縄産 無釉陶器	口縁	蓋					鋲つき蓋。蓋甲の丸みは深い。器色：にぶい黄橙色10YR7/2。
2227	E-38	VI		沖縄産 陶質土器	口縁	蓋					やや丸みのない蓋甲。器色：橙色5YR7/8。
2228	E-35	VI		沖縄産 陶質土器	口縁	鍋					口頸部を「く」の字状に折り曲げ、横耳を貼り付ける。器色：橙色5YR7/8。

## 5. 不明土器

II地区VIII層から出土した資料に、精製された素地の本土産の須恵器もしくは黒色土器の碗底部と目される破片資料が1点得られている。

## 6. 陶磁器

本地区から得られた陶磁器は、中国産磁器、中国産陶器、本土産磁器、本土産陶器、沖縄産陶器に大別される。総破片数は486点で沖縄産陶器が大半を占める。以下、それぞれ特徴を記す。

### (1) 中国産磁器

#### 1) 白磁

II地区出土の白磁は口縁部総数10点、胴部総数7点である。器種は碗が確認される。口縁部は端部が玉縁状に肥厚するのが特徴的である。小破片で全形の窺える資料はないが、口縁部は金武分類（金武1989）を参考にI、II類に分類する。I類は玉縁碗で、玉縁の大きさ器厚などにより1種と2種として分類する。第I類1種は比較的薄手で玉縁が小さい資料で、胴部がわずかに膨らむ器形2198～2202。第I類2種は、1種に比べ厚手で玉縁が大きく腰部から口縁部へ逆ハの字状に開き、腰部から下は露胎する資料である（2203～2206）。

なお、第II類は端反碗で、口縁端が肥厚せず、器厚は薄く外反する（2207）。

#### 2) 青磁

II地区出土の青磁は破片総数8点ですべて小破片である。器種は碗と器種不明の耳の破片と推定される資料がそれぞれ1点確認できる。2208は碗で口縁部が外反する資料であり、2209は耳の小片資料、いずれも小破片である。

#### 3) 青花

II地区出土の青花は破片総数17点ですべて小破片である。器種は碗で、ほとんどが清代に属するものと考えられる（2210～2212）。

#### 4) 褐釉陶器

破片総数6点で器種は壺のみである（2213）。

## (2) 本土産磁器

染付（17世紀代？）が破片総数38点、近・現代染付けが破片総数30点得られている。器種は碗、皿、瓶、杯などである。

## (3) 沖縄産陶器

### 1) 施釉陶器

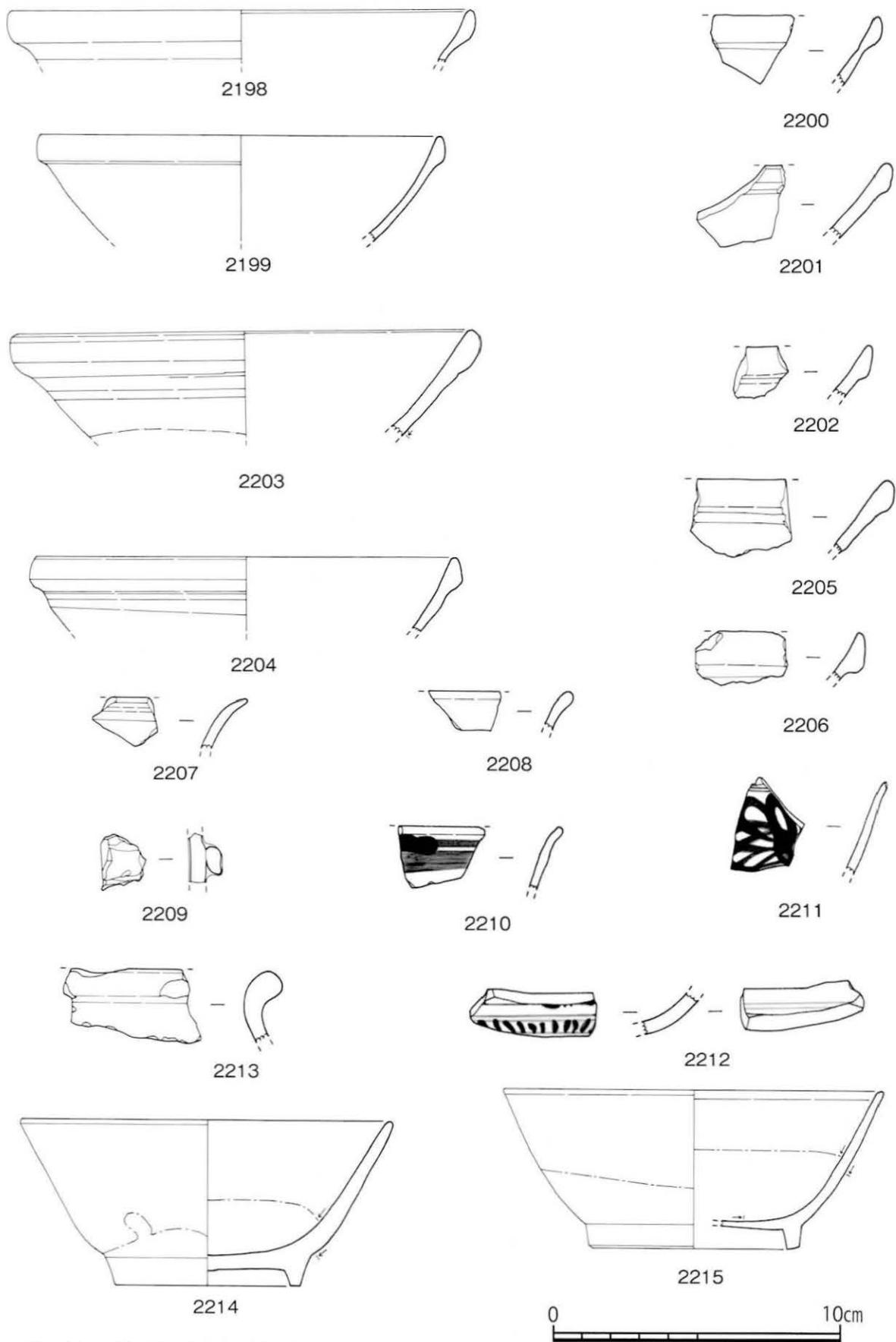
沖縄産施釉陶器として分類したものは、器の表面に釉をかけたものであり、一般的に「上焼」と呼称されるものを中心とする。II地区出土の破片総数138点で器種は碗、壺、鉢、甕、香炉、瓶、蓋などが確認できる（2214～2220）。これらの器に釉掛けされた釉の種類としては灰釉、鉄釉？（褐色の釉）、素地に白色の化粧土を塗布した後透明釉を施すものなどがある。個別の観察事項については、第14表に示した。

### 2) 無釉陶器

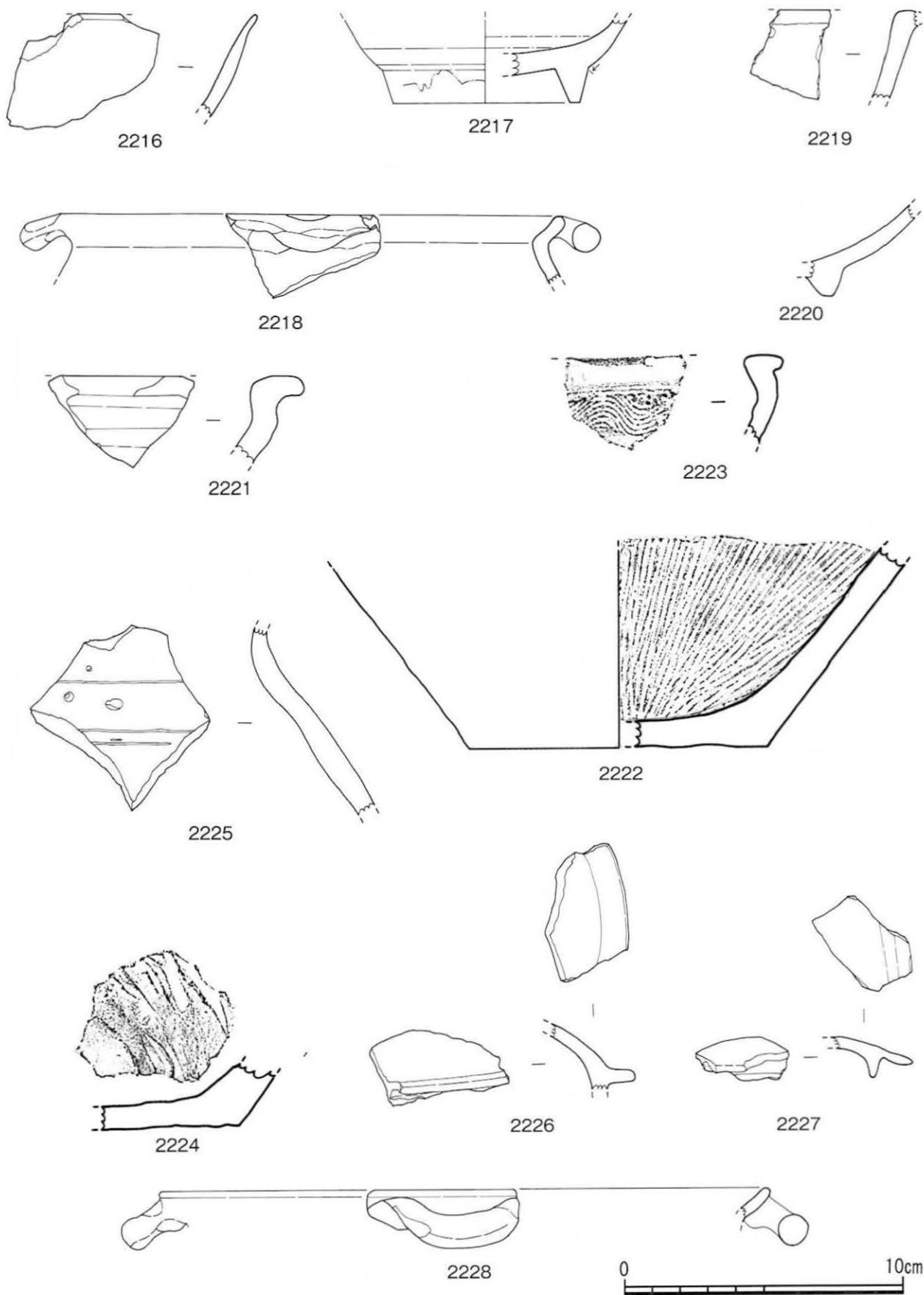
一般的に「荒焼」と呼ばれるものである。破片総数176点で、器種はすり鉢、甕、壺、瓶、蓋が得られている。2221・2222は擂鉢の口縁、底部資料である。2223は水鉢逆L字状に口縁を外側に折り曲げ、外面に波状門を櫛状工具で線刻する。2224は壺底部、2225は壺や瓶の頸部資料である。2226は蓋の小片である。

### 3) 陶質土器

「アカムヌー」と呼ばれるもので破片総数20点、器種は鍋と蓋が確認された。2227は蓋、2228は鍋の口縁資料である。



第44図 II地区陶磁器(1) (縮尺1/2)



第45図 II地区陶磁器(2) (縮尺1/2)

## 6. 貝製品

Ⅱ地区から出土した貝製品は総計13点である。製品を装飾品と実用品に大別すると、ほとんどが実用品である。実用品ではシャコガイ有孔製品が10点で最も多く、螺蓋製敲打器、スイジガイ製利器がそれぞれ1点で、装飾品ではゴホウラ貝輪の未製品が1点得られている。以下、これらの概要を記す。

### 二枚貝有孔製品

二枚貝の腹部に敲打による孔を穿った製品で、漁網錘と解される(2229～2236)。総数10点出土しており8点を図化した。貝種はシラナミ、ヒメジャコ、ヒレジャコのシャコガイ類の3種であった。シャコガイ類のサイズは殻長最小2235の8.6cm、最大2236の13cm、平均11cmを使用しており、重量は最軽量が2235の52.8g、最も重いのは2236の226.5g、平均約115gのものを使用している。穿孔のサイズは約2.3cmを平均とする。ほとんどが全体的に磨耗しており、復縁部の磨耗が著しいものがある。

### 螺蓋製敲打器

2237はヤコウガイのフタの縁辺部の周辺に剥離痕を持つもので、それが意図的な付刃であるという見方と叩いた結果生じたものであるという見方がある製品である。本地区からは第3号掘立柱柱穴12より1点得られた。使用の度合いは具志堅貝塚発掘調査報告書(本部町教委1986)に準じると第2段階で、付刃の範囲はシヌグ堂遺跡(沖縄県教委1985)に準じると④～⑩である。

### ゴホウラ製貝輪

2238ゴホウラの背面や腹面を利用して加工された製品である。本地区からはC-35グリットVIII層から1点出土した。背面加工の未製品で粗割りの状態で研磨も加わっておらず破損している。

### スイジガイ製利器

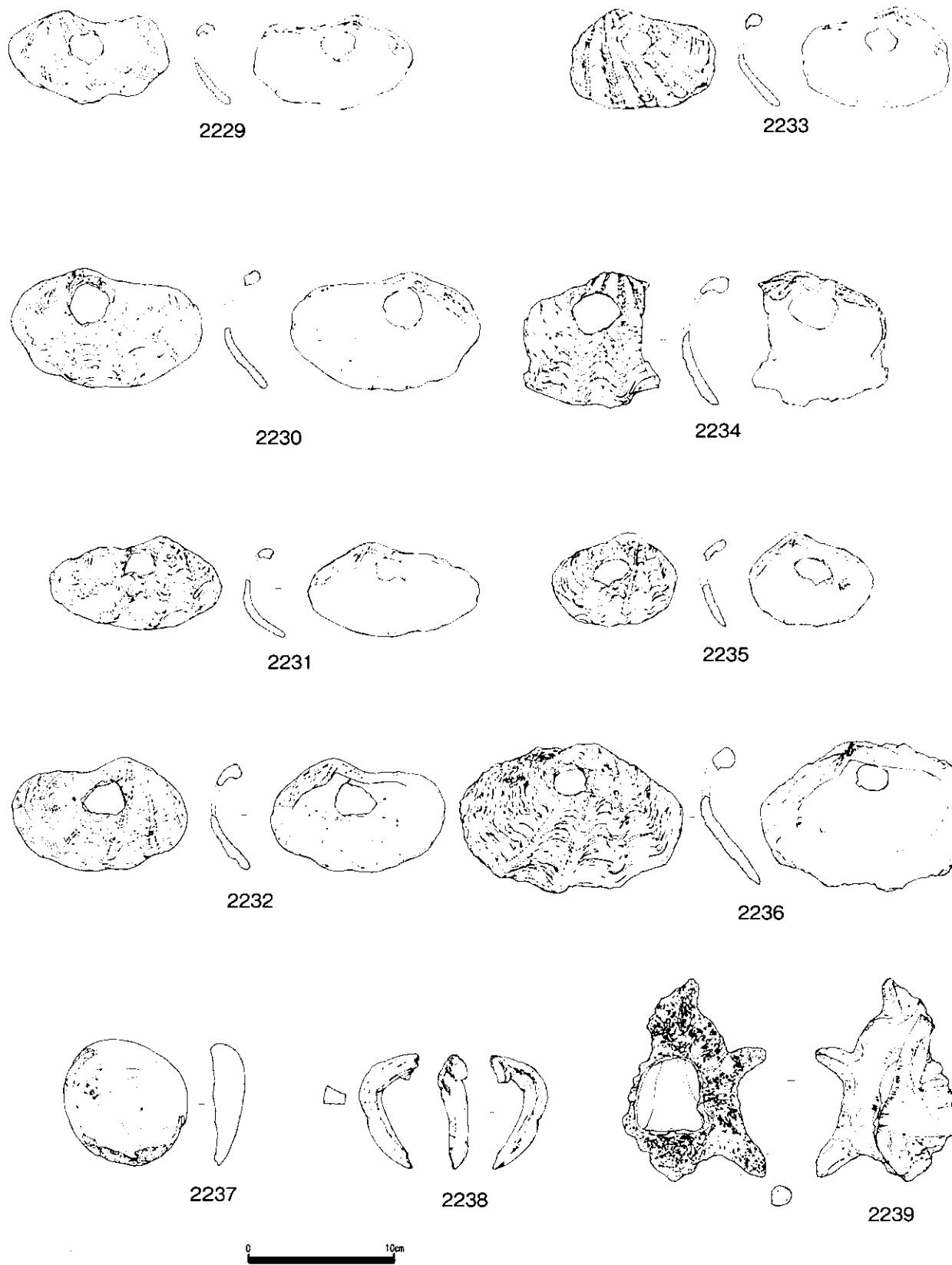
2239はスイジガイの突起の先端に付刃した製品で、本地区からはE-37グリットかく乱部より出土した。上原静氏の分類(上原1981)に準じると付刃された突起は①で縦刃の平刃である。

## 7. 土製品

土製品は鍛冶関連遺物としての羽口、用途不明品として棒状製品、円盤状有孔製品が得られている。

### (1) 羽口

羽口は4点出土している。形状の復元できるものを図示する。2240は全形を窺えないが円筒形を呈すると思われる。胴部で外系は推定約7.3cmで円形、内径は約2.4cmでやや方形状、厚さは約2.8cmを計る。器色は外面が灰白色、内面が橙色で混入物には石英、微砂粒が含まれる。A-38グリットVIII層出土。



第46図 II地区貝製品（縮尺1/4）

## (2) 土製品

銘苅原遺跡（那覇市教委1997）において土器の脚部である可能性が指摘されている製品である。手づくねで作り出されており、2241・2242は上面が平坦になっており上端部も器状に広がって行くよう土器の内底であると推される。下端部は破損しており、断面観は円形である。器色は明赤褐色で混入物には微砂粒、赤色粒がわずかにみられる。2243は上下端ともに破損しているが前二者に比べ調整が丁寧にされており、表面には成形痕が残るもの裏面は丁寧に平坦になっているため前者とは違う用途があるかと思われる。断面観は隅丸方形を呈する。器色は赤褐色で混入物には石英、微砂粒がみられる。

## (3) 円盤状有孔製品

2244はだいぶ磨耗が激しいが径が推定約5cm、厚さが1cmの円盤状になると思われる製品である。約9mmの孔が穿たれており上部孔の裏面には紐ずれのような痕が確認できる。混入物には石英、千枚岩がみられ、触ると手にパウダー状のものが付着する。器色は橙色。

第15表 II地区貝製品等観察表

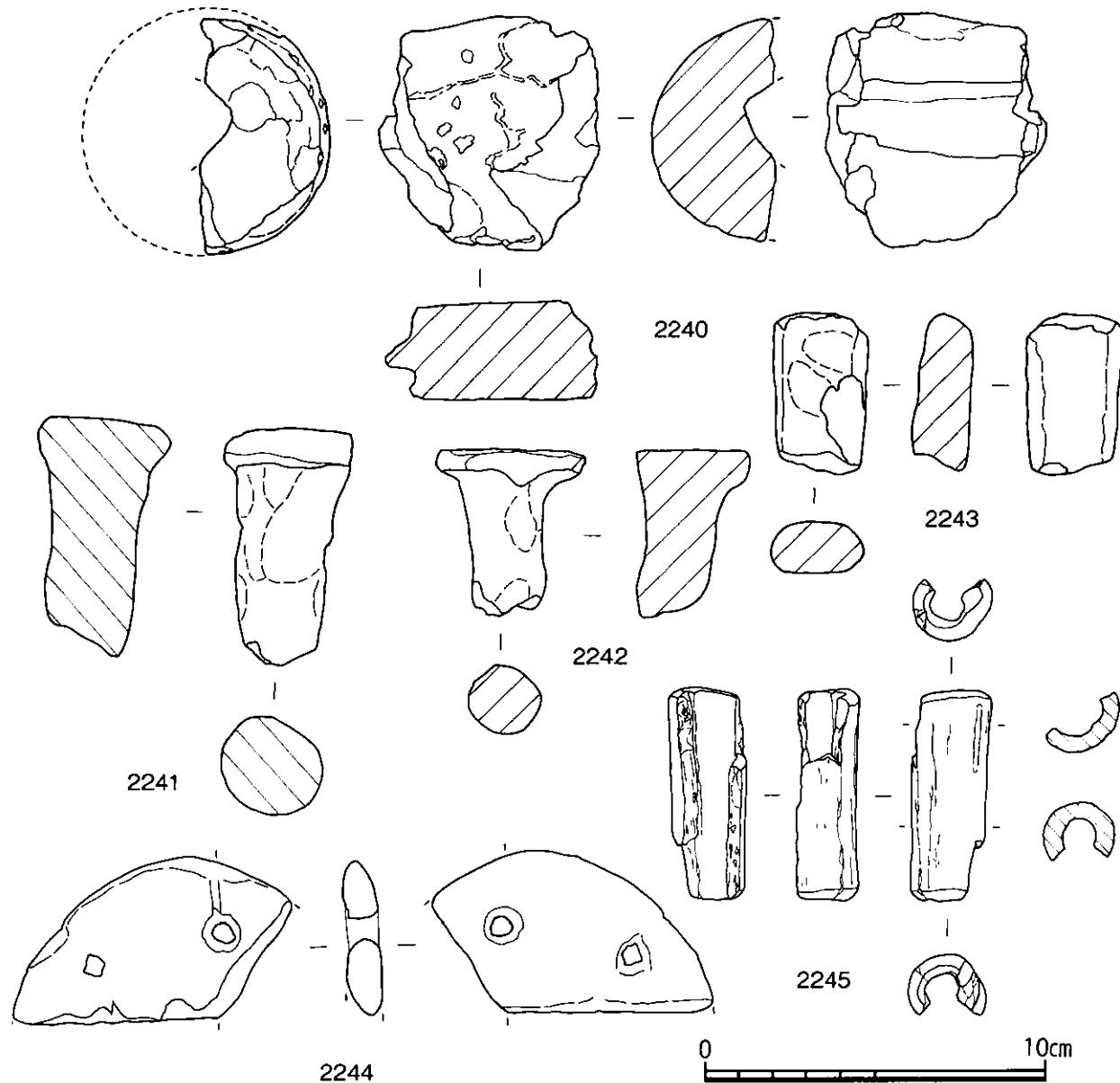
掲載No	グリッド	層	層備考	種別	貝種部位	左右	高さ(cm)	縦長(cm)	孔径 縦/横	重量(g)	観察事項
2229	A-36		pit1	貝製品	シラナミ	右	6.6	11.2	縦2.0 横2.4	75.1	全体的に磨耗する
2230	C-35	X I		貝製品	シラナミ	右	7.8	13	縦3.2 横2.7	132.7	全体的に磨耗する
2231	C-35	第3号掘立	pit18	貝製品	シラナミ	左	3.6	11.9	縦1.2 横1.2	98.6	全体的に磨耗する
2232	C-35	第3号掘立	pit19	貝製品	シラナミ	左	7.5	12.6	縦2.4 横3.0	109.2	全体的に磨耗する
2233	C-35	第3号掘立	pit21	貝製品	ヒメジャコ	右	6.9	10.2	縦1.8 横2.2	116.3	復縁部の磨耗が著しい
2234	C-36	畦		貝製品	ヒメジャコ	左	9.2	8.6	縦3.0 横3.5	119.22	約3分の1破損
2235	D-37	第6号掘立	pit3	貝製品	ヒメジャコ	左	6.2	8.6	縦1.8 横2.3	52.8	復縁部磨耗
2236	D-35	畦		貝製品	シラナミ	左	9.8	14.4	縦2.0 横2.3	226.5	全体的に磨耗が少ない
掲載No	グリッド	層	層備考	種別	貝種部位	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	観察事項
2237	B-37	第3号掘立	pit12	貝製品	蝶蓋		長さ8.7	幅8.5		206.5	風化し触るとザラザラする。付刃も短く2・3回の敲打による
2238	C-35	VII		貝製品	コホウラ	腕輪	高さ7.6			27.5	背面加工の未製品。研磨見られない
2239	E-37	かく乱		貝製品	スイジガイ					285.6	背面加工を打ち削り、突起部の付刃は丁寧で片刃となる
2240	K-38	VII		土製品	羽口		6.8	6.3	3.8	124.51	筒状の土製品で、内面は赤褐色、外面は灰白色を呈す
2241	A-37	VII	320.0~319.4	土製品	柱状		7	3.6	3.6	66.71	上面端は平たんに成形され、棒状の脚？部は手捏ねによる。赤褐色の素地に砂粒を多く含む
2242	A-37	VII	330.0~	土製品	柱状		4.9	4.5	3.6	35.38	上面端は平たんに成形され、棒状の脚？部は手捏ねによる。赤褐色の素地に砂粒を多く含む
2243	B-38	VII	317.4~305.1	土製品	柱状		4.7	2.6	1.6	24.89	上面端は平たんに成形され、棒状の脚？部は手捏ねによる。橙色の素地に砂粒を多く含む
2244	Z-38	X III	311.6~295	土製品	柱状		4.8	6.4	1.2	28.42	断面格円形で側面部は平たんとなる棒状の土製品。
2245	C-35	掘立柱	3号-21	骨製品	管状		6.2	2.5	0.6	12.88	
2246	Y-38	VI	361.6~354.5	金属製品	角釘		9.3	1.4	1.4	19	付着物が多く、全体の器形は判然としない
2247	D-39	表面		金属製品	角釘		6.1	0.7	0.6	8	ほぼ完形に近い製品である。頭部端が外に張り出す
2248	C-36		pit2	金属製品	身部	刀子	6.7	1.4	0.5	7.9	刀子の完形品。小品ながら保存状態は良好
2249	B-37	VI	337.3~329.2	金属製品	管		4	0.5	0.2	2.8	カブ部厚2mm、竿部厚2mm
2250	D-35	VI	289.3~283.7	金属製品	管			0.3	0.2	1.8	竿部はかなり曲がっている。カブ部厚1mm、竿部厚3mm
2251	D-39	表面	335.3	金属製品	管			0.3	0.2		竿部中間からくの字に屈曲している。カブ部の直径は約1cm
2252	D-39	VII	314.2~309.5	金属製品	管		4	0.4	0.3	2.9	残存する竿部は屈曲している。カブ部厚2mm、竿部厚3mm
2253	B-37	VI	337.3~329.2	金属製品	煙管		11.2	0.9	0.8	9.8	全体的に青銅化しているが所々本来の白金の輝きが見られる。火皿径1.5cm、吸口径0.5cm
2254	B-39	4号炉跡		金属製品	煙管		3.4	0.6	0.6	1	吸口の破片である。吸口内径0.2cm、羅字接続部内径0.5cm

## 7. 骨製品

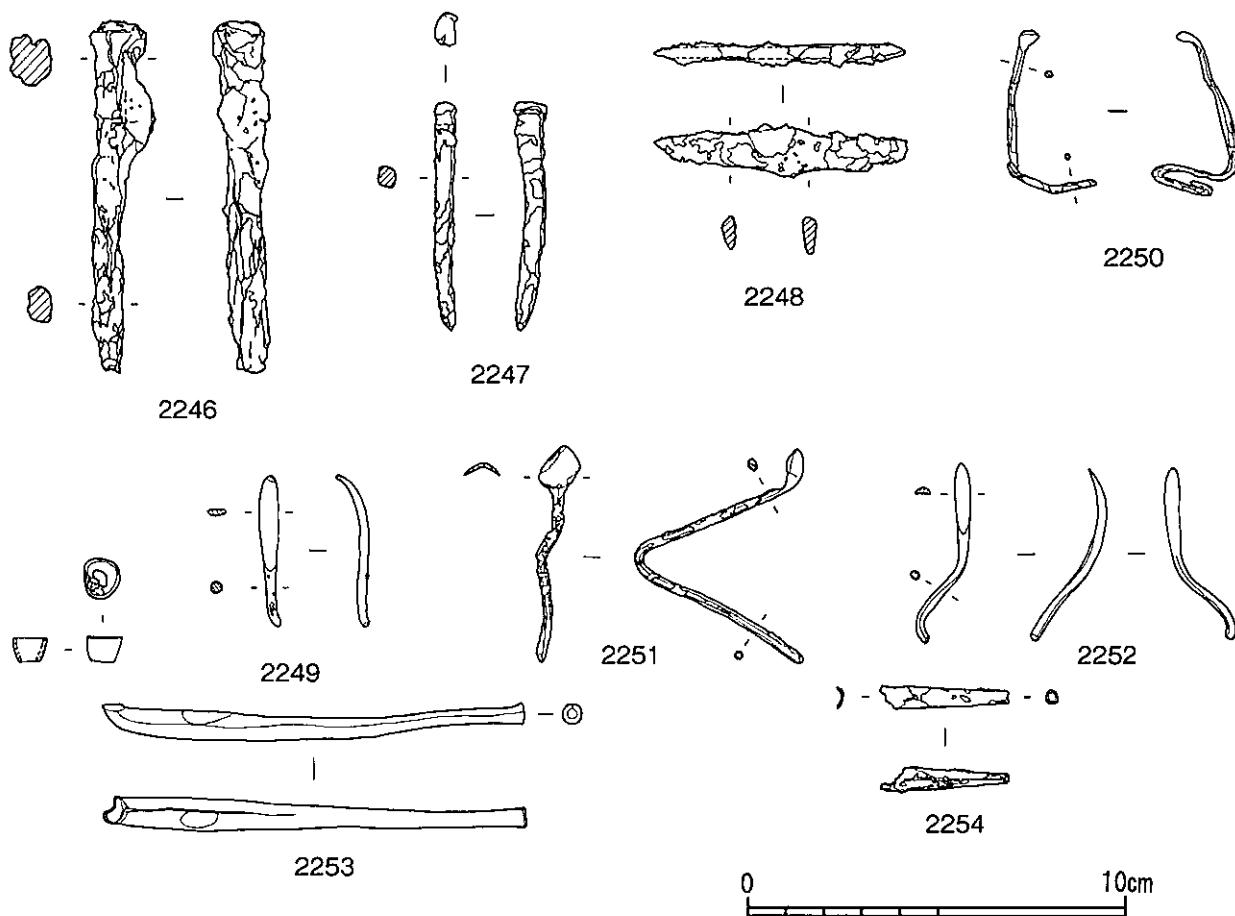
骨製品は2245の1点である。用途、材質ともに不明であるが、最大長62mm、最大幅22mm、最大厚6mmで両端が丁寧に磨かれ、下端では光沢を有するほどである。破損しているもののきれいな筒状の製品が予想され、断面観では下面是円状、上面はもとの材質の形状から楕円状になる。内面には材質を推定できそうな凸部が確認できる。第3号掘立柱柱穴21の出土。

## 8. 金属製品

金属製品は、鉄製品の釘が2点、刀子が1点、銅製とみられる簪が4点、煙管が2点得られている。ほとんどがVI層からの出土である。個々の詳細については第15表に記した。



第47図 II地区土製品・等 (縮尺1/2)



第48図 II地区金属製品（縮尺1/2）

## 9. 脊椎動物遺体

II地区における脊椎動物遺体の出土量は、総破片数が150点とそれほど多量ではなく、ほとんどがVIII層からの出土である。ただし、この出土量の低調さはサンプリング方法が発掘現場での視認による拾い上げ（ピックアップ法）に起因すると考える。

出土した骨種の同定については樋泉岳二氏に同定を依頼した（第VII章第1節参照）。

## 10. 貝類遺存体

平成15年度に発掘調査が行なわれたII地区について資料整理を行なった。第16・17表に層ごとに分類し、種ごとに完形・殻頂・破片数に分け、その重量と生息地、最小個体数を示した。また、いくつかの種においてはその体長の計測を行なった。

**最小個体数の算出方法** 最小個体数の算出には巻貝では完形と殻頂の合計を、二枚貝では右殻と左殻の完形と殻頂を合計し、その多い方を最小個体数とした。

**生息地分類方法** 貝類の生息地分類には報告書によっていくつかの分類法が提示されているが、ここでは黒住耐二氏による古我地原貝塚（黒住1987）の生息場所類系に従った。

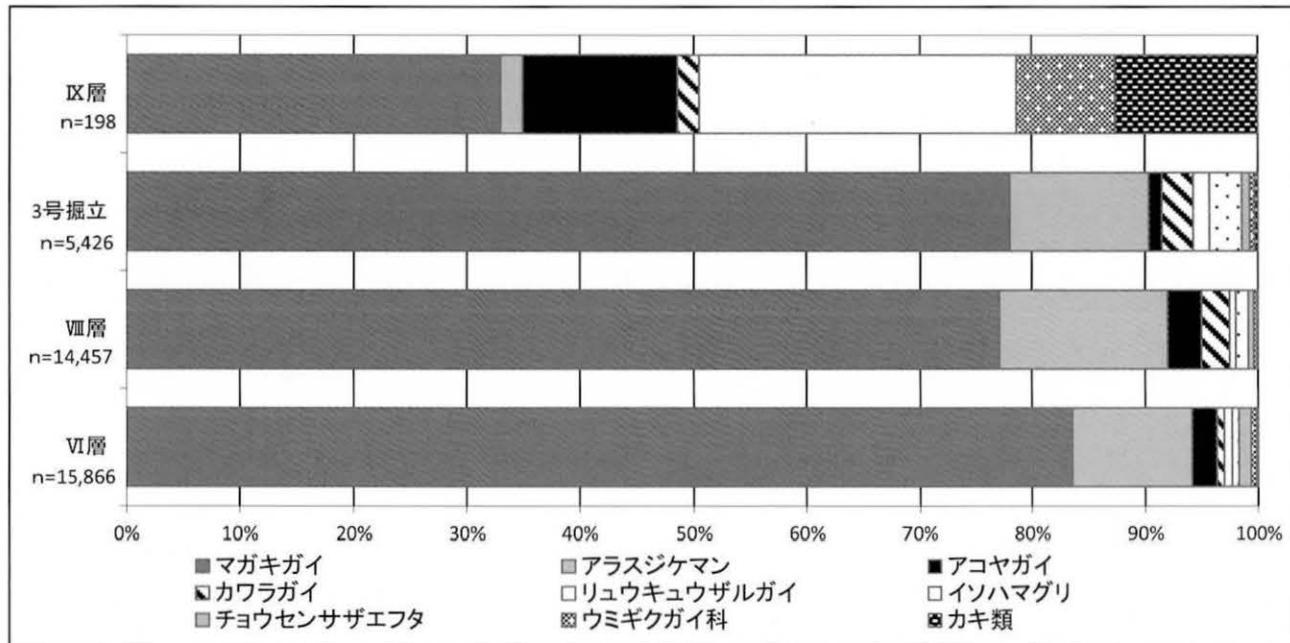
## 出土状況

II地区からは発掘面積約488m<sup>2</sup>から巻貝類34科140種、二枚貝類21科61種、多板類1科1種の計56科202種、総計22,203個体、総重量約326kgの貝類遺存体が得られている（第16・17表）。

グリッド別の出土状況を第49図に示した。層別にみると全体の出土量ではVI層が8,610個体、VIII層が8,137個体で、VI層ではD-39、C-35とD-35からの出土量が多く、VIII層ではD-39グリッドから半数近くが出土している。

次に貝の種別での出土量についてみてみると、IX～X層、XI～XIV層ではII地区の北側のグリッドでわずかにみられたのみで発掘面積も少なく、得られた貝類遺存体はIX層から188個体でX層～XIV層からは出土していない。

VI層、VIII層、グスク時代初頭の遺構である第3号掘立柱建物跡から出土した貝類遺存体の出土状況を第49図に示した。どちらもマガキガイが圧倒的に多く、アラスジケマンガイが続き、上位2種でVI層・VIII層では80%を超える。3号掘立柱でも69%の高い優先率を示しており、この2種に対する選択性が読み取れる。3位以下ではVI層はアコヤガイ（ベニコチョウガイ）・チョウセンサザエ・リュウキュウウザルガイ、VIII層ではアコヤガイ（ベニコチョウガイ）・カワラガイ・イソハマグリ、3号掘立柱ではイソハマグリ・カワラガイ・リュウキュウウザルボウと続く。次に生息地別に見てみるとやはりマガキガイの出土量によりI-2（外洋サンゴ礁域のイノー）が圧倒的でIII-1（河口干潟・マングローブ域の潮間帯中・下部）、II-1（内湾・転石地域の潮間帯中・下部）・II-2（内湾・転石地域の亜潮間帯上縁部）が続く。前田原貝塚の遺跡集団はイノーからマガキガイを河口干潟からアラスジケマンガイを集中的に採取し、内湾・転石地域からカワラガイやリュウキュウウザルガイなどの二枚貝を主に採取していたようである。



第49図 II地区出土貝種組成

## 体長組成

マガキガイ、アラスジケマンガイ、イソハマグリ、シャコガイ類についてはその体長の計測を行なった。マガキガイはその殻長・殻幅、アラスジケマンガイは殻高・殻頂を計測し、VI層・VIII層・3号掘立柱ごとにグラフを作成した。イソハマグリ・シャコガイ類についてはその完形貝の出土量の少な

さからグラフを作るに至らなかったがイソハマグリでは殻高1.7~1.8cm、殻長2.2cmが多く、シャコガイ類では殻高10cm以下、殻長15cm以下の小さい個体が多く出土していた。

マガキガイは（第50・51図）殻長ではVI層・VIII層とも4.9~5.1cmが最頻値を示しており、3号掘立柱では4.9~5.1cmと4.3~4.5cmの両方に山があり、ややバラつきがあるようである。殻幅では各層・遺構とも2.8~3.1cmに最頻値を持っている。

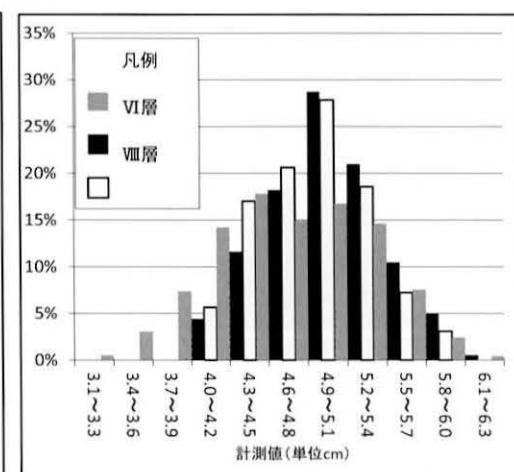
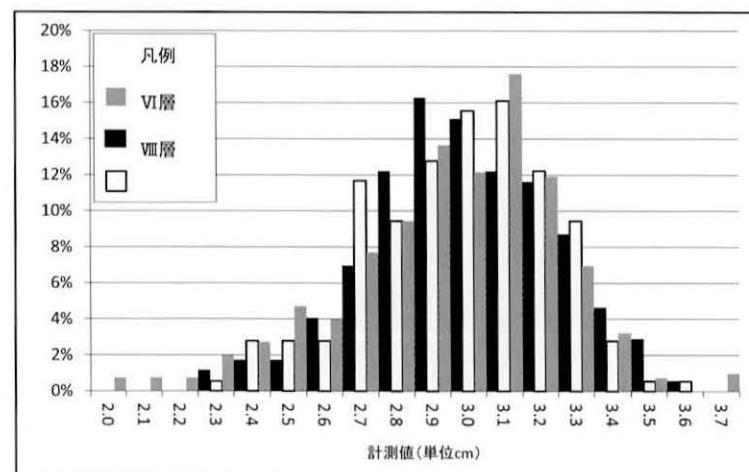
アラスジケマンガイにおいては（第52・53図）、殻高では各層・遺構とも2.7~2.9cmに最頻値を持っており、殻長ではVIII層・3号掘立柱では3.0~3.2cmに最頻値を持っているがVI層では少し大きい3.3~3.5cmに最頻値を持っている。いずれも典型的な山型分布を描いている。

この2種について、計測が行われているほかの遺跡との比較を行ってみると、マガキガイにおいては渡喜仁浜原貝塚の資料（今帰仁村教委1977）よりやや小さく、アラスジケマンガイにおいては渡喜仁浜原貝塚の資料（今帰仁村教委1977）と同程度で今帰仁城跡の資料（黒住1991）よりやや大きいといえる。

## 小結

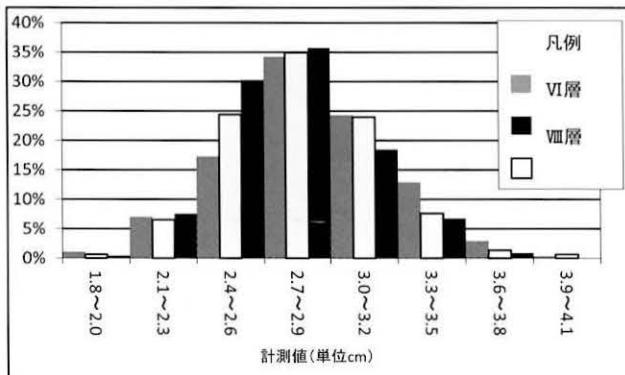
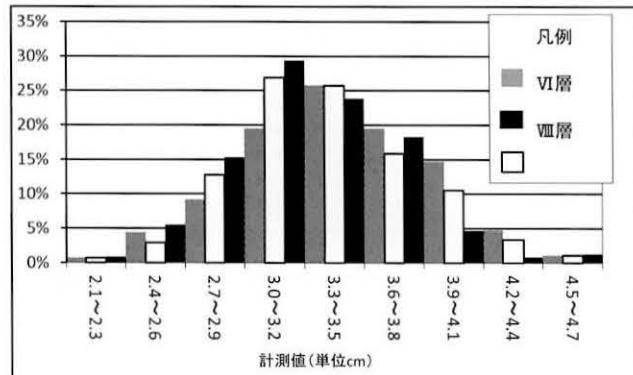
以上、前田原貝塚の貝類遺存体の特徴について記述した。出土状況ではD-39グリットが最も出土量が多く、貝の種では各グリット・層序・遺構ともマガキガイが圧倒的で、アラスジケマンガイがこれに続き、イノーや河口干潟からこれらの種を優先的に選択し、採取していたことが窺われた。

また、マガキガイ・アラスジケマンガイにおいては体長を計測し、グラフを作成した。貝類遺存体の体長の組成は時期によって違いがあることが指摘されているが（沖縄県教委1996）、今回のVI層・VIII層・3号掘立柱からは多少の違いはあるものの明瞭なサイズの変化は読み取れなかった。他遺跡との比較においてはマガキガイにおいては渡喜仁浜原貝塚の資料よりやや小さく、アラスジケマンガイにおいては今帰仁城跡の資料よりやや大きいという結果を得た。



第50図 マガキガイ殻幅度数分布

第51図 マガキガイ殻高度数分布



第52図 アラスジケマンガイ殻長度数分布

第53図 アラスジケマンガイ殻高度数分布

第16表 Ⅱ 地区出土貝類集計表 (1)

第17表 II 地区出土貝類集計表 (2)

番号	科名	種名	生長期	VI層				IV層				III層				II層				I層				底層				計								
				L	H	R	S	L	H	R	S	L	H	R	S	L	H	R	S	L	H	R	S	L	H	R	S	重量(g)	個体数							
142	エガイ科	エガイ	1-2-a	1	2			18				1	2			3				1	1			17	2			30	5							
143	エガイ科	エガイ	2-2-a		2	1		16	2			1	1	26	1					1	1			3	1			1	1	46	5					
144	オオタノハガイ科	オオタノハガイ	1-2-a		1	1	24	1																				24	1							
145	オオタノハガイ科	オオタノハガイ	2-1-a	7	1	1		22	8	2	3	1	2	32	3				1	1	2	2	23	3			21	4								
146	フタガイ科	フタガイ	2-1-a		8	2		14	2	3	1	2	14	2					2	3	1	1	1	1			120	1								
147	フタガイ科	フタガイ	2-2-a		2	1	3	12	3	4	1	2	14	2				2	3	2	1	1	1			29	4									
148	フニカガイ科	フニカガイ	1-2-a		2	1	3	12	3	4	1	2	14	2				2	3	2	1	14	5			45	17									
149	リッカウツササガ科	リッカウツササガ	2-2-a	22	23	30	27	263	3618	52	32	42	16	8	103	268	50	2	2	2	4	6	30	2938	48	3	2	2	4	253	5					
150	タマギガイ科	タマギガイ	2-2-a	22	23	30	27	263	3618	52	32	42	16	8	103	268	50	2	2	2	4	6	30	2938	48	3	2	2	4	253	5					
151	タマギガイ科	タマギガイ	2-2-a	22	23	30	27	263	3618	52	32	42	16	8	103	268	50	2	2	2	4	6	30	2938	48	3	2	2	4	253	5					
152	タマギガイ科	タマギガイ	2-2-a	22	23	30	27	263	3618	52	32	42	16	8	103	268	50	2	2	2	4	6	30	2938	48	3	2	2	4	253	5					
153	イガイ科	イガイ	2-2-a	1	1	2	3	24	4			1	1	17	1																					
154	イガイ科	イガイ	2-2-a		1	1	2	3	24	4			1	1	17	1																				
155	クラッカガイ科	クラッカガイ	1-2-a	8	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12									
156	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
157	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
158	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
159	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
160	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
161	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
162	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
163	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
164	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
165	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
166	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
167	アコガイ科	アコガイ	2-2-a	6	14	144	158	2	1844	177	3	10	218	182	2267	227	1	14	6	130	14	4	8	3	4	71	12	2	2	2	3	55	11			
168	オオヒガイ科	オオヒガイ	1-2-a	1	1			1	1			1	1			1				1	1			1	1			1	1			1	1			
169	オオヒガイ科	オオヒガイ	2-2-a	1	1			1	1			1	1			1				1	1			1	1			1	1			1	1			
170	オオヒガイ科	オオヒガイ	2-2-a	8	5	45	36	137	849	31	42	49	121	139	134	2633	188	1	1	2	2	29	2	1	1	2	5	4	54	6	3	2	1	2	8	124
171	オオヒガイ科	オオヒガイ	2-2-a	8	5	45	36	137	849	31	42	49	121	139	134	2633	188	1	1	2	2	29	2	1	1	2	5	4	54	6	3	2	1	2	8	124
172	オオヒガイ科	オオヒガイ	2-2-a	8	5	45	36	137	849	31	42	49	121	139	134	2633																				

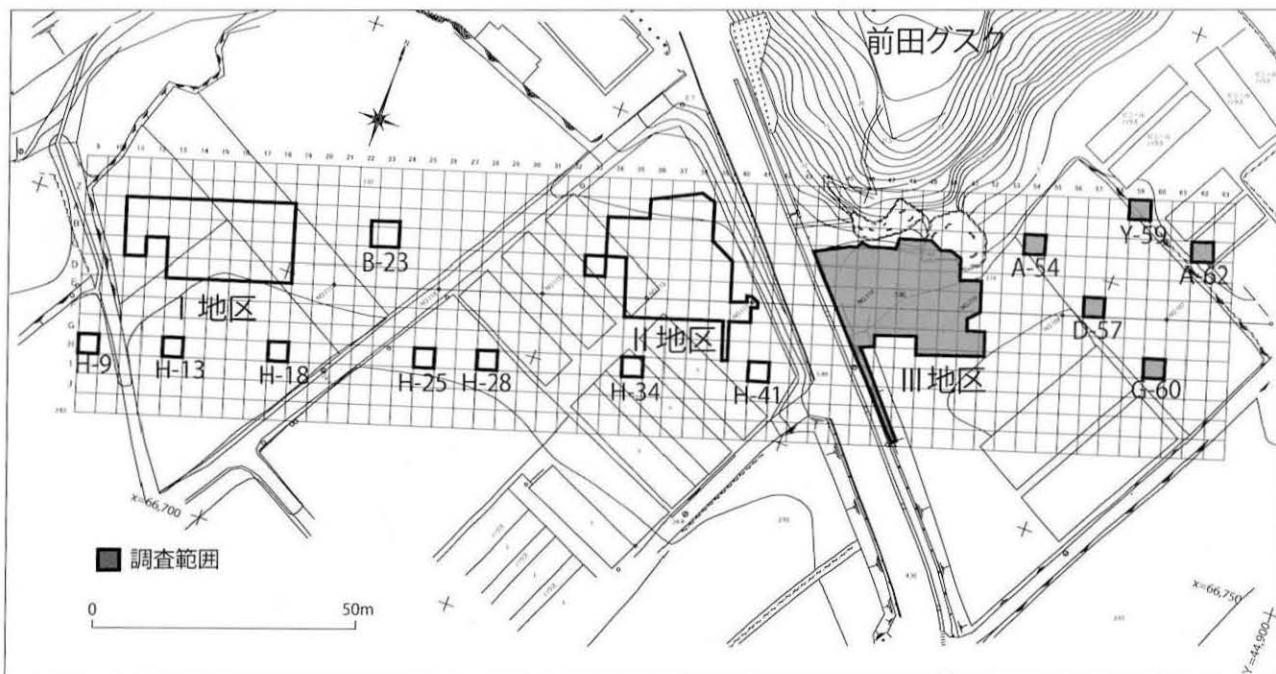
# 第VI章 III地区の調査報告

## 第1節 層序と遺構

### 1. はじめに

屋部前田貝塚の発掘調査対象地が広範囲にわたることから、調査対象地を分断する県道117号線（名護運天港線）とそれに連結する農道を境に便宜上3地区に区分し調査を行なった。III地区は、屋部422-1番地・ほかを調査対象地とする。

試掘調査によってC-46・C-49グリッドで比較的良好な遺物包含層が確認されたことから、平成16年度より当該グリッド周辺を拡大して調査を行った。



第54図 III地区調査箇所位置図

### 2. 層序

今回III地区の調査で確認した層は基本的に5層で、上から順にI、II層・・・と名づけた。各層は全体的に北西から南東へと傾斜して土層が堆積している。（第55図）

I層：表土層・耕作（暗褐色混礫土：Hue10YR3/3）　褐色土に明褐色を呈する赤土や黄褐色を呈するシルト質土が混入する。近・現代の造成によって持ち込まれたと思われる土である。多数の土器・石器とともにガラス製品・陶磁器・瓦類・プラスチック・金属など後世の遺物が出土する。

II層：遺物包含層（褐色混礫土層：Hue2.5Y4/6）　褐色を呈する混礫土で、1～3cm大の礫が混入する。I層の造成土が持ち込まれる前の表土を成すと思われる土で、場所によってはI層に大きく切

り込まれている。貝塚時代中期の土器を主体に後期の土器や、I・II地区でみられたカムィヤキや玉縁白磁（陶磁器類）などの出土もみられる。

III層：遺物包含層（暗褐色混礫土層：Hue10YR3/4） 暗褐色を呈する混砂土層で、貝塚時代中期の遺物を包含する。上位面に20cm大の礫が帶状に堆積するが、小礫の混入はII層に比べると若干少ない。III層の上位面においては若干II層と混じるようであった。

IV層：遺物包含層（暗褐色混礫土層：Hue7.5YR3/4） 暗褐色土に若干の褐色砂や円礫などを含む。貝塚時代前期後半から中期にかけての土器の出土。主にC-48、D-48、D-49グリッド周辺にまたがって堆積する。

V層：地山（褐色砂層：Hue2.5Y4/6） 褐色を呈する砂層で上部にわずかに土器片などを伴うが、その下はほとんど無遺物である。水が湧き出してくれる地点ではオリーブ褐色を呈する。なお、A～B地区の崖側へり付近において黄褐色を呈する砂が出土する。そこから土器及び獸魚骨類などの出土もあるが、これが地山かどうかは今のところ保留している。

### 3. 遺構

III地区からは炉跡、石組遺構、埋葬人骨、土坑などが確認された。炉跡はII層に掘り込まれ、石組遺構・土坑はIII層にて検出された。なおIII層上面において礫が帶状に分布するため、散礫状況を第56図に図示した。礫の堆積状況が自然のものなのか人為的なものなのかは現時点では不明である。以下各々について概略する。

#### （1）石組遺構

III層上面において確認された帶状の散礫を掘り進めると、方形の石組遺構が検出された、これらの石組遺構の幾つかは、竪穴住居跡と考えられる。5基確認されており以下個別の遺構について紹介する（第56・57図）。

##### ①第1号石組遺構（第58図）

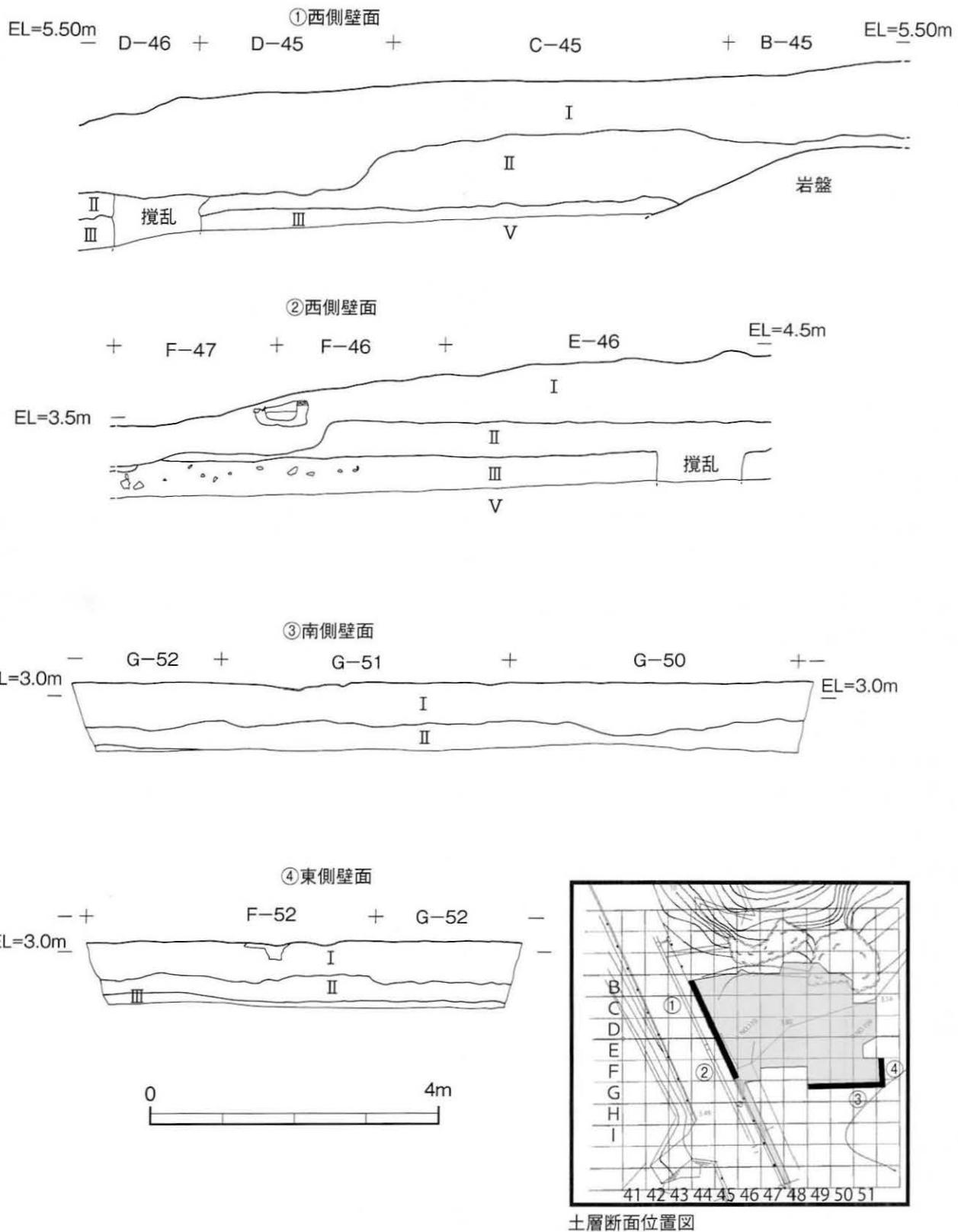
A・B-48グリットにおいて検出された石組遺構である。30cm大の石が台形状に並び、その中に10～15cmほどのこぶし大の石が間を埋めるようにあった。石組は比較的整然としている。炉跡は検出されなかった。

##### ②第2号石組遺構（第59図）

A・B-48・49グリットにおいて検出された石組遺構である。第1号石組遺構を40cmほど掘り下げたところで検出された。20～50cm大の石がコの字形に並び、周囲にこぶし大の石が散在する。石組は比較的整然としている。炉跡は検出されなかった。

##### ③第3号石組遺構（第60図）

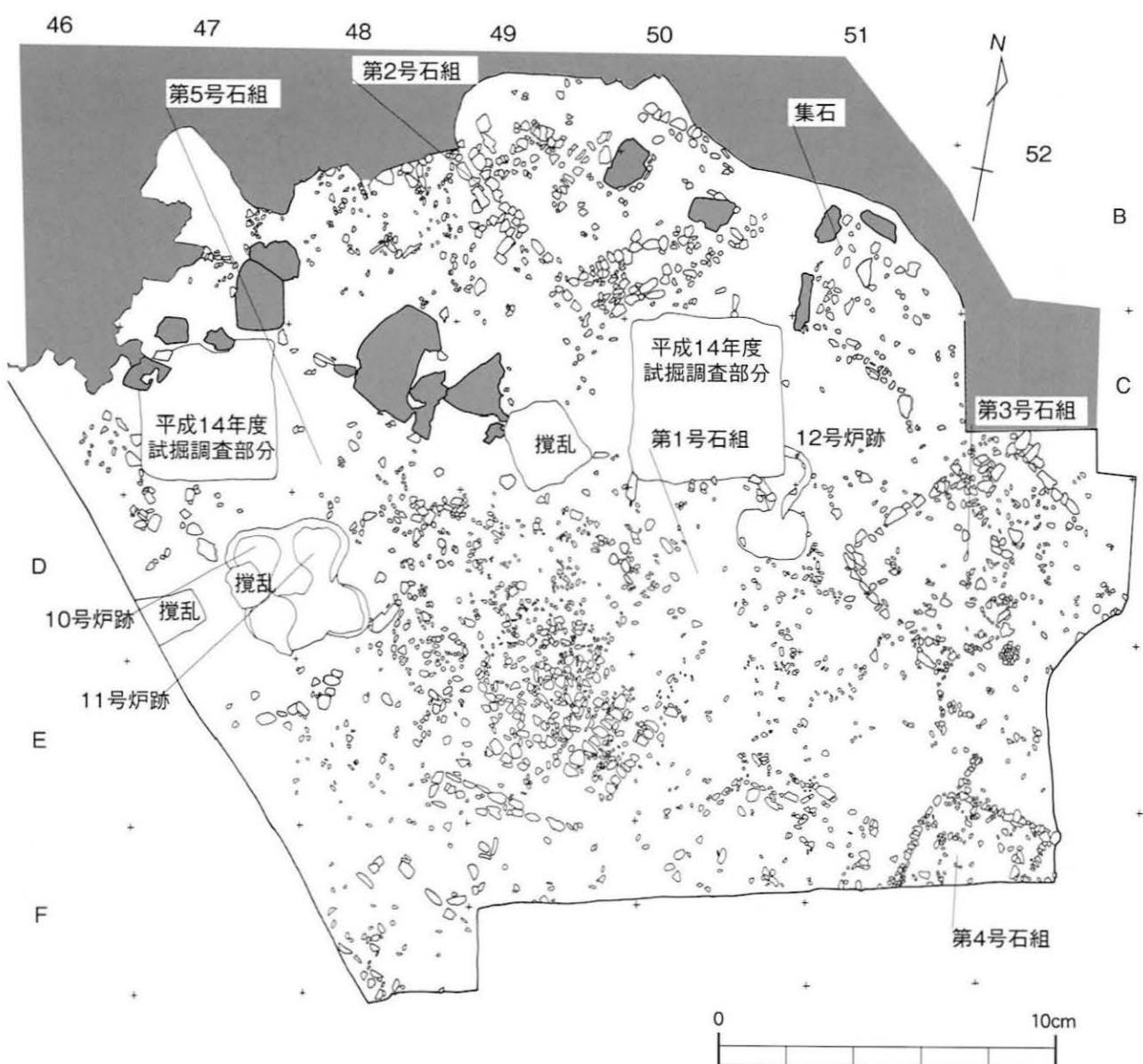
D-50・51グリットにおいて検出された石組遺構である。30cm大の石が整然と並び周囲には大小様々な大きさの礫が散在する。南東側の石組が崩れているため全体の形状は完全には把握出来ないが、平面観は長方形を呈すると思われる。西側は南北に約5.2m、北側は東西に約2.6m、南側は東西に約3.5mを測る。炉跡は検出されなかった。



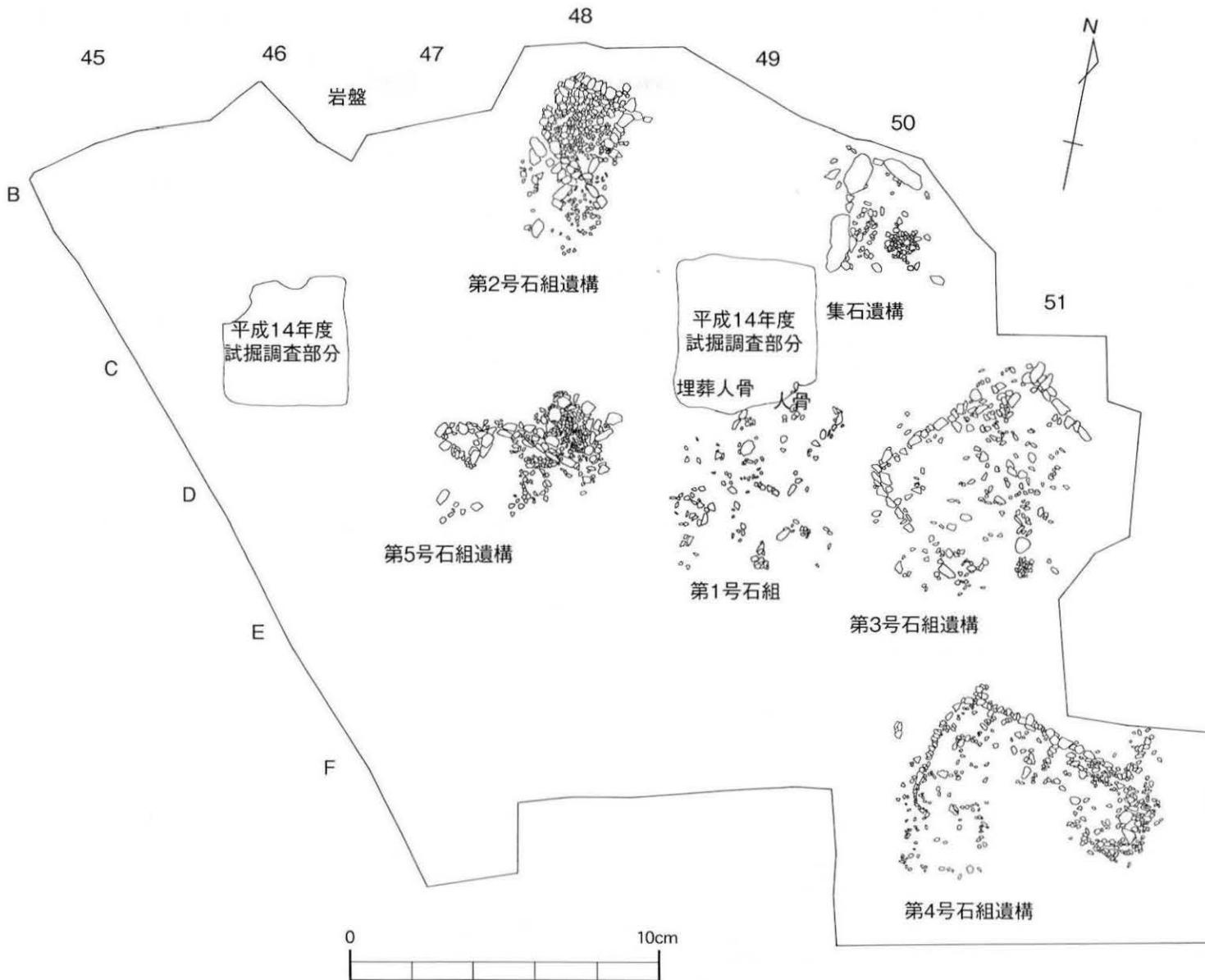
第55図 III地区土層断面図（任意）

#### ④第4号石組遺構（第61図）

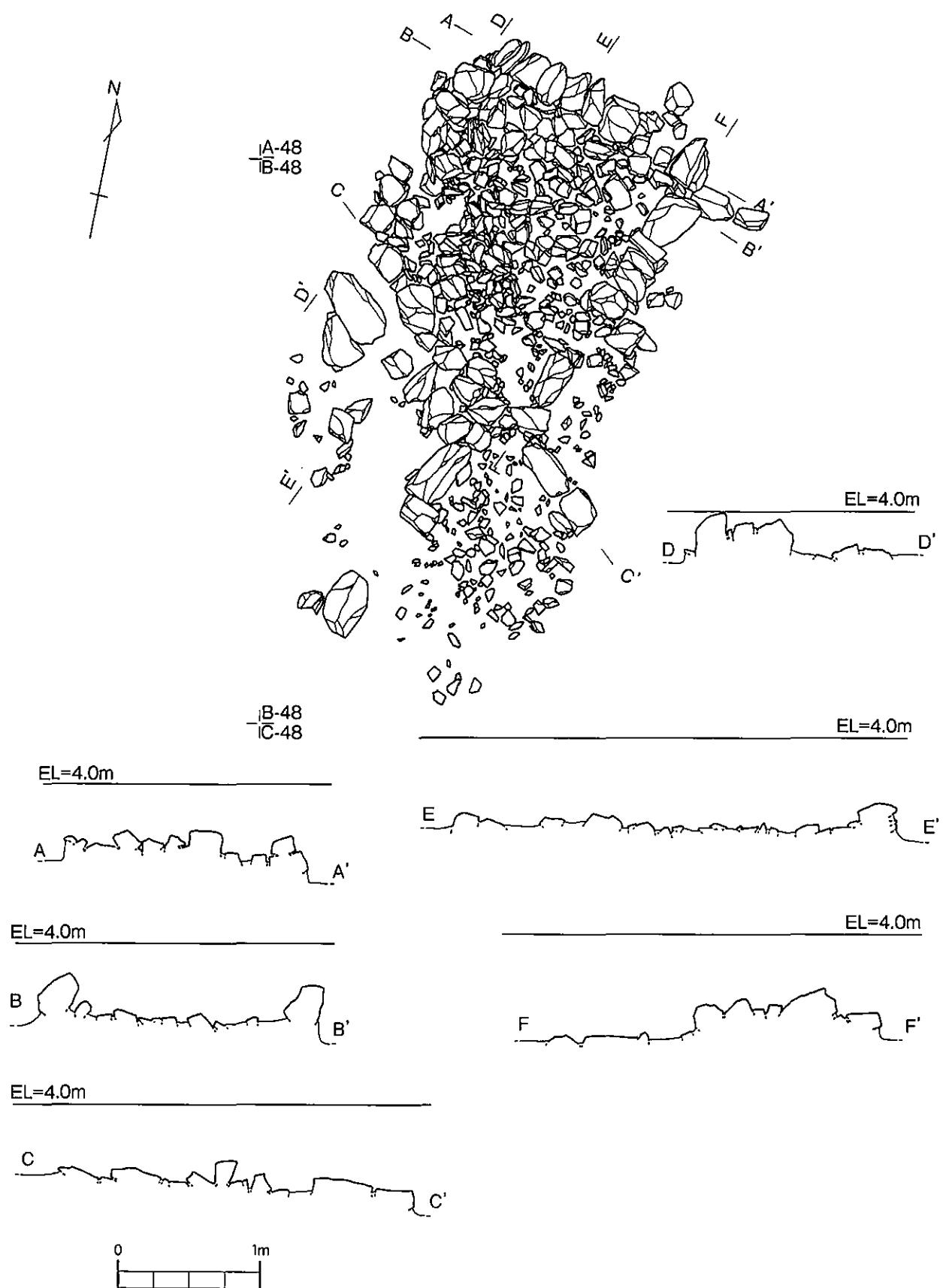
E-50、F-51グリッドにおいて検出された石組遺構である。東及び南側の石組が崩れているため全体の形状は把握できないが、平面觀は長方形を呈すると思われる。西側は南北に約3m、北側は東西に約4.7mを測る。炉跡は検出されなかった。なお当遺構は時間上の都合により遺構を露呈させる程度で終了した。



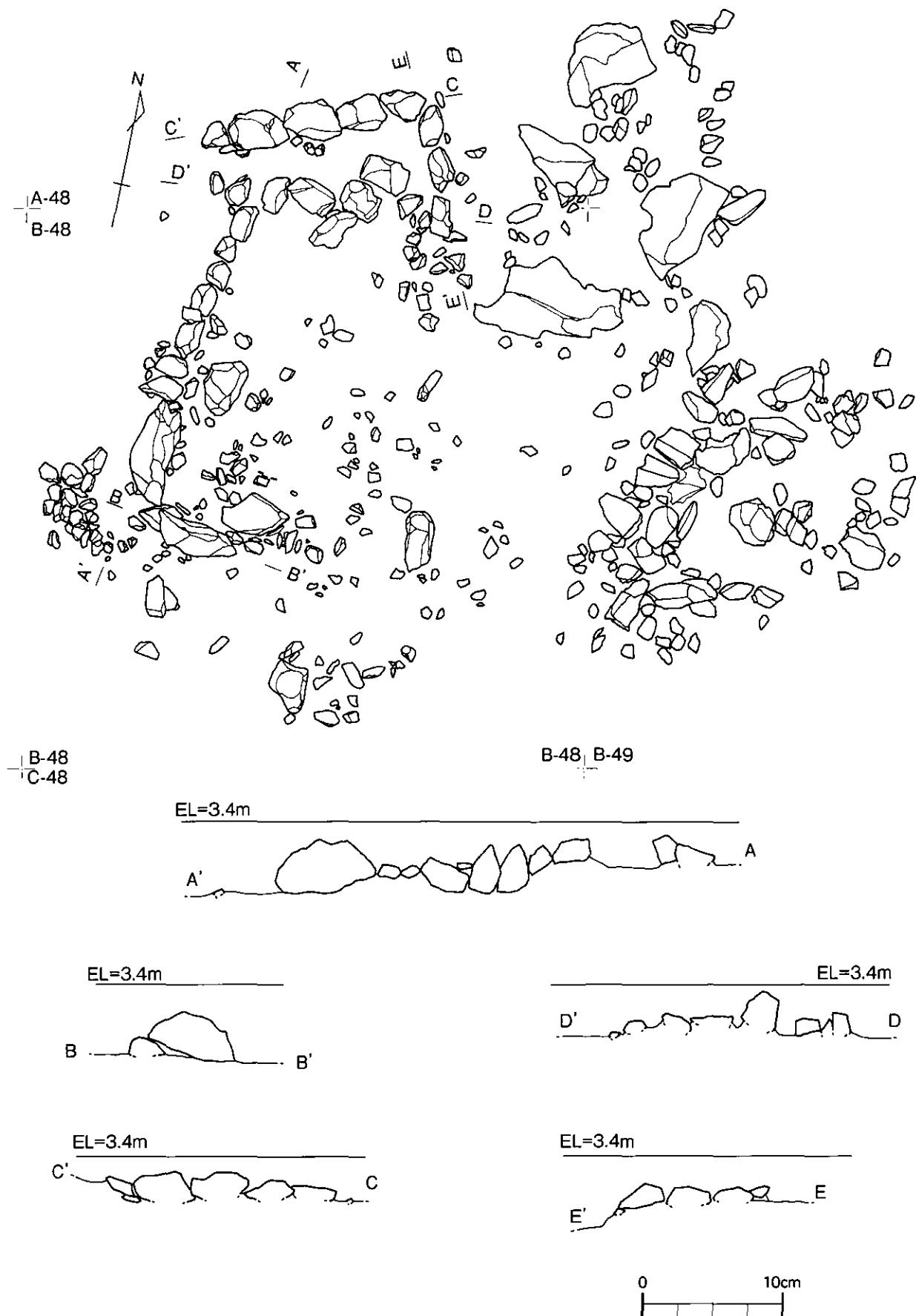
第56図 遺構配置図・Ⅲ層上面散櫟状況(縮尺 任意)



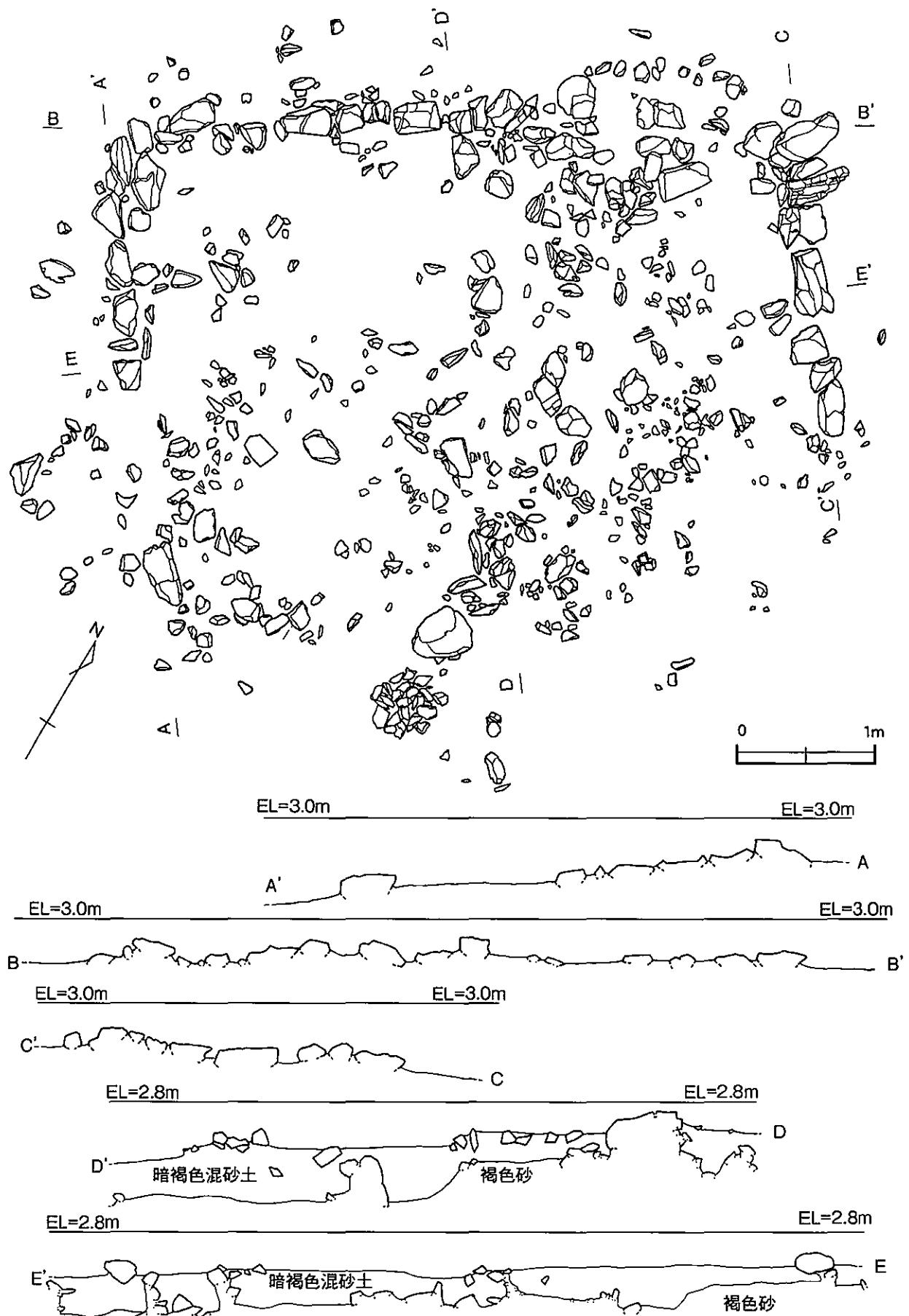
第57図 石組遺構出土状況(縮尺 任意)



第58図 第1号石組遺構(S=1/40)



第59図 第2号石組遺構 (S=1/40)



第60図 第3号石組遺構(S=1/40)

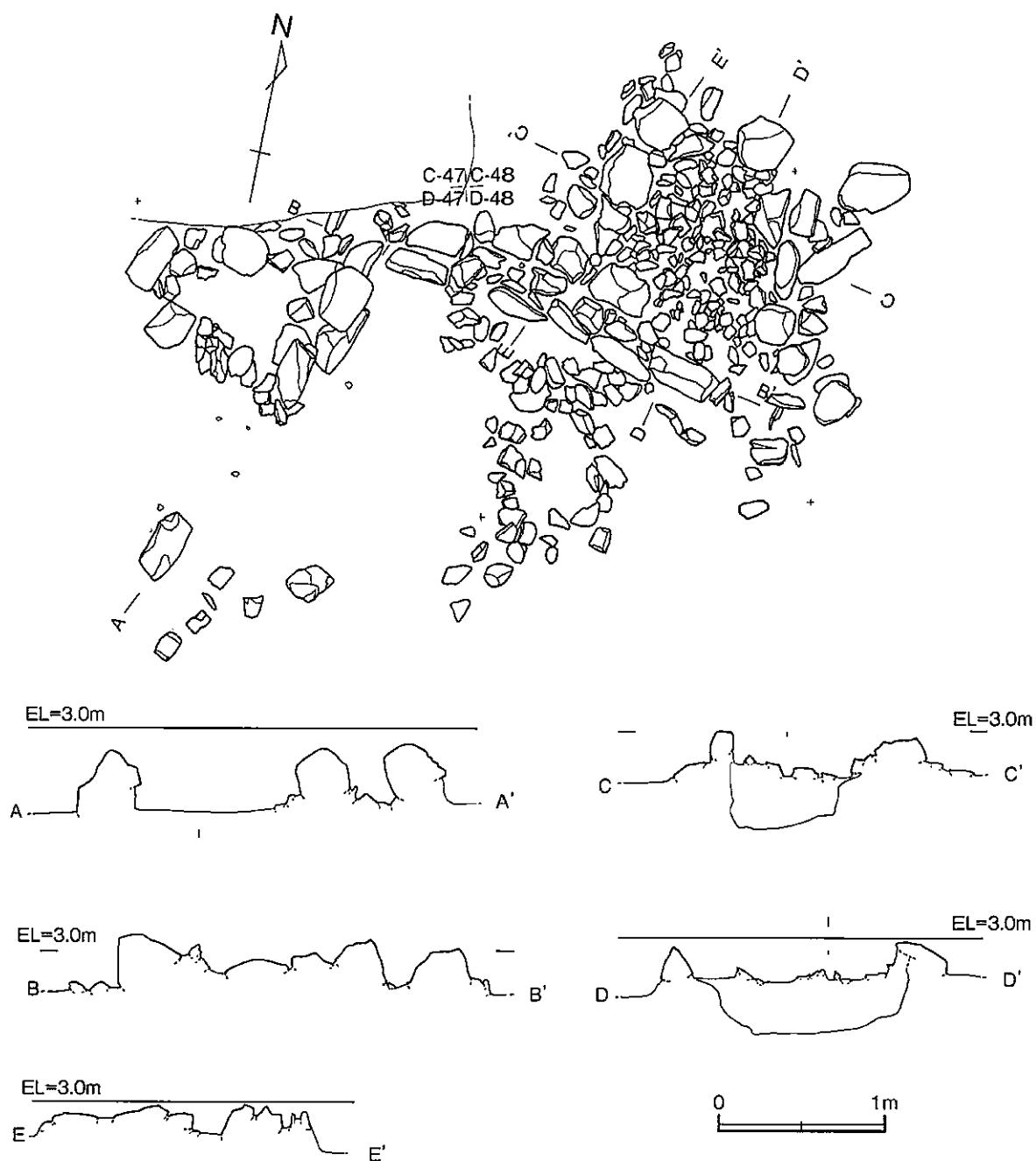


第61図 第4号石組遺構 (S=1/40)

##### ⑤第5号石組遺構（第62図）

イ D-47グリッドにおいて検出された石組遺構である。北側が未発掘のため形状ははっきりとはしないが、30cmほどの大石を方形に配置している。石組は比較的整然としており、一边が約1.3mを測る。

ロ D-48グリッドにおいて検出された石組（集石）遺構である。30cmほどの大石を方形に配置し、こぶし大の礫で構成される。南北に約1.8m、東西に約1.9mを測る。石組は比較的整然としている。礫を取り除いたあと、長軸1.3m、短軸0.8mの略楕円形状の土坑が検出された。V層の褐色砂に約30cm掘り込まれている。



第62図 第5号石組遺構平面図及び断面図 (S=1/40)

## (2) 集石遺構 (第63図)

B-50グリッドにおいて集石遺構が検出されている。幅約90cmの範囲に15cmほどの礫が集中する。石の配置には特に規則性は見受けられなかった。集石のすぐ西側の土がややまわりよりも濃い暗褐色土を呈していたため土坑の可能性もあるかと思われる。

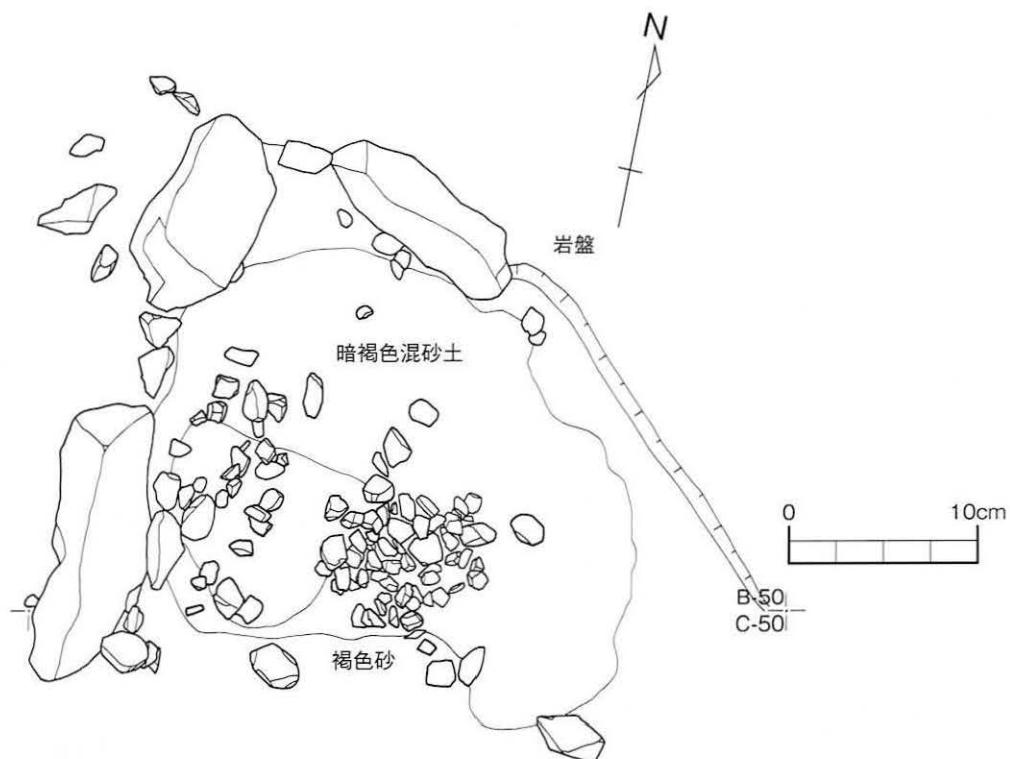
なお、当遺構は時間的な都合により遺構の表面を露呈させる程度で終了している。土器のほか、イノシシ骨が出土している。

## (3) 埋葬址 (第64・65図)

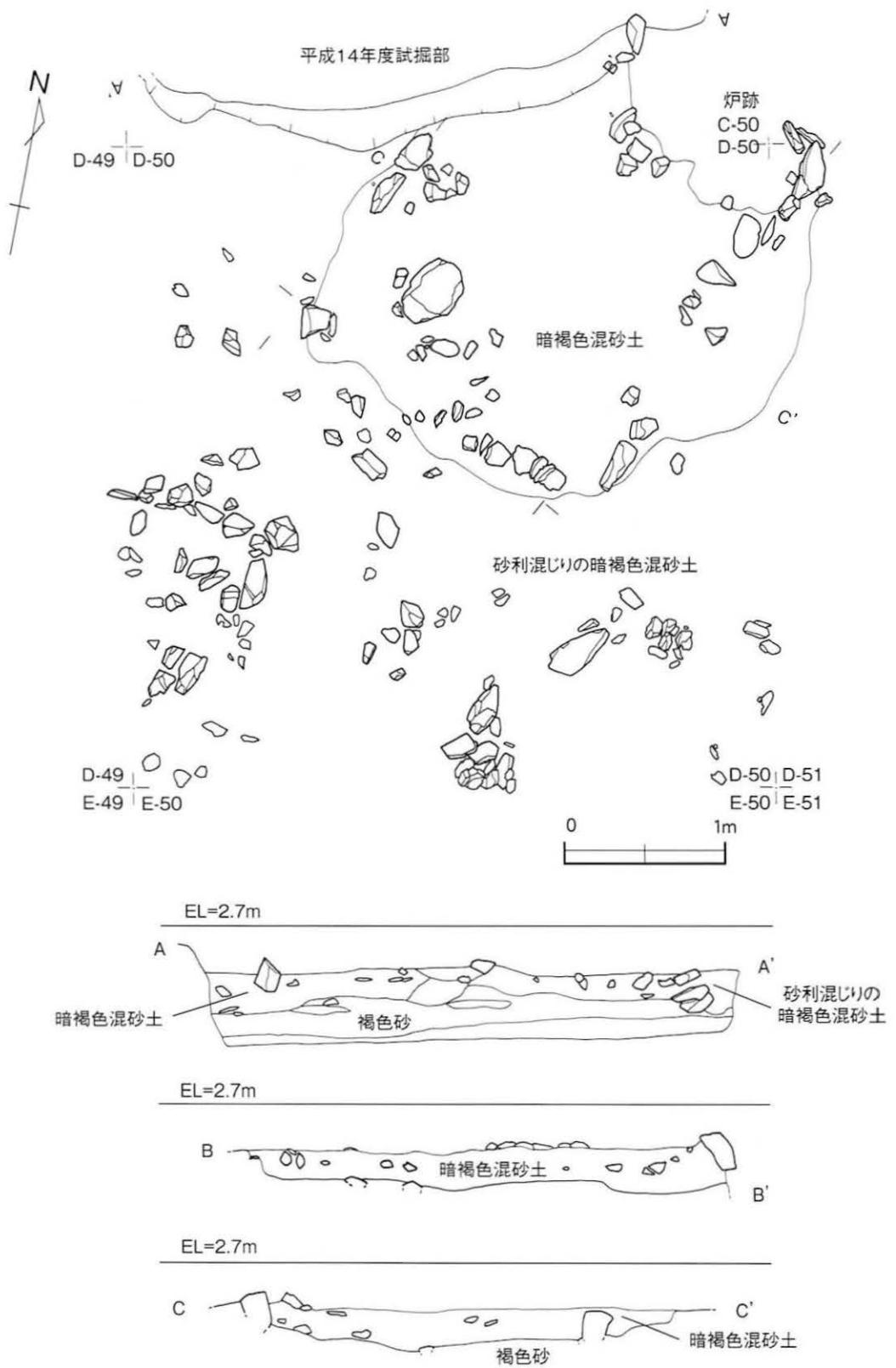
D-49グリッドにて検出された石組遺構は、遺構検出前に礫が散在している状態であった。北側は14年度の範囲確認の際に、北東側も第2号炉跡にて破壊されているが、石組遺構はおおむね隅丸方形を呈していたと思われる。遺構はⅢ層下からⅣ層にかけて掘り込まれている。残存部のみでみると最大で東西で約2.8m、南北で2.7mを測る。掘り込みに沿うように石組が検出されたがその配置は乱れ、かつまばらである。

人骨は頭部を南西方向に向け、身体は仰向け、両膝を「くの字」に折り左方向に倒した状態で検出された。人骨の配置はだいぶ押しつぶされてはいるが相互の位置関係はおおむね正常に保たれていた。頭蓋骨と左上腕骨部は欠失しており、何らかの意図があったかについては現時点では判然としない。人骨とりあげ後30cmほど掘り下げたところで遺構の床面が検出された。副葬品などの出土は認められない。

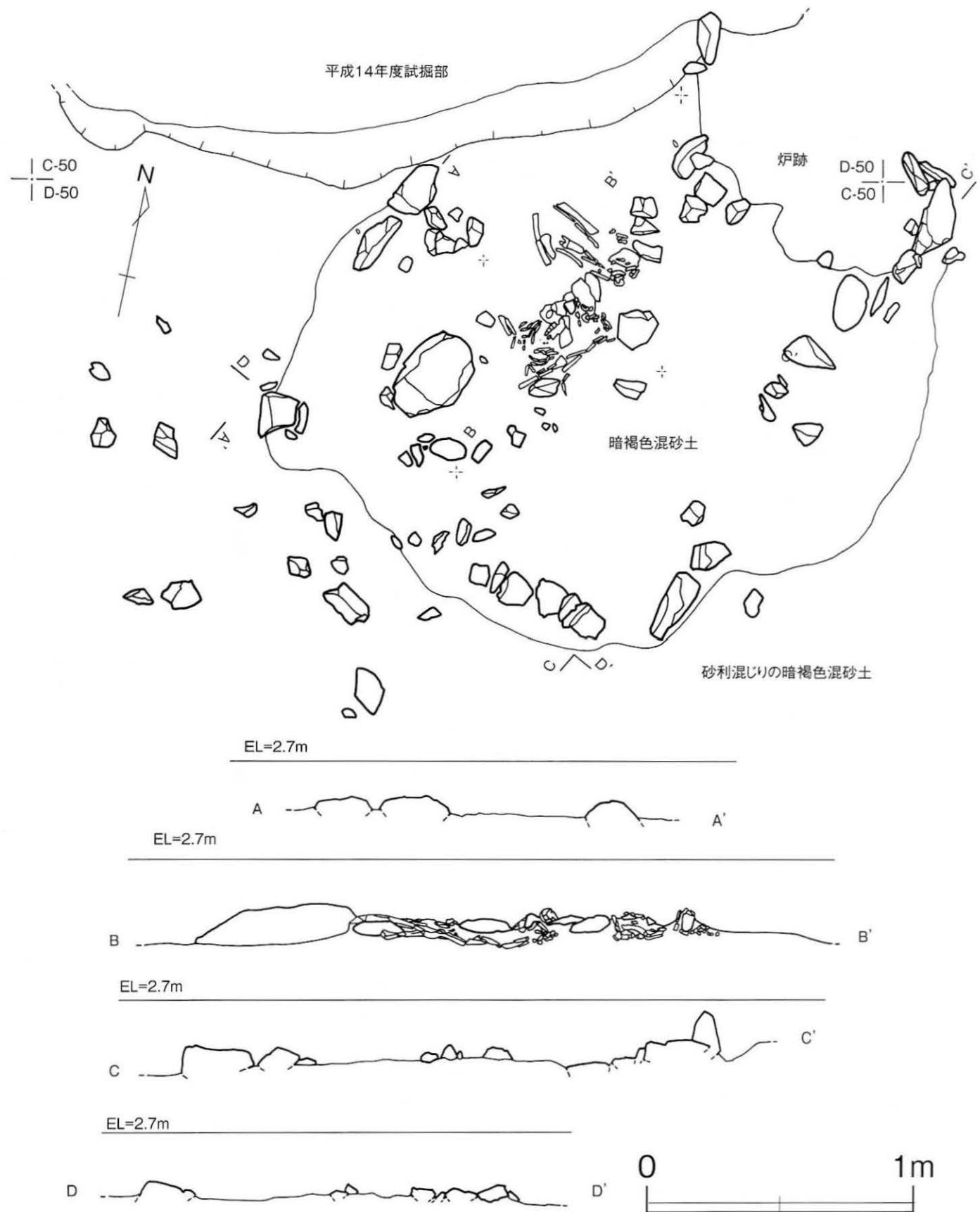
これらの人骨については鹿児島女子短大の竹中正巳氏に現地で臨検していただき、発掘調査終了後は琉球大学の土肥居直美氏に詳細な分析を依頼した(第VIII章第2節)。



第63図 集積遺構平面図(S=1/40)



第64図 埋葬人骨出土状況(1) (S=1/40)



第65図 埋葬人骨出土状況(2)(S=1/20)

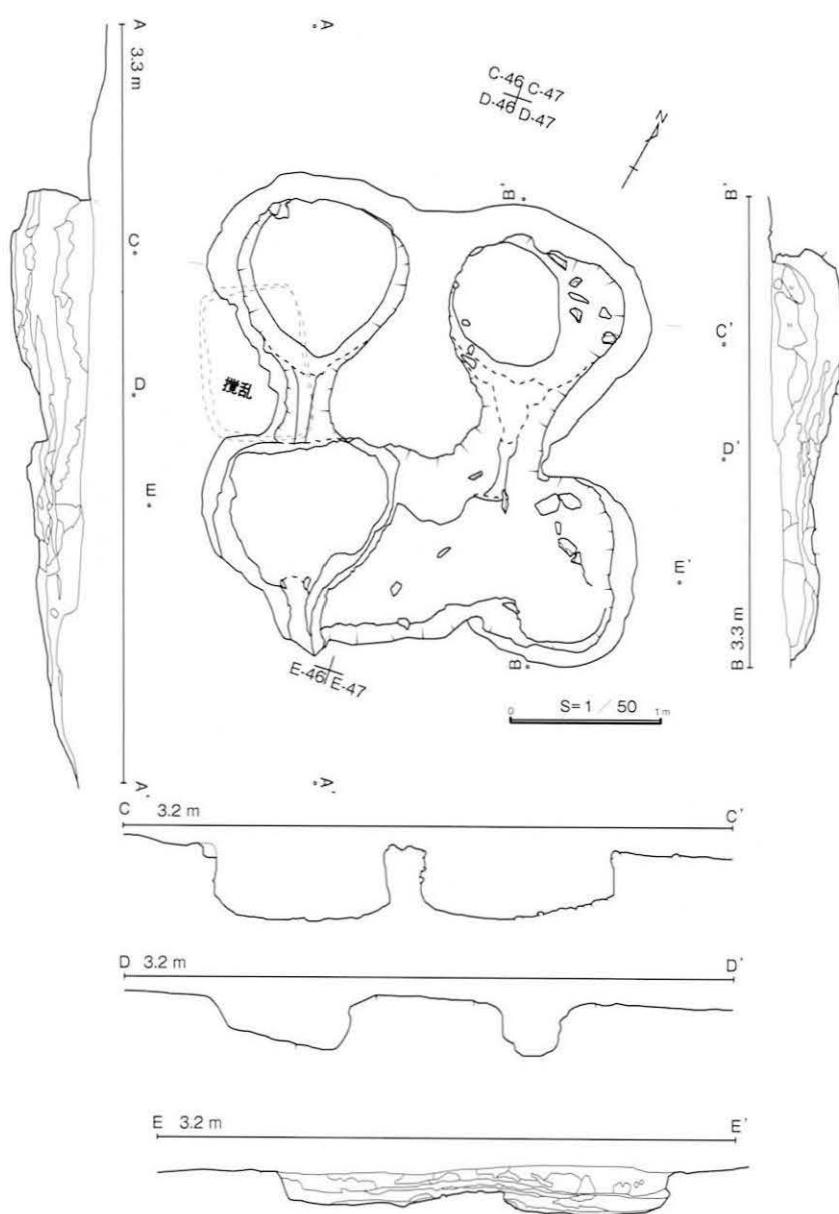
#### (4) 炉跡

Ⅱ地区でも見られた近世期に構築されたと考えられる炉跡である。第66図にD-49・50グリッドにおいて検出された第10・11号炉跡を図化した、D-46・47グリッドにおいても12号炉跡が検出されている。

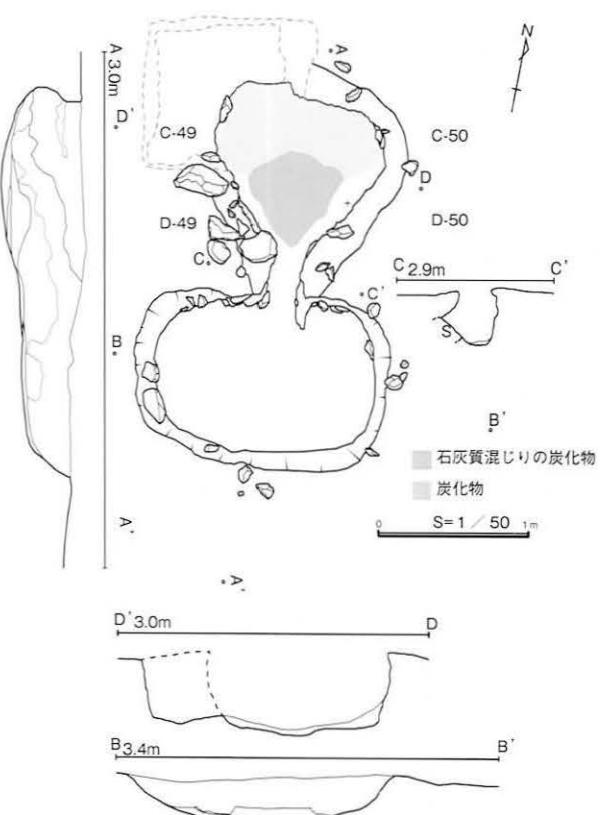
第18表 Ⅲ地区炉跡サイズ一覧

単位:cm

	焼成室	焚口		作業土坑			
		長軸 (a)	短軸 (b)	長軸 (c)	短軸 (d)	長軸 (e)	短軸 (f)
10号炉	左室	115	110	45	25		
11号炉	右室	115	110	45	35	280	110
12号炉	単室	110	110	35	30	165	115
							30



第66図 10・11号炉跡



第67図 12号炉跡

## 第2節 出土遺物

Ⅲ地区からは、土器、石器、陶磁器、カムイヤキなどの遺物が出土している（第19表）。以下個別の資料について報告する。

第19表 Ⅲ地区出土遺物集計表

種別 層序	土器				石器	カムイヤキ				白磁	貝製品	骨製品	
	口 縁	胴 部	底 部	小 計		口 縁	胴 部	底 部	小 計				
不明 搅乱	61			61	49			1	1	2	1		
I層	56			56	40			11	1	12	2	1	
II層	243			243	90		2	12	2	16	1		
III層	1336			1336	233			2		2		3	
IV層	28			28	12								
V層	93			93	20								
計	1817	※	※	1817	444		2	26	3	31	5	2	3

※集計を省略

### 1. 土器

屋部前田原貝塚Ⅲ地区出土土器は、高宮暫定編年前IV期末～前V期に相当もしくはそれに準ずる土器群が中心となっている（第20表）。本報告では、土器を主に口縁部の形態・文様・器形等の諸特徴を基準に分類を試みた。

第20表 出土土器一覧

形 式 名 層 序	I群		II群				III群	IV群			VII群		計							
	1 類	2 類	1 類	2 類	3 類	4 類		1 類	2 類	3 類										
	伊 波 ・ 大 山 式	大 山 式	カ ヤ ウ チ バ ン タ 式	室 川 式	室 川 上 層 式	宇 佐 浜 式	仲 原 式	面 繩 西 洞 式	喜 念 I 式	奄 美 系	前 期 系 土 器	後 期 系 土 器								
			有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文						
不明	2	2		1	20	24		2	5		1	2	1	1	61					
I層	2		1		13	15		2	2	9		8	1		2	1	56			
II層	6		3	6	51	67	2	6	19	44	1	18	2	1	3	11	1	243		
III層	20	26	36	30	299	335	27	29	101	230	4	109	11	27	2	21	26	1	2	1336
IV層	2	2		1	4	12	1	1		3		1					1		28	
V層	7		3	3	20	27	2	1	7	11		7		4			1		93	
計	39	32	43	41	407	480	32	39	131	302	5	144	14	33	3	25	40	4	3	1817

### 1) 第Ⅰ群土器

第68図は伊波式土器、荻堂式土器、大山式土器などの高宮暫定編年前IV期を代表する土器群の範疇で捉えることのできるものである。本地区から出土したⅠ群土器は小破片が多く、器形からの型式判断が困難なものが多い。そのような場合は、文様の観察によって型式判断を行なった。

1類（3001～3014）：伊波式土器あるいは荻堂式土器の範疇で捉えることのできる土器である。得られた資料の多くが小破片のため文様による型式断定が困難なものが多い。

2類（3015～3027）：いわゆる大山式である。横捺刻文のみを施すものに他に、横捺刻文と凹線文や突帯文を組み合わせるものなどもみられる。

### 2) 第Ⅱ群土器

第69図から78図は高宮暫定編年前IV期からV期にみられるいわゆる肥厚口縁土器の一群で、Ⅲ地区の主体的な土器群である。肥厚形態の特徴から次の5類に大別した。なお、分類の2類の室川式土器と3類の宇佐浜式土器が大半を占めていることから、本地区は高宮暫定編年前IV期末から前V期にかけて盛行したものと考えられる。無文土器が圧倒的に多い。

1類（3028～3048）：口縁部が植木鉢状に肥厚するタイプで、いわゆるカヤウチバンタ式土器である。肥厚部の断面観は長方形が大半を占めるが、正方形や上端を強調するものなどもみられる。

2類（3049～3148）：室川式土器またはそれに準ずる土器で、口唇部を誇張するタイプである。口縁部を肥厚させて口唇部を誇張するものが大半であるが、口縁部を肥厚させずいろいろ屈折させて擬似肥厚を造りだすことで口唇部を誇張させるものもみられる。また、有文資料も含まれ細分が可能と思われるが一括して2類とした。

3類（3149～3166）：器面がポーラス状を呈するいわゆる室川上層式土器である。室川式土器同様、口縁部を肥厚させて口唇部を誇張させる傾向にある。

4類（3167～3208）：いわゆる宇佐浜式土器またはそれに準ずる土器で、口縁部は三角形状あるいはカマボコ状に肥厚する。本資料も有文・無文の別等によって細分可能である。

5類（3209～3148）：1～4類のどの土器型式にも該当しないと思われる土器。及び壺形土器でⅡ群土器に該当すると目される資料。

### 3) 第Ⅲ群土器

第79図は仲原式土器の範疇で捉えることのできる土器群である。無文化が著しくなるが、外耳をつけるものや、沈線文を施すものもみられる。口縁形態は平口縁と山形口縁の両方が確認できたが、口唇部が平坦に成形されるものは少なく、波状を呈するものがほとんどである。また、有段口縁が多くみられる。有段口縁の形状は広義のカヤウチバンタ式口縁や宇佐浜式口縁に近似するが、肥厚が長大化・扁平化し有段部を強調している。

### 4) 第Ⅳ群土器

第80図は奄美地方を中心に分布する土器群で、口縁形態・文様・器形等の特徴から次の3類に分類した。

1類（3230～3245）：面縄西洞式土器または犬田布式土器と思われる土器。口縁部に2条の突帯をめぐらし突帯間を沈線による鋸歯状文や綾杉文などで充填する。犬田布式土器には突帯を3条めぐら

すものもみられる。また、犬田布式土器は口縁上端が肥厚して突帯状またはカマボコ状になる。

2類（3246～3259）：ミミズ腫れ状の細い隆帯を縦・横に非対称に組み合わせて貼り付け、その隆帯に沿って刺突文を施文するもので、いわゆる喜念I式土器である。口縁部はカマボコ状に肥厚する。ミミズ腫れ状の隆帯の代わりに沈線を施し、その両側に刺突文を施すものもみられる。

#### 5) 第V群土器

第81図-3260～3271は高宮暫定編年後期にみられる土器群の範疇に含まれると思われるもの。3261・3262・3263はⅢ群土器の範疇でとらえられるべきものか判断に苦慮する資料だが、ここに含めた。前半期に該当する1類（3260～3270）と後半期に該当する2類（3271）が出土している。

#### 6) 第VI群土器

第83図-3272はグスク土器の範疇に含まれると思われる資料で、石鍋模倣土器の縦耳を付する資料である。

#### 7) 底部

第82図・83図に底部資料を図示した。平底のA種、くびれ平底のB種、丸底のC種、尖底のD種、特殊な土器のE種類、底径の広いいわゆるグスク土器のF種が出土。

A種（3273～3291）は平底土器。底径の大きさや厚み、平底底面からの立ち上がりの形状によって細分可能と考える。

B種（3292～3301）はくびれ平底土器で、底部の厚さと器壁の厚さがほぼ同じもの（3292・3293）と、底部の厚さが器壁に比べて非常に厚く、台状になるもの（3294～3301）がある。また、3295は底面に複数の圧痕が認められる。

C種（3302・3303）は底部が丸みを持ち、立ち上がりが緩やかないわゆる丸底土器と、底部が尖り、立ち上がりが急な尖底（3304～3323）が認められる。端部に厚みがありやや小さな底面を整形するもの（3304・3305）、器壁とほぼ同じ厚さで尖底になるもの（3306～3314）がある。

D種（3315～3323）は乳房状の尖底になるもので、尖底端部が凹み若干中空になるもの（3321～3323）もこれに含めた。

E種（3324～3327）特殊な底部資料、脚台や尖底もしくは丸底の安定をはかるために、その周りに粘土板をめぐらし成形したもの、弥生土器と推される土器底部が出土している。

F種（3328）は広い平底底部資料でいわゆるグスク土器に該当する資料である。なお、3329は、底部として図化したが、胴部と推される。

第21表 III地区土器観察表 (1)

掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	部位	分類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器色	混和材
3001	E-48	III	259.6~252	土器	口縁	I-1	24.0			赤褐色2.5YR4/6	チャート、石英、白色砂粒を含む
3002	A-49	地山の可能性	347.1~342.4	土器	口縁	I-1				赤褐色5YR4/6	石英、チャートの細粒
3003	A-48	III	387.7~378.9	土器	口縁	I-1				にぶい赤褐色5YR4/4	チャート、石英、石灰細粒
3004	C-50	III	271.5~263	土器	口縁	I-1	10.8			暗褐色7.5YR3/3	チャート、石英、石灰細粒
3005	B-50	III	342.5~331.2	土器	口縁	I-1				暗褐色7.5YR3/4	石英、チャート、石灰粒、赤色粒
3006	C-49	III	370.6~365.1	土器	口縁	I-1	19.7			明赤褐色2.5YR5/6	チャート、石英、白色砂粒を含む
3007	A-49	褐色混壁	319.5~308.0	土器	口縁	I-1				褐色7.5YR4/6	チャート、石英、石灰細粒
3008	B-50	III	267~262.5	土器	口縁	I-1				明赤褐色2.5YR5/6	チャート、石英、石灰粒多く含む
3009	A-48		~308.5	土器	口縁	I-1				褐色7.5YR4/6	チャート、石英、石灰細粒
3010	D-48	II	315.5~296.1	土器	口縁	I-1				暗褐色5YR3/4	チャート、石英、白色砂粒を含む
3011	D-49	III	255.9~249.7	土器	口縁	I-1				明赤褐色2.5YR5/6	石英、チャート
3012	D-49	III	279.5~274	土器	口縁	I-1				褐色7.5YR4/6	チャート、石英、白色砂粒
3013	C-48	III	278.8~264	土器	口縁	I-1				褐色7.5YR4/6	チャート、石灰、石英
3014	C-46	灰褐色砂礫層	272.6~	土器	口縁	I-1	4.0			橙色5YR6/8	石英、石灰細粒
3015	B-48	III	285.9	土器	口縁	I-2	15.6			表:黒褐色7.5YR2/3 裏:赤褐色5YR4/6	チャート、石英、石灰粒、赤色粒
3016	A-48	III	314~302.2	土器	口縁	I-2	16.4			明赤褐色5YR5/6	石英、チャート、石灰粒
3017	B-50	III	280.9~	土器	口縁	I-2	13.6			明赤褐色5YR5/6	石英、チャート、石灰粒
3018	D-51	II	263.4~251.2	土器	口縁	I-2	11.6			褐色7.5YR4/3	石英、チャート、石灰細粒
3019	C-48	IV	275.8~267.4	土器	口縁	I-2				明赤褐色5YR5/6	チャート、石灰
3020	C-49	III	379.3~370.6	土器	口縁	I-2				裏:明褐色7.5YR5/6 表:褐色7.5YR4/3	石英、チャート、石灰細粒
3021	C-49	南東角赤土中		土器	口縁	I-2				暗褐色7.5YR3/3	石英、チャート、石灰細粒
3022	C-51	III	265.1~256.7	土器	口縁	I-2				暗褐色7.5YR3/3	石英、チャート、石灰細粒
3023	F-47	III	~252.9	土器	口縁	I-2				表:暗赤褐色5YR5/6 裏:黒色5YR1.7/1	石英、チャート、石灰白色・赤色細粒
3024	C-48	IV	275.8~267.4	土器	口縁	I-2				暗褐色7.5YR3/3	石灰、小石
3025	C-48	IV	275.8~267.4	土器	口縁	I-2	10.0			裏:明褐色7.5YR5/6 表:暗褐色7.5YR3/3	石灰細粒多、石英、チャート
3026	G-51	II	230.3	土器	口縁	I-2	10.4			褐色7.5YR4/6	石英、チャート、石灰細粒
3027	F-51	III	226.6	土器	口縁	I-2	14.0			褐色7.5YR4/6	石英多く含む、チャート
3028	B-46	III	333.3~327	土器	口縁	II-1	11.5			褐色7.5YR4/6	石灰細粒多、石英、チャート
3029	A-49	地山の可能性	352.3~347.1	土器	口縁	II-1	16.7			にぶい褐色7.5YR5/4	石英含む、砂質胎土
3030	B-50	III		土器	口縁	II-1				にぶい黄褐色10YR5/4	石英、石灰粒、微細粒含む
3031	A-49	III	342.4~330.5	土器	口縁	II-1	10.4			明赤褐色2.5YR5/6	石英、石灰微細粒
3032	B-49	III	313.1~305.9	土器	口縁	II-1	13.3			明赤褐色5YR5/6	石灰砂粒多
3033	A-48	III	387.7~378.9	土器	口縁	II-1				黄褐色10YR5/6	石灰砂粒多
3034	A-49	地山の可能性	330.5~327.3	土器	口縁	II-1				褐色7.5YR4/6	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3035	B-48	III	333.7~330	土器	口縁	II-1				黄褐色10YR5/6	石灰砂粒多
3036	D-49	埋葬人骨(東)		土器	口縁	II-1				赤褐色5YR4/6	石灰砂粒多
3037	C-50	III	277.7~271.5	土器	口縁	II-1				裏:にぶい赤褐色5YR4/4 表:灰褐色5YR4/2	石英、石灰微細粒
3038	B-49	III	333.4~304.1	土器	口縁	II-1				明赤褐色5YR5/6	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3039	D-49	埋葬人骨(東)		土器	口縁	II-1				暗赤褐色5YR3/6	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3040	B-49	III	301.3~294.7	土器	口縁	II-1				赤褐色5YR4/8	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3041	C-50	III	271.5~263	土器	口縁	II-1				裏:褐色7.5YR4/6 表:黒褐色7.5YR3/1	石灰、石英、チャート
3042	A-48	III	406.6~400.4	土器	口縁	II-1				褐色7.5YR4/6	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3043	C-47	II	339.1~300.3	土器	口縁	II-1				にぶい褐色7.5YR5/3	石灰細粒、小石
3044	D-48	III	249~242.4	土器	口縁	II-1				明褐色7.5YR5/6	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3045	A-48	III	330~326.3	土器	口縁	II-1				赤褐色5YR4/6	石灰細粒
3046	C-48	III	261.9~256.7	土器	口縁	II-1	17.4			赤褐色5YR4/6	石灰、石英、？
3047	A-49	褐色土層	342.4~330.5	土器	口縁	II-1	25.6			赤褐色5YR4/8	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3048	C-49	III	279.3~270.6	土器	口縁	II-1				暗褐色7.5YR3/3	石灰砂粒多、石英、チャート含む
3049	F-49	III	232~228	土器	口縁	II-2	19.8			明赤褐色5YR5/8	石英、石灰砂粒、粘板岩
3050	E-49	III	250.8~245.8	土器	口縁	II-2	14.6			暗赤褐色5YR3/6	石灰細砂少量
3051	D-48	III	241.3~241.3	土器	口縁	II-2	11.0			赤褐色5YR4/6	石灰砂粒、チャート
3052	B-49	III	317.9~313.1	土器	口縁	II-2				明赤褐色5YR5/8	石灰砂粒、チャート
3053	D-48	III	282.5~280	土器	口縁	II-2				赤褐色5YR4/8	石灰砂多量
3054	A-B-48	III		土器	口縁	II-2				暗赤褐色5YR3/6	石灰砂多量
3055	F-51	III	228.7~221.7	土器	口縁	II-2				明褐色7.5YR5/6	石灰砂、チャート、粘板岩
3056	D-50	III	246.3~220	土器	口縁	II-2				橙色5YR6/8	石英、石灰、粘板岩
3057	C-49	III	379.3~370.6	土器	口縁	II-2	11.0			暗赤褐色5YR3/6	石灰細砂少量
3058	A-49	II	383.5~373	土器	口縁	II-2	8.0			赤褐色5YR4/8	石灰細砂少量、チャート
3059	A-48	II	393.2~382.6	土器	口縁	II-2				表:にぶい褐色7.5YR5/4 裏:明赤褐色5YR5/6	石灰砂、石英、粘板岩
3060	G-50, 51	II	225.4~	土器	口縁	II-2	10.0			裏:にぶい赤褐色5YR4/4 表:黒褐色5YR3/1	石灰砂、チャート、粘板岩
3061	B-48	III	326~321	土器	口縁	II-2	9.2			黒褐色5YR2/2	粘板岩
3062	A-49	II	398~383.5	土器	口縁	II-2	14.6			褐色7.5YR4/6	石灰砂、チャート、石英、粘板岩
3063	B-48	II	350~345.1	土器	口縁	II-2	14.4			表:明褐色7.5YR5/6 裏:明赤褐色5YR5/8	砂質胎土、石灰細砂粒、金雲母
3064	D-49	埋葬人骨(南)	241~206.9	土器	口縁	II-2	7.2			裏:暗赤褐色5YR3/6 表:黒褐色5YR2/2	石灰細砂粒多量、石英
3065	D-47	V	249.5~前後	土器	口縁	II-2	11.8			暗赤褐色5YR3/6	石灰細砂粒多量
3066	B-48	III	331.4~	土器	口縁	II-2	14.8			赤褐色5YR4/8	石灰細砂粒多量、石英
3067	48	III		土器	口縁	II-2				裏:褐色7.5YR4/6 表:黒褐色7.5YR3/1	石英、チャート
3068	B-48	黒褐色土層	285.9	土器	口縁	II-2	23.1			裏:赤褐色5YR4/8 表:暗赤褐色5YR3/6	チャート、石英
3069	F-49	III	232~228	土器	口縁	II-2	12.0			極暗赤褐色5YR2/3	石英、石灰砂、チャート
3070	E-48	III	248~245.2	土器	口縁	II-2	16.8			裏:赤褐色5YR4/8 表:暗赤褐色5YR3/6	石英、石灰砂、チャート
3071	A-B-48	褐色混硬土層		土器	口縁	II-2	15.5			裏:赤褐色5YR4/8 表:褐色7.5YR4/6	石英、チャート、黒色細粒
3072	A-49	III		土器	口縁	II-2	28.2			赤褐色5YR4/8	チャート、石英、石灰砂
3073	B-50	地山?	288.4~280	土器	口縁	II-2	14.4			裏:暗赤褐色5YR3/6 表:極暗赤褐色5YR2/4	チャート、石英、石灰砂
3074	B-49	III		土器	口縁	II-2	11.9			赤褐色5YR4/8	石英、石灰
3075	A-B-48	II		土器	口縁	II-2	14.4			表:暗赤褐色5YR3/6 裏:黒褐色5YR2/2	チャート、石英、石灰砂
3076	B-50	III	295.4	土器	口縁	II-2				裏:暗赤褐色5YR3/6 表:黒褐色5YR2/2	石英、石灰砂
3077	D-49	埋葬人骨(西)		土器	口縁	II-2				明褐色7.5YR5/8	石英、石灰
3078	A-48	III	365~354.8	土器	口縁	II-2				赤褐色5YR4/8	石灰砂、石英、チャート
3079	A-48	III	361.1~354.1	土器	口縁	II-2				裏:赤褐色5YR4/8 表:極明赤褐色5YR2/4	石灰砂、石英
3080	A-B-48	II		土器	口縁	II-2				赤褐色5YR4/8	石灰砂、石英
3081	E-49	III	271.7~268.8	土器	口縁	II-2	11.6			裏:暗赤褐色5YR3/6 表:暗赤褐色5YR3/4	石英、チャート
3082	B-48	III	326~321	土器	口縁	II-2				赤褐色5YR4/8	石灰砂多量、石英

第22表 III 地区土器観察表 (2)

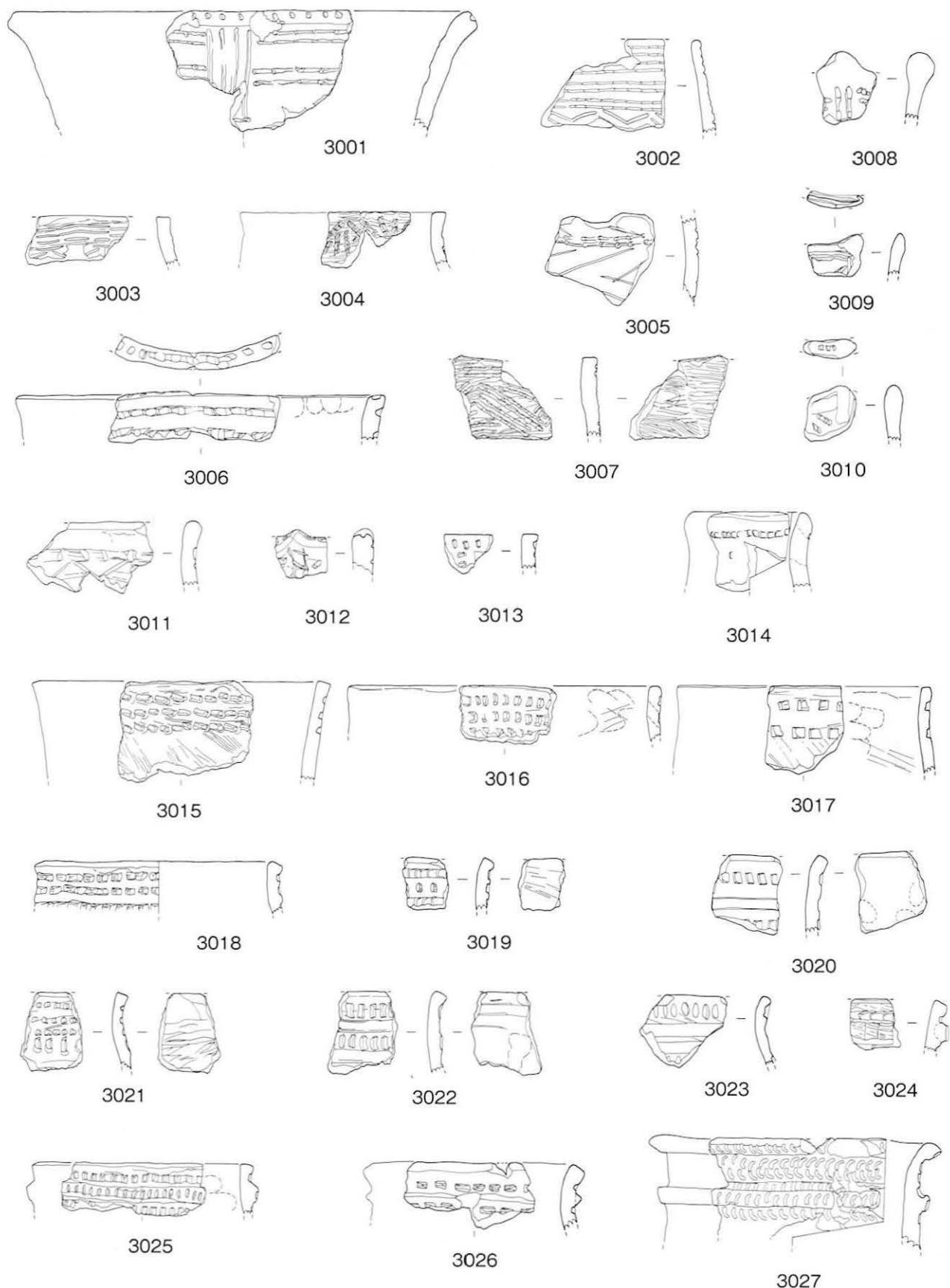
掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	部位	分類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器色	混和材
3083	E-49	III	250.8~245.8	土器	口縁	II-2				裏:赤褐色5YR4/8 表:暗赤褐色5YR3/6	石灰砂
3084	D-47	III	298.2~293.8	土器	口縁	II-2				暗赤褐色5YR3/6	石灰砂、石英、チャート
3085	D-49	III	274~260	土器	口縁	II-2	8.2			橙色7.5YR6/8	石灰、チャート
3086	A-48	III	326.3~316.9	土器	口縁	II-2	10.4			明赤褐色5YR5/8	石英、チャート、石灰砂
3087	D-46	III		土器	口縁	II-2	10.0			赤褐色2.5YR4/8	石英、石灰砂多量
3088	C-46	III	290.6~286.2	土器	口縁	II-2				表:明赤褐色5YR5/8 裏:橙色7.5YR6/8	石英、石灰砂
3089	B-48	III	333.7~326	土器	口縁	II-2				明赤褐色2.5YR5/8	石灰砂
3090	B-47	III		土器	口縁	II-2				表:赤褐色5YR4/8 裏:暗赤褐色5YR2/4	石灰砂、チャート
3091	A-48	III	352.9	土器	口縁	II-2				赤褐色5YR4/6	石灰砂、石英
3092	B-49	III	295.7~288.8	土器	口縁	II-2				表:赤褐色5YR4/6 裏:明赤褐色5YR5/6	石灰細砂多量、石英
3093	C-48	III	281~275.8	土器	口縁	II-2	11.4			表:赤褐色2.5YR4/8 裏:赤褐色2.5YR4/6	石灰砂、石英
3094	A-49	地山の可能性?	342.4~330.5	土器	口縁	II-2	9.2			表:暗赤褐色2.5YR3/2 裏:褐色7.5YR4/4	石灰砂少量
3095	C-49	III	279.3~270.6	土器	口縁	II-2	25.41			赤褐色5YR4/8	石灰砂、石英
3096	B-48	III	352.2~333.7	土器	口縁	II-2				表:赤褐色5YR4/8 裏:暗赤褐色5YR3/6	石灰細砂、石英
3097	A-48	III	370.9~365	土器	口縁	II-2				赤褐色2.5YR4/6	石灰砂多量、石英
3098	A-48	III	406.6~400.4	土器	口縁	II-2				赤色10R5/8	石灰砂多量、石英
3099	B-48	III	312.7~310	土器	口縁	II-2				明赤褐色5YR5/8	粘板岩、石英
3100	A-48	II	393.2~382.6	土器	口縁	II-2				暗赤褐色7.5R3/3	石灰、石英
3101	B-48	III	285.9	土器	口縁	II-2				表:赤褐色5YR4/6 裏:明赤褐色2.5YR5/6	石灰砂多量、石英
3102	A-48	III	330~326.3	土器	口縁	II-2	6.7			表:橙色2.5YR6/8 裏:にぶい赤褐色5YR4/4	石灰砂、石英
3103	B-48	III	299~293.7	土器	口縁	II-2				表:暗赤褐色10R3/2 裏:赤褐色2.5YR4/6	石灰砂、石英
3104	A-49	II	398~383.5	土器	口縁	II-2				表:暗赤褐色7.5R3/2 裏:暗赤褐色5YR3/3	石英、チャート
3105	A-48	III	382.6~376.7	土器	口縁	II-2				明赤褐色2.5YR5/6	石英、チャート、粘板岩
3106	C-48	III	281~275.8	土器	口縁	II-2				裏:赤褐色2.5YR4/6 表:にぶい赤褐色5YR4/4	石灰、粘板岩
3107	B-49	III	362.4~340.7	土器	口縁	II-2				明赤褐色2.5YR5/6	石灰砂、石英、チャート
3108	C-47	III	309.9~286.5	土器	口縁	II-2				橙色7.5YR7/6	石英、チャート
3109	B-48	III	391~372.1	土器	口縁	II-2				明赤褐色2.5YR5/6	石英、チャート、粘板岩
3110	A-49	III	342.4~330.5	土器	口縁	II-2	19.0			明赤褐色5YR5/8	石灰
3111	F-49	III	235.3~232	土器	口縁	II-2	17.0			裏:にぶい橙色5YR7/4 表:赤褐色5YR4/6	石灰、石英
3112	F-49	III	236.8~235.2	土器	口縁	II-2	12.5			裏:明赤褐色2.5YR5/6 表:暗赤褐色2.5YR3/4	石灰
3113	A-48	III	326.3~316.9	土器	口縁	II-2	8.4			裏:にぶい赤褐色2.5YR4/4 表:赤色10R4/6	石灰
3114	A-48	III	393~387.7	土器	口縁	II-2	12.4			明赤褐色2.5YR5/6	石灰、石英
3115	D-47	III		土器	口縁	II-2	17.2			橙色2.5YR6/6	石灰、石英、チャート
3116	B-49	暗褐色土層	305.9	土器	口縁	II-2	16.6			裏:明赤褐色2.5YR5/6 表:明赤褐色2.5YR5/8	石灰、石英、チャート
3117	D-48	III	260.4~258	土器	口縁	II-2	17.8			裏:明赤褐色2.5YR5/8 表:赤褐色5YR4/8	石灰、石英
3118	A-B-48	II		土器	口縁	II-2	14.4			裏:にぶい赤褐色5YR4/3 表:赤褐色2.5YR4/8	石英
3119	A-49	III	342.4~330.5	土器	口縁	II-2	19.3			裏:赤色10R5/8 表:明赤褐色2.5YR5/8	石灰、石英、チャート
3120	B-49	黒褐色土層	298.6~290.2	土器	口縁	II-2	19.0			にぶい赤褐色2.5YR5/4	石灰、石英、チャート
3121	C-49	III	379.3~370.6	土器	口縁	II-2	27.6			暗赤褐色5YR3/3	石灰、3mmほどの小石
3122	D-49	埋葬人骨(南)	241~206.9	土器	口縁	II-2				赤褐色5YR4/8	石灰、チャート、他
3123	B-50	III	288.4~280	土器	口縁	II-2				にぶい赤褐色2.5YR5/4	石灰、チャート、2mmほどの小石
3124	C-50	III	266.5~256.8	土器	口縁	II-2	17.0			赤色10R5/8	石灰、5mmほどの小石
3125	B-48	III	312.7~310	土器	口縁	II-2	19.5			橙色2.5YR6/8	4枚岩、チャート
3126	B-48	III	333.7~330	土器	口縁	II-2	12.6			裏:にぶい赤褐色2.5YR4/4 表:暗赤灰色2.5YR3/1	石灰
3127	B-49	III	295.7~288	土器	口縁	II-2	29.0			裏:明赤褐色2.5YR5/6 表:橙色2.5YR6/8	石灰、石英
3128	E-47	III	260.7~258	土器	口縁	II-2	16.0			裏:明赤褐色5YR5/6 表:にぶい赤褐色5YR5/3	石灰
3129	D-48	III	264.2~255.4	土器	口縁	II-2	20.8			裏:橙色2.5YR6/6 表:明赤褐色5YR5/8	石灰
3130	C-48	III	EL-265.6	土器	口縁	II-2	16.4			裏:暗赤褐色5YR3/6 表:黑褐色5YR3/1	石灰、石英
3131	B-50	III	296.2~288.4	土器	口縁	II-2	16.8			裏:にぶい褐色7.5YR5/3	石灰、石英
3132	D-46	III?	309.3~303.5	土器	口縁	II-2	22.0			裏:灰褐色5YR5/2 表:暗赤褐色5YR5/6	石灰、石英
3133	E-47	III	270.8~264.2	土器	口縁	II-2	18.0			裏:灰赤色2.5YR6/2 表:灰赤色2.5YR6/2	石灰
3134	B-49	III	317.9~313.1	土器	口縁	II-2				裏:橙色2.5YR6/8 表:一部赤黒色2.5YR2/1	石灰、石英、チャート
3135	B-46	I		土器	口縁	II-2	14.2			裏:橙色2.5YR6/6 表:淡赤橙色2.5YR7/4	石灰
3136	G-	III		土器	口縁	II-2	17.0			裏:橙色2.5YR6/6 表:にぶい赤褐色5YR5/3	石灰
3137	B-49	III(土器割り)	313.1~305.9	土器	完形	II-2	25.1	24.35		裏:橙色2.5YR6/8 表:灰赤色2.5YR4/2	石灰、石英
3138	C-50	III	271.5~263	土器	口縁	II-2				裏:にぶい赤褐色5YR5/3 表:にぶい赤褐色2.5YR5/4	石灰
3139	E-47	III	257~252.7	土器	口縁	II-2	11.8			にぶい赤褐色2.5YR4/4	石灰
3140	B-48	III	333.7~326	土器	口縁	II-2	15.2			赤色10R5/6	石灰、石英、チャート
3141	C-50	III	271.5~263	土器	口縁	II-2	18.0			裏:暗赤灰色10R4/1 表:にぶい赤褐色2.5YR4/6	石灰、石英
3142	A-48	III	387.7~378.9	土器	口縁	II-2	9.4			裏:赤褐色2.5YR4/6 表:明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3143	B-48	III	300.7~	土器	口縁	II-2	5.0			裏:橙色2.5YR6/8 表:橙色2.5YR7/6	石灰、石英
3144	C-49	III	365.1~359.3	土器	口縁	II-2	8.8			裏:明赤褐色2.5YR5/6 表:灰赤色2.5YR4/2	石灰
3145	C-45	I		土器	口縁	II-2	4.6			裏:赤褐色2.5YR4/8 表:にぶい赤褐色2.5YR5/4	石灰
3146	F-47	III	263.4~257.1	土器	口縁	II-2	9.0			赤色10R5/6	石灰
3147	C-50	V	266.5~256.8	土器	口縁	II-2	4.6			にぶい赤褐色2.5YR5/3	石灰、石英
3148	E-49	IV	240~234	土器	口縁	II-2	7.6			赤褐色10R6/8	石灰
3149	A-48	III	330~326.3	土器	口縁	II-3	21.0			裏:灰赤色2.5YR4/2 表:明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3150	B-48	III	293.7~287.1	土器	口縁	II-3				裏:にぶい赤褐色5YR4/3 表:赤褐色5YR4/6	石灰
3151	B-48	III	326~321	土器	口縁	II-3				裏:にぶい赤褐色5YR5/4 表:橙色5YR6/6	石灰
3152	E-49	IV	245.8~	土器	口縁	II-3				裏:にぶい赤褐色5YR4/3 表:灰赤色2.5YR4/2	石灰
3153	B-49	III	362.4~340.7	土器	口縁	II-3				裏:明赤褐色2.5YR5/6 表:橙色2.5YR6/6	石灰
3154	D-47	V	262.2~256	土器	口縁	II-3				裏:にぶい橙色7.5YR5/4 表:明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3155	B-49	地山?	335~332.3	土器	口縁	II-3				橙色2.5YR6/6	石灰
3156	D-47	III	280~277.7	土器	口縁	II-3	21.0			にぶい赤褐色5YR5/4	石灰
3157	B-48	III	297~293.2	土器	口縁	II-3	10.7			にぶい赤褐色5YR5/3	チャート
3158	A-48	III	387.7~378.9	土器	口縁	II-3	10.8			橙色2.5YR6/6	石灰
3159	B-46	暗褐色混疊砂層	345.9~	土器	口縁	II-3	24.4			明赤褐色2.5YR5/8	石灰、石英
3160	C-51	III	270.6~265.4	土器	口縁	II-3				明赤褐色2.5YR5/6	石灰、石英
3161	A-48	III	387.7~378.9	土器	口縁	II-3				橙色2.5YR6/6	石灰
3162	E-48	III		土器	口縁	II-3				裏:にぶい赤褐色5YR5/3 表:明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3163	D-47	V	262.2~256	土器	口縁	II-3	11.8			にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英
3164	E-48	III	239.4~235.4	土器	口縁	II-3				にぶい赤褐色2.5YR5/4	石灰
3165	D-47	III+V?	265~263	土器	口縁	II-3	22.1			裏:褐灰色5YR5/1 表:橙色2.5YR6/6	石灰
3166	B-48	III	352.2~333.7	土器	口縁	II-3				裏:赤褐色5YR4/8 表:明赤褐色2.5YR5/6	石灰、石英

第23表 III 地区土器観察表 (3)

掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	部位	分類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器色	混和材
3167	B-48	III	318~312.7	土器	口縁	II-4	25.6			明赤褐色2.5YR5/8	石灰、石英
3168	B-48	III	305~300.7	土器	口縁	II-4				橙色2.5YR6/6	石灰
3169	C-50	III	287.7~284	土器	口縁	II-4				裏: 橙色2.5YR6/6 表: にぶい赤褐色5YR5/4	
3170	F-51	III	231.9~226.9	土器	口縁	II-4				裏: にぶい褐色7.5YR5/4 表: 暗褐色10YR3/4	石灰
3171	E-49	III	255.4~249	土器	口縁	II-4				にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英
3172	D-49	II	293.5~286.6	土器	口縁	II-4				明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3173	E-47	V	253.6~246.9	土器	口縁	II-4				明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3174	D-47	V	291.7~277.7	土器	口縁	II-4				明赤褐色2.5YR5/6	石灰、小石
3175	D-46	III	291~285.7	土器	口縁	II-4				橙色2.5YR6/6	石灰、石英
3176	F-49	III~V	232~228	土器	口縁	II-4	18.0			明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3177	D-48	III石組遺構内	241.3~241.3	土器	口縁	II-4				灰褐色7.5YR4/2	石灰、石英
3178	A-48	III	393~387.7	土器	口縁	II-4				橙色2.5YR6/6	石灰、石英
3179	D-47	III	254.8~	土器	口縁	II-4	12.4			裏: 橙色2.5YR6/6 表: 一部灰褐色5YR6/2	石灰、石英
3180	B-48	III	391~372.1	土器	口縁	II-4				裏: にぶい赤褐色5YR5/4 表: 一部黒褐色5YR3/1	石灰
3181	B-48	III	307.3~305	土器	口縁	II-4				明赤褐色2.5YR5/6	石灰、石英
3182	E-47	III	244~	土器	口縁	II-4				にぶい赤褐色5YR4/4	石灰、石英
3183	B-48	表面清掃		土器	口縁	II-4				赤褐色2.5YR4/6	石灰
3184	D-50	III	277.3~272.7	土器	口縁	II-4				橙色2.5YR6/6	石灰
3185	D-47	III	263~258.5	土器	口縁	II-4				裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: 橙色2.5YR6/6	石灰
3186	C-50	III	284~281.4	土器	口縁	II-4	20.0			にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英
3187	B-49	III	305.9~301.3	土器	口縁	II-4				明赤褐色2.5YR5/6	石灰、石英
3188	D-50	III	277.3~272.7	土器	口縁	II-4				にぶい褐色7.5YR5/4	石灰、小石
3189	A-49	III	347.1~342.4	土器	口縁	II-4				明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3190	B-48	III	333.7~330	土器	口縁	II-4				裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: 灰褐色2.5YR4/2	石灰、石英
3191	E-47	III	257~252.2	土器	口縁	II-4	22.3			裏: 赤黒色2.5YR1.7/1 表: 明赤褐色5YR5/6	石灰、石英
3192	D-48	III	373.5~264.2	土器	口縁	II-4	17.4			裏: にぶい橙色7.5YR6/4 表: 明赤褐色2.5YR5/6	石灰、石英、小石
3193	B-48	III	326~321	土器	口縁	II-4	23.0			明赤褐色5YR5/6	石灰、石英、小石
3194	C-51	III	281.3~273	土器	口縁	II-4	17.0			裏: 暗赤褐色5YR3/3 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、小石
3195	B-48	III	318~312.7	土器	口縁	II-4	25.6			明赤褐色5YR5/6	石灰、小石
3196	D-47	III	256~244.4	土器	口縁	II-4	16.8			裏: 橙色2.5YR6/6 表: 橙色2.5YR6/1	石灰、石英、チャート、小石
3197	E-46	II伊賀焚口	288.9~277.7	土器	口縁	II-4	19.4			裏: 橙色2.5YR6/6 表: 赤褐色5YR4/6	石灰、石英
3198	F-47	III	270.6~267.8	土器	口縁	II-4	23.0			赤褐色5YR4/6	石灰、石英
3199	D-48	III	264.2~255.4	土器	口縁	II-4	11.6			橙色2.5YR6/8	石英、小石
3200	C-46	V?	272.6~	土器	口縁	II-4	13.0			裏: にぶい橙色7.5YR6/4 表: にぶい橙色7.5YR5/4	石灰、石英
3201	C-49	III	390.8~387.6	土器	口縁	II-4				灰褐色10YR5/2	
3202	B-48	III	333.7~226	土器	口縁	II-4				にぶい褐色7.5YR5/4	石灰、石英
3203	E-46	III	282.4~274.3	土器	口縁	II-4	12.5			橙色7.5YR6/6	
3204	B-48	III	391.8~387.8	土器	口縁	II-4	11.6			黒褐色10YR3/2	石灰、石英
3205	B-48	III	387.8~383.2	土器	口縁	II-4	7.0			裏: 赤褐色5YR4/6 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石英、石灰
3206	B-48	III	312.7~310	土器	口縁	II-4	7.0			にぶい黄褐色10YR5/3	石灰
3207	C-50	III	292.2~287.8	土器	口縁	II-4	7.7			裏: にぶい赤褐色5YR4/4 表: 暗褐色7.5YR4/4	石灰、石英
3208	E-47	III	264.2~260.7	土器	口縁	II-4	8.0			にぶい黄褐色10YR4/3	石灰
3209	B-47	III	406.8~388.6	土器	口縁	III				にぶい褐色7.5YR5/4	
3210	D-48	III	255.4~253	土器	口縁	III				にぶい黄褐色10YR4/3	石灰、石英、小石
3211	B-47	II	351~339.7	土器	口縁	III				裏: にぶい褐色7.5YR5/4 表: 黑褐色5YR3/1	石灰、石英、小石
3212	B-13	II	247.5~238.8	土器	口縁	III				にぶい褐色7.5YR5/4	石灰
3213	D-47	III	280~277.7	土器	口縁	III				裏: にぶい赤褐色5YR4/3 表: 赤褐色5YR4/6	石灰、石英、チャート
3214	D-51	III	247.8~230	土器	口縁	III				裏: 黑色7.5YR2/1 表: 暗赤灰色2.5YR3/1	石灰、石英、チャート、小石
3215	F-47	III	275.9~270.6	土器	口縁	III				裏: 明赤褐色5YR5/6 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英
3216	C-46	III	417~408.4	土器	口縁	III				裏: 明赤褐色2.5YR5/8 表: にぶい褐色7.5YR5/4	石灰、石英、小石
3217	—	III		土器	口縁	III	22.3			裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: 明赤褐色2.5YR5/6	石灰、小石
3218	E-49	III	255.4~249	土器	口縁	III	21.0			明赤褐色2.5YR5/6	石英、チャート
3219	A-46	地山?		土器	口縁	III	22.2			裏: 橙色5YR7/6 表: 橙色5YR6/6	石灰
3220	C-50	III	277.7	土器	口縁	III	12.8			褐色10YR4/4	石灰、小石
3221	E-48	III	272~266	土器	口縁	III	5.8			にぶい黄褐色10YR5/4	石灰
3222	B-47	III	398.6~366.3	土器	口縁	III				にぶい黄褐色10YR4/3	石灰、石英、小石
3223	B-48	III	415.2~391	土器	口縁	III	6.6			裏: にぶい赤褐色5YR5/4 表: 赤褐色10YR4/4	石灰、石英
3224	D-49	II	293.5~286.6	土器	口縁	III				明赤褐色5YR5/6	石灰
3225	—	黄褐色混疊土層		土器	胴部	III				裏: にぶい赤褐色5YR5/4 表: にぶい橙色5YR6/4	石灰
3226	F-47	III	242.1~239	土器	口縁	III	14.4			裏: 明赤褐色5YR5/6 表: 暗褐色7.5YR4/3	石灰
3227	B-49	III	408.8~380	土器	口縁	III				明赤褐色5YR5/8	石灰、石英
3228	F-47	III	267.8~255.9	土器	口縁	III	13.2			裏: 明赤褐色5YR5/6 表: にぶい褐色7.5YR5/4	石灰、石英
3229	C-50	III	281.4~277.5	土器	口縁	III				にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英
3230	—	清掃		土器	口縁	IV-1	12.8			明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3231	B-50	III	301.2~291.6	土器	口縁	IV-1	10.4			裏: にぶい赤褐色2.5YR4/4 表: 暗赤灰色2.5YR3/1	石灰
3232	E-50	III	251.1~247	土器	口縁	IV-1				裏: にぶい赤褐色5YR4/3 表: にぶい褐色7.5YR5/4	石灰、チャート
3233	A-49	II	383.5~373	土器	口縁	IV-1				にぶい赤褐色5YR4/3	石灰
3234	B-49	III	301.3~294.7	土器	口縁	IV-1				裏: 明赤褐色2.5YR6/6 表: 暗褐色7.5YR4/1	石灰
3235	A-48	III	354.1~349	土器	口縁	IV-1				裏: 黑褐色5YR3/1 表: 暗褐色5YR4/1	石灰
3236	E-49	III	266.1~255.4	土器	口縁	IV-1				裏: 暗褐色7.5YR4/3 表: 暗赤灰色2.5YR3/1	石灰、チャート
3237	A-48	不明	368.9~	土器	口縁	IV-1	10.4			裏: 橙色5YR6/6 表: 明赤褐色5YR5/6	石灰
3238	C-46	灰褐色砂礫層	~263.7	土器	口縁	IV-1	12.4			裏: 暗褐色5YR4/3 表: にぶい赤褐色5YR4/4	石灰、石英
3239	B-48	III石組遺構撤去時	352.2~333.7	土器	口縁	IV-1				裏: 黑褐色10YR2/2 表: 明赤褐色2.5YR5/6	石灰、小石
3240	C-49	III	359.3~337.7	土器	口縁	IV-1	11.8			裏: にぶい赤褐色5YR4/4 表: 暗褐色7.5YR4/3	石灰、チャート、小石
3241	A-48	不明	371.2~364.5	土器	口縁	IV-1				明赤褐色2.5YR5/8	石灰、チャート、小石
3242	B-47	III	361.9~	土器	口縁	IV-1	14.6			裏: にぶい褐色7.5YR5/3 表: 暗褐色7.5YR4/3	石灰
3243	D-49	III	285.6~279.5	土器	口縁	IV-1	10.4			裏: 明赤褐色2.5YR5/8 表: 黑褐色7.5YR3/1	石灰、石英
3244	B-49	III	313.1~305.9	土器	口縁	IV-1	13.2			裏: にぶい橙色5YR6/4 表: 灰褐色7.5YR4/2	
3245	A-48	III	330~326.3	土器	口縁	IV-1	14.6			黑褐色5YR3/1	石灰、石英、チャート
3246	D-46	V	293.6~285.5	土器	口縁	IV-2	14.4			にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、チャート

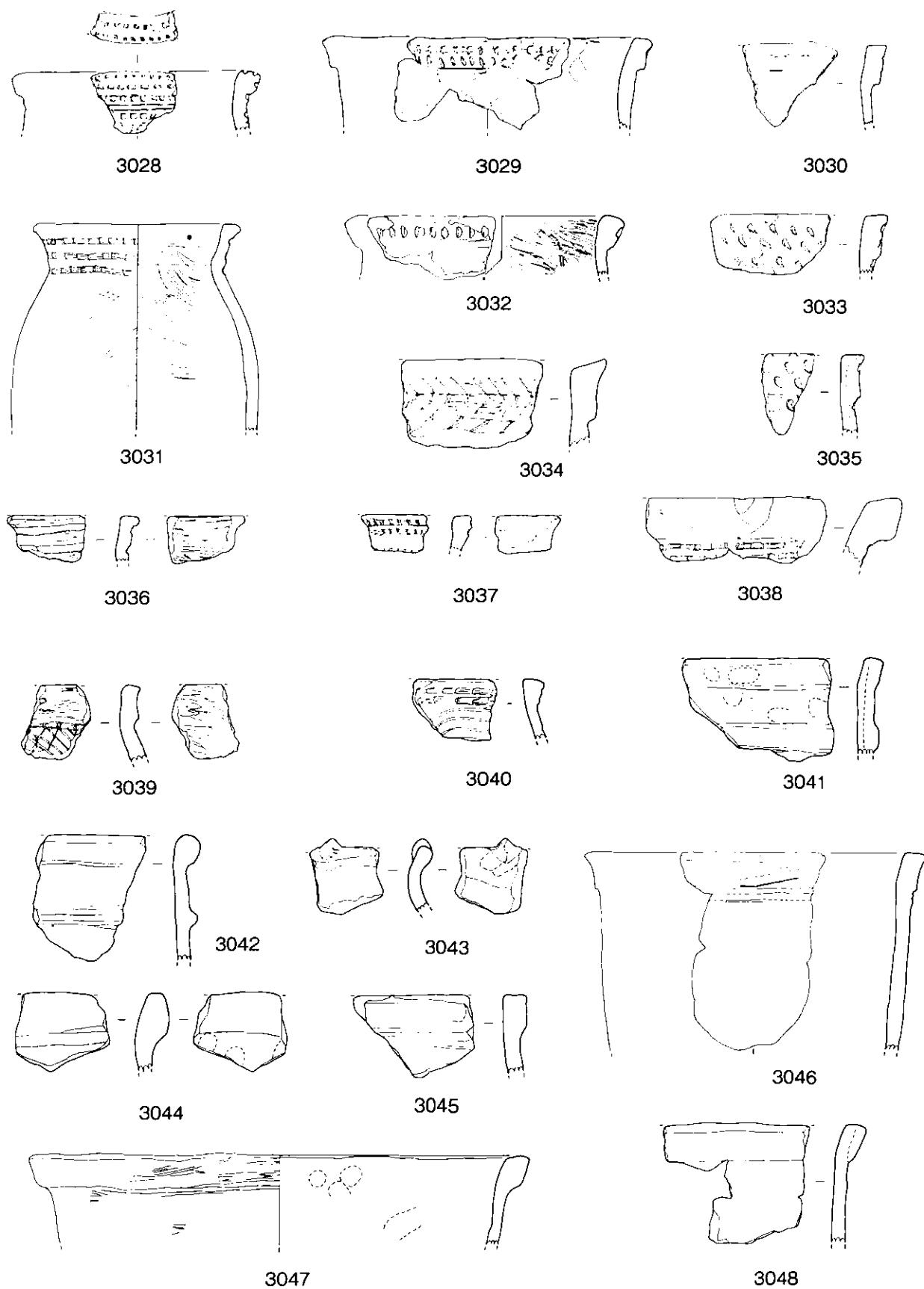
第24表 III地区土器観察表 (4)

掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	部位	分類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器色	混和材
3247	B-48	III	307.3~305	土器	口縁	IV-2	9.4			裏: 橙色5YR6/6 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英、
3248	B-49	III	288.8~285.7	土器	口縁	IV-2	13.0			裏: 黒褐色5YR3/1 表: 灰褐色5YR4/2	石灰、石英
3249	B-48	III	321~318	土器	口縁	IV-2				にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英
3250	A-48	III	387.7~378.9	土器	口縁	IV-2	8.4			裏: 黒褐色2.5Y3/1 表: 明赤褐色5YR5/8	石灰、石英
3251	D-47	III	277.7~271.5	土器	口縁	IV-2	8.8			裏: 明赤褐色5YR5/6 表: 灰褐色5YR4/2	石灰、石英
3252	B-49	III	313.1~305.9	土器	口縁	IV-2	10.1			裏: にぶい褐色5YR5/6 表: にぶい黄褐色10YR4/3	石灰、石英
3253	B-50	III	299.2~298	土器	口縁	IV-2	4.4			明赤褐色5YR5/6	石英、チャート
3254	B-46	不明	390.7~384	土器	口縁	IV-2				にぶい黄褐色10YR6/4	石灰、石英
3255	F-50	III	245.6~236.4	土器	口縁	IV-2				明赤褐色5YR5/6	石灰、チャート
3256	F-47	III	267.8~255.9	土器	口縁	IV-2	12.0			橙色5YR6/6	石英
3257	D-48	III	282.5~280	土器	口縁	IV-2				黒褐色10YR3/1	石灰
3258	D-46	V	294.5~287.5	土器	口縁	IV-2				にぶい黄褐色10YR4/3	石灰、石英
3259	D-47	III	306.1~291	土器	胸部	IV-2				裏: 橙色5YR6/8 表: 明黄褐色10YR6/6	石灰、石英、チャート
3260	C-46	III	290.6~286.2	土器	口縁	V-1				裏: にぶい黄褐色10YR6/3 表: 橙色5YR6/6	石灰、小石
3261	C-49	III	370.6~365.1	土器	口縁	V-1				裏: 橙色2.5YR6/6 表: 黑褐色10YR2/2	石灰
3262	D-46	III?	309.3~303.5	土器	口縁	V-1				裏: にぶい黄褐色10YR4/3 表: にぶい橙色7.5YR6/4	石灰
3263	C-46	III	428.1~417	土器	口縁	V-1	15.0			裏: にぶい橙色7.5YR6/4 表: にぶい赤褐色5YR4/4	石灰
3264	D-49	埋葬人骨(東)		土器	口縁	V-1				橙色5YR6/6	石灰、石英、小石
3265	B-47	III		土器	口縁	V-1				橙色7.5YR6/6	石英、チャート
3266	F-47	III	270.6~267.8	土器	口縁	V-1				裏: 明赤褐色5YR5/6 表: にぶい褐色7.5YR5/4	石灰、石英、小石
3267	A-49	I		土器	口縁	V-1				にぶい黄褐色10YR6/4	石灰、石英、小石
3268	D-46	III	291~285.7	土器	口縁	V-1				裏: 黑色7.5YR2/1 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英
3269	B-49	I		土器	口縁	V-1				にぶい黄褐色10YR6/4	石灰、石英、小石
3270	B-49	II	359.7~347.5	土器	口縁	V-1				にぶい黄褐色10YR6/4	
3271	E-47	III	288.1~286.2	土器	口縁	V-2				裏: にぶい黄褐色10YR4/3 表: 黑褐色5YR2/1	
3272	D-46	II		土器	口縁	VI				裏: にぶい黄褐色10YR6/4 表: 橙色7.5YR7/6	
3273	B-49	IV	285.5	土器	底部	A				6.4 明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3274	A-49	褐色土層	347.1~342.4	土器	底部	A				8.6 明赤褐色2.5YR5/6	石灰、チャート
3275	B-49	III	362.4~340.7	土器	底部	A				5.0 裏: 明赤褐色2.5YR5/8 表: 明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3276	C-47	II	369.6~352.6	土器	底部	A				5.5 裏: 明赤褐色2.5YR5/8 表: 明赤褐色5YR5/6	石灰
3277	B-48	III	326~321	土器	底部	A				5.3 裏: 明赤褐色5YR5/8 表: にぶい褐色7.5YR5/4	石灰、小石
3278	C-48	III	288.8~278.8	土器	底部	A				6.2 にぶい赤褐色2.5YR5/4	石灰、チャート
3279	B-48	III	H=312.7~	土器	底部	A				5.6 裏: 明赤褐色5YR5/6 表: 明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3280	C-49	黒褐色土層	365.1~359.3	土器	底部	A				5.0 裏: 赤褐色2.5YR4/6 表: 黄灰色2.5Y6/1	石灰
3281	C-51	I	270.8~260	土器	底部	A				7.0 明赤褐色2.5YR5/8	石灰
3282	E-49	III	268.8~257.1	土器	底部	A				4.2 裏: 明赤褐色2.5YR5/8 表: にぶい黄褐色10YR4/3	
3283	B-49	III	291.6	土器	底部	A				6.2 明赤褐色2.5YR5/8	石灰
3284	A-49	褐色土層	347.1~342.4	土器	底部	A				4.0 裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: 明赤褐色2.5YR5/8	石灰、チャート
3285	B-48	III		土器	底部	A				4.0 明赤褐色2.5YR5/8	石灰、チャート
3286	D-48	暗褐色土層	282.5~280	土器	底部	A				3.2 裏: 橙色2.5YR6/8 表: 明赤褐色2.5YR5/8	石灰
3287	A-48	暗褐色混疊土層	382.6~376.7	土器	底部	A				4.4 裏: 橙色2.5YR6/8 表: にぶい橙色5YR6/4	石灰、小石
3288	B-50	III	276~267	土器	底部	A				2.0 裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: にぶい褐色7.5YR6/3	石灰
3289	B-48	III		土器	底部	A				4.4 裏: にぶい赤褐色5YR5/4 表: 灰褐色7.5YR4/2	石灰、石英
3290	B-48	III	305~300.7	土器	底部	A				2.4 裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: 橙色2.5YR6/6	石灰、石英、チャート
3291	B-49	III	301.3~294.7	土器	底部	A				3.0 裏: 明赤褐色2.5YR5/8 表: にぶい黄褐色10YR4/3	石灰、石英
3292	Z-38	10層	319.7~311.6	土器	底部	B				5.0 裏: にぶい黄褐色10YR4/3 表: 明赤褐色2.5YR5/8	
3293	E-48	III	296.7~287.8	土器	底部	B				6.8 裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: にぶい赤褐色2.5YR5/4	石灰、チャート
3294	D-39	6層	313.6	土器	底部	B				3.6 裏: 黑色5YR6/2 表: にぶい橙色5YR6/4	石灰
3295	A-35		306.6~299.3	土器	底部	B				3.6 裏: 黑色5YR2/1 表: 赤褐色2.5YR4/6	石灰、チャート
3296	A-35	11層	306.6~299.3	土器	底部	B				4.2 にぶい橙色7.5YR6/4	
3297	B-47	II		土器	底部	B				2.4 明赤褐色5YR5/6	
3298	—	褐色土層		土器	底部	B				3.8 裏: 黄褐色10YR4/2 表: にぶい赤褐色2.5YR4/4	石灰
3299	B-46	I		土器	底部	B				2.4 裏: 暗赤灰色10YR3/1 表: 橙色2.5YR6/6	石灰
3300	E-46	II	303.7~297.2	土器	底部	B				4.4 にぶい黄褐色10YR7/3	
3301		南畠?		土器	底部	B				2.8 裏: 褐色7.5YR4/2 表: にぶい橙色7.5YR6/4	石灰
3302	C-50	III		土器	底部	C				明赤褐色2.5YR5/6	石灰
3303	A-46	I		土器	底部	C				裏: 明赤褐色5YR5/6 表: 明褐色7.5YR5/6	チャート
3304	D-49	III	285.6~279.5	土器	底部	D				裏: 明赤褐色5YR5/6 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、チャート
3305	D-48	III	264.2~255.4	土器	底部	D				裏: 明赤褐色2.5YR5/6 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、チャート
3306	C-39	11層	312.8~301.2	土器	底部	D				にぶい橙色7.5YR7/4	石灰
3307	C-47	II		土器	底部	D				裏: 橙色5YR6/8 表: にぶい橙色5YR6/4	石灰、石英
3308	D-46	III		土器	底部	D				明赤褐色5YR5/6	石灰、石英
3309	E-48	III	248~245.2	土器	底部	D				明赤褐色5YR5/6	石灰、石英、チャート
3310	B-50	III	288.4~280	土器	底部	D				にぶい橙色7.5YR6/4	石灰、チャート
3311	F-47	III		土器	底部	D				裏: 橙色5YR6/6 表: にぶい橙色7.5YR6/4	石灰、チャート
3312	B-48	III	387.8~383.2	土器	底部	D				裏: 橙色5YR6/6 表: にぶい橙色7.5YR6/4	石灰
3313	E-47	III	260.7~258	土器	底部	D				裏: 橙色5YR6/6 表: にぶい黄褐色10YR6/3	
3314	D-45	III		土器	底部	D				橙色5YR6/6	石英、小石
3315	B-48	III		土器	底部	D				裏: にぶい褐色7.5YR5/4 表: 明赤褐色5YR5/6	石灰、チャート
3316	不明	I		土器	底部	D				裏: にぶい黄褐色10YR4/3 表: 橙色5YR6/6	チャート
3317	B-48	III	321~318	土器	底部	D				裏: 明赤褐色2.5YR5/8 表: 橙色5YR6/6	石灰、小石
3318	C-48	III	309.9~288.7	土器	底部	D				橙色7.5YR6/6	石灰、チャート
3319	D-51	III	263.9~262.3	土器	底部	D				明赤褐色2.5YR5/8	石灰
3320	B-48	III石組撤去時	352.2~333.7	土器	底部	D				裏: 明赤褐色5YR5/6 表: にぶい黄褐色10YR4/3	石灰、石英
3321	D-46	V	294.5~287.5	土器	底部	D				橙色2.5YR6/6	石灰、石英
3322	B-50	II		土器	底部	D				3.7 裏: にぶい黄褐色10YR4/3 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰
3323	C-48	III	265.7	土器	底部	D				1.7 裏: 橙色2.5YR6/6 表: にぶい黄褐色10YR4/3	
									4.2 裏: 橙色2.5YR6/6 表: にぶい黄褐色10YR4/3	石灰	
3324	A, B-48	褐色混疊土層		土器	底部	E				裏: オリーブ褐色2.5YR4/3 表: にぶい黄褐色10YR7/4	石灰、石英
3325	F-47	III	268.8	土器	底部	E				にぶい黄褐色10YR6/3	石灰、石英、チャート
3326	B-48	III		土器	底部	E				5.6 明赤褐色2.5YR5/8	石灰、チャート
3327	C-45	II		土器	底部	E				3.6 明赤褐色5YR5/6	
3328	F-47	III	280~275.7	土器	底部	E				11.0 橙色5YR6/6	
3329	C-50	III	277.9~271.5	土器	底部	F				13.5 裏: にぶい黄褐色10YR5/4 表: にぶい赤褐色5YR5/4	石灰、石英



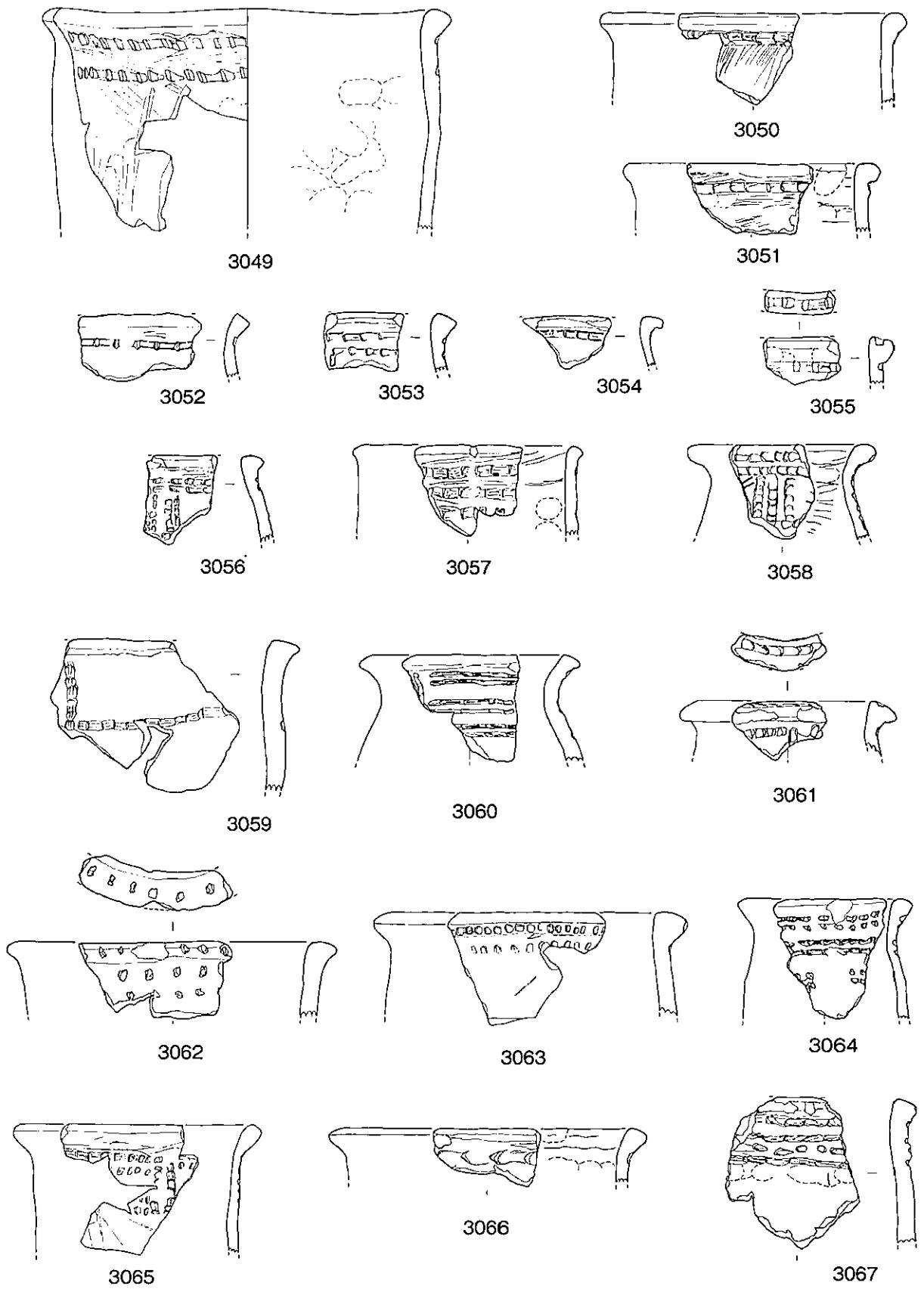
第68図 III地区の土器(縮尺1/3)

0 10cm



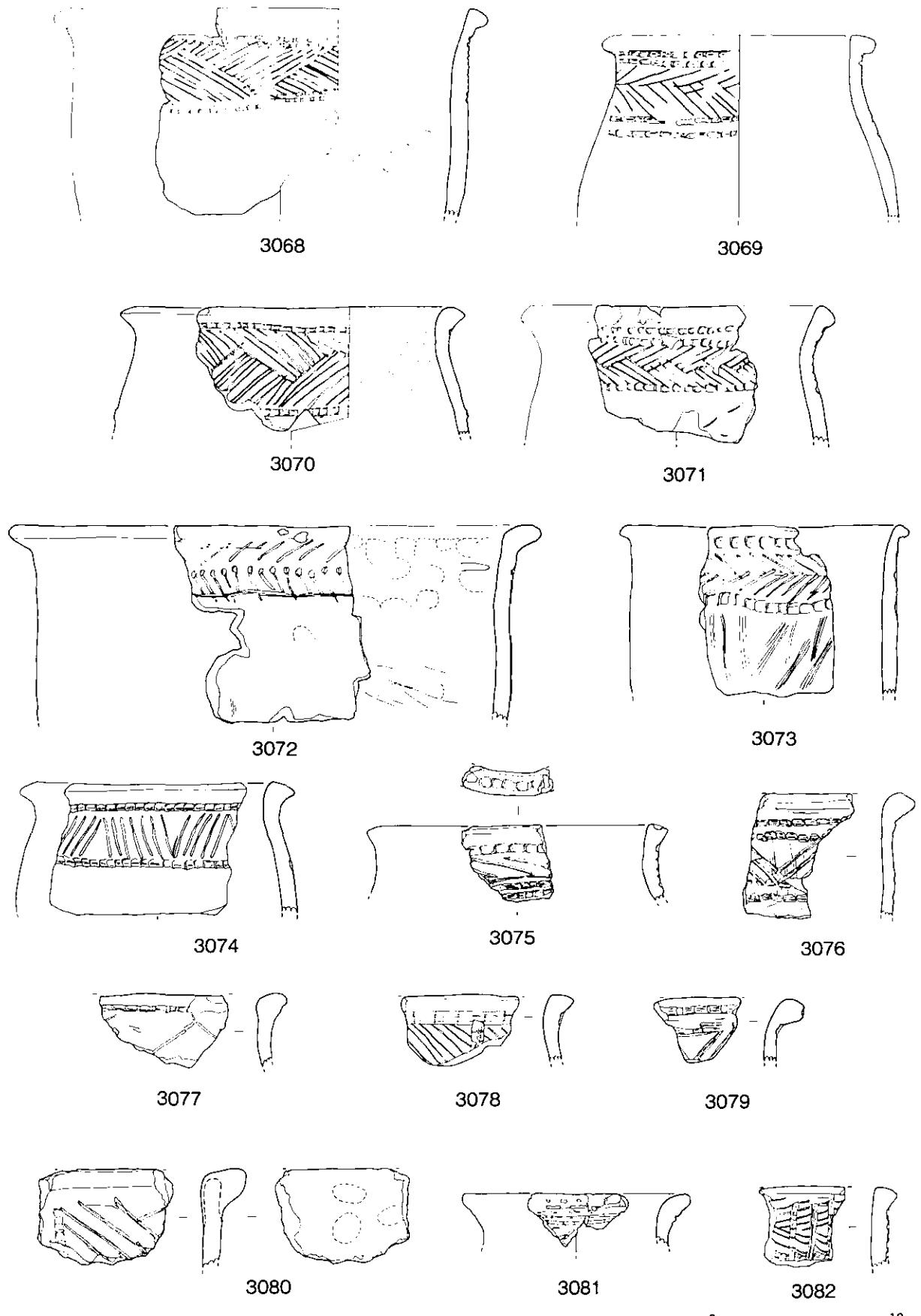
第69図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)

0 10cm

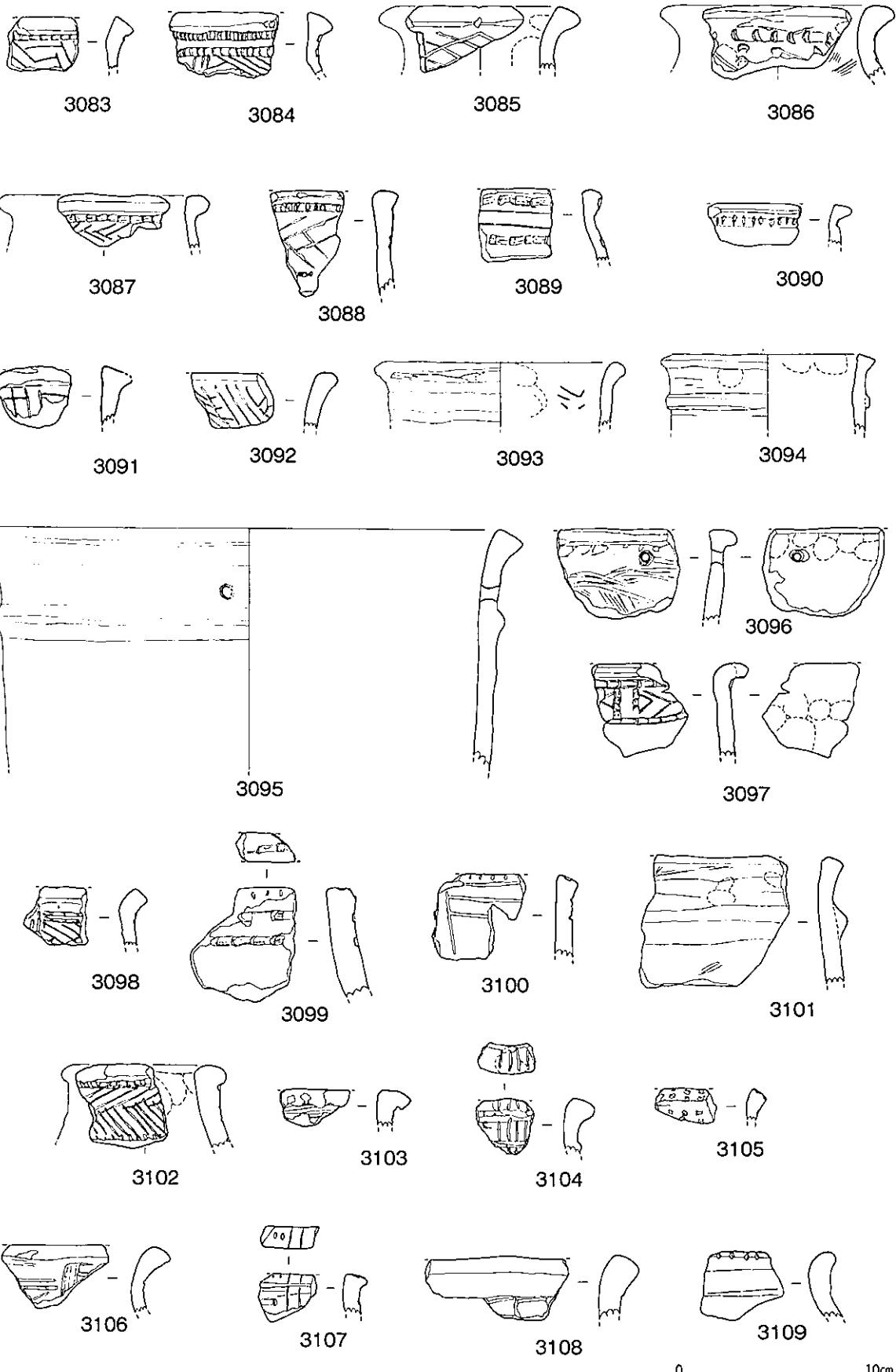


0 10cm

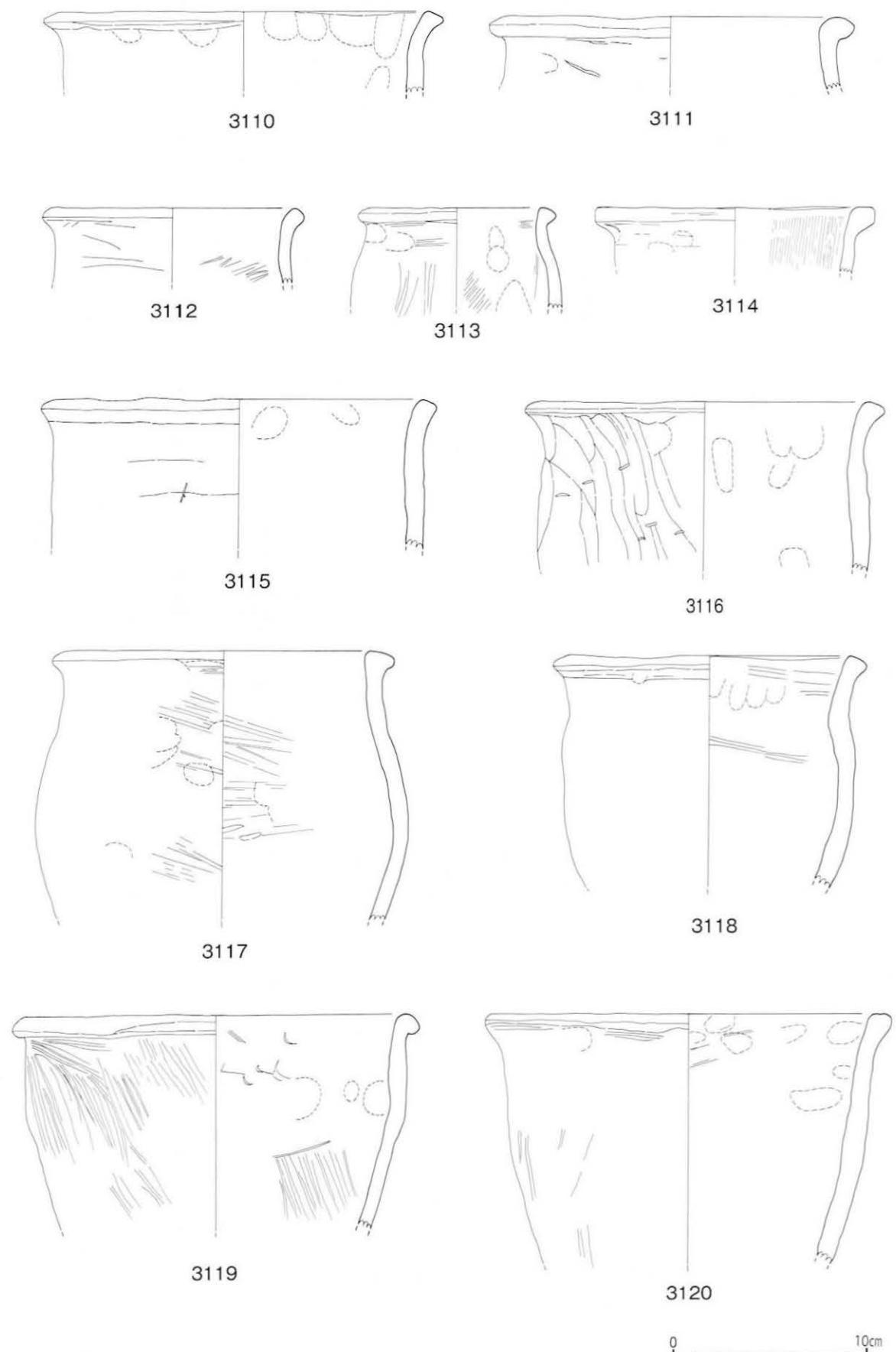
第70図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)



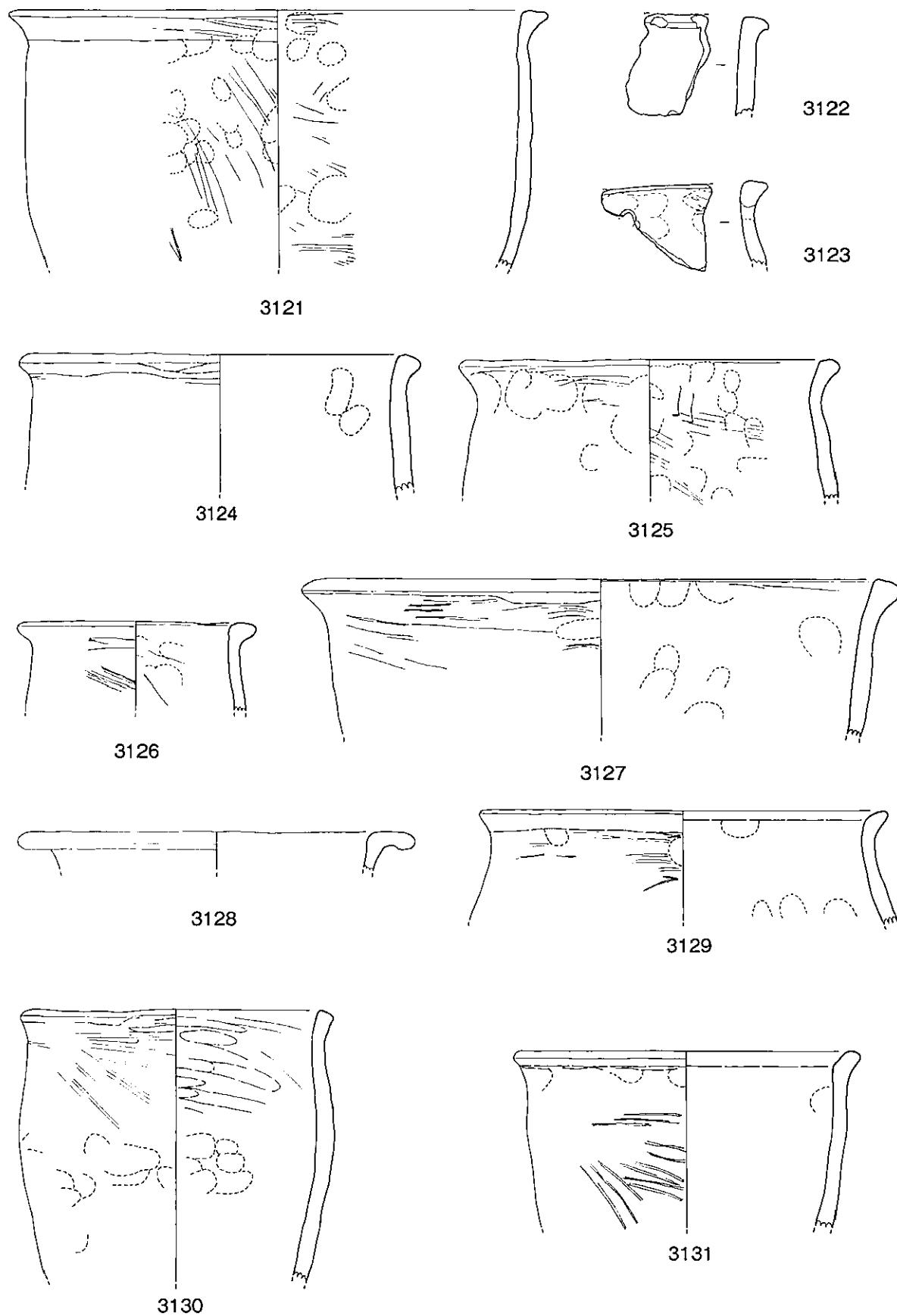
第71図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)



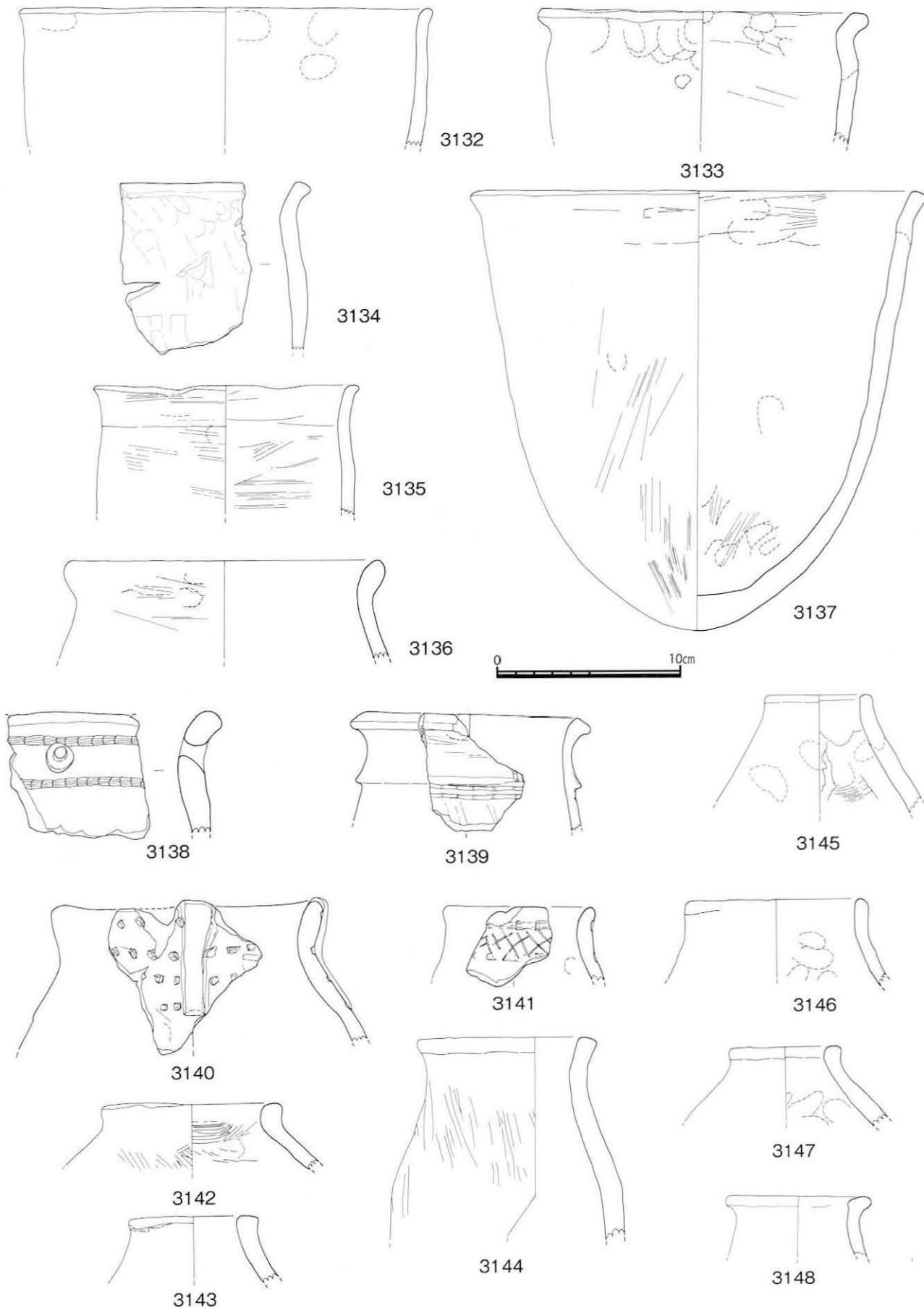
第72図 III地区の土器(縮尺1/3)



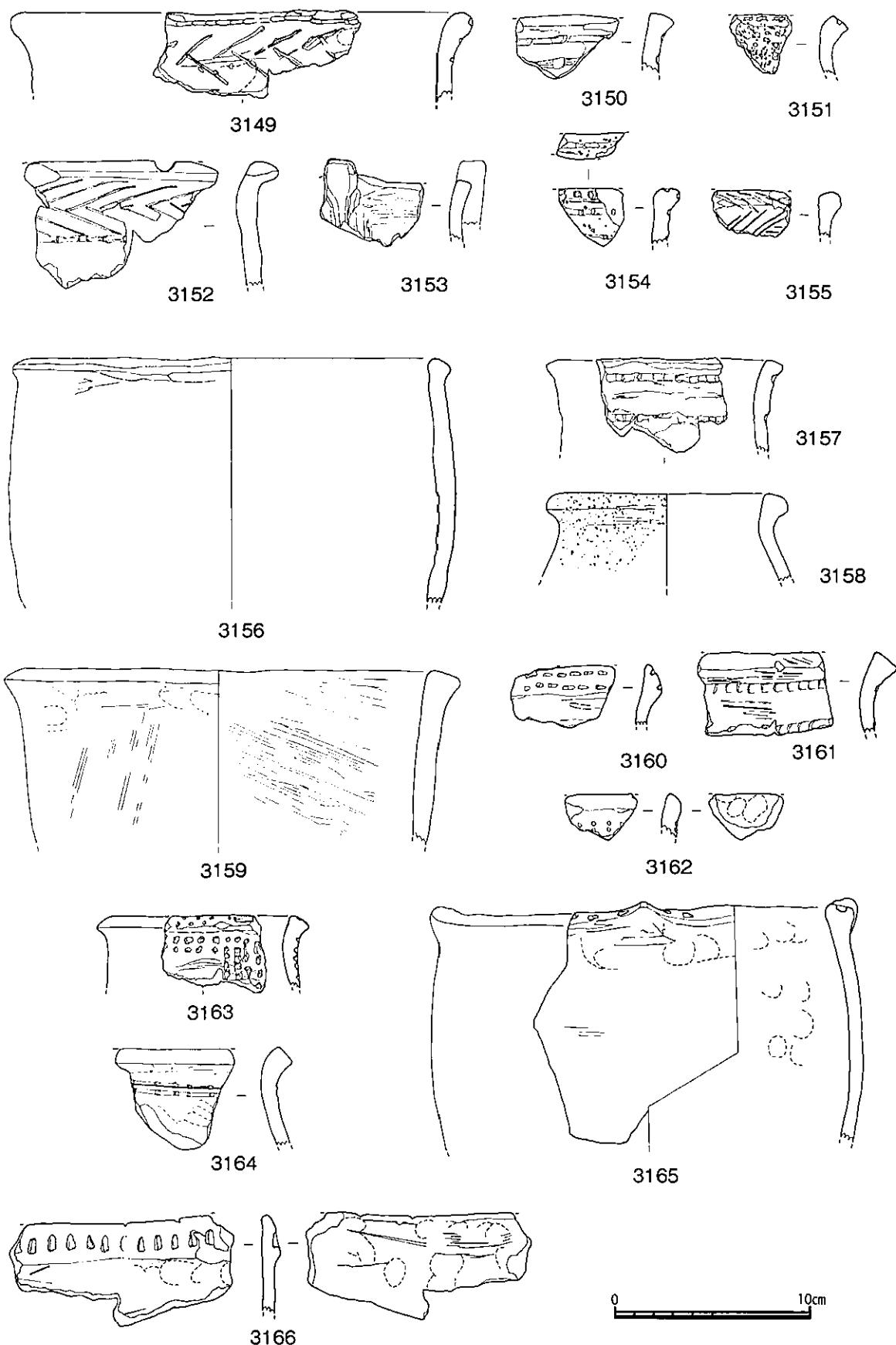
第73図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)



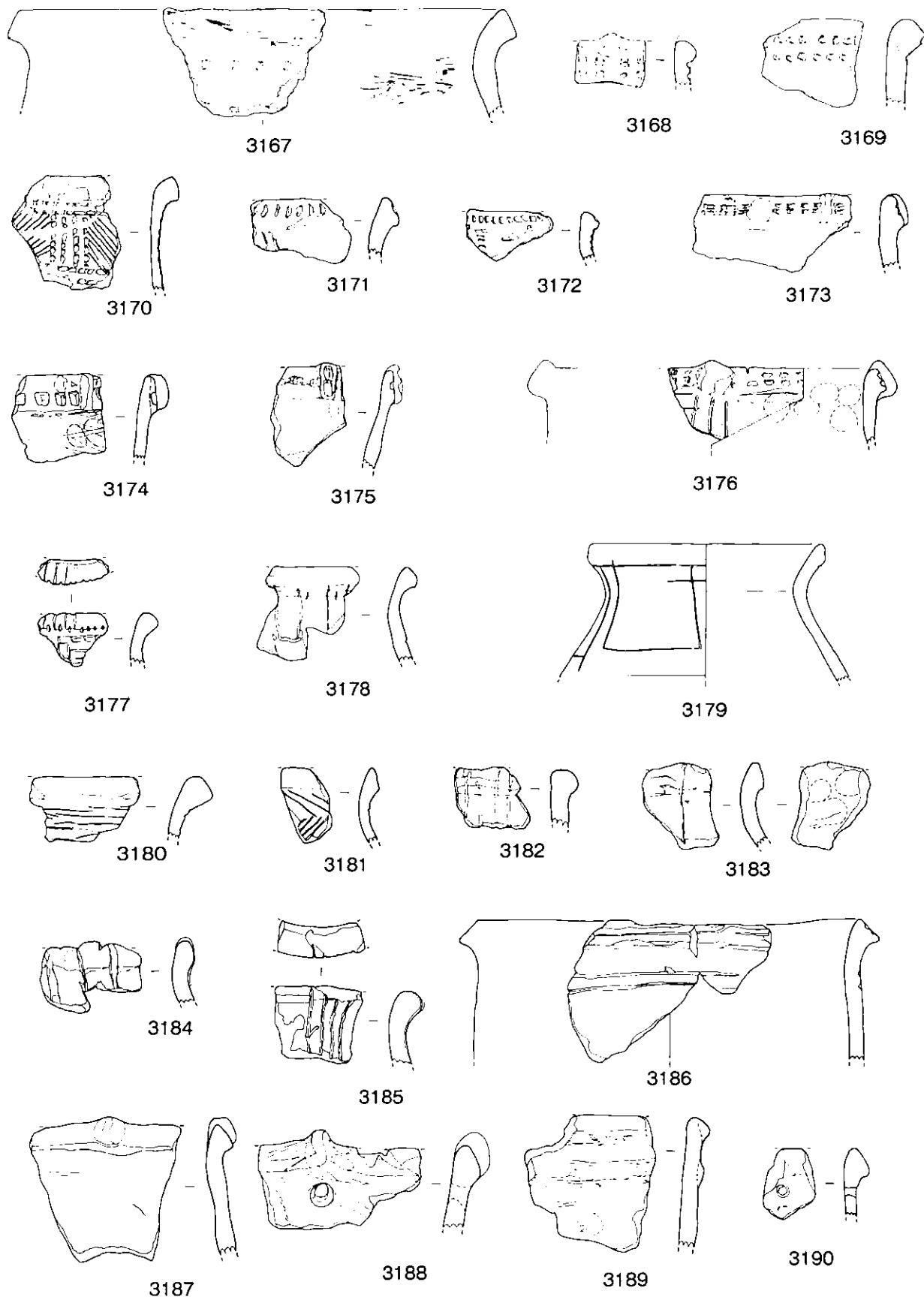
第74図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)



第75図 III地区の土器 (縮尺1/3)

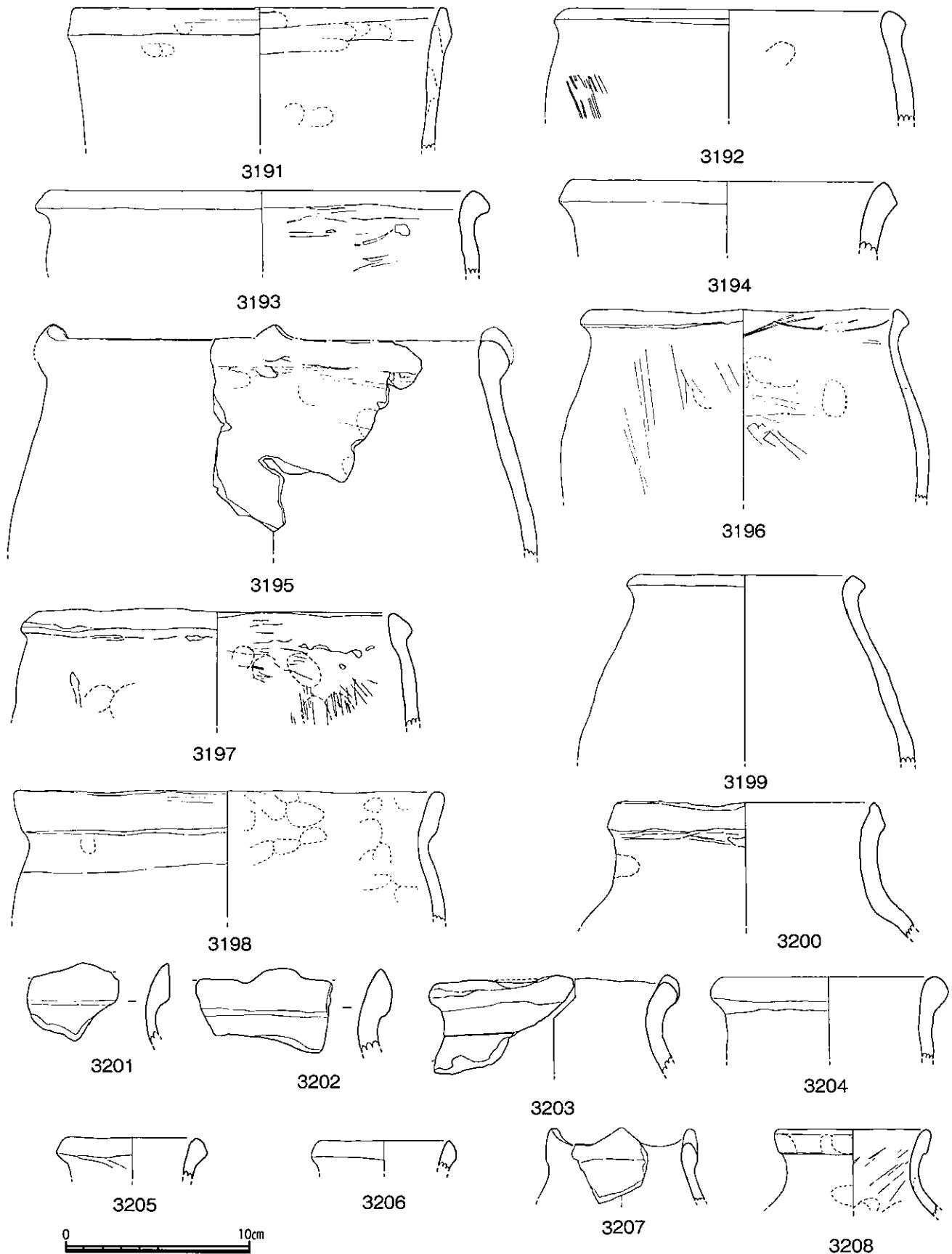


第76図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)

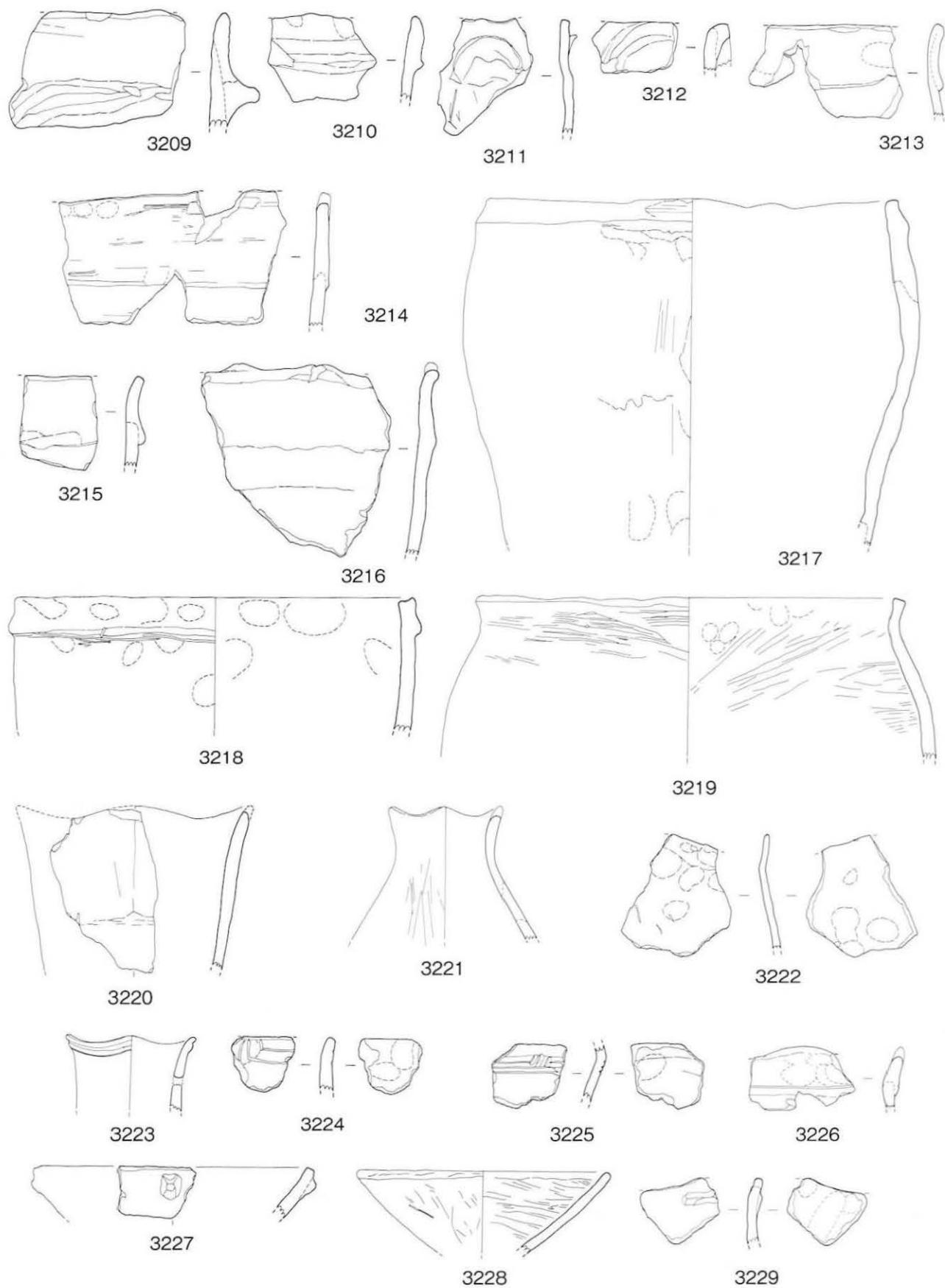


第77図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)

0 10cm

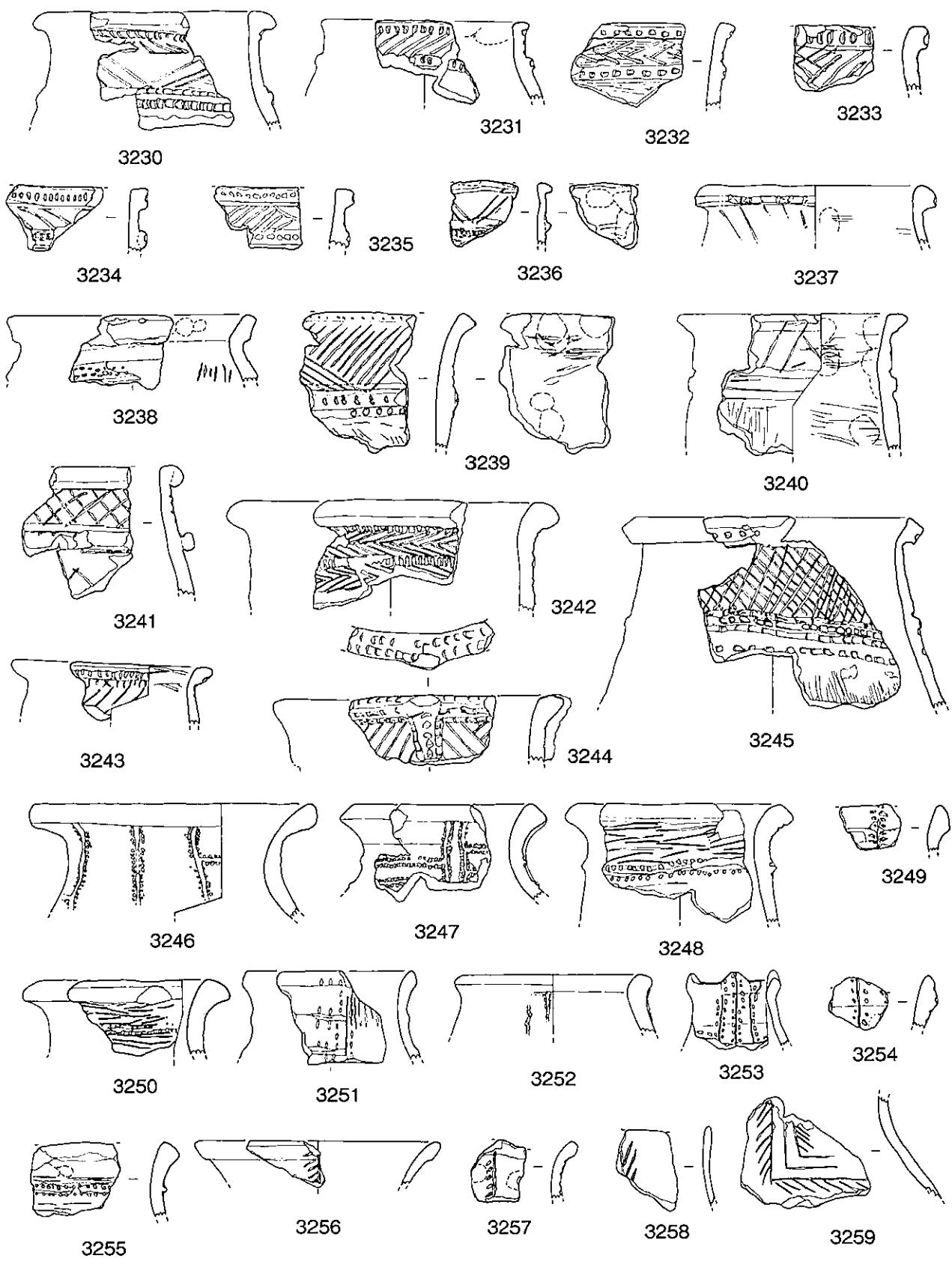


第78図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)



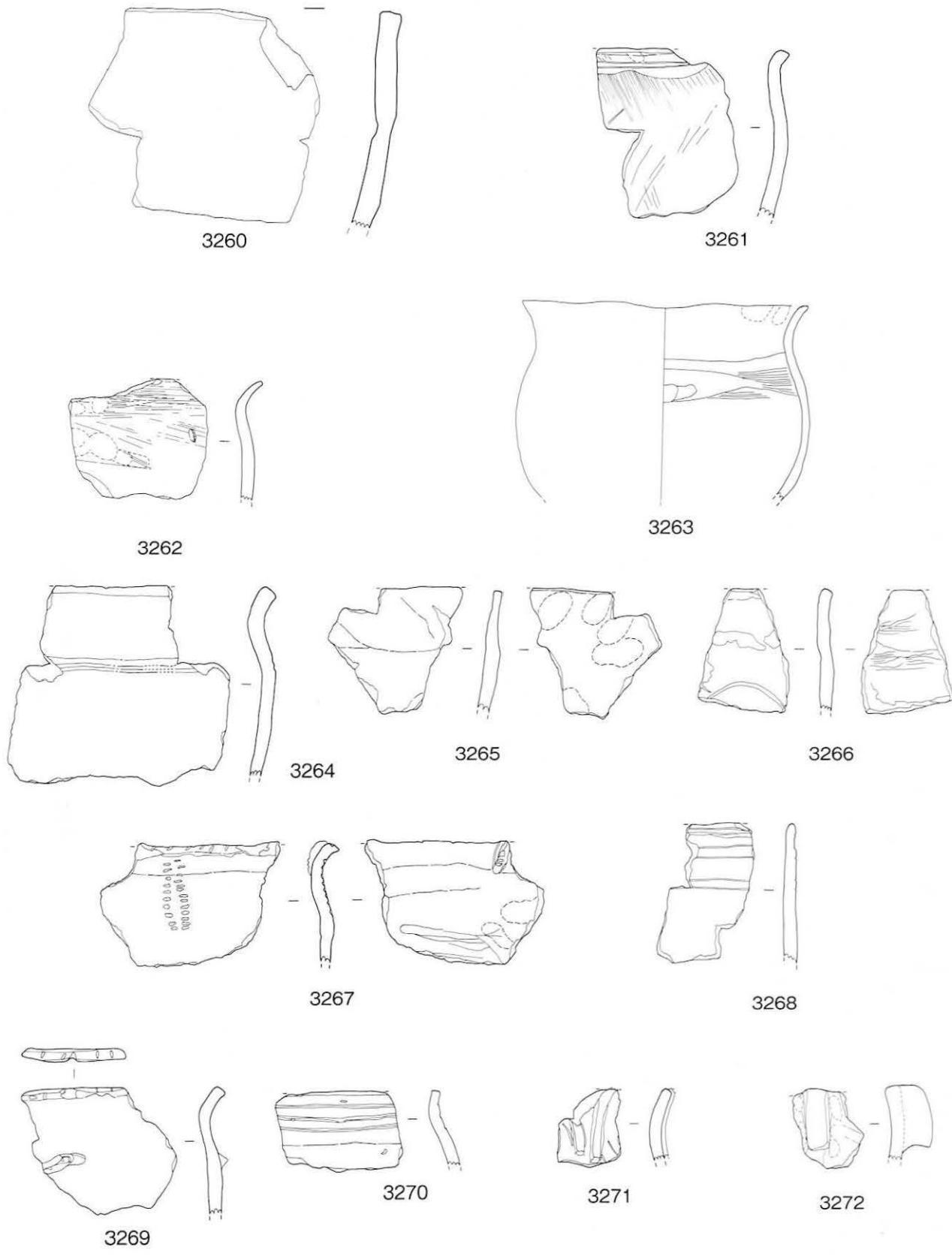
第79図 III地区の土器(縮尺1/3)

0 10cm



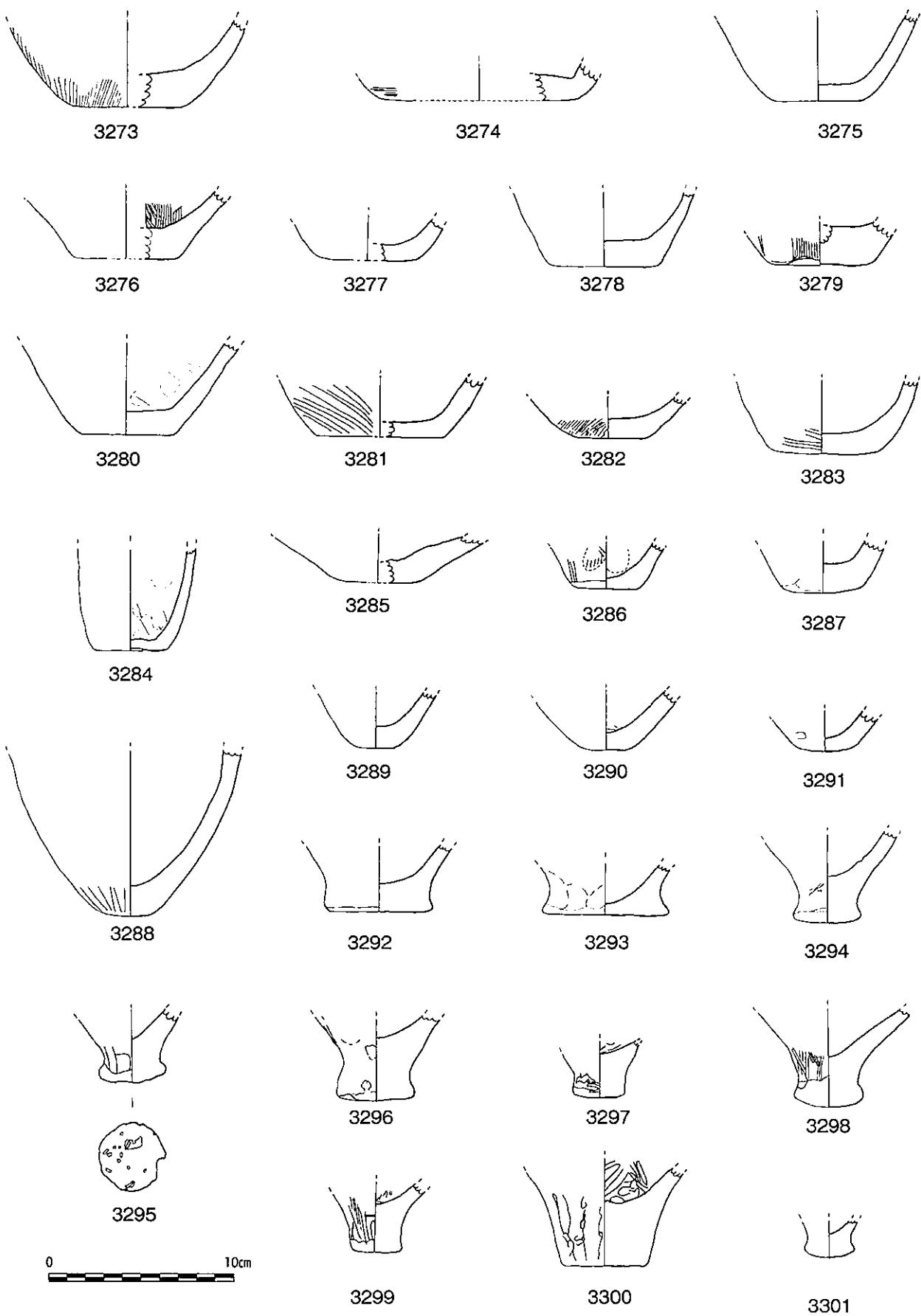
0      10cm

第80図 Ⅲ地区の土器(縮尺1/3)

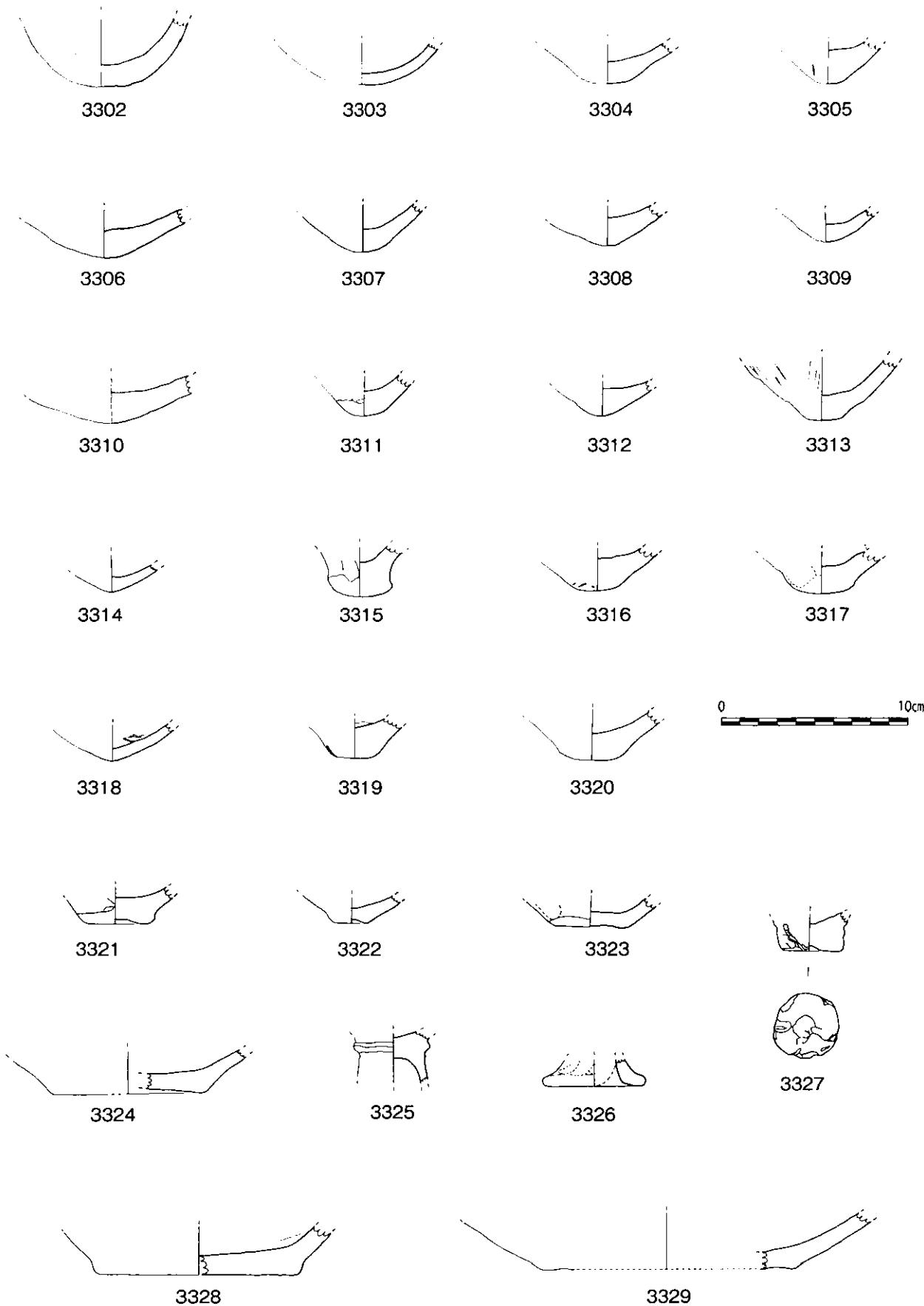


0 10cm

第81図 III地区の土器(縮尺1/3)



第82図 III地区の土器(縮尺1/3)



第83図 III地区の土器(縮尺1/3)

## 2. 石器・石製品

石器および石製品として取り扱った資料は、第25表に示すとおり444点を数える。沖縄諸島の貝塚時代中期（縄文時代晩期相当期）に属する遺跡から出土する石器は、その組成・種類はこれまでの調査報告において石器（石斧の大型化）、石鏃の増加が顕著であることが知られている。本遺跡の現場での調査において、石鏃の検出が著しく、その地点を中心にチャートの剥片が多数出土することから、極力チャート片を取り上げることに留意した。その結果、482点のチャート片が検出されている。

Ⅲ地区より出土した石器の分類作業に際しては伊是名貝塚出土の土器の分析・報告を執筆担当した小田静夫氏（東京大学教養学部講師）に石器を見ていただく機会を得た。従って、本稿で扱う石器の器種分類は、その際の小田氏の分類に従い、伊是名貝塚（小田2001）を参考とした。

なお、各器種における細分類は、完形資料および全形を推察することが容易な資料を対象とした。

### （1）石核石器

母岩を核として打割し、また磨製された石器で礫塊石器に劣らない重量を有する大型石器が多い。種類には礫器、磨製石斧があげられる。

#### 1) 磨製石斧（3330～3347）

3330～3347は石斧で、合計で24点検出されている。18点を図示した。両刃や片刃の刃部形態を含め幾つかのタイプに細分はある。3330～3336・3339は基部が刃部よりも細くなるバチ形の石斧。輝

第25表 Ⅲ地区出土遺物集計表

器種 層序	石核石器					剥片石器									両面加工石器	剥片
	磨製石斧	ノミ状石器	打製石斧	刃器	石核（黒曜石）	石鏃	石鏃未製品	尖頭状石器	錐状石器	ナイフ形石器	スクレイパー	スクレイピードラウンド	エスキュー・ピエキス	U-フレイク		
不明 搅乱						1	1		1		10			7		1
I層	4	1	3		1					1						1
II層	4			1		10	5		1		15	1		7	5	3
III層	13	3				17	4	1		1	30	1	1	22	7	1
IV層																
V層	1															
小計	22	4	3	1	1	28	10	1	2	2	55	2	1	36	12	1
10																

器種 層序	礫塊石器											その他品	合計			
	磨石	凹石	敲石	砥石	石皿	ペツキング	フケアブリ	ハストマーン	チヨバ	チヨツピングル	円盤状石器	デスク	石板	台石		
不明 搅乱	10	3	2	3	2			4			2	2				49
I層	13	3	9	1	1		1								1	40
II層	9	4	5	1			5	8		1	1	3	1			90
III層	48	19	2	8	9	2	14	14	2		4	3	1	1		233
IV層	7			1			2	2								12
V層	10	3	1	3			1					1				20
小計	97	32	19	17	12	2	23	28	2	1	1	9	7	1	2	444

緑岩、砂岩、斑レイ岩を材とする。3334は刃部が敲打によって破損したものとみられる。3337・3338は扁平定角式の石斧で、3338は片刃の石斧。3330は基部に滑面を、3336・3338は側縁部に敲打痕を認めいずれも着柄痕等と推量される。また、3330・3338は刃部に直行、3340・3346は刃部に斜行する線条痕を認めいずれも使用痕と推量される。

## 2) 石核（黒曜石）

3399は石器製作の素材である「剥片」を剥離するために用意された石の核で、表面に剥片を剥離した条面（剥離痕）が認められる。

### (2) 剥片石器

母岩より打割して生じた剥片を用いた石器で、硬質の石材を用いた小型の石器が多い。種類には石鏸、尖頭状石器、ナイフ状石器、ナイフ形石器、錐状石器、削器（スクレイパー）、円形搔器（ラウンド・スクレイパー）、U-フレイク、ノッチがある。

#### 1) 石鏸

石鏸は、石を用いて製作された弓矢の矢の先端につける矢じりである。素材・製作加工の分類において、打製石器に分類される。石材には加工しやすく、割れ口が鋭利になるチャートや黒曜石の利用が多い。本遺跡検出の石鏸においてもチャート・黒曜石を素材に用いている。

本調査においてⅢ地区のB-47地点を中心に28点の石鏸が検出された。いずれの資料も形状が三角形を呈する無茎タイプの石鏸である。基部に注目すると、抉り状に凹みを持つものと、抉り状の凹みのない直線的なものに二分することができる。28点の資料において、前者は21点、後者は4点。破片であるため、いずれのタイプにも分類することのできない資料が3点となっている。

また、石鏸の未成品と推察される石鏸状石器（3376～3384）が10点検出された。

基部に抉り状の凹みを持つもの（3348～3351、3354～3356、3360～3365、3368～3370、3372、3373、3375）。

基部に抉りが無く直線的になるもの（3352、3353、3358、3371、3373）。

基部が欠損し分類の不明なもの（3257・3359・3366・3367）。

#### 2) 尖頭状石器

3385は尖頭器の基部にあたる部分に類似する資料であるが、南西諸島において尖頭器や石鏸の基部につまみ状の柄（茎）を持つ有茎石器が認められないことから、類例資料の増加を待ちたい。

#### 3) 錐状石器

3386は剥片の一部に先端の尖った刃部をもつ石器。穿孔に用いる道具。

#### 4) ナイフ形石器

3387・3388は剥片石器の一種で、刃部は剥片の鋭い縁辺を利用し、背面となる打面に調整が行われている。ナイフ形石器に類する資料であるが当該資料も南西諸島では類品が少なく、資料の増加を待ちたい。3389は両面加工の石器で、長軸に刃部を備える様子からナイフ形石器（？）とする。

#### 5) 削器（スクレイパー）

3390～3392は剥片の側縁に、連続的な調整によって刃部を作り出した石器である。

#### 6) 円形搔器（ラウンド・スクレイパー）

3393・3394円形・長円形の器体のほぼ全周に急傾斜角度調整による刃部を設けた石器である。

#### 7) U-フレイク

3395～3397剥片の一種。刃部の加工調整は認められないが、使用の結果と推定される微細剥離の認められる不定形石器である。「使用痕のある剥片」と称されるものに相当する。36点出土。

#### 8) ノッチ

3398縁辺の一部に挿入状の調整加工が施される不定形石器である。「挿入石器」と称される石器に相当する。12点出土。

### (3) 磔塊石器

母岩となる自然石をほとんど加工することなく、石器として利用したものである。種類には磨石、凹石、敲石、砥石、石皿などがある。だが、磨石、敲石、凹石はしばしば「敲打器類」として扱われるよう、明確に区分できないものが多い。

#### 1) 磨石

3400～3413は片手で握れる程度の大きさで、平面形態が楕円形を呈する扁平礫を利用している磨石である。本貝塚のⅢ地区から出土した磨石は、形態により次の5種類に分類することができるが、中には敲打による凹部を有する資料もある。

1類：平面及び縁辺部が整形され、立体形態から「石鹼形」に類似する定形石器（3400～3404）。11点出土する。

2類：平面形態は円形を呈し、指先で摘んで使用する小型の定形磨石（3405・3406）。3点出土する。

3類：平面形態は円形や楕円形など形態差は認められるが、磨り面を三面有するため断面形態が角丸の三角形（おむすび形）を呈するのが特徴となる（3407～3409・3413）。4点出土する。

4類：卵形あるいは球体を呈し、指先で摘んで使用する小型の定形磨石。硬質砂岩を用いる。（3410・3411）

5類：3414は4類と同様だが、小田静夫氏の分類によると、ファブリケーター（調整具）と称する細かな調整や整形に用いる石器である。本遺跡からは20点検出された。これらの資料に共通する特徴は次のとおりである。斑岩や砂岩を用いた3～5cm大の球形または卵型をなす小型の定形石器である。用途として磨石に含まれるものと考え、本類に分類した。

5類：上記の1類から3類に属さない不定形の磨石（3412）。

#### 2) 凹石

3415～3419は、凹石である。片手で持てる程度の扁平な円礫を利用し、平坦面（両面）の中央に窪みを有し、側面も含め6カ所窪む資料（3415）から側面や平坦面の片方のみ窪むなど窪む箇所を減じ明瞭でないもの、礫の形状がやや棒状になるものなどのバリエーションが認められる。総計32点出土。

#### 3) 敲石

総計19点。完形品4点、欠損品9点、破損品2点、破片が4点検出されている。敲石は、大別すると下記の3類に分けることができる。

- 1類：自然礫の平坦面を叩きに用いた結果、敲打痕が認められるもの。軟質の石材が多い。
- 2類：長軸の端部および側面を叩きに用いた結果、敲打痕が認められるもの。
- 3類：3424・3427は自然礫を叩きに用いた結果、敲打痕が礫の一部に認められるもの。「ハンマー・ストーン」と称される石器で、硬い物を叩く石器と考えられ、チャートなどの硬い自然礫を使用している。

#### 4) 砥石

3428は、板状の石の広い面が平滑になる石器で、磨製石斧などの磨製製品を製作する際の研磨具と考えられる。長軸の両端部に軽微な打痕を有する。

#### 5) 石皿

3429・3430は石皿で、磨石の受け皿となる一対関係にあり、主に植物質食料や堅果類などの粉砕、製粉作業に用いる石器である。

第26表 III地区石器観察表 (1)

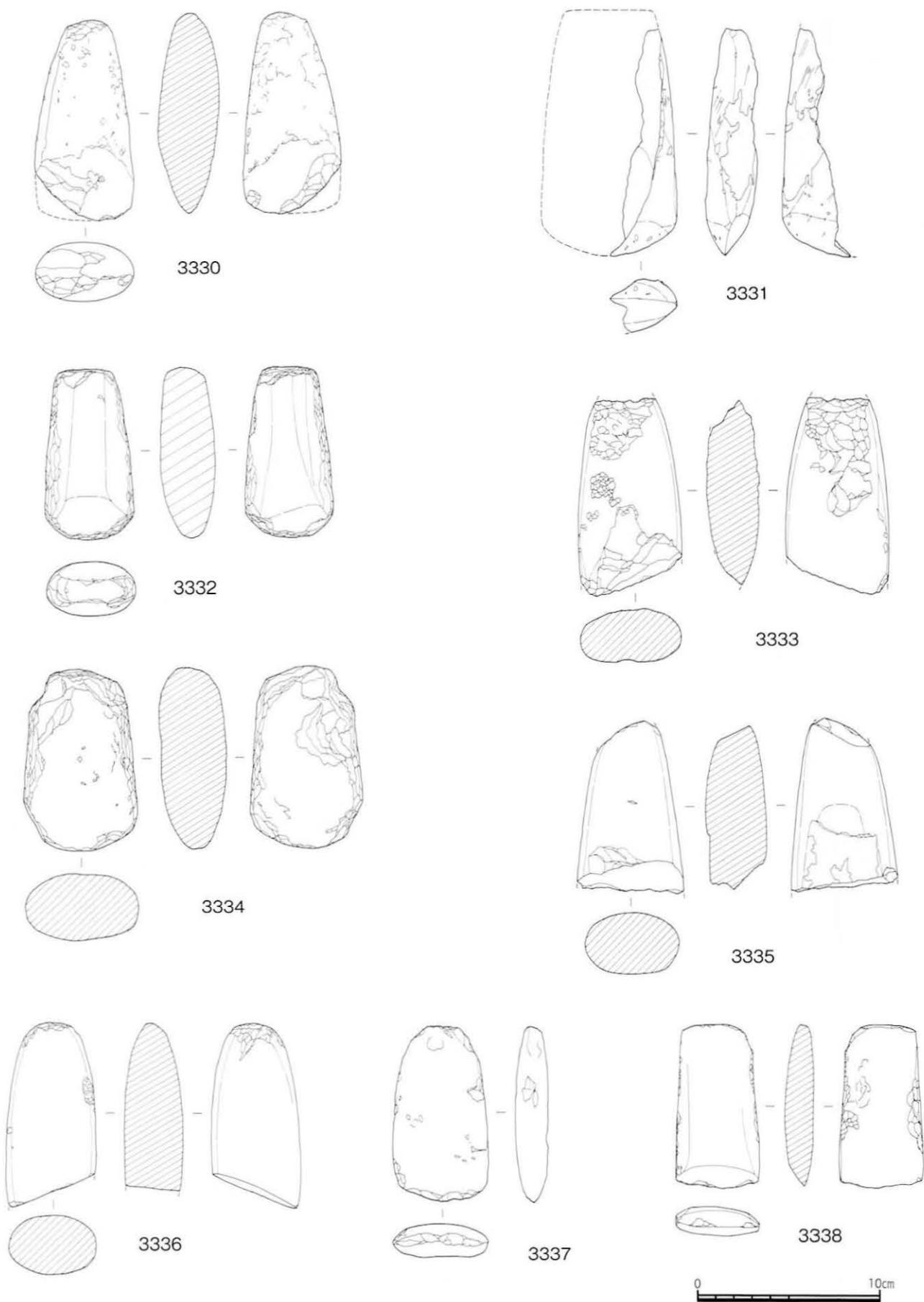
掲載No	グリッド	層	層備考	種別	分類	分類材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	観察
3330	C-46・49	I層	表土	石核石器	磨製石斧	輝緑岩	11.16	5.38	3.36	291.6	乳房状磨製石斧。刃部の約1/2を破損する。刃部の残存部分に刃こぼれが認められる。刃部の研磨のみ丁寧になされる。基部の上部から1/3部位軽微な光沢様が認められる。
3331	C-46	VIII層	417~408.4	石核石器	磨製石斧	砂岩	(11.45)	(2.82)	(2.81)	5.5	全体の大半を欠失する。残存部は全面に入念な研磨がなされる。基部と刃部の間に棱をつくり、残存する刃部には僅かな刃こぼれが認められる。
3332	不明	I層		石核石器	磨製石斧	斑レイ岩	9.42	4.85	2.96	24.62	磨製石斧から敲き石への転用品。刃部は敲打で潰れ面をなす。表面を残し他は敲打により研磨面をなくす。
3333	C-50	III層	266.5~256.8	石核石器	磨製石斧	輝緑岩	(10.4)	5.68	(2.8)	28.11	磨製石斧の刃部と基端部を大きく欠失する。表面の側面と刃部の端に明瞭な棱をつくる。
3334	A-48	II層	418.8~409.3	石核石器	磨製石斧	輝緑岩	9.99	6.25	3.61	372.6	磨製石斧から敲き石への転用品。上端部は敲打による破損がおおく表裏面の広い範囲にまで及ぶ。刃部は敲打により潰れ面をつくる。
3335	A-48	III層	382.6~376.7	石核石器	磨製石斧	輝緑岩	9.56	5.86	3.37	289.4	磨製石斧の基部。刃部を大きく欠失する。基端部、裏面の破損面に転用時の磨り面が認められる。器面は非常に滑らかである。
3336	D-49	II層	293.5~286.6	石核石器	磨製石斧	輝緑岩	10.25	4.87	3.3	293.0	磨製石斧の基部。刃部を摺理面より欠失する。基端部と右側部、左下部に敲き痕が認められる。左右側面と表裏面との間に棱の稜は明瞭さを失く。
3337	B-48	III層	300.7~297	石核石器	磨製石斧	砂岩	9.72	5.23	1.7	146.5	定角式磨製石斧。丁寧に研磨された完形の石斧で僅かに刃こぼれが認められる。表面の刃部と基端部の端に弧状の棱線をつくり、左右縦位にも緩い稜線をつくる。右側面から基頭部、左側部、裏面に敲打痕がみられる。
3338	B-47	III層		石核石器	磨製石斧	輝緑岩	9.11	4.58	1.5	113.6	定角式磨製石斧。敲き石として再利用される。
3339	D-49	III層	248.3~246	石核石器	磨製石斧	斑レイ岩	13.32	6.6	3.7	555.1	両刃磨製石斧。形の整った重量感のある石器。刃部の刃を丁寧に研ぎ出す。刃部の他は表面を僅かに磨るだけで成形され裏面は特に顕著である。刃部と基端部に敲打痕が認められる。
3340	B-48	III層	333.7~330	石核石器	磨製石斧	斑レイ岩	11.01	7.6	2.6	397.8	両刃磨製石斧。僅かの刃こぼれで完形に近い状態である。表面は緩く膨らみ裏面は平坦に成形される。左右側部と基端部に敲打痕が認められる。表面に擦痕が認められる。
3341	D-47	不明	249.4	石核石器	磨製石斧	輝緑岩	(7.96)	6.76	2.28	306.9	両刃磨製石斧の基部。全体の約1/3を欠失する。基端部の敲打痕は顕著で残存部全體に敲打痕が認められる。
3342	不明	不明		石核石器	磨製石斧	輝緑岩	(7.85)	6.37	4.22	460.2	大形磨製石斧の刃部。全体の約1/2を欠失する。刃部に軽微な敲打痕、表裏面の中央部と左右側面に敲打痕を有する。大きく欠失した縁辺部に使用痕と思われる敲打の痕がみられる。
3343	E-47	III層	287.1~274.1	石核石器	磨製石斧	斑レイ岩	8.57	6.84	2.3	207.4	大形磨製石斧の基部。刃部を大きく欠失し基端部を破損する。丁寧に研磨され形の整った磨製石斧である。擦痕が表裏面の広範囲に及ぶ。
3344	B-48	III層	391~372.1	石核石器	磨製石斧	斑レイ岩	6.97	7.97	3.14	282.2	大形磨製石斧の基部。摺理面から大半を欠失する。表面のほぼ中央部に滑らかな溝状の産みを有する。基頭部から裏面にかけて大きく破損する。
3345	A+B-48	II層		石核石器	磨製石斧	輝緑岩	6.8	3.98	1.42	77.0	磨製石斧の基部。全面を丁寧に研磨する。基頭部、両側部に平坦な面をつくり基部との境に明瞭な棱線をつくりだす。裏面の左上部と表裏面に敲打痕が認められる。
3346	B-48	III層		石核石器	ノミ状磨製片刃石斧	斑レイ岩	4.94	2.15	1.17	23.4	ノミ状磨製片刃石斧の刃部で基部を欠失する。全面に丁寧な研磨が施され、正面、右側面、刃部は渴面をなす。側面と表裏面の境には明瞭な棱をつくる。表裏面の主に棱線部位に敲打痕が認められる。
3347	B-46	I層	表土	石核石器	平ノミ状磨製石斧	斑レイ岩	10.44	2.15	1.39	43.2	完形の平ノミ状磨製石斧で斧身のほぼ真中で折損する。自然縫を利用しノミ先を研磨成形する。刃こぼれが僅かにみられる。

第27表 III地区石器観察表 (2)

掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	分類	分類 材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	観察
3348 B-48		III層	433.7~391	剥片石器	石鎌	チャート	2.05	1.82	0.63	1.20	完形。抉り
3349 C-48		III層	307.9~294.6	剥片石器	石鎌	チャート	1.70	1.88	0.30	0.70	完形。抉り
3350 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	石鎌	チャート	2.01	1.84	0.60	1.50	完形。抉り
3351 B-47		III層	415.2~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.66	1.56	0.31	0.50	完形。抉り
3352 B-48		III層	433.7~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.86	1.67	0.49	1.20	完形。基部直線
3353 B-48		III層	433.7~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.86	1.52	0.37	1.00	完形。基部直線
3354 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	石鎌	チャート	1.28	1.62	0.33	0.50	破損。抉り
3355 B-48		III層	433.7~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.78	1.41	0.41	0.90	破損。抉り
3356 B-47		II層	425.8~399	剥片石器	石鎌	チャート	1.93	1.68	0.59	1.30	破損。抉り
3357 B-47		II層	425.8~399	剥片石器	石鎌	チャート	1.89	0.82	0.35	0.50	破損。抉り
3358 B-47		III層	415.2~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.59	1.44	0.32	0.60	破損。基部直線
3359 B-47		III層	415.2~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.51	1.15	0.32	0.40	破損。分類不可
3360 B-47		III層	415.2~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.72	2.63	0.49	1.40	破損。抉り
3361 B-47		III層	415.2~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.25	2.17	0.39	0.70	破損。抉り
3362 B-48		III層	433.7~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.91	1.23	0.42	0.80	破損。抉り
3363 B-47		III層	333.3前後	剥片石器	石鎌	チャート	1.75	1.89	0.41	1.00	破損。抉り
3364 E-48		III層	296.7~280.3	剥片石器	石鎌	チャート	2.17	1.38	0.26	0.40	破損。抉り
3365 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	石鎌	チャート	1.85	1.37	0.36	0.90	破損。抉り
3366 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	石鎌	チャート	1.39	1.76	0.38	1.00	破損。分類不可
3367 B-48		III層	433.7~391	剥片石器	石鎌	チャート	1.54	1.07	0.28	0.30	破損。分類不可
3368 B-47		III層	398.6~366.3	剥片石器	石鎌	チャート	1.34	2.06	0.28	0.50	破損。抉り
3369 F-47		III層	275.9	剥片石器	石鎌	チャート	1.61	1.89	0.33	0.80	破損。抉り
3370 F-48		不明	266.6~262.4	剥片石器	石鎌	チャート	1.41	1.62	0.33	0.60	破損。抉り
3371 D-46		III層	294.9~289.4	剥片石器	石鎌	チャート	2.29	1.85	0.67	2.10	完形。基部直線
3372 E-47		II層	298.9~293.4	剥片石器	石鎌	チャート	1.44	1.46	0.40	0.80	破損。抉り
3373 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	石鎌	黒曜石	1.98	1.22	0.51	0.80	破損。基部直線
3374 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	石鎌	黒曜石	1.43	1.34	0.30	0.50	破損。抉り
3375 C-47		II層	339.1~300.3	剥片石器	石鎌	チャート	2.28	1.89	0.77	3.10	破損。抉り
3376 D-48		II層	315.5~296.1	剥片石器	鐵の未製品	チャート	2.40	2.35	0.75	3.90	
3377 B-48		III層	415.2~391	剥片石器	鐵の未製品	チャート	2.83	2.78	0.94	6.90	
3378 D-46, 47		II層	300~284.4	剥片石器	鐵の未製品	チャート	2.99	2.93	1.21	7.00	炉跡周辺
3379 E-47		III層	287.1~274.1	剥片石器	鐵の未製品	チャート	3.49	2.66	1.41	10.40	
3380 A-B-48		III層		剥片石器	鐵の未製品	チャート	1.90	1.85	0.51	1.60	
3381 B-47		III層	339.7~322.9	剥片石器	鐵の未製品	チャート	2.18	1.86	0.45	1.80	
3382 B-47		II層	371.3~351	剥片石器	鐵の未製品	チャート	2.55	2.00	1.03	4.50	
3383 A・B-48		II層	トレンチ	剥片石器	鐵の未製品	チャート	2.71	2.32	0.78	5.20	
3384 A・B-48		II層	トレンチ	剥片石器	鐵の未製品	チャート	2.16	2.00	0.94	4.10	
3385 B-48		III層	433.7~391	剥片石器	尖頭状石器	チャート	2.53	1.69	0.52	2.00	破損。尖頭状石器の基部 (小田氏分類)
3386 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	錐状石器	チャート	4.17	1.55	0.86	5.10	完形
3387 B-47		III層	433.7~406.8	剥片石器	ナイフ形石器	チャート	1.43	1.30	0.49	1.00	破損。ナイフ形石器の基部 (小田氏分類)
3388 B-49		I層		剥片石器	ナイフ形石器	チャート	10.11	3.97	1.00	37.30	完形
3389 E-46		III層	291~274.1	剥片石器	両面加工石器	チャート	3.35	1.38	0.56	2.70	
3390 C-45		不明	320.6	剥片石器	スレーブ(削器)	黒曜石	2.39	1.90	1.07	3.50	表面清掃
3391 E-46		III層		剥片石器	スレーブ(削器)	チャート	3.12	2.51	0.95	7.50	スレーブ (以下小田氏による分類無~137番)
3392 E-46		II層		剥片石器	スレーブ(削器)	黒曜石	2.36	2.15	0.76	2.80	スレーブ
3393 E-47		III層	288.1~286.2	剥片石器	ラウンドスレーブ	チャート	1.89	1.90	0.64	2.20	完形
3394 B-47		II層	371.3~351	剥片石器	ラウンドスレーブ	チャート	4.32	3.50	0.89	12.10	完形
3395 B-47		III層	433.7~406.8	剥片石器	U-フレイク	チャート	3.22	1.91	0.71	3.20	
3396 B-47		III層	415.2~391	剥片石器	U-フレイク	黒曜石	2.11	1.84	0.84	2.30	
3397 B-48		III層	433.7	剥片石器	U-フレイク	チャート	2.27	1.25	0.51	1.00	
3398 B-48		II層	410.1~395.3	剥片石器	ノッチ	チャート	3.85	2.70	0.70	4.94	
3399 C-50		I層	330~313.4	石核石器	石核	黒曜石	3.20	2.45	2.00	11.57	正面左側は風化が著しい

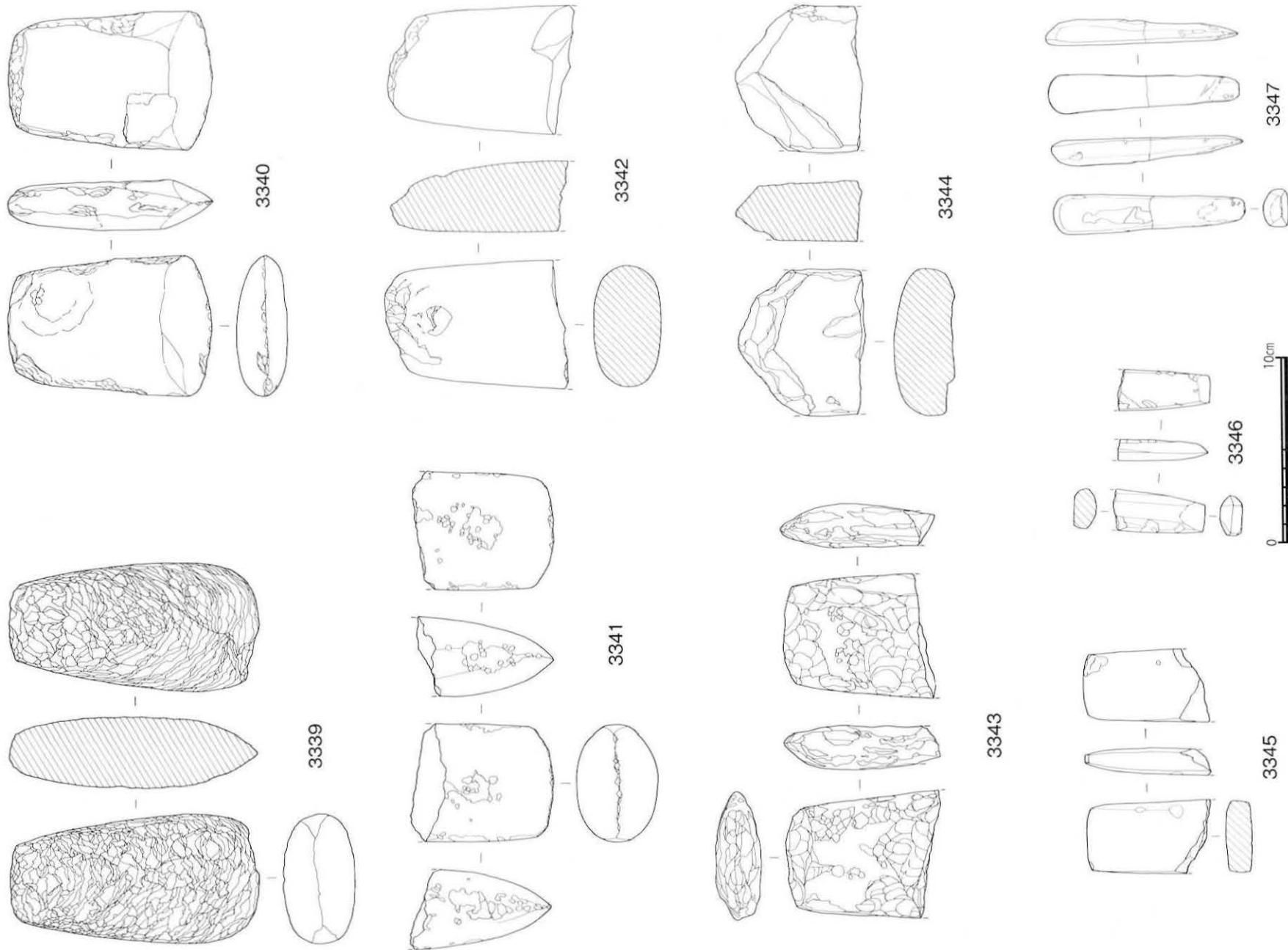
第28表 III地区石器観察表 (3)

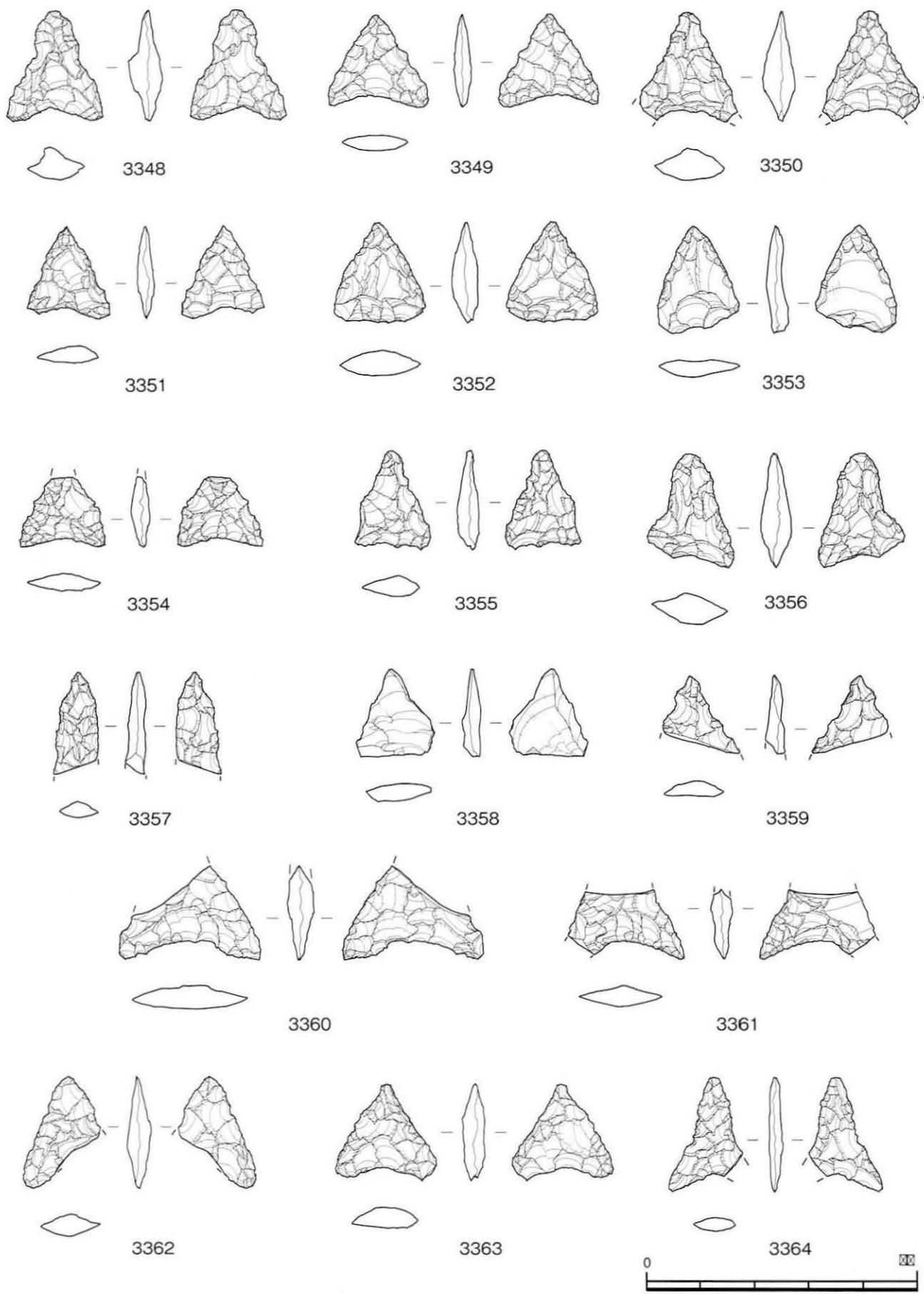
掲載 No	グリッド	層	層備考	種別	分類	分類 材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	観察
3400	D-48	IV層	248~243.7	礫塊 石器	磨石・ 凹石	砂岩	12.068	9.143	5.291	888.1	表面は磨り面、裏面は凹面を有する使用目的が明瞭な石器。裏面中央の凹面周囲に軽微な磨り面が観察される。下端部に僅かな敲打痕が認められる。石鱗型。
3401	D-49	III層	255.9~249.7	礫塊 石器	磨石	砂岩	12.65	8.9	4.86	870.3	表裏面共に滑らかな磨り面を有し光沢をおびる。左右側面とも丁寧に成形される。表面の中央部と側面に軽微な敲打の痕が見られる。石鱗型。
3402	D-50	III層	267.9~264.8	礫塊 石器	磨石	角閃石斑岩	9.62	7.35	5.21	437.0	略六角形を呈する。左右側面に窪み部を有する。表面は平坦な面を成し裏面に条痕が残る。厚みがあり重量感のある磨石。
3403	C-48	IV層	267.4~262.6	礫塊 石器	磨石	砂岩	12.52	9.18	4.48	823.2	表裏面共に滑らかな磨り面を成し光沢をおびる。中央部に軽微な敲打痕が認められる。外周は丁寧に敲打成形され表裏面との裸に明瞭にする。石鱗型。
3404	D-47	V層	249.5	礫塊 石器	磨石	石英斑岩	12.81	8.22	3.87	596.5	表裏面共に滑らかな磨面を有する。外周を丁寧に成形し軽微な磨りを施す。No. 217の遺物とほぼ同じ形の磨石である。
3405	E-47	III層	287.1~274.1	礫塊 石器	磨石	輝緑岩	6.59	(5.43)	4.02	228.0	全体の約1/3を破損する。表裏面に略円形の磨面を有する。外周は丁寧に調整される。
3406	D-49	埋葬人骨取り上げ作業時		礫塊 石器	磨石	斑レイ岩	7.6	(4.93)	4.69	327.9	全体の約1/3を損壊部から破損する。No. 188に形態は類似するが表面の磨面は側面の際まで及ぶ。下端部に敲打痕が認められる。右側面は損壊面を利用したと考えられる。
3407	B-49	III層	表面清掃	礫塊 石器	磨石	輝石安山岩	5.51	6.29	4.06	159.5	平面觀は略三角形を呈する。表面は平坦な磨り面を成し擦痕が認められる。断面は略三角を呈する。
3408	C-46・49	I層	表土	礫塊 石器	磨石	砂岩	10.51	(7.29)	6.07	491.9	全体の約1/4を破損する。三角柱状の三側面に平坦な磨面を有する。上下端部に敲打の痕が認められる。
3409	C-50	V層	266.5~256.8	礫塊 石器	磨石	石英斑岩	8.13	6.58	4.55	239.5	三面に平坦な磨り面を有する。裏面右上部と下端部に敲打の痕が認められる。断面は略三角を呈する。
3410	D-50	III層	267.9~264.8	礫塊 石器	磨石	砂岩	6.29	46.8	40.9	175.7	表裏面に磨りが認められる。上下端部に敲打痕が散在し表面にも僅かに及ぶ。
3411	E-48	III層	268.2~260.4	礫塊 石器	磨石	砂岩	4.24	29.1	2.58	35.9	小型の偏平礫を使用。上下端部に敲打の痕が認められる。
3412	A-48	II層	418.8~409.3	礫塊 石器	磨石	片状砂岩	(1.371)	(9.24)	(4.45)	765.8	正面の上部を損壊面から破損する。裏面も大きく破損し全体の約半分を欠失する。完形品は重量感のある大形の磨石と推察される。正面中央部位に敲打痕が集中し凹部をつくる。下端部、左側部にも敲打痕が認められる。
3413	A-48	不明	330~326.3	礫塊 石器	磨石	砂岩	13.6	15.2	8.35	2343.5	平面觀が略三角形を呈する。重量があるため片手での操作は困難と考えられる。全体的に曲線で構成されるが表面上部に極小な平坦部を有す。明瞭な敲打痕はみられない。
3414	D-48	III層	251.5~241	礫塊 石器	フツブリ ケーブ	石英斑岩	4.06	3.77	3.12	96.1	全体に磨り面は認められない。敲打痕が左側面と下端部に僅かに認められる。右側部は表面が削れた要素を呈する。
3415	B-49	III層	299.7~295.7	礫塊 石器	凹石	斑岩	12.56	10.36	6.04	929.3	表裏面、上下端部、左右側面の六面に敲打痕を有する。磨面は裏部の凹部を中心に僅かに施される。裏面の敲打痕は僅かで左右側面、上下端部は大きく窪み使用頻度の高さ示している。
3416	E-48	III層	239.6~235.4	礫塊 石器	凹石	斑岩	11.96	9.71	4.28	634.0	表面中央部に敲打による凹部を有する。表面部左部に平坦な磨り面を有する。上下端部と左側部に敲打の痕がみられる。裏面は中央部に僅かな敲打痕、下部は中央が緩やかに窪み込む。
3417	C-45	II層	359.4	礫塊 石器	凹石	斑岩	7.87	7.05	4.57	260.5	表面中央部に滑らかな円形の窪み部を有する。窪み部以外の明瞭な使用痕はみられない。
3418	C-48	III層	333.3~326.6	礫塊 石器	凹石	砂岩	8	6.56	3.62	219	表裏面の中央部に略円形の窪み部を有する。上下端部と左右側部に敲打痕を有する。磨面は見られない。
3419	不明	表採		礫塊 石器	凹石	砂岩	15.58	5.85	6.07	71.69	三角柱状を呈し三面に敲打による凹面を有する。特に表面は大きく窪み使用頻度のたかさをす。上下端部に軽微な敲打痕を有する。
3420	B-48	II層	410.1~395.3	礫塊 石器	敲石	砂岩	8.54	6.07	4.34	324.9	表裏面が磨面。上端部、側面は自然面になる。下端部の敲打によりは潰れて面をつくる。
3421	B-46	I層		礫塊 石器	敲石	砂岩	10.88	12.87	7.19	1450.3	大形の敲き石で損壊面で破損する。破損の縁辺部が敲打により潰れ表面は磨り面となる。左側面と下端部に敲打痕が認められる。
3422	C-46	III層	316.9~306.6	礫塊 石器	敲石	石英斑岩	19.4	14.75	7.28	3225.2	大形で重量感のある敲石。下端部が主な使用部位で大きな剥離痕を有し右側部にも敲打痕を有する。
3423	不明	II層		礫塊 石器	敲石	砂岩	10.02	6.07	2.74	247.5	磨石からの転用と考えられる。損壊面から破損した縁辺部を敲き石として使用。上端部と下端部は敲打による潰れ面をつくり、左右側部も僅かに窪む。
3424	F-47	III層	267.8~255.9	礫塊 石器	ハマーストーン	チャート	6.37	5.19	4.63	219.0	チャートの塊を使用。上端部は敲打で潰れ面を成す。下端部は敲打による潰れ面と大きく剥離した面を有する。石器などの硬い物を叩くハンマーストーン。
3425	E-46	III層	291~274.1	礫塊 石器	ハマーストーン	砂岩	7.99	4.25	2.92	132.4	自然礫を使用。右側部を縦位に欠失する。上下端部は敲打による剥離痕を有し、上端部は潰れ面を成す。
3426	B-48	III層		礫塊 石器	ハマーストーン	輝緑岩	4.5	3.45	2.25	63.18	自然縞模様の上、下面に敲打痕を有する。
3427	B-47	II層	388.3~376.8	礫塊 石器	チモシングル トゥール	流紋岩	8.83	6.48	3.6	269.6	両面丸棒、下端部に表裏面から敲打による剥離痕を有し、左側面にも剥離面を有する。
3428	B-48	II層	345.1~319.7	礫塊 石器	砥石	砂岩	17.85	10.22	4.63	1438.3	不定形で板状の製品。器厚が平均し安定感がある。
3429	F-47	III層	252.9	礫塊 石器	石皿	流紋岩	3.5	2.4	0.8	8700.0	全体の約1/3を破損する。磨り面の窪み部周囲に縁を成形するが全面には及ばず残存部の左側部から下部に成形される。外周は敲打による大きな形成がされる。裏面は損壊面からの破損と推察され平坦になり安定感がある。窪み部は3.5cmを測る。
3430	D-49	III層	274	礫塊 石器	石皿	斑岩	4.5	3.1	0.8	23900.0	完形の石皿。表裏面共に使用面となる。磨り面は非常に滑らかで窪む。両面共に据え置いた時に安定感がある。



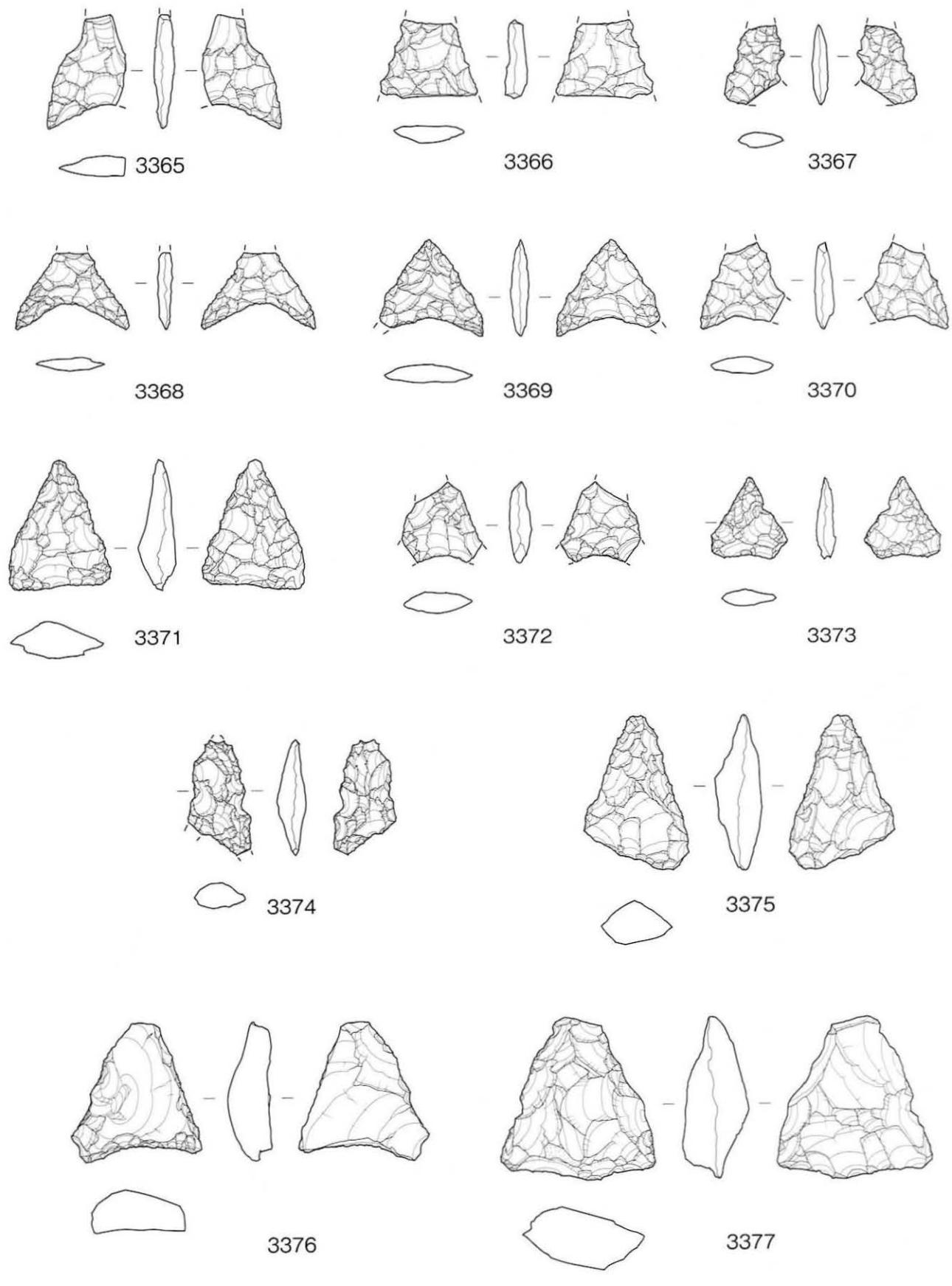
第84図 Ⅲ地区石器(1) (縮尺1/3)

第85図 Ⅲ地区石器(2) (縮尺1/3)

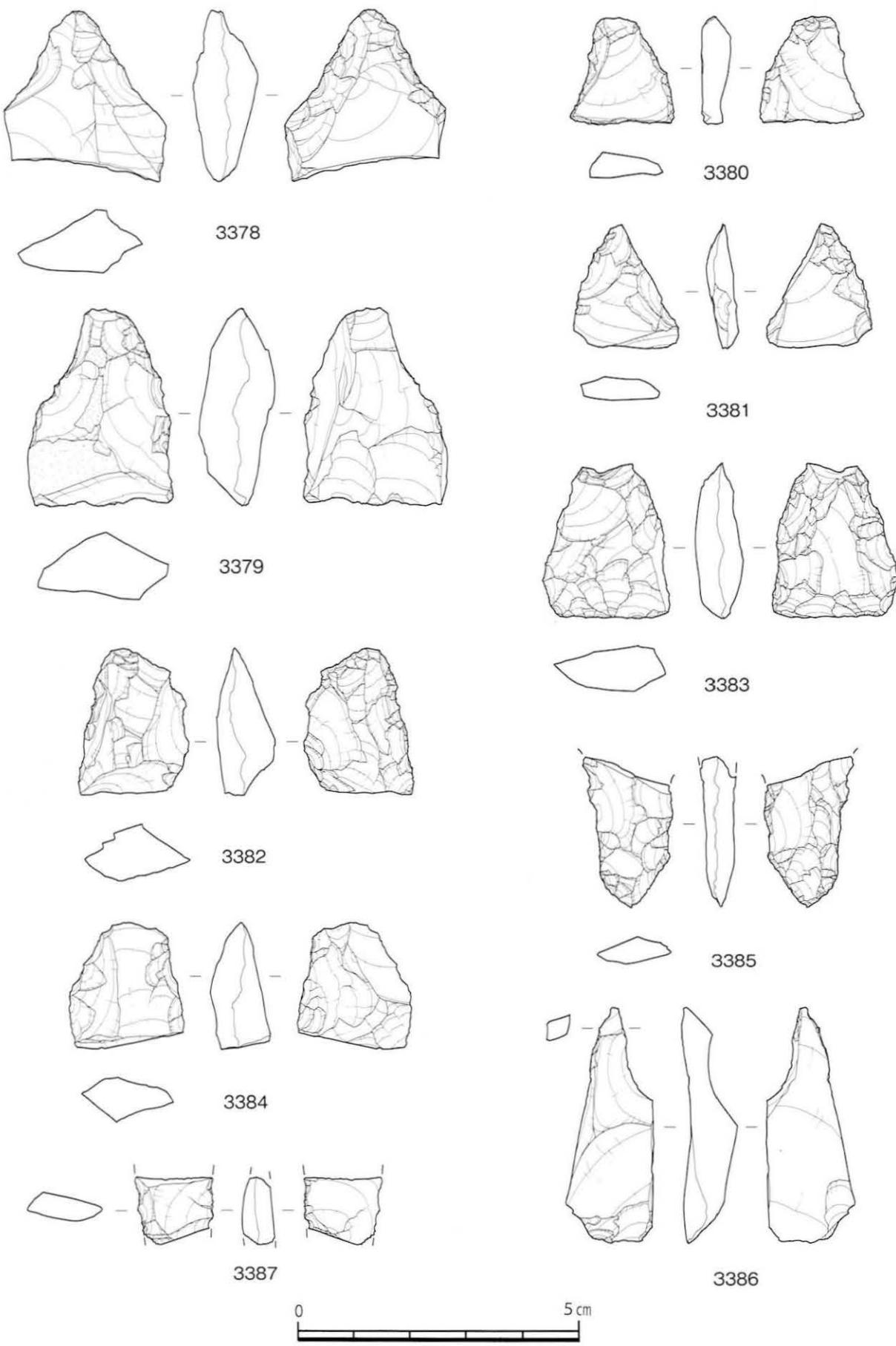




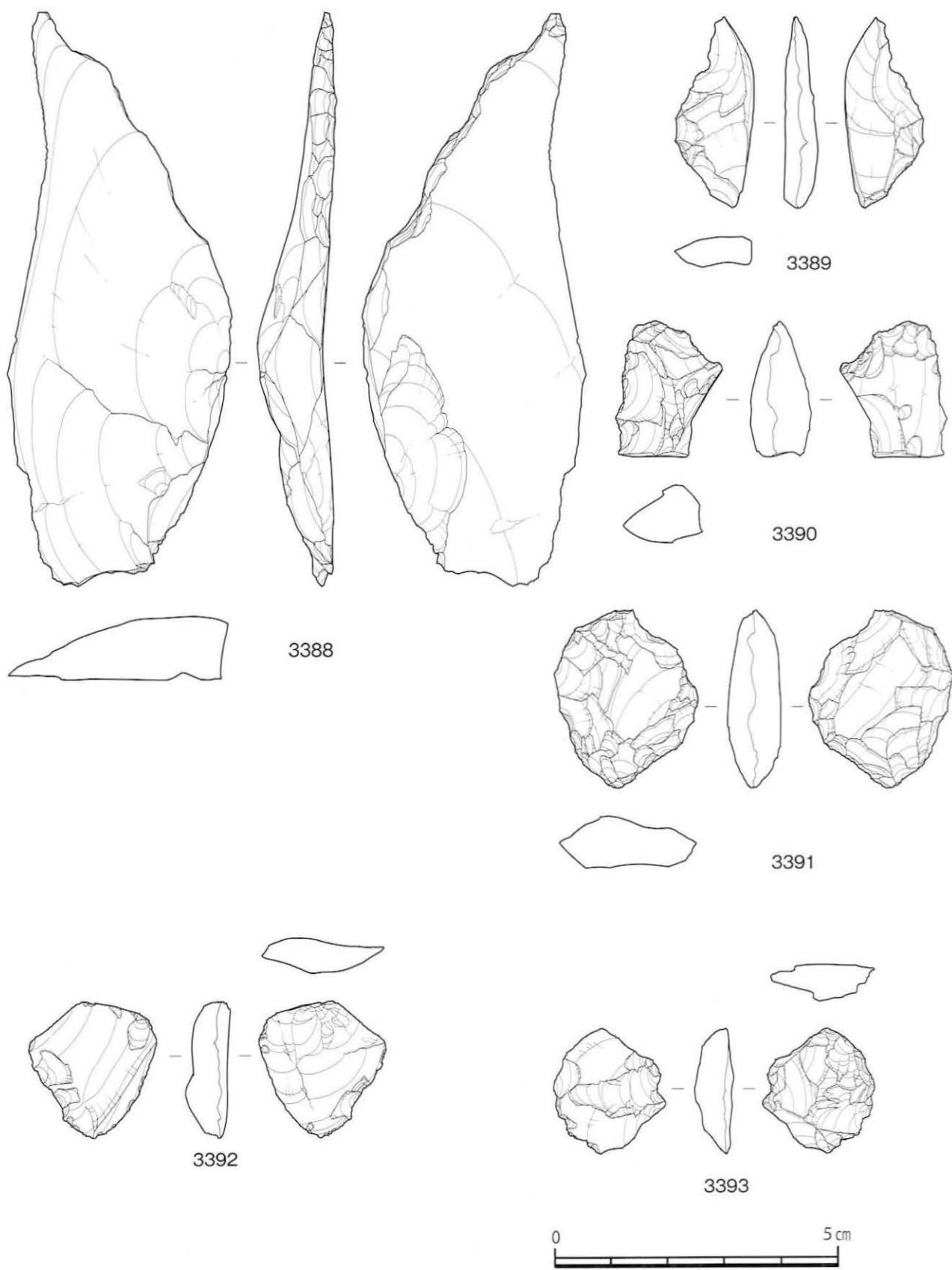
第86図 Ⅲ地区石器(3) (縮尺1/1)



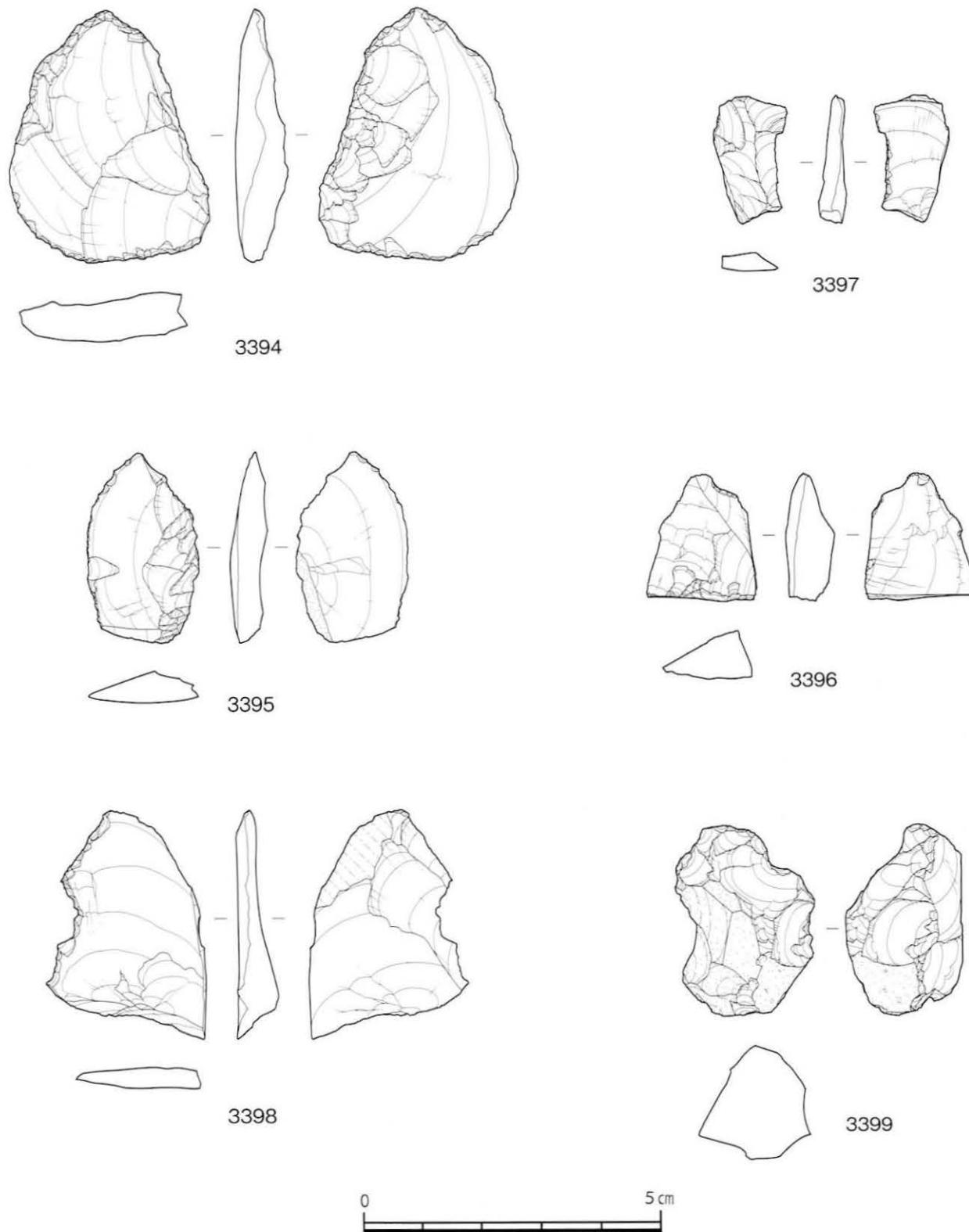
第87図 Ⅲ地区石器(4) (縮尺1/1)



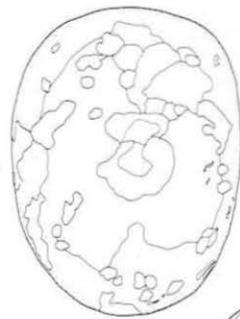
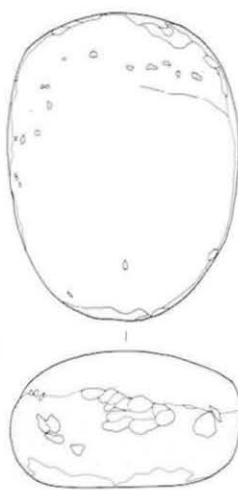
第88図 Ⅲ地区石器(5) (縮尺1/1)



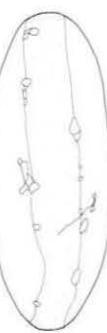
第89図 Ⅲ地区石器(6) (縮尺1/1)



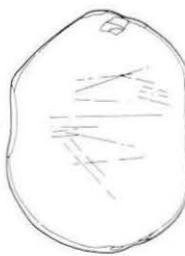
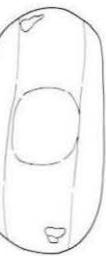
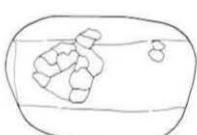
第90図 III地区石器(7) (縮尺1/1)



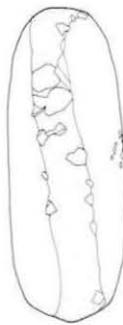
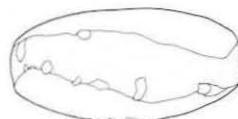
3400



3401



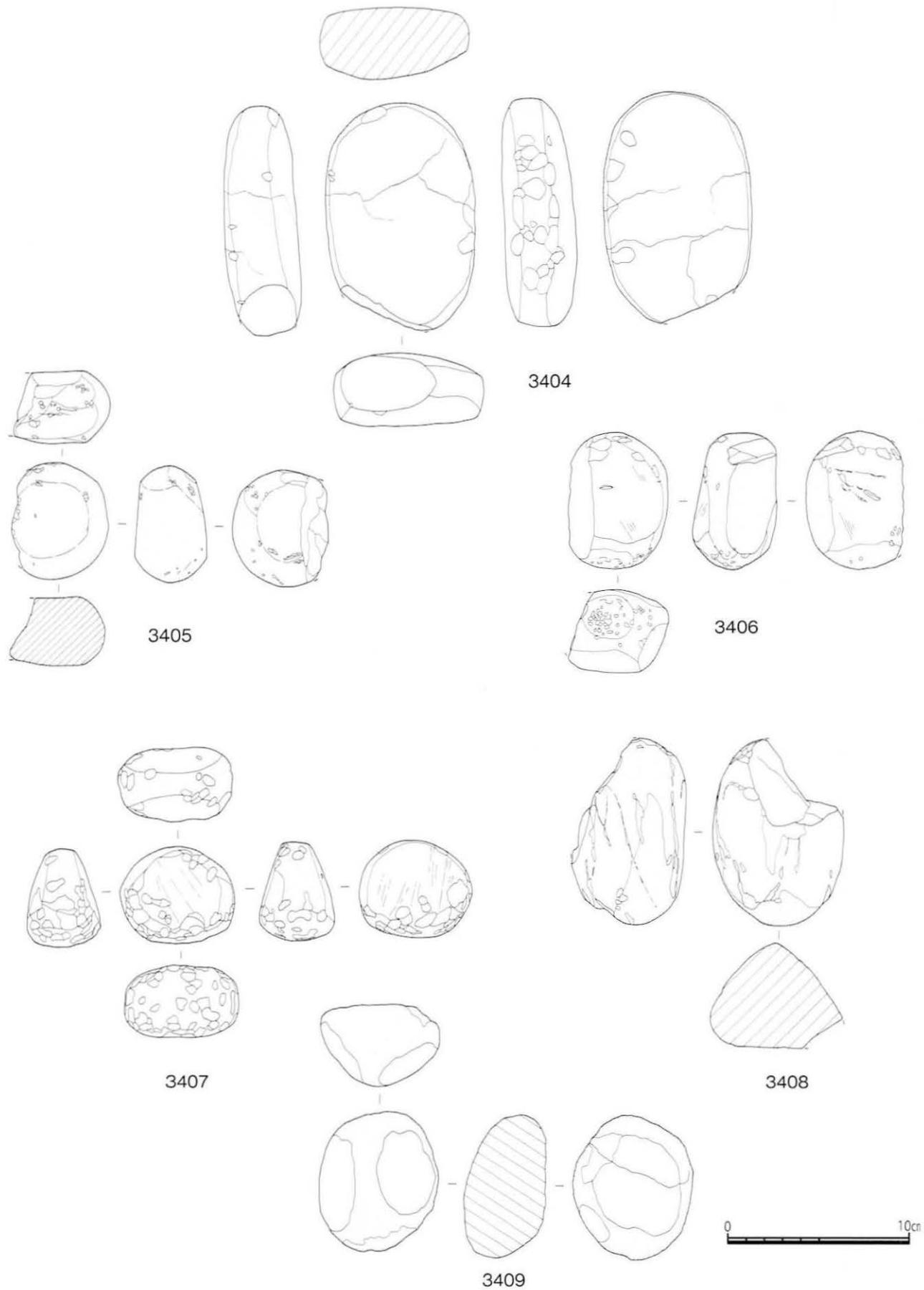
3402



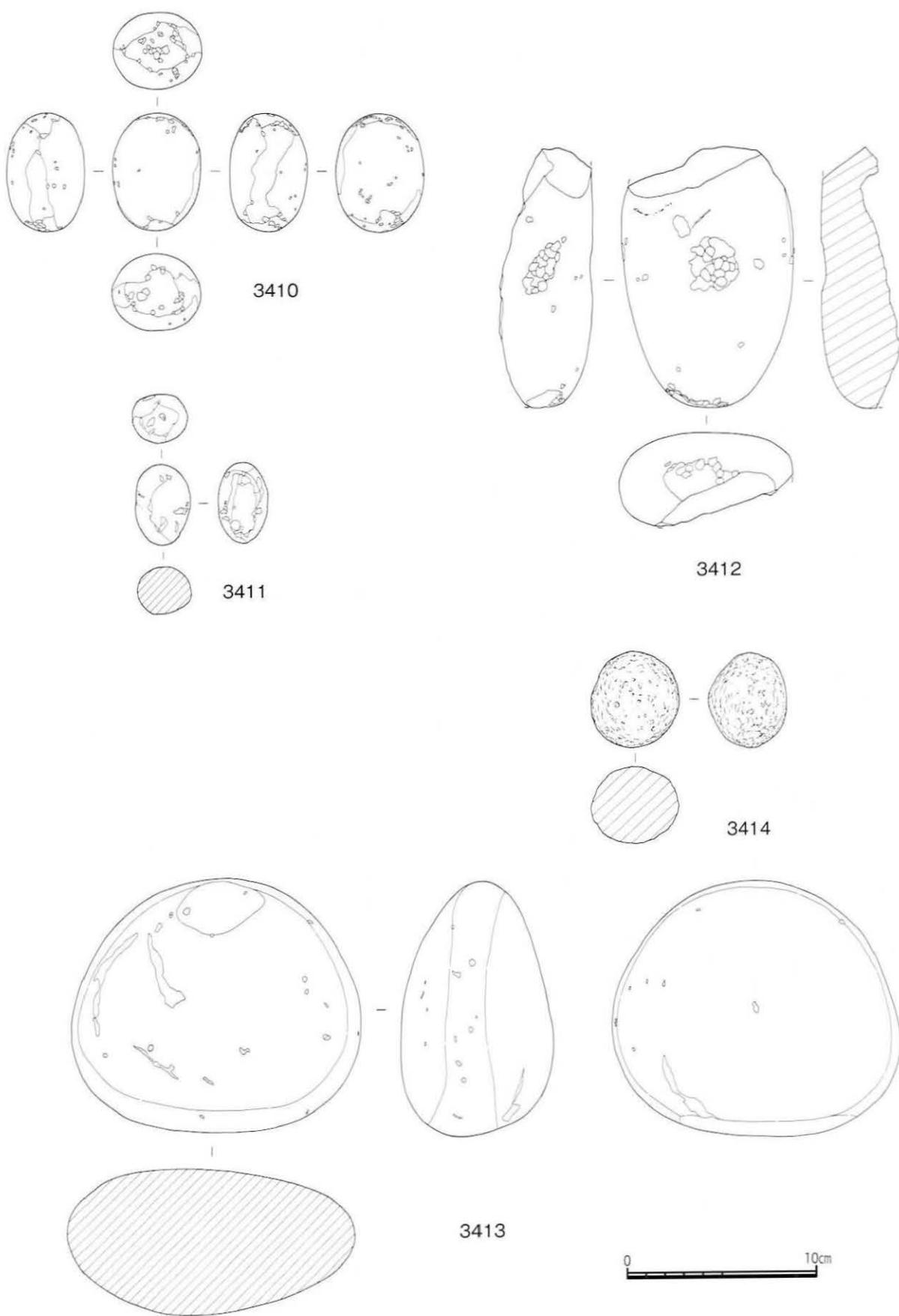
0 10cm

3403

第91図 III地区石器(8) (縮尺1/3)



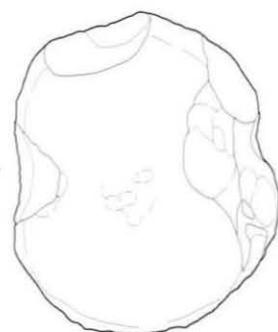
第92図 III地区石器(9) (縮尺1/3)



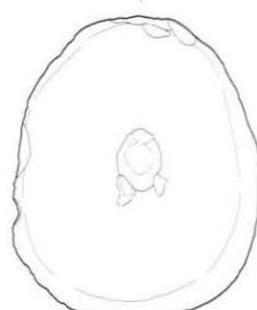
第93図 Ⅲ地区石器(10) (縮尺1/3)



3415



3417



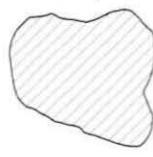
3416



3418



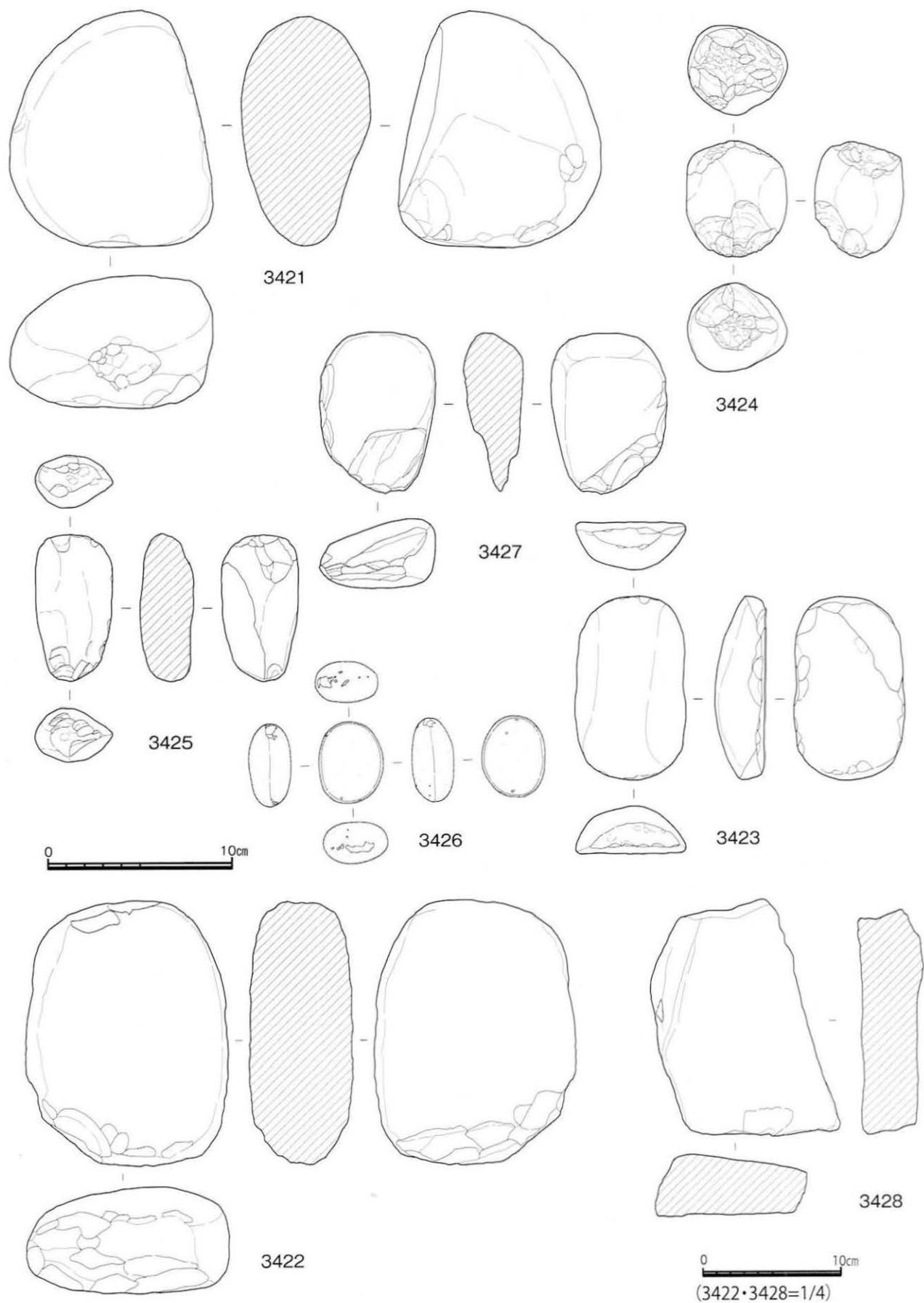
3420



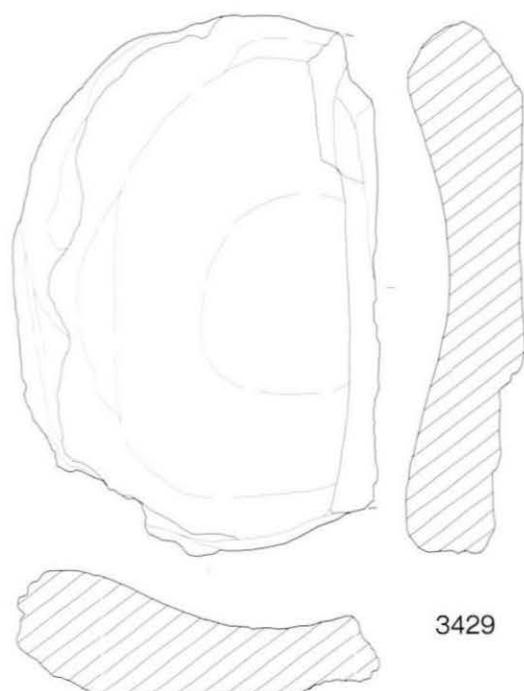
3419

A scale bar indicating a length of 10 cm, with smaller tick marks every 1 cm.

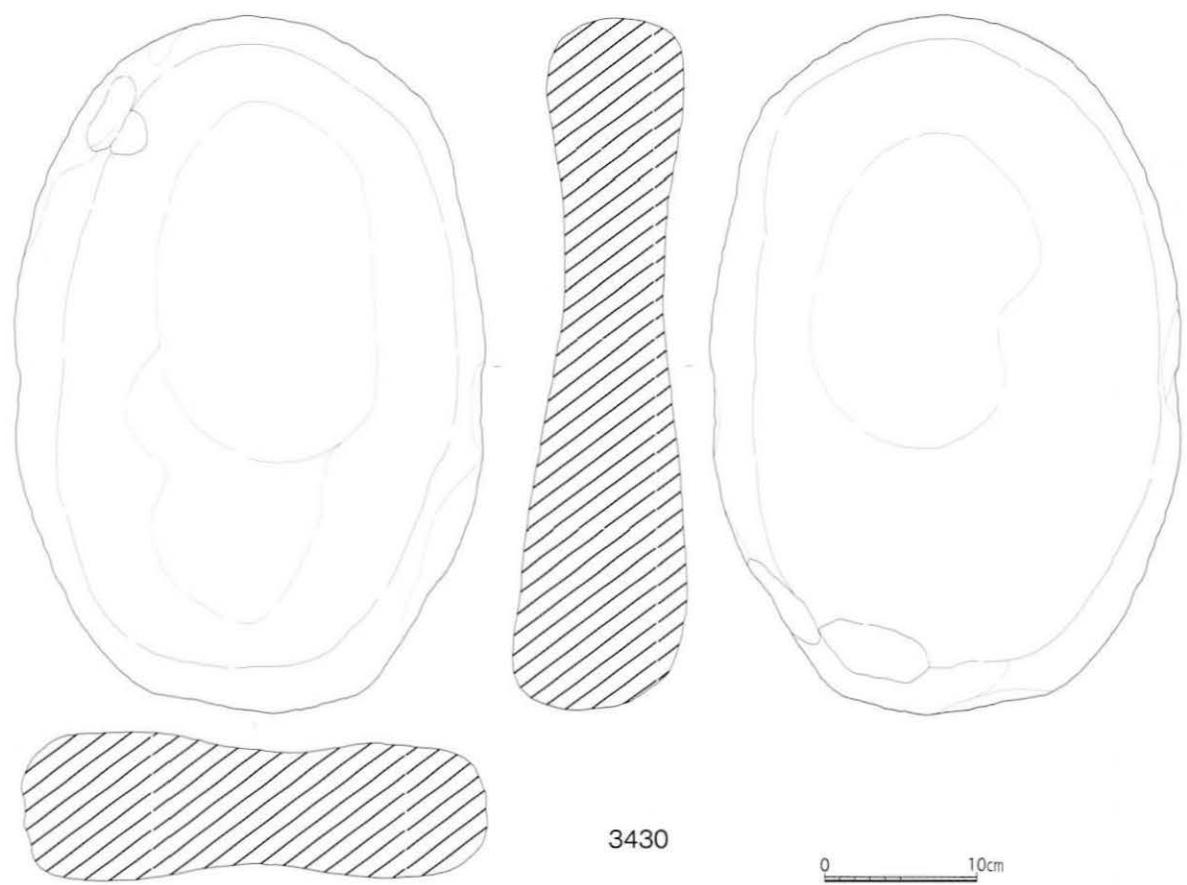
第94図 III地区石器(11) (縮尺1/3)



第95図 III地区石器(12) (縮尺1/3・1/4)



3429



0 10cm

第96図 III地区石器(13) (縮尺1/5)

### 3. カムィヤキ

Ⅲ地区からは31点のカムィヤキが検出された。すべて破片資料で、その内訳は口縁部2点、頸部2点、胴部24点、底部3点である。いずれも無文で、ほとんどが小破片のため全形をうかがえるものではないが、おおよそ壺形に限られるようである。3431・3432は口縁部資料、3433・3434は頸部資料、3435～3437は底部資料でいずれも外器面はナデ調整が施される薄手の資料である。出土地点等は第29表に示した。

### 4. 陶磁器類

Ⅲ地区から得られた陶磁器類は、中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器に大別することができる。中国産陶磁器には、白磁、青磁、青花、褐釉陶器が含まれる。沖縄産陶器には少量の施釉陶器に多量の無釉陶器、陶質土器、赤瓦が含まれる。本土産陶磁器には、染付と近現代期の磁器が検出された。いずれも近代期の遺物の混入が見られるⅠ層、Ⅱ層からの出土であり、小破片であることから白磁玉縁碗以外の陶磁器類については割愛し、ここで取り上げるのは口縁部の端部が玉縁状に肥厚するのが特徴的な白磁を掲載した。Ⅲ地区から検出された玉縁碗（I類）は口縁部が5点である。器種は碗が確認されている。いずれも小破片であり、全形のうかがえる資料はないが、口縁部の形態から金武氏（金武1990）に従い分類を行った。1種（3438～3439）比較的薄手で口縁部の玉縁が小さく、胴部がわずかに膨らむ器形。2種（3440～3442）1種に比べ厚手で口縁部の玉縁が大きく、胴部から口縁部へ逆ハの字状に開く器形となる。出土地点等は第29表に示した。

第29表 Ⅲ地区出土カムィヤキ・白磁観察表

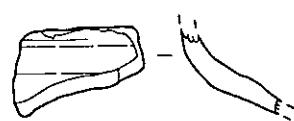
掲載No	グリッド	層	層備考	種別	部位	分類	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	重量(g)	観察事項 (器色、混和材)
3431	B-47	II		カムイヤキ	口縁部	壺			0.4		内外面に回転による調整。口唇部をへら削りにより調整がなされている。灰5Y5/1
3432	E-46	II		カムイヤキ	口縁部	壺			0.5		内外面に回転による調整。灰N5/
3433	E-47	II		カムイヤキ	頸部	壺？			0.6		内外面とも回転による調整のあとにナデ調整がされる。灰N5/
3434		I		カムイヤキ	頸部	壺？			0.5～1.0		内外面とも回転による調整のあとにナデ調整がされる。灰7.5Y5/1
3435		I		カムイヤキ	底部				0.7～0.9		外面がナデ調整、内面にロクロ痕が残る。黄灰2.5Y5/1
3436	C-47	II		カムイヤキ	底部				7.0	0.6～0.8	外面がナデ調整、内面にロクロ痕が残る。灰5Y5/1
3437	C-47	II	369.6～352.6	カムイヤキ	底部				15.0	0.8～1.0	外面がナデ調整、内面に格子目状の当て具痕が残る。灰7.5Y4/1
3438	D-4 6	I層		白磁	口縁	I類1種			4.0		玉縁下部に釉たれがみられる。素地は、灰白色2.5Y8/1。釉色は灰白色5Y8/1。
3439	C-48	II層		白磁	口縁	I類1種	16.0		4.0		玉縁下部に範状工具による整形痕が確認でき、そこに釉垂まりがみられる。内面に貫入がみられる。素地は、灰白色N8/。釉色は灰白色5Y7/2。
3440	E-47	III層		白磁	口縁	I類2種	16.0		5.0		玉縁下部に範状工具による整形痕が確認でき、そこに釉垂まりがみられる。素地は、灰白色N8/。釉色は灰白色7.5Y7/1。
3441	D-47	II層		白磁	口縁	I類2種	—		5.0		玉縁下部に範状工具による整形痕がみられる。内面に釉たれがみられる。素地は、灰白色2.5Y8/1。釉色は灰白色5Y8/1。
3442	B-50	I層		白磁	口縁	I類2種	—		5.0		やや厚みのある玉縁。素地は、灰白色N8/。釉色は灰白色5Y7/2。



3431



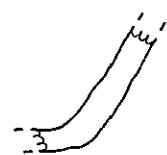
3432



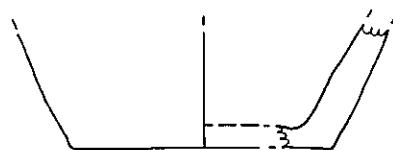
3433



3434



3435



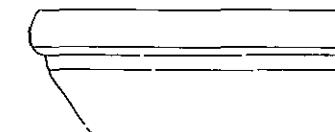
3436



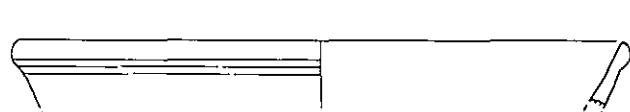
3437



3438



3440



3439



3441



3442



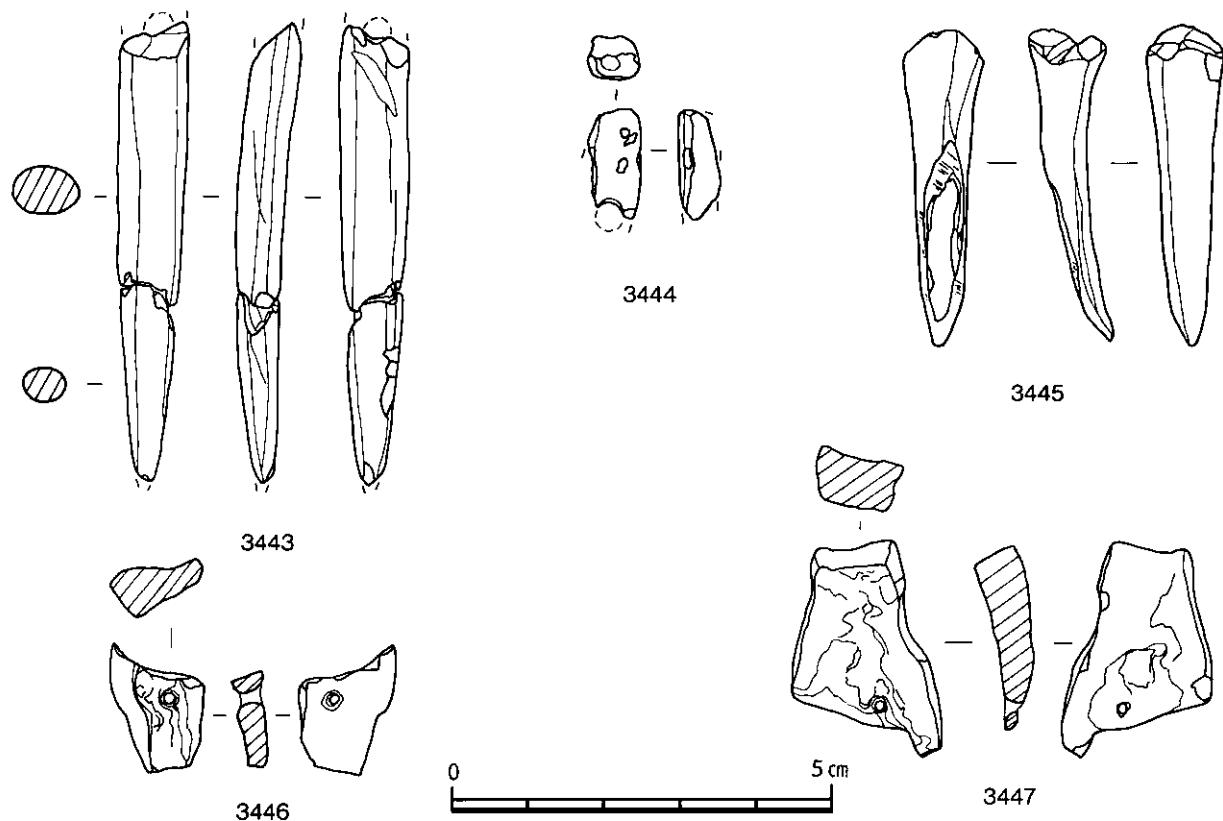
第97図 Ⅲ地区カムイヤキ・白磁 (縮尺1/2)

## 5. 骨製品

3443はジュゴンの肋骨を素材とした骨製品である。頭部と先端部がわずかに欠損する。肋骨を素材とするためゆるやかに湾曲する。頭部に孔を有する。B-49グリッドⅢ層出土。長さ12.2cm、最大幅1.8cm、最大厚1.2cm、重量22.5gを測る。3444はイノシシ科の腓骨（右）を素材とした骨製品である。遠位端はずれから骨体にかかる部分を使用している。骨体の中間部から近位端に向けて斜位に打ち欠き、その面に研磨を施して尖りだしを行っている。B-48グリッドⅢ層から出土。完形品で法量は長さ7.2cm、最大幅2cm、最大厚2.1cm、重量8.8gを測る。3445はジュゴンの肋骨を使用した製品と考えられる。孔を有するが小破片であるため詳細は不明である。D-48グリッドⅢ層出土。

## 6. 貝製品

3446・3447はいずれも摩耗しており定かではないが、シャコガイの腹縁部を利用した有孔製品と思われる。2.5mmの小孔が両側から穿たれており、錘等の製品の可能性も考えられる。3446はD-47グリッドⅠ層出土、重量は31.4g。3447はC-48グリッドかく乱部から出土、重量は8.9g。



第98図 Ⅲ地区骨製品・貝製品 (縮尺1/1)

# 第VII章 自然科学分析

## 第1節 屋部前田原貝塚から出土した脊椎動物遺体群

樋泉岳二（早稲田大学）

### はじめに

沖縄県名護市屋部前田原貝塚では、平成14年度～17年度に名護市教育委員会によって実施された発掘調査において、Ⅱ地区・Ⅲ地区より多数の脊椎動物遺体（骨類）が検出された。ここではその分析結果を報告する。出土した骨類の年代は、Ⅱ地区ではおもに貝塚時代後期後半～グスク時代初期、Ⅲ地区ではおもに貝塚時代中期（縄文晩期）に位置づけられる。また資料の採取方法は、両地区ともに通常のピックアップ法に加え、篩別（フルイがけ）による詳細な採集も実施されている。

本遺跡の動物骨資料は、(1)これまでほとんどデータがなかったグスク時代初期の資料がまとまって得られたこと、(2)貝塚時代中期（Ⅲ地区）・グスク時代初期（Ⅱ地区）の双方から篩別資料が採集されており、それぞれの時代について微小骨を含めた遺体群の全容が把握可能であること、さらに(3)貝塚時代とグスク時代初期の様相を、両時代の環境条件がかなり近いと考えられるひとつの遺跡において比較できることから、貝塚時代～グスク時代間の文化・社会の変遷を動物資源利用の面から解明する上できわめて重要である。

### 1. 資料と分析方法

#### (1) 分析資料

骨類はⅡ地区とⅢ地区から採集されている。

骨類の出土状況をみると、Ⅱ地区では第3号掘立柱建物跡をはじめとする柱穴や土坑の覆土および包含層（おもに8層）からの出土資料が大半を占める。とくに第3号掘立柱建物跡では柱穴覆土の水洗選別によって大量の小型骨が検出されている（詳細は後述）。第3号掘立柱建物跡の年代は、出土した陶磁器・滑石製石鍋（模造品を含む）・カムィヤキ・土器類および放射性炭素年代から11世紀～12世紀の幅の中で捉えられる。他の遺構・包含層についても、出土土器から貝塚時代中期（縄文晩期）が主体と推測される。

Ⅲ地区では、A・Bグリッドの3層を主とする包含層のほか、集石・石組・土坑・埋葬人骨墓坑などの遺構覆土内からも資料が採集されている。とくに墓坑では埋葬人骨周辺の覆土がフルイがけされ、多数の小型骨が検出されている。Ⅲ地区的骨類の年代は、出土土器から貝塚時代中期（縄文晩期）が主体と推定される。

資料は、その採集方法によって、手で拾い上げられた資料（以下「ピックアップ資料」）と、堆積物のフルイがけによって回収された資料（以下「篩別資料」）の2種類に分かれる。篩別資料は、Ⅱ地区では第3号掘立柱の柱穴覆土を対象として植物遺体検出のために実施されたフローテーションの際の沈降物（ヘビー・フラクション）から1mmメッシュで回収されたものである。Ⅲ地区では、人骨墓壙覆土が1mm目の乾ふるいにかけられ、骨片が採集されている。

#### (2) 分析方法

同定対象部位については、魚類は主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨を必須部位とし、それ以外にも分類群に応じて同定可能な部位を適宜同定対象資料とした。魚類以外については、部位

の判定可能なものを同定資料とした（ただし、哺乳類の四肢骨のうち骨幹破片（骨幹の全周を残さないもの）は対象外とした）。

同定方法は、まず現地（名護市教育委員会崎山資料室）で予備的な同定を行った。その際には現生標本を参照できなかつたため、出土資料の中から保存状態のよいものを抽出し、これを比較標本として、同定可能な資料のみを記録した。種類・部位・左右などを確定できなかつた資料（現生標本との比較による確認を要する資料）については持ち帰り、現生標本と比較・確認した。使用した現生標本は筆者の所蔵標本のほか、西本豊弘氏・小林園子氏の所蔵標本も参照させていただいた。

## 2. 分析結果

以下、分析結果について、年代に沿ってⅢ地区、Ⅱ地区の順に記載する。

### （1）Ⅲ地区

#### 1) ピックアップ資料

同定結果を第31、32表に、また同定標本数（NISP）・最小個体数（MNI）による組成を第38表に示す。ピックアップ資料の出土量は破片総数で約450点、これらのうち科以下のレベルで分類群を特定できた資料は約320点である。同定された分類群の数は、軟骨魚綱3、硬骨魚綱12、爬虫綱3、鳥綱2、哺乳綱4である（第30表）。

骨類の組成の概要をみると、MNIでは魚類が37と圧倒的に多く、イノシシ7、リクガメ3がこれに次ぐ（第99図上）。その他にウミガメ類、ヘビ、ウミスズメ科、ニワトリ、ネコ、イヌ？、ウシ、ジュゴンが確認されているが、MNIはいずれも1である。NISP比ではMNI比に比べてイノシシの比率が高いが（第99図下）、これはイノシシの1個体当たりの同定可能部位数が魚類よりも多いことによるもので、MNI比が実態に近いと考えられる。リクガメ類は、MNIは3だがNISPは少なく、逆にジュゴンではMNIは1だが、NISPはやや多い。なお、イノシシとジュゴンの骨には焼けたものがやや目立った。

魚類の内訳をみると（第100図）、MNIではベラ科が17と突出しており、以下ハリセンボン科5、ブダイ科3、フエフキダイ科・クロダイ属各2、他は各1である。NISP比でも基本的な特徴は同様である。ベラ科の咽頭骨には「コブダイ型」・「ベラ科A」・「ベラ科B」およびその他の各タイプ（金子（1996）を一部修正。樋泉2005）がみられたが、大半は「コブダイ型」である。なお「マグロ類似種」とした資料は大型のサバ科尾椎でマグロに近似するが、椎体が長く隆起線前方の窪みが長く深いことから、近縁の別種と考えられる。

#### 2) 篩別資料

墓坑覆土の篩別によって採集された骨類の総重量は約600gである。今回は時間の制約のため、その中から試料No.568（D-49埋葬土北）の約100g（17%）を抽出し、対象を魚骨に限定して同定した。

同定結果を第33表に示す。同定された分類群の数は、軟骨魚綱1、硬骨魚綱18である（魚類以外は未分析、表1）。組成をみると、MNIではブダイ科が9と最も多く、以下ハタ科4、フエフキダイ科・ベラ科各3、クロダイ属2、他は各1である（第101図上）。NISP比でも基本的な特徴は同様だが、ブダイ科の卓越がいっそう強く表れている（第101図3下）。ハタ科は全体に小型であり、ブダイ科・フエフキダイ科・ベラ科も小・中型の個体が多い（詳細は第33表の備考欄を参照）。なお、残りの未分析試料についても概要を観察した結果、上記の特徴は墓坑覆土全体に認められるものと予測された。

#### 3) Ⅲ地区（貝塚時代中期）の脊椎動物遺体群の特徴

ピックアップ資料では魚類が圧倒的に多く、イノシシがこれに次ぎ、他は少ない。また魚類はピッ

クアップ資料でも篩別資料でも、ベラ科・ブダイ科・ハタ科・フエフキダイ科といったサンゴ礁や内湾砂底域の生息種が大半を占めている。これは沖縄諸島の貝塚時代前期～後期の遺跡に普遍的にみられるパターンである。

ただし魚類組成には、ピックアップ資料と篩別資料とで大きな違いが認められる。ピックアップ資料では「コブダイ型」を主とするベラ科が卓越しており、ブダイ科は比較的少ない。このパターンは、金武湾や中城湾といった内湾砂底域沿岸の貝塚時代遺跡でしばしばみられる特徴である（伊波1982、樋泉2002・2006a、名島2003）。また、「コブダイ型」としたベラ科の多くは、そうした環境に多いシロクラベラに同定される可能性が高い。ベラ科に次いで多いハリセンボン科も、現在ではイノーや港湾内などに多くみられることから内湾的要素と考えられる。このように、ピックアップ資料の魚類組成からみる限り、貝塚時代中期当時の遺跡付近の海岸には内湾砂底環境が卓越していたと推定される。

これに対し篩別資料の魚類組成は、ピックアップ資料とは対照的にブダイ科（アオブダイ属）やハタ科の若魚が主体である。こうした組成はサンゴ礁の礁縁付近の魚類相を想起させるものであり、また実際にサンゴ礁海岸の貝塚時代遺跡ではブダイ科の卓越が普遍的な特徴となっている（伊波1982、樋泉2002・2006a、名島2003）。小型のハタ科が多産する事例も、伊是名島伊是名貝塚（貝塚時代前期、金子2001）、沖永良部島住吉貝塚・今帰仁村西長浜原遺跡（同中期、樋泉2006b・2006c）、奄美大島用見崎遺跡・マツノト遺跡（同後期、樋泉2002・2006d）など、奄美諸島や沖縄諸島北部のサンゴ礁海岸の貝塚時代遺跡でしばしば報告されている。このように、篩別資料の魚類組成は、むしろサンゴ礁環境の卓越を示唆している。

以上のようにⅢ地区の脊椎動物遺体群は、全体としては奄美・沖縄諸島の貝塚時代遺跡における基本パターンの範疇内で捉えられるが、魚類についてはピックアップ資料と篩別資料とで組成およびそれから示唆される海洋環境が大きく異なっている点が特徴である。これをどう解釈するかは今後の課題だが、航空写真に基づいて現在の遺跡付近の沿岸地形をみると（第102図）、海岸から数100m～1kmほど沖合に、発達は弱いもののサンゴ礁の形成が認められ、その内側は広く浅い砂底域となっている。これを地形的にみれば、基本的には貧弱な干瀬と、それゆえに開放的な広いイノー（礁池）からなる未発達の裾礁とみなすことができるが、魚類の生息環境という観点からは、サンゴ礁と内湾砂底域が複合した環境ととらえることもできそうである。したがって、こうした環境が貝塚時代中期にすでに形成されていたとすれば、小型のブダイ科やハタ科の漁獲は沖側のサンゴ礁域（干瀬）で、大型のベラ科やハリセンボン科などの漁獲は内側の広い砂底域（イノー）で、というように漁法や漁獲対象魚によって漁場が使い分けられていた可能性も考えられる。

## （2）Ⅱ地区

### 1) ピックアップ資料

同定結果を第34表～第36表に、またNISP・MNIによる組成を第38表に示す。ピックアップ資料の出土量は破片総数で162点（掘立柱建物跡87点、その他75点）、これらのうち科以下のレベルで分類群を特定できた資料は95点（掘立柱建物跡45点、その他50点）である。同定された分類群の数は、軟骨魚綱1、硬骨魚綱13、爬虫綱2、哺乳綱2である（第30表）。

骨類全体の組成をみると、MNIでは魚類が19と多く、イノシシが3でこれに次ぎ、リクガメ類・ウミガメ類・ジュゴンは各1である（第99図上）。NISP比ではイノシシが多く見えるが（第99図下）、地区でも述べた通り、これは実態よりも大きく誇張された値と考えられる。なお、イノシシ遺体に飼育や家畜化（ブタ化）を示す兆候は確認されていない。掘立柱建物跡とそれ以外の間に明確な違いは

みられない。魚類の内訳（第100図）をみると、MNIではフエフキダイ科・ブダイ科・ハリセンボン科が各3、ベラ科2、他は各1である。NISPではフエフキダイ科が多くみえるが、優占種の構成は同様である。

## 2) 篩別資料

第3号掘立柱建物跡の柱穴覆土からフローテーションに伴って大量の微小骨が採集されている。フローテーション処理された堆積物の総量は1845リットルに及ぶが、今回は時間の制約のため、柱穴8（堆積物量約100リットル、回収された骨類の重量約110g）のみを抽出して同定した。

同定結果を第37表に示す。同定された分類群の数は、軟骨魚綱1、硬骨魚綱18、両生綱1、爬虫綱2、哺乳綱2である（第30表）。MNIはほとんどの分類群が1で組成の特徴が読み取れないと想定するが、その他の資料には魚類92点（未同定・保留・同定不可の資料を加えると137点）に対し、カエル・ヘビ類・ネズミ科？・イノシシは各2点、リクガメ類1点で、魚骨が大半を占めている（第37表）。魚類の内容はアジ科（複数種を含む）が21点と最も多く、フエフキダイ科10点、ブダイ科9点、カマス科8点がこれに次ぐ。他にニシン科・ダツ科・ハタ科・アイゴ属なども普通である。ニシン科の頭骨要素はいずれもサッパに近似しており、ミズン類の可能性が高い。アジ類は大型の歯骨が1点みられた以外は、いずれも小型魚（小型種または大型種の幼魚）であった。ブダイ科も若魚が多い（詳細は第37表の備考欄を参照）。なお、残りの未分析資料についても概要を観察した結果、上記の特徴は第3号掘立柱建物跡全体にわたって認められるものと予測された。

## 3) II地区（グスク時代初期）の脊椎動物遺体群の特徴

II地区の資料の年代については、第3号掘立柱建物柱穴の出土資料はグスク時代初期に位置づけられるが、その他の資料には貝塚時代後期後半のものが混じる可能性がある。ただし、第3号掘立柱建物跡とその他の資料の間で遺体の内容に明確な違いがみられなかつたことから、ここではIII地区の遺体群が主にグスク時代初期の様相を反映しているものと仮定して論を進める。

脊椎動物全体の組成（MNI比）をIII地区と比較すると、ピックアップ資料では魚類が優占し、イノシシがこれに次ぐ点で合致している。篩別資料については、III地区の魚類以外が未分析のため詳細な比較は今後の課題だが、両地区とも魚類が卓越する点は同様である。このように、貝塚時代中期もグスク時代初期も、魚類とイノシシを中心とする動物食という基本パターンは共通している。一般にグスク時代以降の遺跡では貝塚時代に比べて魚骨の出土量が減少する傾向があるが（樋泉2002）、本遺跡ではそうした兆候は認められない。ただし、これがグスク時代初期の一般的な特徴といえるかどうかは、類例の增加を待って判断する必要がある。

なお、II地区ではIII地区に比べてピックアップ資料が比較的少ないのに対して、篩別資料からは小型魚骨を主とする大量の骨が検出されている。このことから、II地区に埋蔵されていた骨に関しては、発掘現場において目視で確認できるような大型の骨（大型魚やイノシシなど）が少なく、小型骨（とくに魚骨）の占める比重が相対的に高かった可能性がある。この想定が正しいとすれば、グスク時代初期には貝塚時代中期よりも大型魚やイノシシなどの利用が衰退し、小型魚の比重が増加した可能性も考えられる。この点については、両地区的面積や篩別資料の包含密度なども考慮したうえで改めて詳しく検討したい。

魚類の内容は、III地区とは明確に異なっている。すなわち、ピックアップ資料ではIII地区で圧倒的多数を占めたベラ科が大きく減少している。篩別資料でもIII地区の優占種であるブダイ科やハタ科の減少が明確であり、とくにIII地区で多数確認されたブダイ科の咽頭骨やハタ科の前上顎骨・歯骨がほ

とんど検出されていない。この結果Ⅱ地区の魚類組成は、ピックアップ資料・篩別資料とともに、突出した優占種をもたず、様々な種類が少數ずつ混在する多様な組成へと変化している。こうした魚類組成の多様化は、グスク時代以降の遺跡にかなり普遍的に認められる現象である可能性が高い（樋泉2002）。

いっぽうⅡ地区の篩別資料では、小型のアジ類が大きく増加し、ニシン科（おそらくミズン類）・カマス科・ダツ科なども普通となる。これらの魚類は、いずれも外海から沿岸に来遊する小型の表層回遊魚という点で共通しており、これらを対象とした沿岸での表層漁業の発達が示唆される。貝塚時代遺跡においても、これらの小型回遊魚類の出土は珍しくはないが、その数は全般的にごく少ない。したがってこれらの魚類の活発な利用は、グスク時代への移行に伴って生じた新しい傾向と考えられる。

以上から本遺跡における漁労活動の変遷をまとめると、次の通りである。

①貝塚時代中期には、内湾砂底域でのベラ科などの大型魚漁、およびサンゴ礁域でのブダイ・ハタの若魚などを主対象とした小型魚漁が主力をなしていたと考えられる。これは、基本的には貝塚時代に普遍的な漁労活動の基本パターンに合致するものである。

②グスク時代初期にはこれらが衰退する一方で、沿岸部におけるアジ類・ミズン類・カマス・ダツといった小型回遊魚の漁が活発化し、全体として漁労活動の構成が多様化している。このことは、グスク時代の初期段階において、すでに貝塚時代の漁労伝統が大きく変質し、新たな漁労形態への転換が進行していたことを示している。

謝辞。仲宗根禎氏・赤嶺信哉氏・比嘉史子氏（名護市教育委員会）には貴重な資料を分析させていただく機会を賜り、また同定・集計その他分析全般にわたくち多くのご支援・ご教示を賜った。西本豊弘氏・小林園子氏には現生標本を参照させていただき、また同定作業に関して多くの便宜と御協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

## 《参考文献》

- 伊波寿賀子 1982「沖縄本島先史時代から見た漁撈活動について－出土魚骨の同定をもとに－」『物質文化』38 pp.1-13
- 金子 浩昌 1996「動物遺体(軟体動物を除く)」『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘長報告書－』沖縄県教育委員会 pp.168-183
- 金子 浩昌 2001「伊是名貝塚の動物遺体」『伊是名貝塚』勉誠出版 pp.346-361
- 樋泉 岳二 2002「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』熊本大学文学部 pp.47-66
- 樋泉 岳二 2005「津堅貝塚から出土した脊椎動物遺体群」『津堅貝塚－中城港湾（アギ浜地区）港湾改修事業に伴う緊急発掘調査報告書－』勝連町教育委員会 pp.47-69
- 樋泉 岳二 2006a「脊椎動物遺体にみる奄美と沖縄」『先史琉球の生業と交易2－奄美・沖縄の発掘調査から－』熊本大学文学部 pp.101-114
- 樋泉 岳二 2006b「魚類遺体群からみた住吉貝塚の特徴と重要性」『住吉貝塚』知名町教育委員会 pp.115-131
- 樋泉 岳二 2006c「西長浜原遺跡の脊椎動物遺体」『西長浜原遺跡－範囲確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター pp.190-210
- 樋泉 岳二 2006d「マツノト遺跡1991年調査で採集された脊椎動物遺体群」『マツノト遺跡』笠利町教育委員会 pp.183-199
- 名島 弥生 2003「琉球列島における遺跡出土魚種組成の比較」『東海史学』38 pp.75-96
- 目崎 茂和 1988『南島の地形－沖縄の風景を読む－』沖縄出版

第30表 屋部前田原貝塚から検出された脊椎動物遺体の種名一覧。

+は確認された分類群を示す(III 地区篩別資料では魚類以外は未分析)。

分類群	III 地区(縄文晩期) ピックアップ	II 地区(グスク初期)	
		篩別	ピックアップ
脊椎動物門	VERTEBRATA		
軟骨魚綱	Chondrichthyes		
ネズミザメ科	Lamnidae	+	
サメ類	Lamniformes ?	+	+
エイ目	Rajiformes	+	
硬骨魚綱	Osteichthyes		
サッパ近似種	Clupeinae cf. <i>Sardinella zonasi</i>		+
ウツボ科	Muraenidae	+	+
ウナギ属	<i>Anguilla</i>	+	+
ダツ科	Belontiidae	+	+
トビウオ科?	Exocoetidae?	+	
ボラ科	Mugilidae		+
カマス科	Sphyraenidae		+
ハタ科	Serranidae	+	+
ギンガメアジ属	<i>Caranx</i>		+
アジ科(小型種)	Carangidae (small type)	+	+
ヒメジ科	Mullidae	+	
フエダイ科	Lutjanidae	+	+
ヘダイ	<i>Sparus Sarba</i>		+
クロダイ属	Acanthopagrus	+	+
フエキダイ属(ハマフエキ型)	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. nebulosus</i>	+	+
チョウチョウウオ科	Chaetodontidae		+
ベラ科(コブダイ型)	Labridae cf. "Semicossyphus reticulatus"	+	+
ベラ科(A)	Labridae A	+	
ベラ科(B)	Labridae B	+	+
ブダイ属	Calotomus		+
イロブダイ属	Bolbometopon		+
オオブダイ属	<i>Scarus</i> spp.	+	+
マグロ類似種	Scombridae cf. <i>Thunnus</i>	+	
サバ科(大型種)	Scombridae (large type)		+
アイゴ属	<i>Siganus</i>	+	+
ニザダイ科	Acanthuridae	+	+
カレイ目	Pleuronectiformes		+
オニオコゼ科?	Synanceiidae ?	+	
モンガラカワハギ科	Balistidae	+	+
ハリセンボン科	Diodontidae	+	+
両生綱	Amphibia		
カエル類	Salientia	-	+
爬虫綱	Reptilia		
ヘビ類	Ophidia	+	+
ウミガメ科	Cheloniidae	+	+
リュウキュウヤマガメ	<i>Gemmyda spengleri japonica</i>	+	+
鳥綱	Aves		
ウミスズメ科	Alcidae	+	-
ニワトリ	<i>Gallus gallus</i>	+	-
哺乳綱	Mammalia		
ネズミ科	Muridae		+
イヌ	<i>Canis familiaris</i>	+	-
ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>	+	+
リュウキュウイノシシ	<i>Sus scrofa ruficirinus</i>	+	+
ウシ	<i>Bos taurus</i>	+	-

第36表 屋部前田貝塚II地区からピックアップ法で採取されたイノシシ頸骨・遊離歯の詳細

[ ]は頸骨残存範囲（ないものは遊離歯）、〈 〉は未萌出歯を示す。

上下	左右	グリッド	層準	頸骨の残存範囲・歯の植立状況／遊離歯の歯種												備考
				I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3		
I1	i2	i3	c	m1	m2	m3										
上顎	L	B-38	8層									P3				
上顎	L	B-38	8層									P4				
上顎	L	B-38	8層									M1				
上顎	L	B-38	8層									M2				
上顎	L	B-38	8層									M3				
上顎	R	A-36	第2号掘立柱柱穴3		I2											
上顎	R	A-38	柱穴9									M3				
上顎	R	B-38	8層									m2				
上顎	R	B-38	8層									m3				
上顎	R	B-38	8層									P4				
上顎	R	B-38	8層									M2				
上顎	R	B-39	8層									M3				
上顎	L	最小個体数										1	1	1	1	1
	R											1	2	1	2	
下顎	L	A/B-36	第3号掘立柱柱穴9		i2											
下顎	L	A/B-36	第3号掘立柱柱穴9		〈i2〉											
下顎	L	B-37	第3号掘立柱柱穴12				C									♀
下顎	L	B-35	第3号掘立柱柱穴26					P2	P3	P4	M1	M2	M3			
下顎	L	B-35	第3号掘立柱柱穴26			I2										
下顎	L	B-35	第3号掘立柱柱穴26				C									♀
下顎	L	Y-37	8層									M3				
下顎	L	A-38	8層				C									♂
下顎	L	B-39	柱穴5									M2				
下顎	R	A/B-36	第3号掘立柱柱穴9		i2											
下顎	R	A/B-36	第3号掘立柱柱穴9		i2											
下顎	R	B-35	第3号掘立柱柱穴26		I1											
下顎	R	B-35	第3号掘立柱柱穴26									M3				
下顎	R	B-35	第3号掘立柱柱穴26									M3				
下顎	R	A-37	9層									M2				
下顎	R	A-38	8層				C									♂
下顎	?	A/B-36	第3号掘立柱柱穴9			I3/c										
下顎	?	A/B-36	第3号掘立柱柱穴9									m2				
下顎	?	A-38	8層				C									♂
下顎	?	B-39	柱穴7				C									♂
上顎	L	最小個体数				3	3	1	1	1	1	2	2			
	R					1	2	1				1	2			

第37表. II地区篩別資料 (第3号掘立柱建物跡柱穴 8. サンプルNo.4971) の同定結果 (暫定結果)。

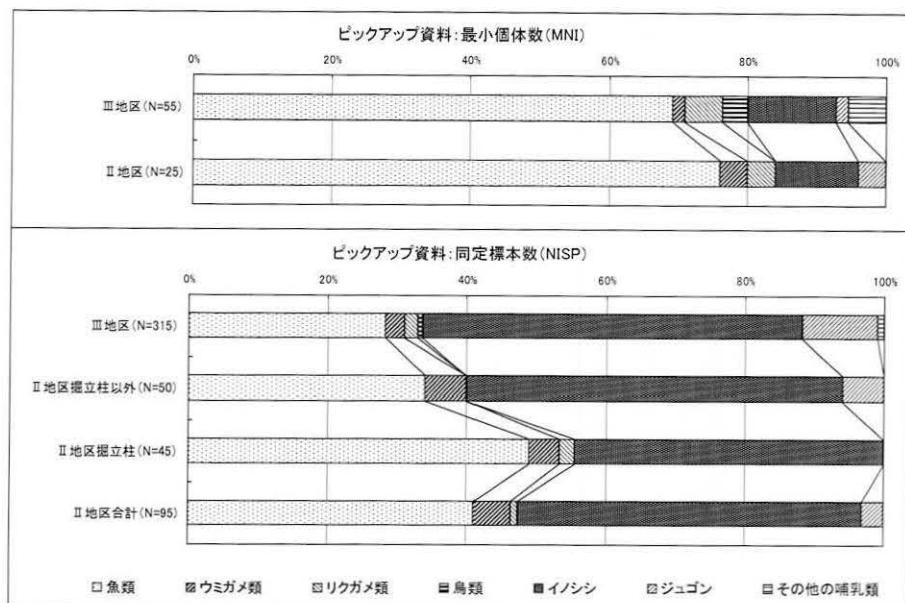
NISPに鱗・歯・ハリセンボン科の棘は含まず。

種類	部位	L / R	備考	NISP	MNI
エイ目	尾棘	2		2	1
板鰓類	椎骨	1	極小型	1	-
サッパ近似種	主上頸骨	1 /		4	2
サッパ近似種	齒骨	/ 2			
サッパ近似種	角骨	1 /			
ニシン科	尾椎	2		2	-
ウナギ属	齒骨	1 /	大型	1	1
ダツ科	齒骨	1 /		4	1
ダン科	頸骨	3			
ボラ科	尾椎	1	小型	1	1
カマス科	齒骨	/ 1		8	1
カマス科	角骨	1 /			
カマス科	腹椎	2			
カマス科	尾椎	4			
ハタ科	主上頸骨	1 /	中型	1	1
ハタ型	腹椎	2		3	-
ハタ型	尾椎	1			
アジ科(小型種)	齒骨	1 /		2	1
アジ科(小型種)	腹椎	1	ムロアジ型		
アジ科(大型種)	齒骨	1 /	大型. イトヒキアジに似るが厚く骨質堅牢	17	1
アジ科(大型種?)	腹椎	1	小型		
アジ科(大型種?)	尾椎	15	小型多數+中型		
アジ科	角骨	1 /	極小型	2	-
アジ科	尾椎	1			
フエダイ科	前上頸骨	1 /	極小型	1	1
クロダイ属	前上頸骨	1 /	成魚大	3	1
クロダイ属	齒骨	/ 1	成魚		
クロダイ属	角骨	1 /	成魚小		
フエフキダイ属	口蓋骨	/ 1	中型	10	1
フエフキダイ科	前上頸骨	/ 1	成魚		
フエフキダイ科	角骨	1 / 1	成魚		
フエフキダイ科	方骨	1 /	小型		
フエフキダイ科	腹椎	3			
フエフキダイ科	尾椎	2			
タイ型	腹椎	2		10	-
タイ型	尾椎	8			
アオダイ属	上咽頭骨	1 /	小型	9	1
フダイ科	前腮蓋骨	/ 1	やや大型		
ブダイ科	第1椎骨	1	小型		
ブダイ科	腹椎	2	小型		
ブダイ科	尾椎	4	小型		
サバ科(大型種)	尾椎	1	カツオ類似?要検討	1	1
アイゴ属	腹椎	1	中型	4	1
アイゴ属	尾椎	3			
ニザダイ科	腹椎	1	小型	3	1
ニザダイ科	尾椎	2	やや小型		
カレイ目	尾椎	1	小型	1	1
モンガラカラワハギ科	鰓	<1>		2	1
モンガラカラワハギ科	方骨	1 /	小型		
モンガラカラワハギ科	腹椎	1	小型		
モンガラカラワハギ科	鱗	<2>			
ハリセンボン属	鱗	<4>		+	1
真骨類・未同定	前頭骨	1 /	半載	2	-
真骨類・未同定	齒骨	1 /			
真骨類・保留	主上頸骨	1 /	ボラ科/トウゴロウイワシ科?	42	-
真骨類・保留	主上頸骨	/ 1	おそらくアジ科 小型		
真骨類・保留	主上頸骨	/ 1	フエフキダイ科?		
真骨類・保留	主上頸骨	/ 1			
真骨類・保留	角骨	/ 1	フエダイ科?		
真骨類・保留	方骨	1 /	ダツ科?		
真骨類・保留	主腮蓋骨	1			
真骨類・保留	椎骨	35			
真骨類・同定不可	角骨	1		1	1
カエル類	寛骨	1 / 1		2	1
リクガメ類	肋骨板	1		1	1
ヘビ類	椎骨	2		2	1
ネズミ科?	尺骨	1		2	1
ネズミ科	大腿骨	1			
イノシシ	下顎M1	1 /		2	1
イノシシ	尺骨	1			
哺乳類・保留	椎骨	1	小型獸	1	-
	合計	147		147	26

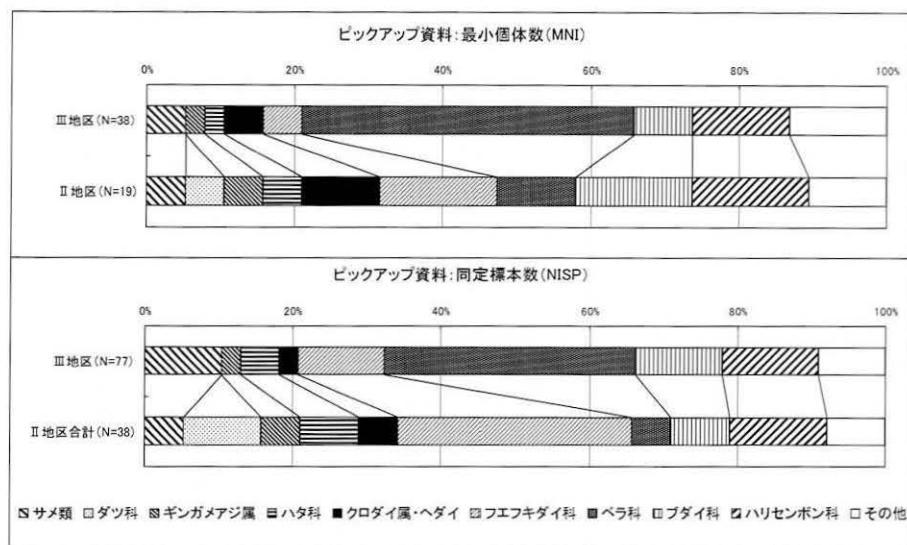
第38表 屋部前田原貝塚からピックアップ法で採取された脊椎動物遺体の組成

NISPには魚類の鱗・歯・ハリセンボン科の棘、カメ類・ジュゴンの部位不明破片を含ま

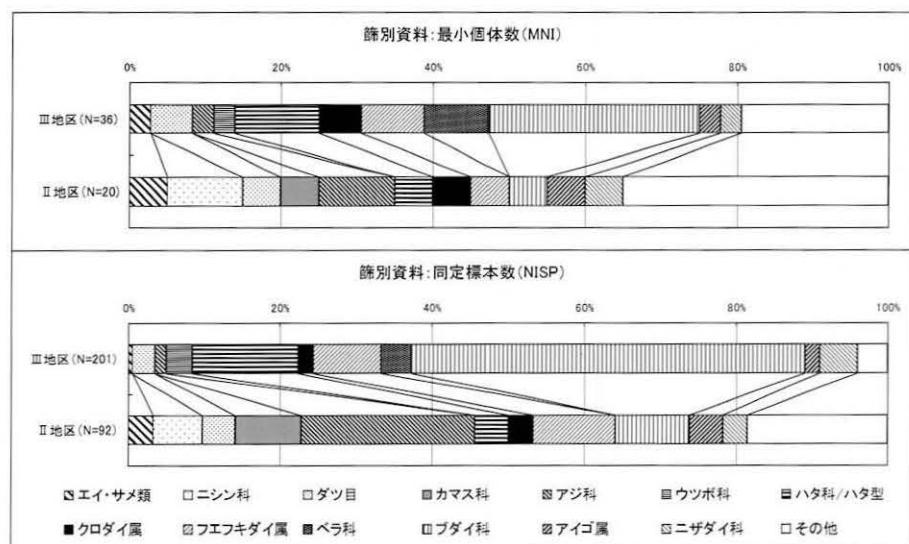
分類群	III区	NISP			MNI	
		掘立柱	II区 その他	合計	III区	II区
ネズミザメ科	1			1		
サメ類	7		2	2	-	1
エイ目	1				1	
ウツボ科(B)		1		1		1
ダツ科		4		4		1
ハタ科	4		3	3	1	1
ハタ科/エダイ科	2				-	
エダイ科	2				1	
ギンガメアジ属/アジ科(大型種)	2	2		2	1	1
ヘダイ		1		1		1
クロダイ属	2		1	1	2	1
フエフキダイ科	9	8	4	12	2	3
タイ型			1	1		-
ベラ科(コブダイ型)	17	1		1	14	1
ベラ科(A)	1				1	
ベラ科(B)	1		1	1	1	1
ベラ(その他)	1				1	
ベラ科(型不明)	6				-	
イロブダイ属			1	1		1
アオブダイ属	9	1	1	2	3	2
マグロ類似種	1				1	
ニザダイ科		1		1		1
オニオコゼ科?	1				1	
モンガラカワハギ科	+				1	
ハリセンボン科	10	2	3	5	5	3
真骨類(未同定・保留)	12	1		1	-	-
ウミガメ類	9	2	3	5	1	1
リクガメ類	6	1		1	3	1
ヘビ類	1				1	
ウミスズメ科	1				1	
ニワトリ	1				1	
ネコ	1				1	
イヌ?	1				1	
イノシシ	172	20	27	47	7	3
ウシ	1				1	
ジュゴン	34		3	3	1	1
合計	316	45	50	95	55	25



第99図 屋部前田原貝塚からピックアップ法で採取された脊椎動物遺体の組成。ヘビ類を除く。



第100図 屋部前田原貝塚からピックアップ法で採取された魚類遺体の組成。ギンガメアジ属にはアジ科（大型種）を含む。



第101図 屋部前田原貝塚から篩別法で採取された魚類遺体の組成。ダツ目はダツ科・トビウオ科？・ダツ目の合計。



第102図 屋部前田原貝塚付近の沿岸地形. ●: 屋部前田原貝塚, CR: サンゴ礁, SB: 砂底城。  
使用した航空写真は国土交通省国土画像情報（カラー空中写真）「COK-77-1 C26A 7」および「COK-77-1 C27 2」  
(1977年撮影)。  
なお屋部川河口にみられる顕著な泥土の流出は、1960年代以降の陸域の造成によって生じた最近の現象である  
(目崎1988)。

## 第2節 屋部前田原貝塚出土の人骨

土肥直美（琉球大学）

### 1. はじめに

平成17年度に実施された名護市教育委員会の発掘調査において埋葬人骨1体が出土した。また、埋葬人骨の他に周辺から少量の骨片が検出されているが、詳細が不明であるため、ここでは埋葬人骨を中心に報告する。人骨の年代は考古学的所見から貝塚時代中期（縄文晩期）と推定されている。保存状態は良好とは言えないが、貝塚時代人骨の貴重な追加例である。また、本例には頭骨がなく、特別な葬制を伺わせる点でも注目される。以下に人骨調査の概略を報告する。

### 2. 出土人骨

埋葬人骨：成人・男性

仰臥屈葬の埋葬人骨である。頭位は南西。上肢は、左腕を胸の上に曲げ、右腕は体幹に添って伸ばしている。下肢は屈曲した膝を左に倒した姿勢である。出土部位を第103図に示している。頭骨、左鎖骨、左上腕骨が見当たらない。右鎖骨が原位置よりもかなり動いていることから、頭骨が二次的に掘り出され、その際に、近くにあった左上腕骨と左鎖骨が一緒に失われた可能性も考えられる。

本人骨は寛骨の所見から性別は男性、右肘関節骨端部が完成していることから年齢は成人（20歳以上）に達していると思われる。

A—49人骨片：

脛骨の一部と思われる骨片が少量検出されている。詳細は不明である。

B—38人骨片：

歯牙片が2点検出されている。1点は成人の右下顎側切歯、他は未成人の右上顎乳犬歯である。

B—46人骨片：

左頭頂骨片が検出された（第104図）。縫合は開離しているが、骨の厚さなどから成人のものと思われる。詳細は不明である。

### 3. 調査の方法

計測はKnussman(1988)<sup>1)</sup>に従った。また、形質の特徴を知るための比較資料としては、沖縄貝塚時代<sup>2)</sup>、種子島弥生<sup>2)</sup>、湊川1号<sup>3)</sup>、ヤッチのガマ近現代<sup>4)</sup>、津雲縄文<sup>5) 6)</sup>、渡来系弥生人とされる金隈<sup>7)</sup>を用いた。

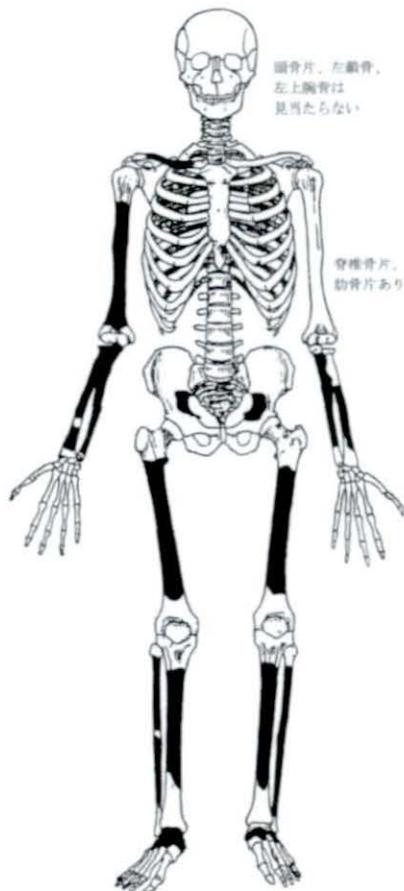
### 4. 人骨の形質

四肢骨計測値

埋葬人骨の上肢骨計測値を第39表に示す。また、他集団との比較を第40表に示す。屋部前田原の上肢骨幅径・周径は、沖縄



第104図 出土人骨



第103図 人骨出土部位

貝塚、種子島弥生、津雲縄文、金隈弥生など他の先史時代人に比べて全体的に華奢で、久米島のヤツチのガマ近現代人や港川1号人骨のそれに近い。

下肢骨の計測値を第41表に、比較を第42表に示す。本例の下肢骨は上肢骨同様に、全体的に華奢である。

第105図は四肢骨の主要な示数を他の集団と比較したものである。大腿骨中央断面示数は本例と津雲縄文人が大きく、柱状傾向を示している。脛骨の扁平性を示す栄養孔位断面示数も、本例と津雲縄文人が小さく、扁平傾向があることを示している。これらの特徴は、津雲縄文人のように狩猟採集を生業にした集団に見られると考えられている。また、相対的な上肢の発達程度を示す示数（上腕骨最小周/大腿骨中央周）は貝塚時代人や種子島弥生人、津雲縄文人などの非農耕集団で大きく、上肢が発達していたことを示している。本例も同様な傾向を示している。

身長の推定：

保存状態が悪く最大長が得られた四肢長骨はなかったが、右桡骨がおよそ21cm～21.5cm程度と推定されるので、ピアソンの式に当てはめると155～157cmとなる。先史時代人の特徴である低身長が本人骨にも認められるようである。

## 5.まとめ

名護市教育委員会による平成13～17年度屋部前田原貝塚の発掘調査において、縄文晩期と考えられる埋葬人骨が出土した。調査結果を要約すると以下のようになる。

1. 埋葬人骨の頭位は南西で、仰臥屈葬の姿勢で出土した。
2. 人骨の性別は男性、年齢は成人（20歳以上）である。
3. 頭蓋骨、左鎖骨、左上腕骨が検出されなかった。
4. 右鎖骨が原位置からかなり離れた位置で検出されており、頭蓋骨他が二次的に掘り出された可能性がある。
5. 四肢骨は全体的に華奢であり、大腿骨の柱状傾向、脛骨の扁平性が認められた。
6. 身長は155～157cm程度と推定され、低身長である。

謝辞：人骨調査の機会を与えていただいた、名護市教育委員会の皆さんに感謝いたします。特に、発掘を担当された仲宗根禎氏には貴重なご助言・ご教示をいただきました。記して感謝の意を表します。

第39表 上肢骨計測値

		r	l
上腕骨			
5	中央最大幅	22	
6	中央最小幅	18	
7	最小周	58	
7a	中央周	64	
6/5	体断面示数	81.8	
尺骨			
3	最小周	34	
11	体矢状径	13	12
12	体横径	15	14
11/12	体断面示数	86.7	85.7
橈骨			
3	最小周	39	38
4	体横径	16	15
5	体矢状径	11	11
5/4	体断面示数	68.8	73.3

(mm)

第40表 上肢骨計測値の比較(男性)

	星部前田原	沖縄貝塚時代	種子島弥生	ヤッチのガマ	港川1号	沖雲繩文	金隈弥生
上腕骨							
5 中央最大幅	22	26.1	23.8	21.6	20.5	23.9	24.1
6 中央最小幅	18	17.8	17.7	16.0	15.5	17.5	17.8
7 最小周	58	65.8	62.0	59.6	58	65.2	64.8
7a 中央周	64	71.9	70.0	62.6	61	69.7	70.2
6/5 体断面示数	81.8	68.3	74.6	74.2	75.6	72.7	74.0
尺骨							
3 最小周	34	41.0	39.4	34.9	36	39.3	40.5
11 体矢状径	13	12.9	12.9	12.3	12	14.2	13.4
12 体横径	15	16.8	17.8	15.6	15	16.3	17.4
11/12 体断面示数	86.7	77.1	73.0	79.1	80.0	87.3	77.1
橈骨							
3 最小周	39	44.4	43.7	39.6	40	44.5	44.8
4 体横径	16	17.3	16.4	15.5	16	17.2	17.4
5 体矢状径	11	12.0	11.4	11.5	11	11.8	12.3
5/4 体断面示数	68.8	69.7	70.1	74.5	68.8	69.2	70.8

(mm)

第41表 下肢骨計測値

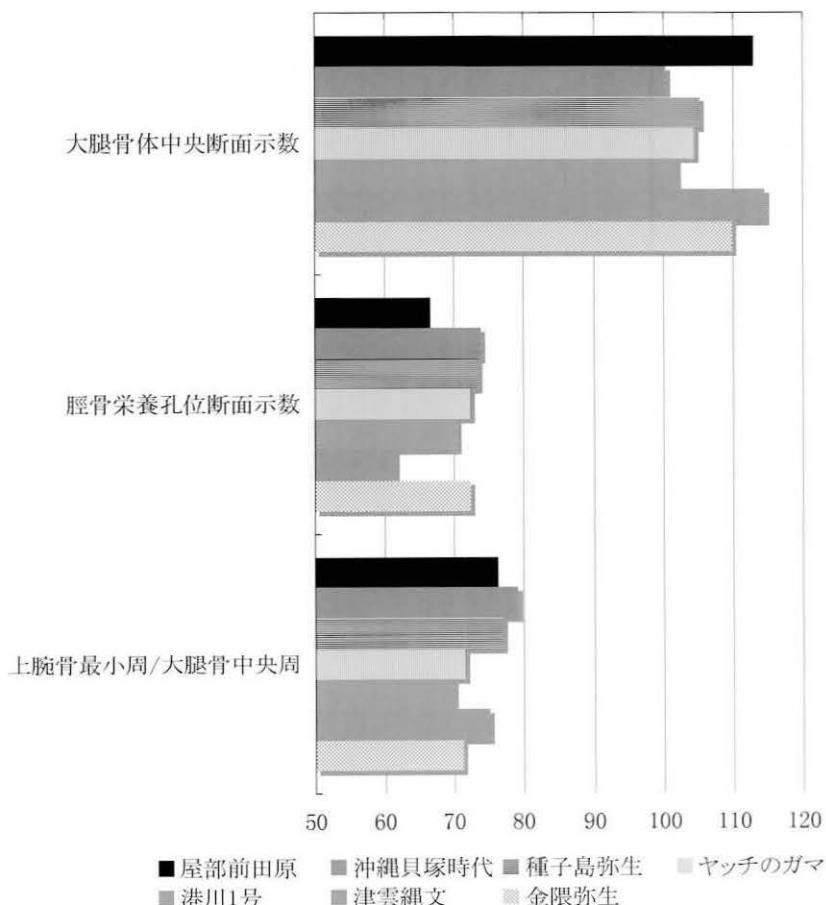
	r	l
大腿骨		
6 体中央矢状径	26	25
7 体中央横径	23	23
8 体中央周径	76	76
9 体上横径	27	27
10 体上矢状径	22	21
6/7 体中央断面示数	113.0	108.7
10/9 体上断面示数	81.5	77.8
胫骨		
8a 栄養孔位最大径	30	28
9a 栄養孔位横径	20	19
10a 栄養孔位周	80	78
10b 最小周	67	66
9a/8a 栄養孔位断面示数	66.7	67.9

(mm)

第42表 下肢骨計測値（男性）

		屋部前田原	沖縄貝塚時代	種子島弥生	ヤッチのガマ	港川1号	津雲繩文	金隈弥生
大腿骨								
6	体中央矢状径	26	26.3	25.7	26.7	26.5	29.3	29.7
7	体中央横径	23	26.3	24.5	25.6	26	25.5	27.1
8	体中央周径	76	83.1	80.5	83.2	83	86.8	91.0
9	体上横径	27	30.5	30.2	29.5	29	30.5	33.1
10	体上矢状径	22	23.0	23.1	23.4	23	24.2	26.0
6/7	体中央断面示数	113.0	100.4	105.3	104.5	101.9	114.6	109.9
10/9	体上断面示数	81.5	75.7	76.9	79.4	79.3	79.5	78.6
脛骨								
8a	栄養孔位最大径	30	32.2	32.1	31.6	33	35.4	36.9
9a	栄養孔位横径	20	22.6	22.5	22.1	23	21.9	25.5
10a	栄養孔位周	80	87.8	87.7	84.4	88	92.2	98.5
10b	最小周	67	74.1	68.8	70.6	71	77.4	77.1
9a/8a	栄養孔位断面示数	66.7	73.9	73.5	72.4	70.4	61.5	72.4

(mm)



第105図 四肢骨示数の比較

## 《参考文献》

- 1) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
- 2) 土肥直美, 泉水 奏, 瑞慶覧朝盛, 譜久嶺忠彦 (2000) 骨からみた沖縄先史時代人の生活. 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編, 琉球・東アジアの人と文化(下巻), 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会, pp.431-448.
- 3) Baba H., and Endo B. (1982) Postcranial skeleton of the Minatogawa man. Suzuki, H. and Hanihara, K. eds. "THE MINATOGAWA MAN", The University Museum The University of Tokyo Bulletin No. 19, pp. 61-195.
- 4) 譜久嶺忠彦, 土肥直美, 石田 肇, 瑞慶覧朝盛, 泉水 奏, 佐宗並衣子, 比嘉貴子 (2001) ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨. 「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集, 沖縄県立埋蔵文化財センター, pp.345-385.
- 5) 清野謙次, 平井隆 (1928a) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第三部上肢骨の研究. 人類学雑誌 43 (3附), pp. 179-301.
- 6) 清野謙次, 平井隆 (1928b) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第四部下肢骨の研究. 人類学雑誌 43 (4附, 5附), pp. 303-390.
- 7) 中橋孝博, 土肥直美, 永井昌文 (1985) 金隈遺跡出土の弥生時代人骨. 「史跡 金隈遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集, 福岡市教育委員会, pp. 43-145.

## 第3節 屋部前田原貝塚の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

南西諸島とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良カルデラや硫黄島火山などに由来すると考えられているテフラ（火山さいせつぶつ碎屑物、いわゆる火山灰）が認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を推定することができる。

ここでは、沖積低地上に位置する名護市屋部前田原貝塚において、地質調査により土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラとの対比を試みた。調査分析の対象となった地点は、A-13グリッド北壁、E-40グリッド基本土層断面、2地区E-39グリッド、2地区第2地点の4地点である。

### 2. 土層の層序

#### (1) A-13グリッド北壁

A-13グリッド北壁では、下位より灰色砂層（層厚18cm以上、X層）、黄灰色粘土層（層厚14cm、IX層）、黄色粘土層（層厚14cm、VII層）、亜角礫混じり暗灰褐色粘質土（層厚18cm、礫の最大径28mm、VII層）、亜円礫混じり暗灰色粘質土（層厚7cm、礫の最大径71mm、V層）、亜角礫を多く含む灰色粘質土（層厚11cm、礫の最大径14mm、IX層）、亜角礫混じり灰色土（層厚10cm、礫の最大径13mm、III層）、亜角礫を多く含む灰色粘質土（層厚14cm、礫の最大径13mm）、盛土（層厚32cm、I層）が認められる。

#### (2) E-40グリッド基本土層断面

E-40グリッド基本土層断面では、下位より炭化物混じり暗灰褐色土（層厚6cm以上）、灰褐色土（層厚15cm）、黄灰色土（層厚12cm）、褐色表土（層厚22cm）が認められる。

### 3. 分析結果

#### (1) 2地区E-39グリッド

2地区E-39グリッドでは、下位より褐色砂層（層厚10cm以上）、サンゴからなる堆積物層（層厚29cm、5b層）、灰褐色砂層（層厚6cm、Va層）、サンゴからなる堆積物（層厚5cm）、貝化石混じり暗灰色土（層厚7cm、III層）、礫混じり黄灰色土（層厚32cm、礫の最大径38mm）、礫混じり灰色土（層厚31cm、礫の最大径37mm）が認められる。ここでは、III層から7世紀頃の遺物が多く検出されている。

#### (2) 2地区第2地点

2地区第2地点では、下位より粒径が良く揃った褐色砂層（層厚8cm以上）、サンゴに富む褐色砂質土（層厚8cm）、褐色砂質土（層厚7cm）、炭化物および砂を含む暗灰色土（層厚8cm、X層下部）、貝化石に富み炭化物や砂を含む暗灰色土（層厚15cm、X層上部）、褐色土（層厚24cm、IX層）、灰色土（層厚13cm、VII層）が認められる。ここでは、X層から多くの土器片が検出されている。

## 4. テフラ検出分析

### (1) 分析試料と分析方法

A-13グリッド北壁とE-40グリッド基本土層断面において、基本的に厚さ5cmごとに設定採取された試料のうちの13点を対象にテフラ検出分析を行い、テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

- ①試料10gを秤量。
- ②超音波洗浄により泥分を除去。
- ③80°Cで恒温乾燥。
- ④実体顕微鏡でテフラ粒子の量や特徴を観察。

### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第43表に示す。A-13グリッド北壁では、軽石やスコリアは認められなかつたものの、試料14、試料12、試料6、試料4、試料2に褐色や淡褐色の軽石型ガラスを認めることができた。とくに試料2には比較的多くの火山ガラスが含まれている。また試料22と試料20を除くいずれの試料からも、角閃石（緑色）をごく少量ながら検出することができた。E-40グリッド基本土層断面の試料4にも、角閃石（緑色）がごく少量含まれている。

## 5 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

より多くのテフラ粒子に関する情報を得るために、A-13グリッド北壁の試料14と試料2、E-40グリッド基本土層断面の試料4を対象に、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新井1972・1993）によりテフラ粒子の屈折率測定を試みた。

## 6. 考察

南西諸島のうち、徳之島以北の島々には、テフラが分布していることが知られている（石田・中川1963、中川1967など）。最近では、徳之島の伊仙町ガラ竿遺跡において、約2.4～2.5万年前（註1）に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT、町田・新井1976・1992、松本ほか1987、村山ほか1993、池田ほか1995）に由来する火山ガラスが検出されたほか、同町小島永ゴなどの露頭において、ATやその上位の硫黄鳥島火山に由来すると考えられる複数のテフラが発見されている（伊仙町教育委員会・古環境研究所、未公表資料）。このほか、沖永良部島においてもATが検出されているらしい（成尾英仁氏、個人談話）。

さらに沖縄本島においても、同定根拠や岩石記載的な特徴については不明であるが、ATやその上位にあるとされる宮古島-沖縄火山灰（MO）と呼ばれるテフラの存在が報告されている（成瀬・井上1990、井上ほか1993）。後者は、「茶褐色のバブルウォール型ガラス」で特徴づけられるらしい。両者の明瞭な層位関係については把握できなかったものの、本研究所の研究員も沖縄本島北部国頭村および宮古島城辺町において、これらの火山ガラスの存在を確認している。

今回の分析により、A-13グリッド北壁の試料14（VII層）から検出された角閃石については、色調や高い屈折率をもつ点で、徳之島においてATより上位にあるテフラ層に含まれる角閃石とよく似ている。ただし、今回検出された層位は、徳之島のテフラより上位にあるように思える。実際には、テフラの降灰層準を示すような角閃石の顕著な濃集層準は認められなかったことから、より下位にこの角閃石で特徴づけられるテフラの降灰層準がある可能性もある。

また、試料2（Ⅱ層）に含まれる火山ガラスについては、屈折率が比較的高く、特徴的なテフラに由来するようにみえる。まだ検出地点が少ないことから、その降灰層準については不明な点が多いが、もしⅡ層中あるいはその近辺に降灰層準があるようであれば、沖縄本島北部とその周辺で、中世以降のある時期の良い時空軸として利用できる可能性がある。

ただ、沖縄本島では第三紀層である島尻層群中に凝灰岩の存在が知られており（中川1983など）、高精度のテフラ同定のためにはより詳しい調査分析を行うことが期待される。今後、よりテフラの保存状態が良い地点においてテフラ層序を確認するとともに、テフラの屈折率測定や、信頼度の高いEPMA（エレクトロンプローブX線マイクロアナライザ）による火山ガラスの主成分化学組成分析などを行って、岩石記載学的特徴を把握し、指標テフラとの同定を行いたい。

なお、沖縄本島で検出される可能性のあるテフラは、ATより下位では約9.5～11万年前に阿多カルデラから噴出した阿多テフラ（Ata, Ui1971, Nagaoka1988, Machida1999など）、約9～9.5万年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界葛原テフラ（K-Tz, 町田ほか1983, Nagaoka1988, Machida1999など）、約8.4～8.9万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4火山灰（Aso-4, 町田ほか, 1985, Machida, 1999）などがある。またATより上位では、約6,300年前（註1）に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井1978）が考えられ、ATとK-Ahに同定される可能性のあるテフラ粒子については、すでに沖縄本島周辺の海底堆積物から検出されている（町田・新井1992）。さらに台湾の火山や琉球列島および八重山諸島周辺に位置する海底火山に由来するテフラも各地に降灰している可能性があることから、テフラに関するより詳細な調査分析が期待される。

## 6. 小結

屋部前田原貝塚において、地質調査を行って土層層序の記載を行うとともに、テフラ検出分析および屈折率測定を試みた。その結果、特徴的な火山ガラスや角閃石を検出することができた。

## 《注釈》

註1 放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代。

## 《参考文献》

- 新井房夫 1972「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11 pp.254-269
- 新井房夫 1993「温度一定型屈折率測定法」『第四紀試料分析法－研究対象別分析法』日本第四紀学会編pp.138-148
- 池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 1995「南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による $^{14}\text{C}$ 年代」『第四紀研究』34 pp.377-379
- 井上克弘・佐竹英樹・若松善彦・溝田智俊・日下部実 1993「南西諸島における赤黄色土壤群母材の広域風成塵起源ー」『第四紀研究』32 pp.139-155
- 石田琢二・中川久夫 1963「徳之島に発見された火山灰について」『地質雑誌』69 p.331
- Machida, H. 1999「Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan」『recent progress. Quat. Res』38 pp.194-201
- 町田洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』46

- 町田洋・新井房夫 1978 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰」『第四紀研究』17 p.143-163
- 町田洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』東京大学出版会 276p
- 町田洋・新井房夫・百瀬 貢 1985 「阿蘇4火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層としての意義－」『火山』30 p.49-70
- 町田洋・新井房夫・長岡信治 1983 「広域テフラによる南関東と南九州の後期更新世海成段丘の対比」『日本第四紀学会講演要旨集』 no.13 p.45-46
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 1987 「姶良Tn火山灰(AT) の<sup>14</sup>C年代」『第四紀研究』26 p.79-83
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 1993 「四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の<sup>14</sup>C年代」『地質雑誌』99 p.787-798
- Nagaoka, S. 1988 The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., 23, p.49-122.
- 中川久夫 1967 「奄美諸島徳之島・沖永良部島・与論島・喜界島の地質(1)」『東北大地質古生物研邦報』 no.63 p.1-39
- 中川久夫 1983 「琉球列島新生代地史の概要」『地質学論集』 no.22 p.67-79
- 成瀬敏郎・井上克弘 1990 「大陸よりの使者－古環境研究所を語る風成塵」『熱き自然－サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ編、古今書院 p.248-267
- 小野晃司・松本征夫・宮久三千年・寺岡易司・神戸信伸 1977 「竹田地域の地質」『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』地質調査所145p
- Ui, T. 1971 Genesis of magma and structure of magma chamber of several pyroclastic flows in Japan. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Ser 2, 18 p.53-127

第43表 テフラ検出分析結果

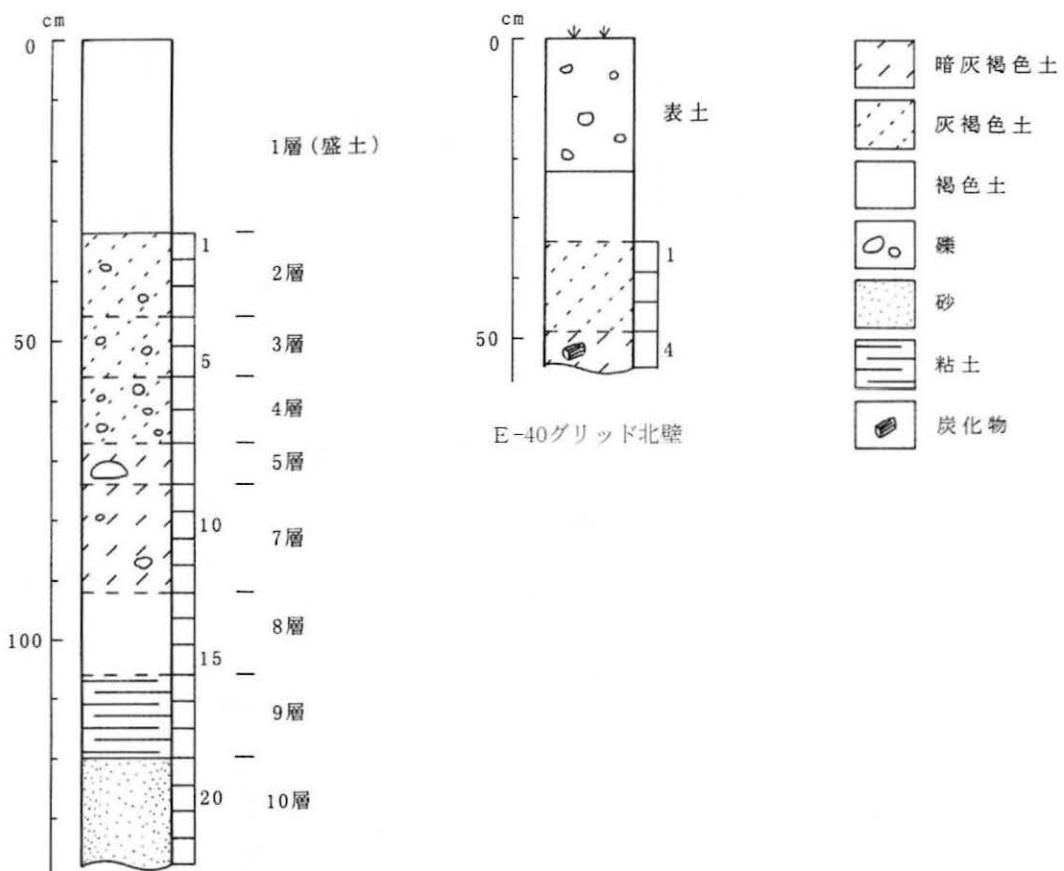
グリッド・地点 試料	軽石・スコリア			火山ガラス			
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
A-13・北壁	2	-	--	-	++	pm	淡褐, 褐
	4	-	-	-	+	pm	褐
	6	-	-	-	+	pm	褐
	8	-	-	-	-	-	-
	10	-	-	-	-	-	-
	12	-	-	-	+	pm	褐
	14	-	-	-	+	pm	褐, 淡褐
	16	-	-	-	-	-	-
	18	-	-	-	-	-	-
	20	-	-	-	-	-	-
	22	-	-	-	-	-	-
E-40・基本土層	2	-	-	-	-	-	-
	4	-	-	-	-	-	-

++++ : とくに多い, +++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない, - : 認められない。最大径の単位は, mm. bw : バブル型, pm : 軽石型。

第44表 屈折率測定結果

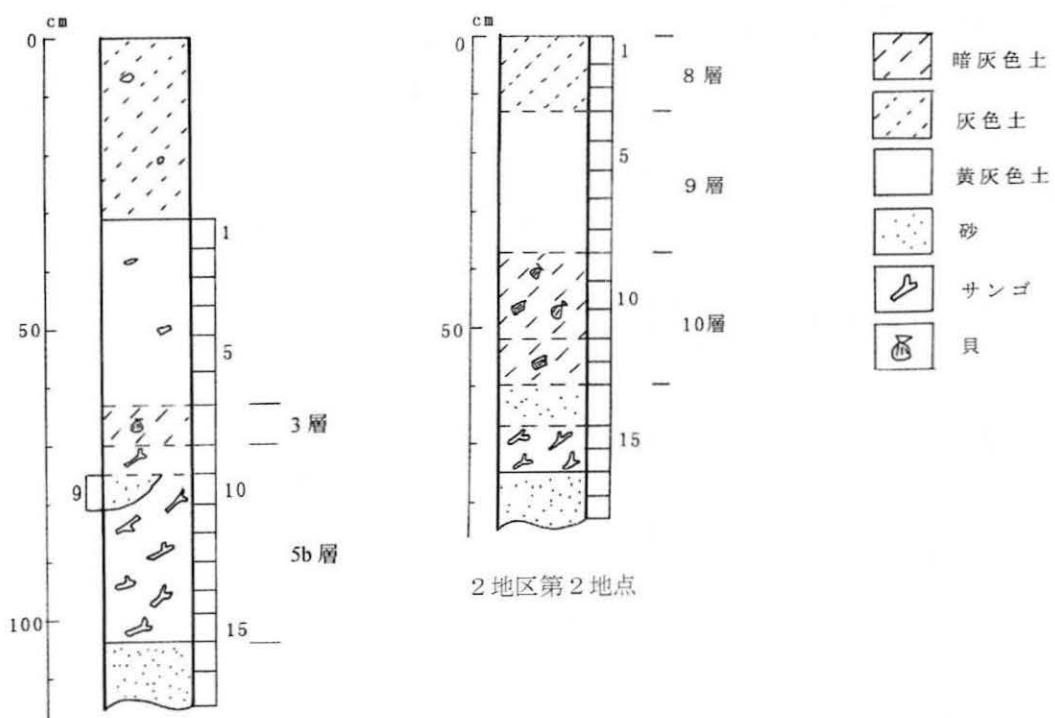
グリッド・地点 試料		火山ガラス (n)	重鉱物	角閃石 (n <sub>2</sub> )
A-13・北壁	2	1.516-1.521	-	-
A-13・北壁	14	-	(ho)	1.682-1.686
E-40・基本土層	4	-	(ho)	1.670-1.675

屈折率の測定は、温度一定型測定法（新井, 1972, 1993）による。  
ho : 角閃石. ()は、量が少ないことを示す。



A-13グリッド北壁

第106図 屋部前田原貝塚の土層柱状図① (数字はテフラ分析の試料番号)



2地区E-39グリッド

第107図 屋部前田原貝塚の土層柱状図② (数字はテフラ分析の試料番号)

## 第4節 屋部前田原貝塚における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

### 2. 試料と方法

次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。

第45表

試料名	採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	E-40グリッド 1号炉西部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 2	E-40グリッド 1号炉中央	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 3	土器付着物	炭化物	酸洗浄	AMS
No. 4	3号炉・炭化木片	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

### 3. 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )年代および暦年代(較正年代)を算出した。次表にこれらの結果を示す。

第46表

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代(較正年代) ( $2\sigma$ :95%確率)
No. 1	178040	210±40	-25.8	200±40	CalAD1640~1690, 1730~1810, 1920~1950
No. 2	178041	290±40	-25.9	280±40	CalAD1500~1670
No. 3	185106	870±40	-13.1	1070±40	CalAD890~1020
No. 4	185107	290±30	-26.0	270±30	CalAD1520~1580, 1630~1660

BP : Before Physics (Present), Cal : Calibrated, AD : 西暦紀元

#### (1) 未補正 $^{14}\text{C}$ 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いている。

#### (2) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(%)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

### (3) $^{14}\text{C}$ 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。曆年代較正にはこの年代値を使用する。

### (4) 曆年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}\text{C}$ 測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線（IntCal 98）を使用した。

曆年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した年代の幅を表し、ここでは信頼限界2シグマ $\sigma$ （95%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

## 3. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 では $200 \pm 40$ 年BP（ $2\sigma$ の曆年代でAD 1640～1690, 1730～1810, 1920～1950年）、No. 2 では $280 \pm 40$ 年BP（AD 1520～1580, 1630～1660年）、No. 3 では $1070 \pm 40$ 年BP（AD 890～1020年）、No. 4 では $270 \pm 30$ 年BP（AD 1640～1660年）の年代値が得られた。

なお、No. 3（土器付着物）については $\delta^{13}\text{C}$ の値が-13.1‰と高いことから、海産物の影響が考えられる。海産物の影響がある場合は、その割合に応じて海洋リザーバー効果により年代が数百年古く見積もられている可能性がある。これを確認するには炭素と窒素の炭素安定同位体比による食性分析（南川 2003, 米田 2004）を行う必要がある。

## 《参考文献》

- Stuiver, M., et. al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, pp.1041-1083  
中村俊夫 1999 「放射性炭素法」『考古学のための年代測定学入門』古今書院pp.1-36  
南川雅男 2003 「炭素・窒素同位体分析による食性解析」『環境考古学マニュアル』松井章編. 同成社 pp.283-291  
米田穣 2004 「炭素・窒素同位体による古食性復元」『環境考古学ハンドブック』安田喜憲編. 朝倉書店, pp.411-418

と、4) 風化作用などによって植物珪酸体が分解・消失したことなどが考えられる。

9層から5層にかけては、ススキ属やチガヤ属などのイネ科草本類が生育する比較的開かれた環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

4層から2層にかけては、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われており、ススキ属やチガヤ属などのイネ科草本類は減少したと考えられる。また、当時は遺跡周辺にシイ属やイスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

#### (2) E-40グリッド(1号炉)

基本土層の炭化物混じり暗灰褐色土および灰褐色土の堆積当時は、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われており、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属などが生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはクスノキ科やイスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

1号炉については、炉内や焼土部で焼かれた植物の検出が期待されたが、これを示唆するような明瞭な結果は得られなかった。

#### (3) 2地区第2地点

10層および9層では、植物珪酸体が検出されなかった。植物珪酸体が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。8層の堆積当時は、キビ族などは少量見られるものの、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

#### (4) 2号炉

植物珪酸体がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと考えられる。ここでは、炉内で焼かれた植物の検出が期待されたが、これを示唆するような結果は得られなかった。

### 《参考文献》

- 杉山 真二 1999 「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』38(2) pp.109-123
- 杉山 真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 pp.189-213
- 藤原 宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 pp.15-29
- 藤原 宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17 pp.73-85

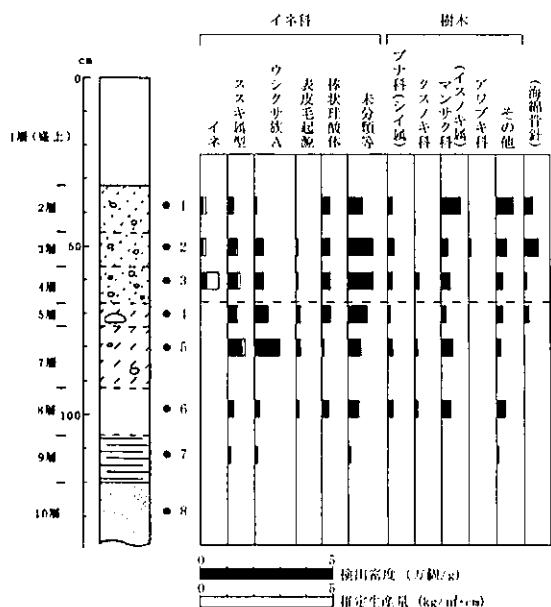
検出密度 (単位: × 100個/g)

第47表 屋部前原貝塚における植物珪酸体分析結果

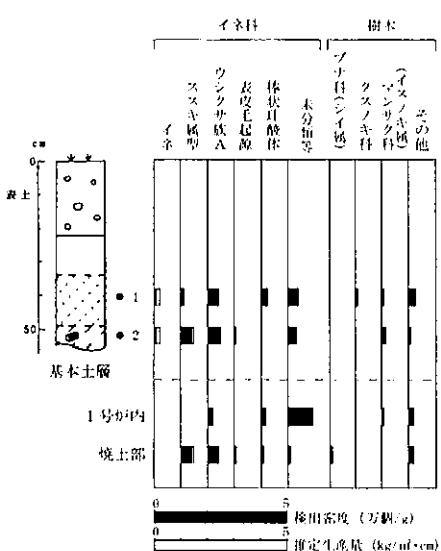
分類群	学名	地点・試料	A-13グリッド北壁								E-40グリッド			2地区第2地点		2号地		
			1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	1	1	1	2	3	1
イネ科	Gramineae (Grasses)																	
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		7	7	22						7	7						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		15	30	37	30	53	15	7		7	37		37				
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A</i> type		7	30	30	45	91	15	7		37	45	15	37				
キビ族型	<i>Paniceae</i> type														7			
その他のイネ科	Others																	
表皮毛起源	Husk hair origin				7	7	15	15	8			7		15				
棒状珪酸体	Rod-shaped		30	30	30	30	8	23			22		15	7	7			22
未分類等	Others		52	90	90	68	45	38	7		37	30	90	7	45			15
樹木起源	Arboreal																	
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>		15	22	15	8	15	15					7	7	7			
クスノキ科	Lauraceae					15		8	8			7						
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>		67	22	30	15	38	30			7	15	7					
アワブキ科	Sabiaceae					7									7			
その他 (海綿骨針)	Others Sponge		60	37	22	23	15	30	7	--	22	7	15	15	22	--	--	7
植物珪酸体総数	Total		254	285	300	233	287	182	30	0	149	149	142	126	97	0	0	45

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>·cm)

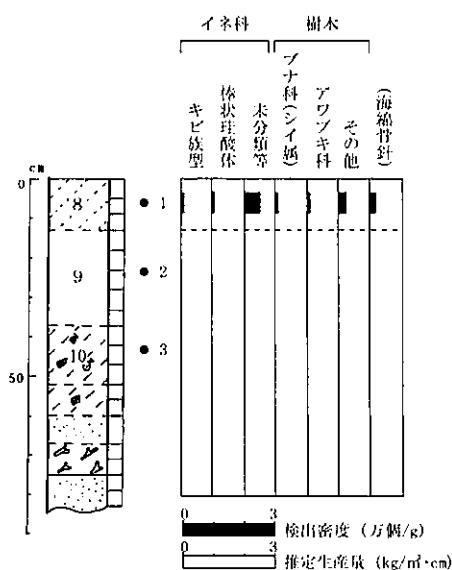
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.22	0.22	0.66						0.22	0.22							
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.19	0.37	0.46	0.37	0.65	0.19	0.09		0.09	0.46		0.46					



第108図 屋部前田原貝塚A-13グリッド北壁における植物珪酸体分析結果



第109図 屋部前田原貝塚E-40グリッドにおける植物珪酸体分析結果



第110図 屋部前田原貝塚2地区第2地点における植物珪酸体分析結果



写真 1-1 イネ  
A-13グリッド北壁 1

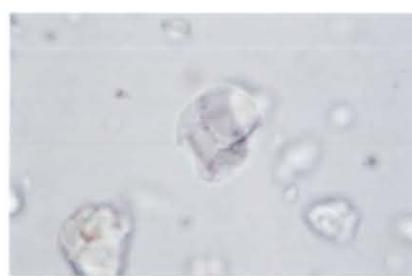


写真 1-2 イネ  
A-13グリッド北壁 1



写真 1-3 イネ（側面）  
A-13グリッド北壁 1



写真 2-1 ススキ属型  
A-13グリッド北壁 3



写真 2-2 ススキ属型  
A-13グリッド北壁 5



写真 3 ウシクサ族A  
A-13グリッド北壁 4

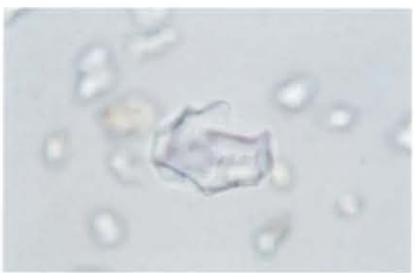


写真 4 ブナ科（シイ属）  
A-13グリッド北壁 4



写真 5 クスノキ科  
A-13グリッド北壁 5

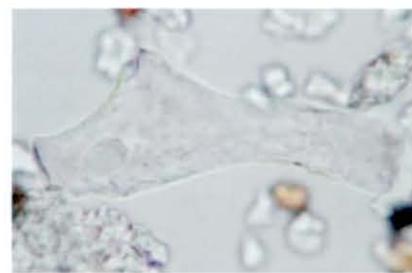


写真 6-1 マンサク科（イスノキ属）  
A-13グリッド北壁 1

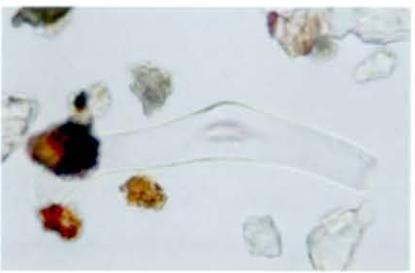


写真 6-2 マンサク科（イスノキ属）  
A-13グリッド基本土層 2



写真 7 アワブキ科  
A-13グリッド北壁 2



写真 8 海面骨針  
A-13グリッド北壁 2

— 50 μm —

図版2 植物珪酸体（プラント・オバール）の顕微鏡写真

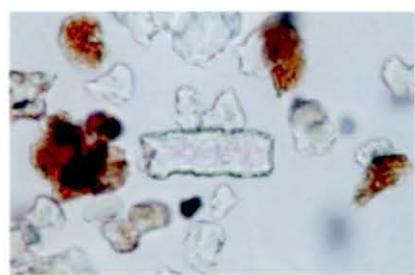


写真 9 キビ属型  
2地区第2地点 1

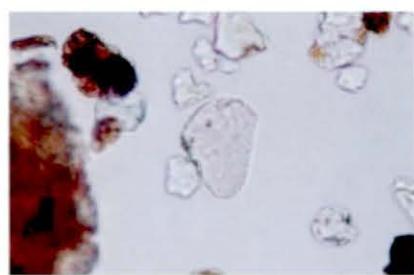


写真 10-1 イネ科（未分類等）  
2地区第2地点 1



写真 10-2 イネ科（未分類等）  
2地区第2地点 1



写真 11 棒状珪酸体  
2地区第2地点 1

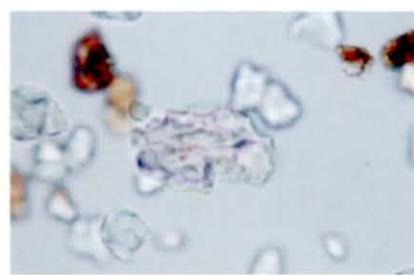


写真 12 アワブキ科  
2地区第2地点 1

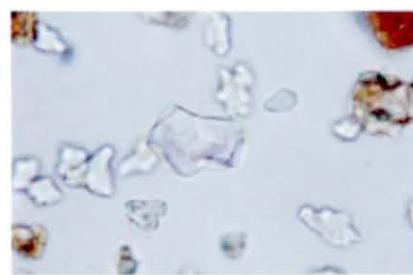


写真 13 ブナ科（シイ属）  
2地区第2地点 1



写真 14 樹木起源（その他）  
2地区第2地点 1

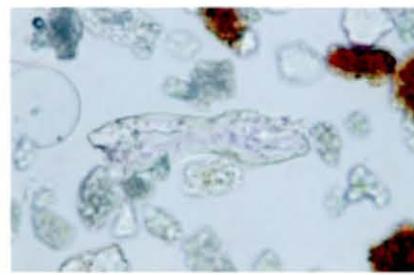


写真 15 樹木起源（その他）  
2地区第2地点 1

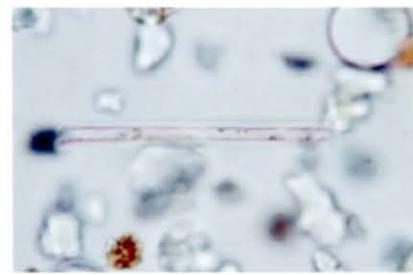


写真 16 海面骨針  
2地区第2地点 1

— 50 μm —

図版3 植物珪酸体（プランツ・オバール）の顕微鏡写真

# 第6節 屋部前田原貝塚における花粉分析

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

## 2. 試料

試料は、A-13グリッド北壁の4層（試料3）～9層（試料7）、2地区E-39グリッドの3層（試料2）とその直上層（試料1）、2地区第2地点の8層（試料1）～10層（試料3）およびその下位層準（試料4～7）から採取された計14点である。

## 3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水してアセトトリシス処理を施す
- 5) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

## 4. 結果

### （1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉2、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉13、シダ植物胞子2形態の計19である。また、寄生虫卵の回虫卵1分類群が検出された。分析結果を表2に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

#### 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属（写真1・写真10）、スギ（写真11）

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ウコギ科

#### 〔草本花粉〕

イネ科（写真2・写真12）、カヤツリグサ科（写真4・写真13）、タデ属サナエタデ節、キンポウゲ属、アブラナ科（写真14）、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、キツネノマゴ、タンボボ亜科（写真6・写真16）、キク亜科（写真5・写真16）、ヨモギ属（写真17）

[シダ植物胞子]

単条溝胞子（写真8・写真18）、三条溝胞子（写真9・写真19）

[寄生虫卵]

回虫卵（写真20）

(2) 花粉群集の特徴

1) A-13グリッド北壁

下位の9層（試料7）から7層（試料5）にかけては、花粉がほとんど検出されなかった。5層（試料4）では、草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子も比較的多い。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率が高く、アブラナ科、タンポポ亜科、セリ亜科などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属の出現率が高い。4層（試料3）では、花粉密度が低く、シダ植物胞子の割合が高い。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、マツ属複維管束亜属などが検出されるが、いずれも少量である。

2) E-39グリッド

3層（試料2）とその直上層（試料1）では、タンポポ亜科やシダ植物胞子などが検出されたが、いずれも微量である。

3) 第2地点

8層（試料1）～褐色砂（試料7）では、部分的にマツ属複維管束亜属、イネ科、ヨモギ属、シダ植物胞子などが検出されたが、いずれも微量である。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

(1) A-13グリッド北壁

下位の9層から7層にかけては、花粉がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、1) 乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2) 土層の堆積速度が速かったこと、3) 水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

5層の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、シダ植物をはじめ、アブラナ科、タンポポ亜科などの草本類が生育する日当たりの良い人里の環境であったと考えられ、遺跡周辺にはリュウキュウマツなどのマツ属（マツ属複維管束亜属）が分布していたと推定される。

なお、花粉分析では植物珪酸体分析で検出されたシイ属、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹が認められないが、これは花粉と植物珪酸体の堆積様式や保存状況の差異によるものと考えられる。また、クスノキ科は花粉壁が完全には保存されないことから、花粉分析では把握が困難である。

4層では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、5層とおおむね同様であった可能性が考えられる。花粉があまり検出され原因としては、前述のようなことが考えられる。なお、同層では寄生虫卵の回虫卵が検出されたが、低密度であることから、集落周辺における通常の汚染と考えられる。回虫は、中間宿主を必要とせず、糞便とともに排泄された寄生虫卵が付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

## (2) E-39グリッド

7世紀頃の遺物が検出された3層では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、タンポポ亜科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆される。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

## (3) 第2地点

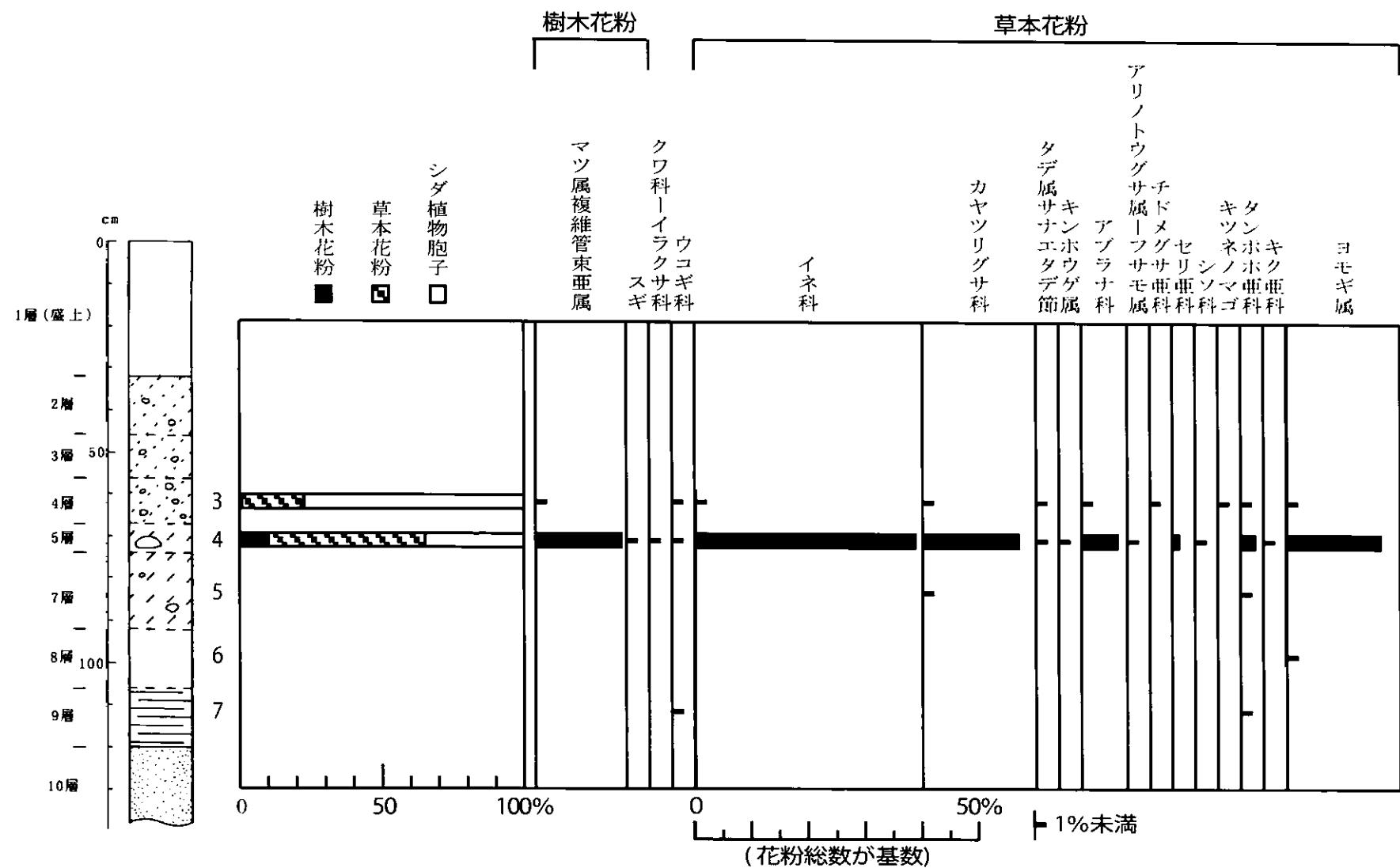
土器片が検出された10層では、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、周辺にマツ属が存在していた可能性が示唆される。その他の層準では、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

### 《参考文献》

- 金原 正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店pp.248-262
- 金原 正明 1999 「寄生虫」『考古学と動物学、考古学と自然科学』2 同成社pp.151-158
- 金原 正明 2004 「寄生虫卵分析」『環境考古学ハンドブック』朝倉書店pp.419-429
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p
- 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院pp.82-110
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p

第48表 屋部前田貝塚における花粉分析結果

分類群		A-13グリッド北壁					2地区								
学名	和名	3	4	5	6	7	E-39グリッド		第2地点						
							1	2	1	2	3	4	5	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉														
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亞属	1	55										1		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1												
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉														
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		1												
Araliaceae	ウコギ科	1	2				1								
Nonarboreal pollen	草本花粉														
Gramineae	イネ科	9	141					1					1	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	62	5					2						
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	1												
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属		1												
Cruciferae	アブラナ科	3	23												
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属		1												
Hydrocotyloideae	チドメグサ亞科	1			4										
Apioidae	セリ亜科														
Labiatae	シソ科		1												
<i>Justicia procumbens</i>	キツネノマゴ	1													
Lactucoideae	タンボポ亜科	1	9	2		3	2	2							
Asteroideae	キク亜科		2												
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	9	60		1		1					1		1	
Fern spore	シダ植物胞子														
Monolate type spore	单条溝胞子	43	62	5	3		4	1	3	2	2	1	4		
Trilate type spore	三条溝胞子	64	131	26	14	8	7	7	3	3	6	4	10	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	1	56	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
Nonarboreal pollen	草本花粉	30	305	7	1	3	4	4	0	0	2	0	1	1	
Total pollen	花粉総数	32	364	7	1	4	4	4	0	0	1	2	0	1	
Unknown pollen	未同定花粉	6	8	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Fern spore	シダ植物胞子	107	193	31	14	11	7	11	1	6	3	8	6	11	
Helminth eggs	寄生虫卵														
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵		1												
Total	計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	



第111図 薮前田原貝塚 A-13グリッド北壁における花粉ダイアグラム

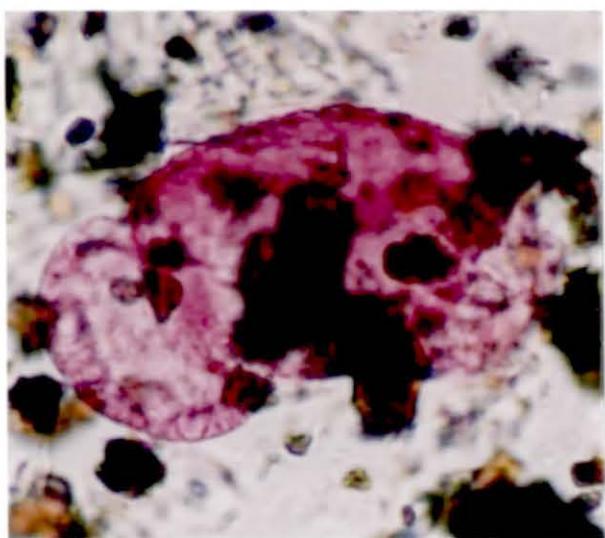


写真1 マツ属複雑管束亞属

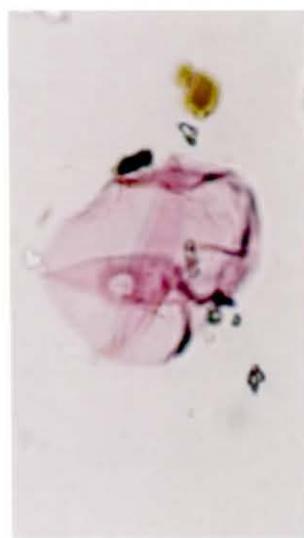


写真2 イネ科

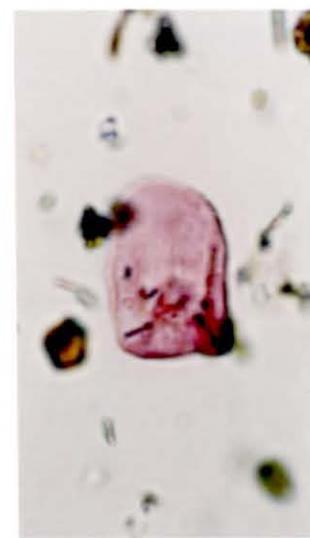


写真3 カヤツリグサ科



写真4 カヤツリグサ科



写真5 キク亜科

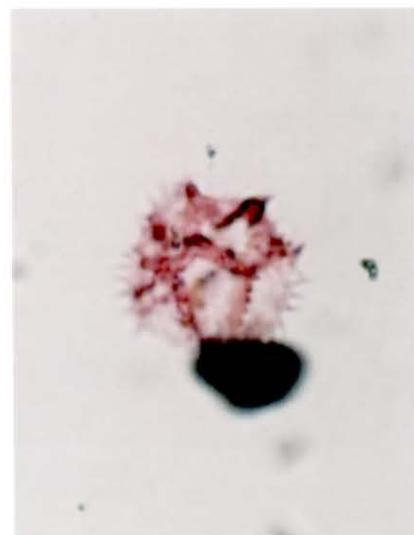


写真6 タンボボ亜科

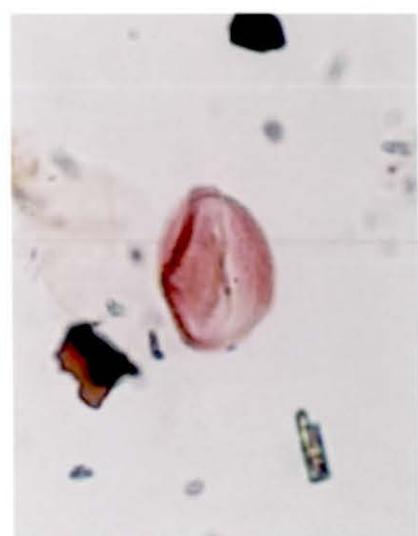


写真7 ヨモギ属



写真8 シダ植物单条溝胞子

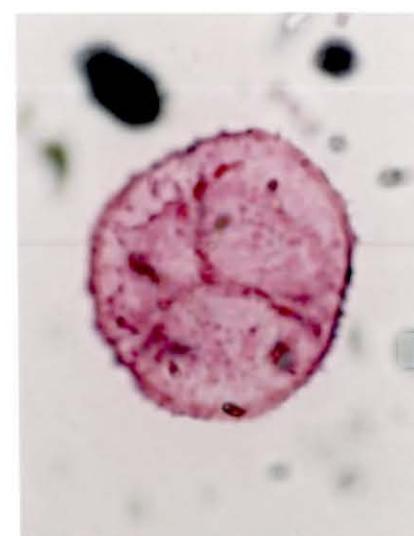


写真9 シダ植物三条溝胞子

— 10 μm —

図版4 屋部前田原貝塚の花粉・胞子

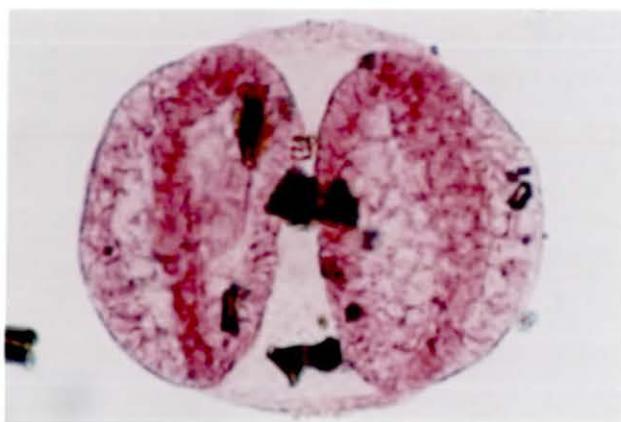


写真10 マツ属複雑管束亞属



写真11 スギ

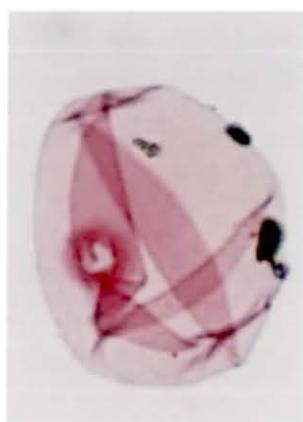


写真12 イネ科

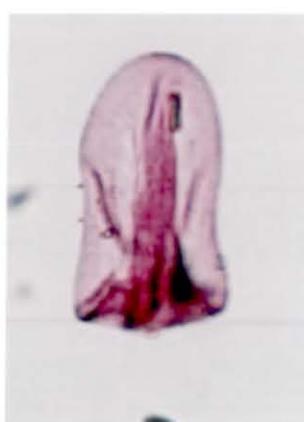


写真13 カヤツリグサ科



写真14 アブラナ科

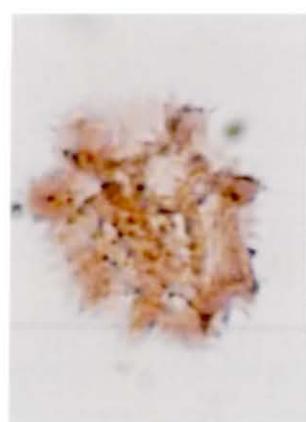


写真15 タンポポ亞科

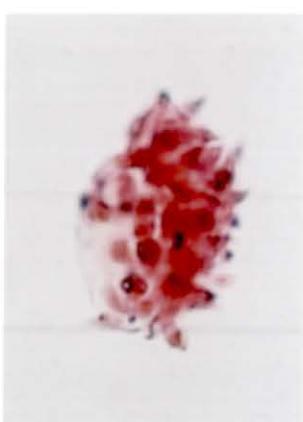


写真16 キク亜科



写真17 ヨモギ属

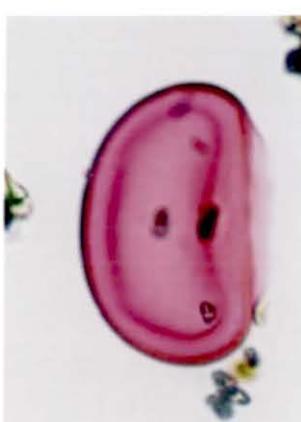


写真18 シダ植物单条溝胞子



写真19 シダ植物胞子三条溝

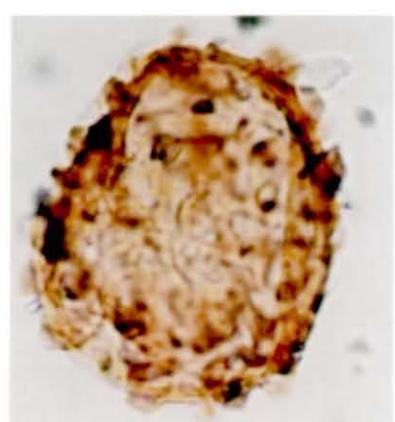


写真20 回虫卵

— 10 μm —

図版5 屋部前田原貝塚の花粉・胞子・寄生虫卵

## 第7節 屋部前田原貝塚における樹種同定

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試料

試料は、1号炉、2号炉、3号炉から採取された炭化材8点である。

### 3. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

第49表に同定結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科（写真1）

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管がおもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部では小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質より、エゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の小高木で、高さ約10m、径約30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

#### マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科（写真2）

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材へのやや移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツ、アカマツ、リュウキュウマツなどがあるが、本試料は分布域からリュウキュウマツと考えられる。マツ属複維管束亜属は、常緑高木で、材は水湿によく耐え、広く用いられる。

#### 散孔材 *diffuse-porous wood*（写真3）

横断面：小型の道管が散在する。放射断面：道管と異性の放射組織が存在する。接線断面：道管が存在し、異性放射組織型で1～3細胞幅の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、ヒサカキ属、シキミなどに類似する点も見られるが、不

明瞭な点が多いことから散孔材の同定にとどめた。

#### 不明 unknown

試料の保存状態が悪く、木材としての組織が確認できいため、不明とした。

### 5. 所見

樹種同定の結果、1号炉から採取された炭化材はエゴノキ属と同定された。また、2号炉、3号炉から採取された炭化材では、マツ属複維管束亞属5、散孔材1、不明1が同定された。

エゴノキ属は谷沿いなどの水際を好んで生育することから、遺跡周辺にこのような環境が存在していた可能性が示唆される。リュウキュウマツなどのマツ属は、樹脂が豊富であり燃料に適している。

#### 《参考文献》

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985『木材の構造』文永堂  
出版290p.

島地 謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣296p.

山田 昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」  
『植生史研究特別1号』植生史研究会242p.

第49表 屋部前田原貝塚における樹種固定結果

試料	結果（学名／和名）	
1号炉	Styrax	エゴノキ属
2号炉C-1	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属
2号炉C-2	unknown	不明
2号炉C-3	diffuse-porous wood	散孔材
3号炉C-1	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属
3号炉C-2	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属
3号炉C-3	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属
3号炉C-4	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属



横断面 0.4mm

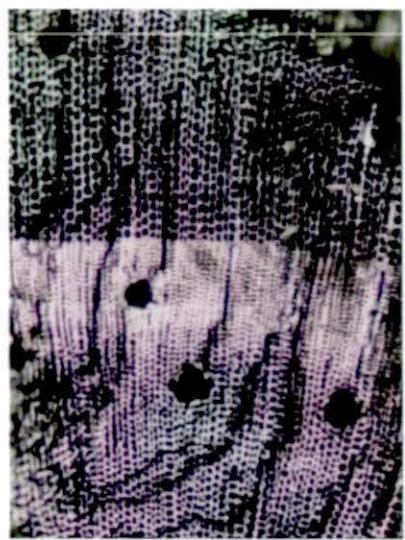
1.②C-1 マツ属複雑管束亜種



放射断面 0.2mm



放射断面 0.2mm



横断面 0.4mm

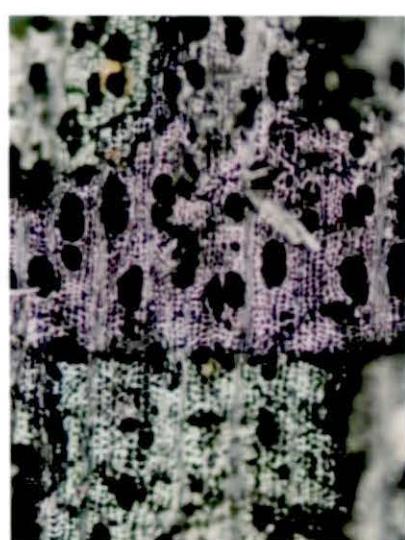
2.③C-4 マツ属複雑管束亜種



放射断面 0.2mm



放射断面 0.2mm

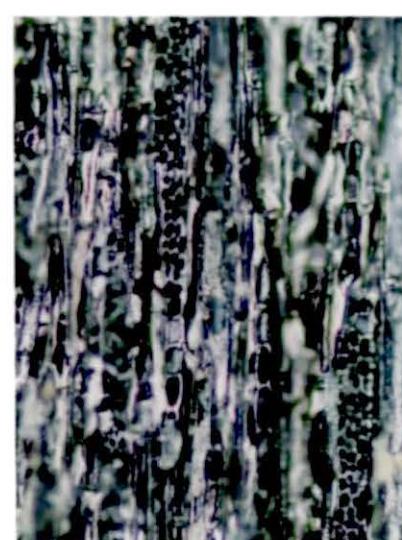


横断面 0.4mm

3.炭化材 エゴノキ属



放射断面 0.2mm



放射断面 0.2mm

図版6 屋部前田原貝塚の炭化材

## 第8節 屋部前田貝塚における種実同定

株式会社古環境研究所

### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

### 2. 試料

試料は、近世とされる2号炉と3号炉から採取された2試料である。

### 3. 方法

以下の方法で、種実の抽出と同定を行った。

- 1) 試料に水を加えて泥化
- 2) 搅拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比を行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### 4. 結果

分析の結果、種実はいずれの試料からも検出されなかった

### 《参考文献》

- 笠原 安夫 1985『日本雑草図説』 養賢堂, 494p.
- 笠原 安夫 1988「作物および田畠雑草種類」『弥生文化の研究第2巻生業』雄山閣出版 pp.131-139
- 南木 瞳彦 1992「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナルNo.355』ニューサイエンス社 pp.18-22
- 南木 瞳彦 1993「葉・果実・種子」日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会 pp.276-283

# 第9節 名護市屋部前田原貝塚出土黒曜石の産地推定分析

株式会社古環境研究所

## 1. はじめに

屋部前田原貝塚で出土した黒曜石製石器について元素分析を行い、原産地の推定を試みた。

## 2. 試料と方法

対象試料は、屋部前田原貝塚より出土した黒曜石の剥片18点である（表1）。

分析装置は、(株)セイコーインスツルメンツ社製の卓上型蛍光X線分析計SEA-211OLを使用した。装置の仕様は、X線管はロジウムRhターゲット、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間240sec、照射径10mm、電流自動設定(1-63μA、デッドタイムが20%未満になるよう自動的に設定)、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(望月2004)を用いた。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3) Zr分率=Zr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 4) Mn強度×100/Fe強度
- 5) log(Fe強度/K強度)

これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定する。

## 3. 分析結果

第50表に産地推定結果を示す。第112図および第113図に黒曜石原石の判別図と屋部前田原遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、すべての試料が伊万里腰岳群の範囲に収まった。判別図による推定結果と多変量解析(判別分析)による推定結果は100%一致しており、推定結果の信頼度は高いものと考えられる。また、判別分析における帰属確率もすべての試料で99.9%を超えていていることからも信頼度は高いと思われる。

## 4. まとめ

屋部前田原貝塚より出土した黒曜石について蛍光X線分析による産地推定を行った。その結果、18試料すべてが伊万里腰岳群産と推定された。

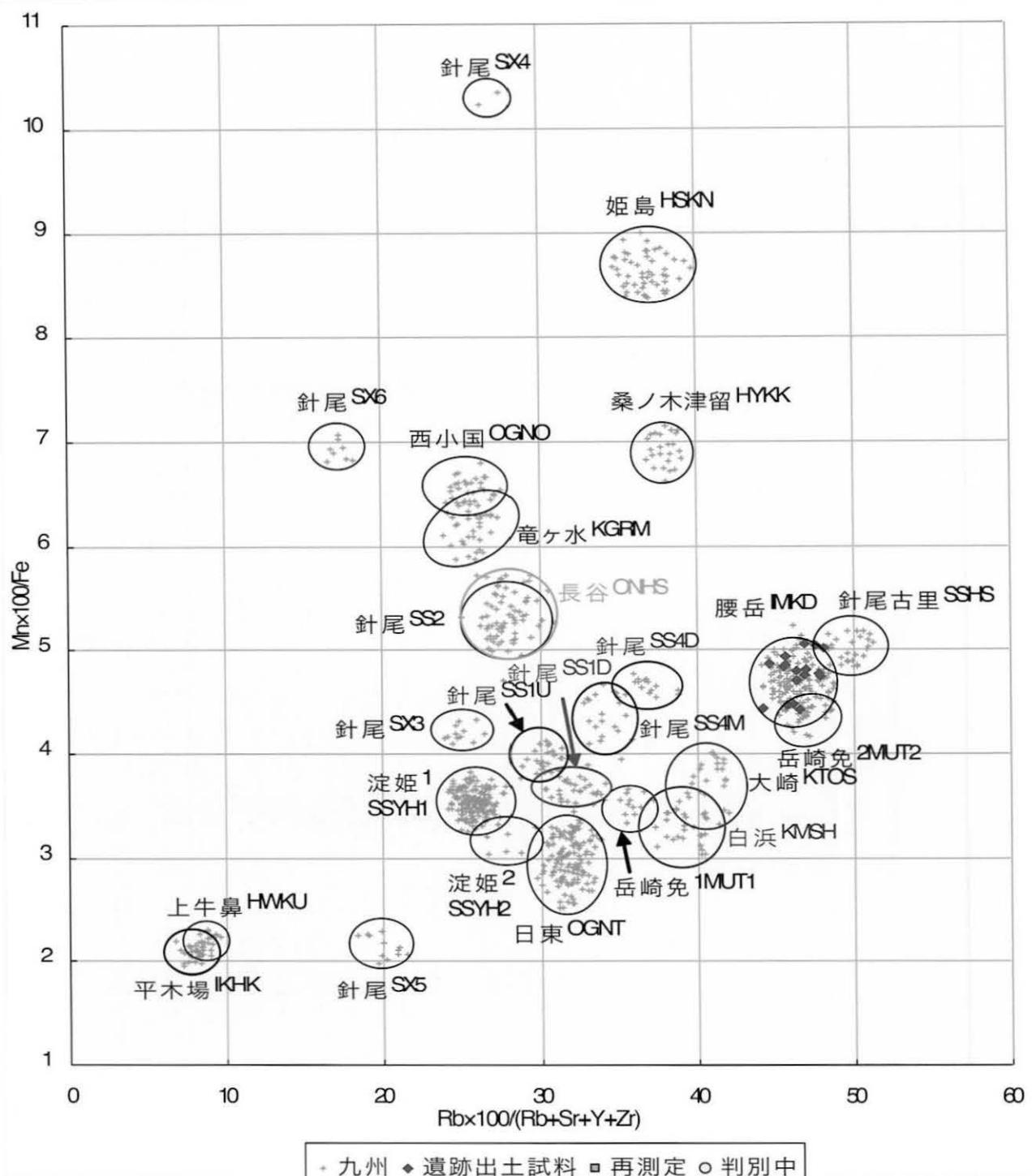
### 《参考文献》

望月 明彦 2004 「用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定」『かながわ考古学財団調査報告167 用田大河内遺跡』財団法人かながわ考古学財団 pp.511-517

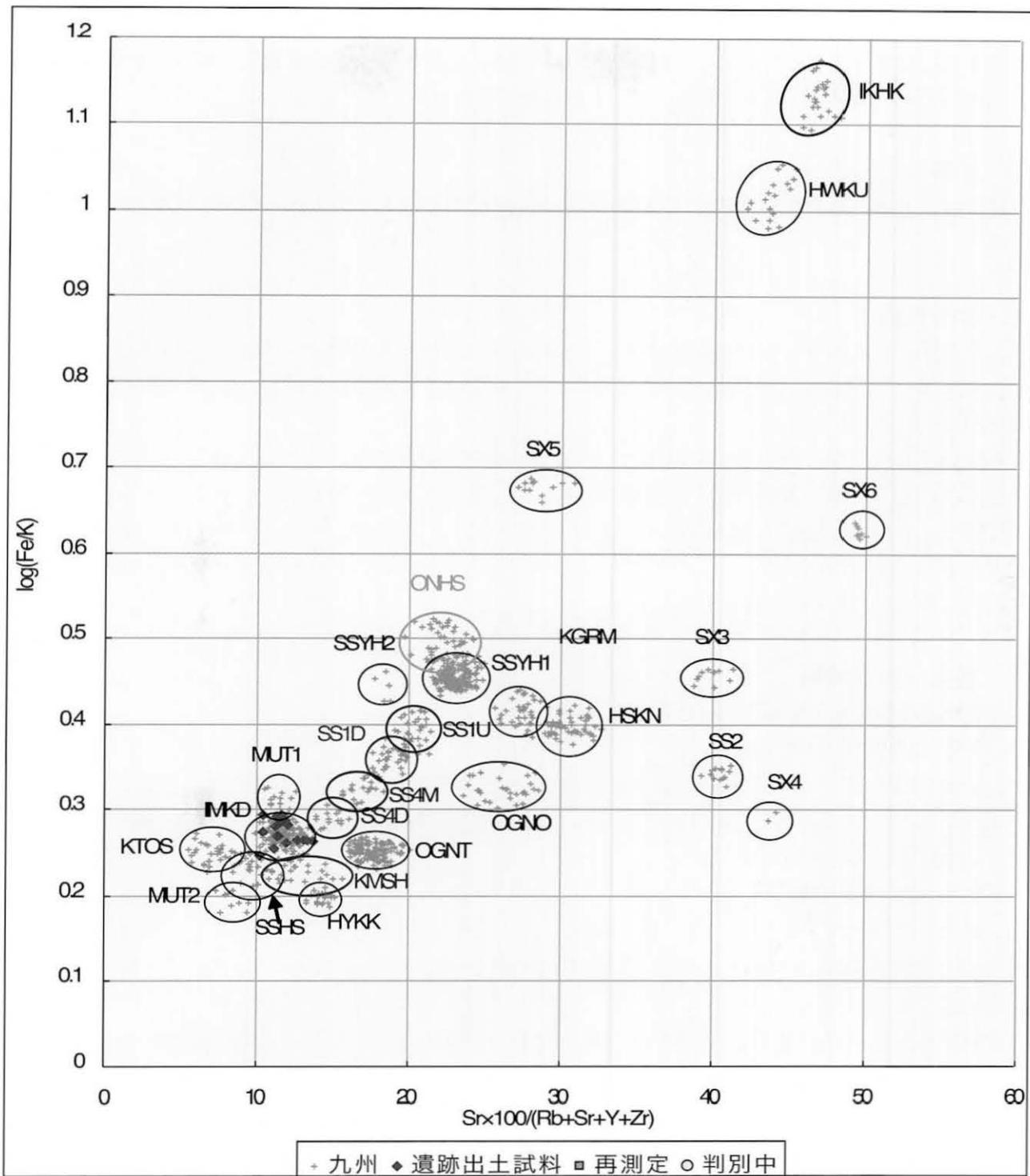
第50表 屋部前田原貝塚出土黒曜石製石器産地推定結果

試料番号	袋番号	地区名	出土層位	判別図 判別群	判別分析				推定産地		
					第1候補産地			第2候補産地			
					判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	
1	No. 7	III地区 B48	2層	IMKD	IMKD	5.52	0.999	SSHS	21.13	0.0001	伊万里腰岳群
2	No. 18	III地区 B48	2層	IMKD	IMKD	5.23	1	SSHS	33.28	0	伊万里腰岳群
3	No. 27	II地区 A39	8層	IMKD	IMKD	0.61	1	SSHS	22.82	0	伊万里腰岳群
4	No. 28	II地区 Y37	9層	IMKD	IMKD	8.58	0.9998	SSHS	21.23	0.0002	伊万里腰岳群
5	No. 91	III地区 C45		IMKD	IMKD	10.25	0.9998	SSHS	23.50	0.0002	伊万里腰岳群
6	No. 93	III地区 E46	2層	IMKD	IMKD	6.87	1	SSHS	32.71	0	伊万里腰岳群
7	No.101	III地区 E47	3層	IMKD	IMKD	8.55	1	MUT2	26.57	0	伊万里腰岳群
8	No.114	III地区 B47	3層	IMKD	IMKD	7.99	0.9996	SSHS	19.69	0.0004	伊万里腰岳群
9	No.117	III地区 B48	3層	IMKD	IMKD	3.59	1	MUT2	31.55	0	伊万里腰岳群
10	No.151	III地区 B46	3層	IMKD	IMKD	14.90	0.9998	SSHS	28.17	0.0002	伊万里腰岳群
11	No.152	III地区 B47	2層	IMKD	IMKD	1.28	1	SSHS	17.62	0	伊万里腰岳群
12	No.153	III地区 C47	2層	IMKD	IMKD	3.07	1	SSHS	28.14	0	伊万里腰岳群
13	No.154-1	III地区 B48	3層	IMKD	IMKD	0.61	1	SSHS	16.88	0	伊万里腰岳群
14	No.154-2	III地区 B48	3層	IMKD	IMKD	0.61	1	SSHS	16.88	0	伊万里腰岳群
15	No.155	III地区 D46	3層	IMKD	IMKD	4.69	1	SSHS	25.65	0	伊万里腰岳群
16	No.156	III地区 D48		IMKD	IMKD	7.35	0.9998	SSHS	20.05	0.0002	伊万里腰岳群
17	No.157	III地区 D46		IMKD	IMKD	4.15	0.9997	SSHS	16.54	0.0003	伊万里腰岳群
18	No.441	III地区 C50		IMKD	IMKD	306.00	1	MUT2	28.56	0	伊万里腰岳群

IMKD:伊万里腰岳群, SSHS:佐世保針尾古里, MUT2:松浦岳崎免2群



第112図 屋部前田原貝塚出土黒曜石判別図（1）



第113図 屋部前原貝塚出土黒曜石判別図 (2)

# 第10節 くびれ平底土器底部の圧痕観察

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1. はじめに

屋部前田原貝塚(沖縄県名護市屋部所在)の発掘調査では、貝塚時代中期とされる人骨や、くびれ平底土器などの遺物が出土している。今回の分析調査では、くびれ平底土器の底部に確認された稻穀由来とされる圧痕の観察を実施し、稻穀由来か否かの検討を試みる。

## 2. 試料

試料は、土器3点(15NYbMK2902E-36 8層、17NYbMK190C-45、15NYbMK4940A-36柱10)である。

## 3. 分析方法

土器底部の圧痕の表面を双眼実体顕微鏡下で観察する。圧痕の特徴を、イネ(*Oryza sativa L.*)の現生標本(穎果、胚乳)および石川(1994)、中山ほか(2000)等の文献類と比較し、圧痕を形成した物質の種類や部位の特定を試みる。

土器1点(15NYbMK4940A-36柱10)については、実体顕微鏡のほかに、マイクロスコープ(株式会社キーエンス製; VHX-1000)による観察を実施する。また、土器を破壊しないように細心の注意を払いながら、シリコン樹脂(株式会社ニッシン製; JMシリコン インジェクションタイプ)を使用して、圧痕部のレプリカを製作する。さらに、圧痕レプリカを金で蒸着し、走査型電子顕微鏡(SEM)(日本電子株式会社製; JCM5700)で観察する。

## 4. 結果および考察

### 〈実体顕微鏡による観察〉

#### ・15NYbMK2902E-36 8層

土器表面は粗面で、底部全面に径1~2mmの円~広楕円体の凹みが十数箇所散在する。圧痕群は、イネよりも明らかに小型で円状を呈す点から、イネによる圧痕とは区別され、アワやキビなどの雑穀類による圧痕の可能性がある。

#### ・17NYbMK190C-45

土器表面は粗面で、底部中央部に長さ5mm、幅1.8mm程度の長楕円体の凹みが1箇所確認される。凹みは土器縁部に向かい斜めに深く、最深2mm程度で、表面には長軸方向に1本の深く鋭利な線状模様がある。

圧痕には、イネの穎(稻穀)の表面模様や果実序柄(小穂軸)、胚乳(玄米)の基部の胚の凹みに該当する箇所が確認されない点と、圧痕から推定される1本の高く鋭利な縦隆条は、イネの表面の縦隆条とは明らかに異なる点から、イネによる圧痕とは区別される。しかしながら、種類や部位の特定はできなかった。

### 〈実体顕微鏡・マイクロスコープ・レプリカ作製・SEM観察〉

#### ・15NYbMK4940A-36柱10(図版9)

土器を構成する胎土の表面は、かなり粗雑な質感を呈し、風化による空隙や亀裂も多数確認された。土器底部中央部に、長さ6.5mm、幅3mm、深さ1~1.4mmの非対称長楕円体の凹みが1箇所確認された。

圧痕部をマイクロスコープで観察し、画像処理による深度合成(図版9-3)と3D反転(図版9-4、5)を試みた結果、イネの表面に似る2本の縦隆条が確認された。この時点では、穎か胚乳かの区別ができなかった。

圧痕レプリカ(図版9-6)は、長さ6.7mm、最大幅2.5mm、厚さ1~1.4mmの細長い非対称長楕円体で、両端は尖り、表面には2本の縦隆条がある。なお、イネの胚乳(玄米)には、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部があるが、圧痕レプリカには胚脱落部が認められないため、イネの胚乳による圧痕とは区別される。

圧痕レプリカの一端は、尖部が正中線上にあり、先端は丸みを帯びる(図版9-6；左側)。一方、反対側の尖部は正中線上よりずれた位置(縦隆条上)にあり、先端は2裂して狭い側が鋭く尖る(図版9-6；右側)。

イネの穎(稲穂)は、ともに舟形で5脈をもつ大型の外穎(護穎と言う場合もある)と、3脈をもつ小型の内穎が縫合して稲穂を構成する。圧痕レプリカは、イネの外穎と内穎に似る特徴を示しており、図版9-6の右側が頂部、左側が基部で、下側の面積が狭い方が内穎、残りの上側が外穎と考えられる。

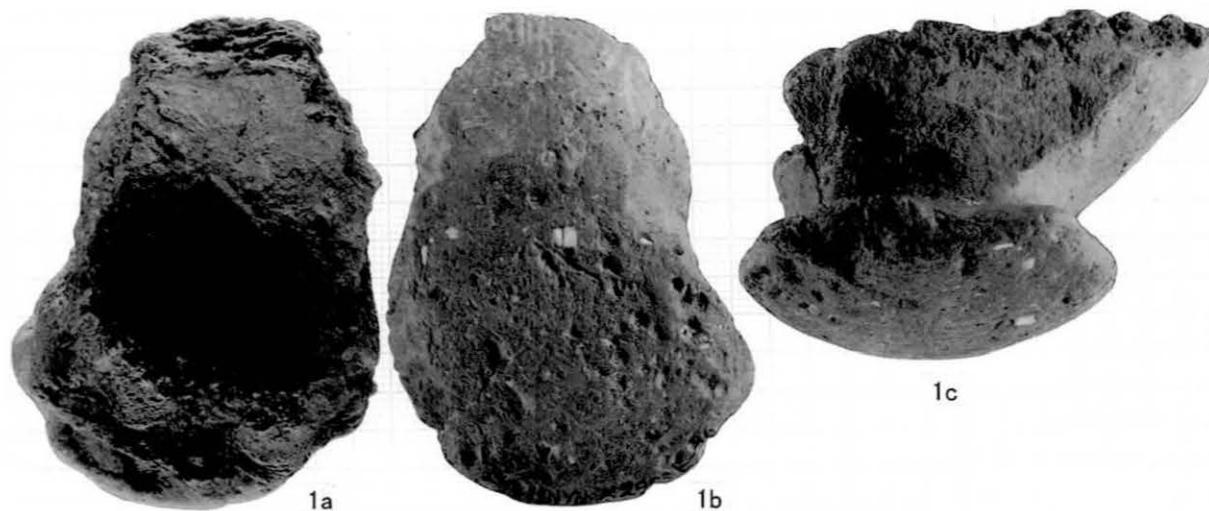
ただし、圧痕レプリカには、イネの穎の基部にある果実序柄(小穂軸)や護穎、果皮特有の表面模様(顆粒状突起の縦列)が確認されなかった。これらは元々欠損していた可能性や、胎土の風化により失われた可能性があるかもしれないが、土器圧痕の鑑定には慎重な対応を望む意見があり、池橋(2005)は、これまで稲穂痕と鑑定された土器圧痕数例に疑問点を指摘しており、厳密な再検討の必要性を述べている。

今回確認された圧痕は、イネの穎による可能性があるが、現時点でイネの穎と断言できる確実な証拠が揃ったとは言えない。そのため、本分析では疑問符を付し、イネの穎?としている。

遺跡出土土器圧痕に稲穂痕が確認された確実な例では、東京都田園調布南遺跡の弥生時代後期が挙げられ、内穎や外穎、護穎、芒、穎表面の顆粒状配列が明瞭に確認されるなど、圧痕原体の形が極めて忠実に残されている(丑野・新里,1992)。今回提示したイネの可能性は、今後の土器圧痕および種実遺体の出土の可能性や、分析精度の向上による解明の可能性などを示唆しており、資料蓄積が大いに期待される。

## 《引用文献》

- 池橋 宏 2005 『稲作の起源－イネ学から考古学への挑戦』 講談社 278p  
石川 茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 328p  
中山 至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 642p  
丑野 肇・新里 康 1992 「土器に残された圧痕の観察」『田園調布南2』 都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書,都立学校遺跡調査会pp. 176-205



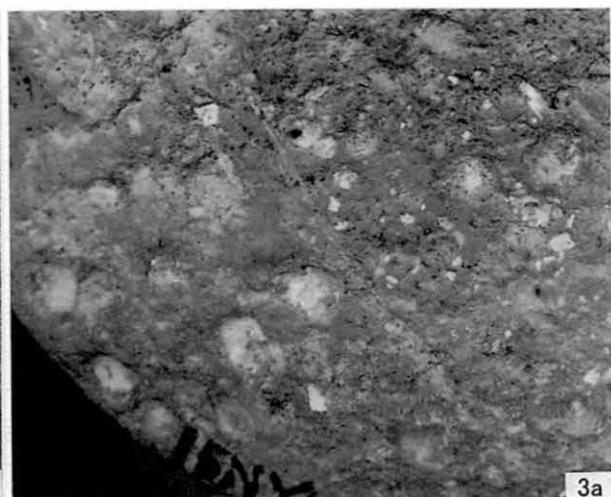
1a

1b

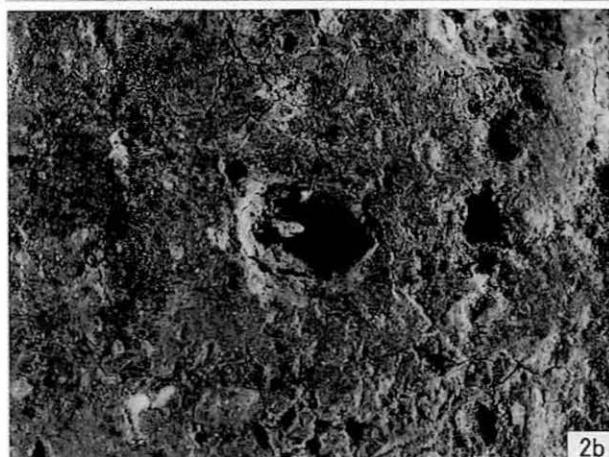
1c



2a



3a



2b



3b

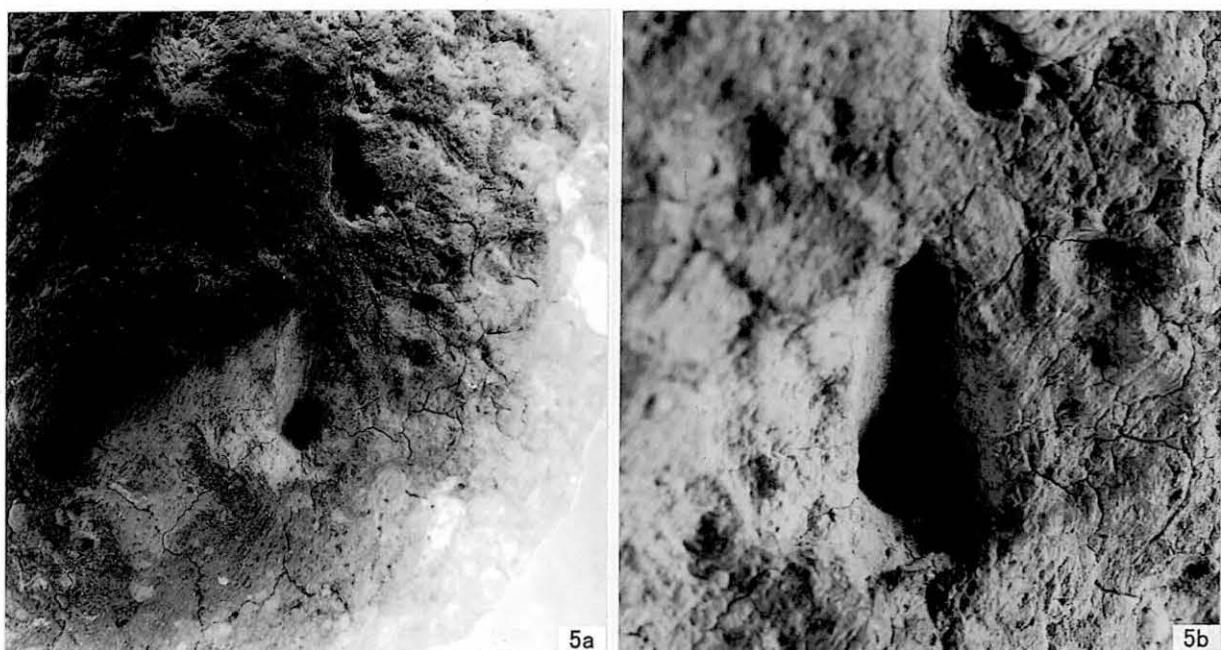
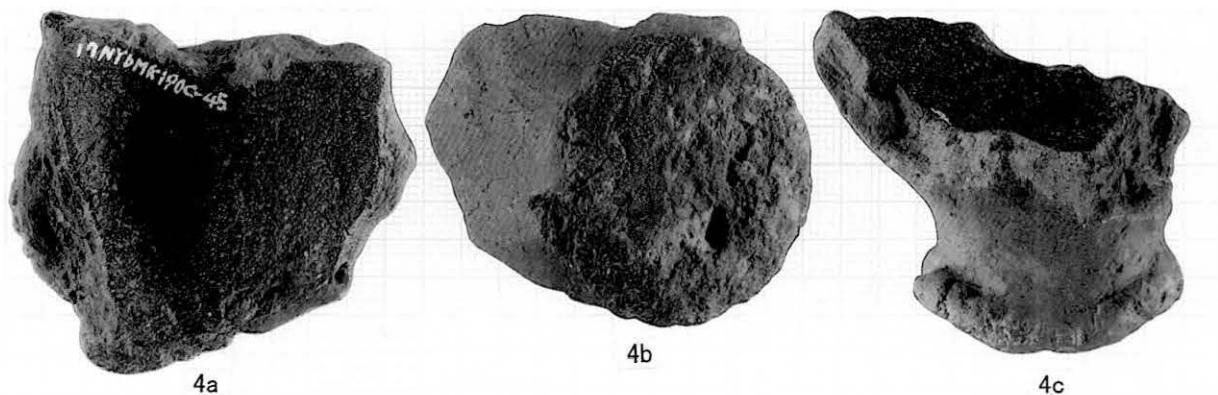
1. 土器概観(a:上面観 b:下面観(底部) c:側面観)

2. 土器底部圧痕

3. 土器底部圧痕

2cm      2mm      2mm  
(1)      (2a,3a)      (2b,3b)

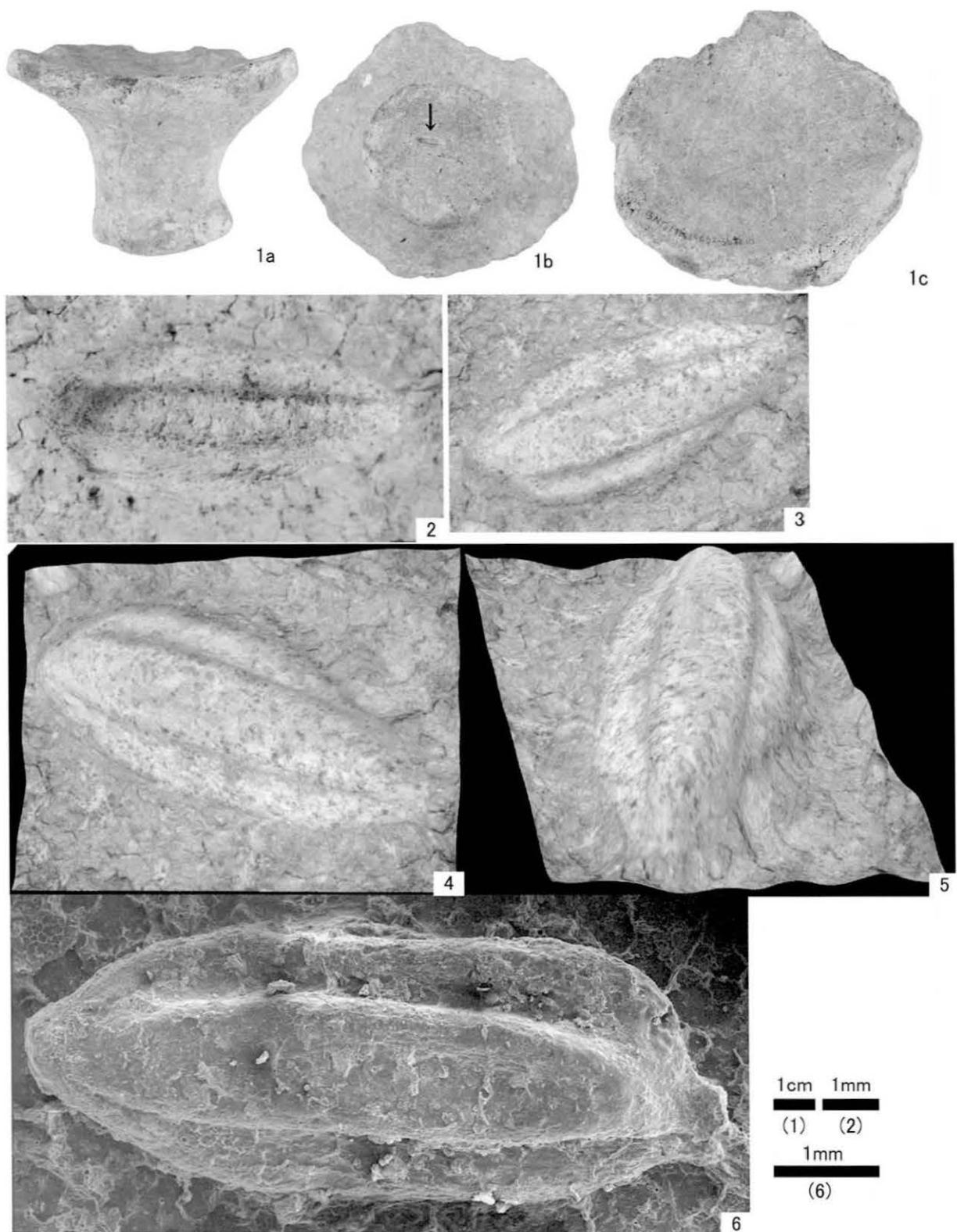
図版7 土器底部圧痕 (15NYbMK2902E-36 8層)



4. 土器概観(a:上面観 b:下面観(底部) c:側面観)

5. 土器底部圧痕

図版8 土器底部圧痕 (17NYbMK190C-45)



1. 土器概観(a:側面、b:底面(矢印:圧痕)、c:上面)  
 2. 土器底部圧痕  
 3. 圧痕(マイクロスコープによる深度合成画像)  
 4. 圧痕(マイクロスコープによる3D反転画像)  
 5. 圧痕(マイクロスコープによる3D反転画像)  
 6. 圧痕レプリカ; イネ 頸?(SEM画像)

図版9 土器底部圧痕 (15NYbMK4904A-36柱10)

# 第11節 屋部前田原貝塚の出土土器および遺跡土壤の プラント・オパール分析

宮崎大学 宇田津徹朗、藏田真一

## 1. はじめに

最近の研究成果から、少なくとも縄文時代後期には、我が国に稻作が存在していたことが明らかになってきている。当時の稻作については、縄文時代晚期を遡る水田遺構が検出されていない点や遺跡の立地などから、焼畑や畑での稻作が行われた可能性が指摘されている。

これら畑作系譜の稻作が、どこからどのように日本へ伝播したかについては、いくつかの仮説はあるものの、十分には解明されていない。

中国では、草鞋山遺跡や城頭山遺跡における水田址発掘により、すでに6000～6500年前には、長江中下流域で、原始的な水田稻作が始まっていたことが確認されている<sup>1)2)3)</sup>。伝播を考える上で、最も基本的な事項である時代の前後関係から見れば、これらの地域から日本へ稻作が伝わったとするこことは可能である。

しかし、稻作技術という点から考えると、水田稻作の技術は焼畑や畑作とは異なるものであり、焼畑や畑での稻作は、やはり、同様の稻作が営まれていた地方から伝わったと考えるほうが合理的である。この点からは、畑作系譜の技術をもつ山東半島や中国南部からの伝播が想定される。

特に、中国の南部には、現在でも焼畑や畑での稻作が営まれている地方があり、ここから稻作が日本へ伝わった場合、台湾、琉球列島を経由して日本へ稻作を伝えたルートが存在したはずである。

この問題について調査研究を進める上で、琉球列島は、大変重要な地域である。また、伝播ルートとは別に、いつ頃、当該諸島で稻作や穀物栽培が始まったかという点についても、その解明が待たれるところである。

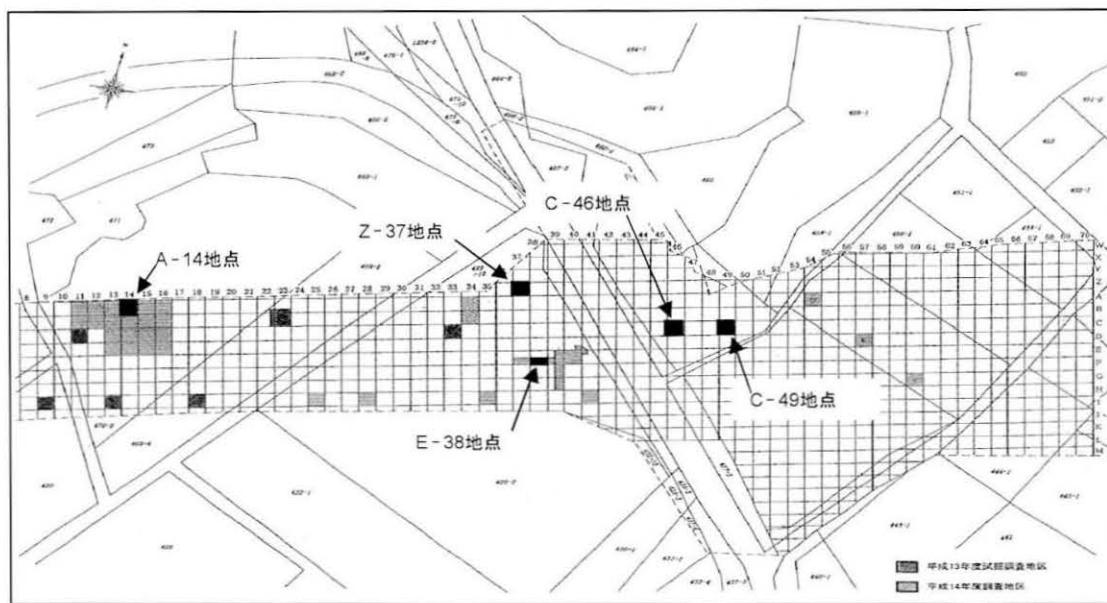
そこで、筆者らは、平成12年度より文部省科学研究費基盤研究B(2)「縄文時代における稻作伝播ルートに関する実証的研究」の助成を受け、琉球列島に所在する遺跡の土壤や土器についてプラント・オパール分析を行い、稻作の存在した遺跡の時代と立地について検討を進めている。

ここでは、名護市教育委員会の協力を得て、名護市に所在する貝塚時代からグスク時代にかけての遺跡である屋部前田原貝塚の遺跡土壤および出土土器胎土について実施したプラント・オパール分析の結果について報告する。

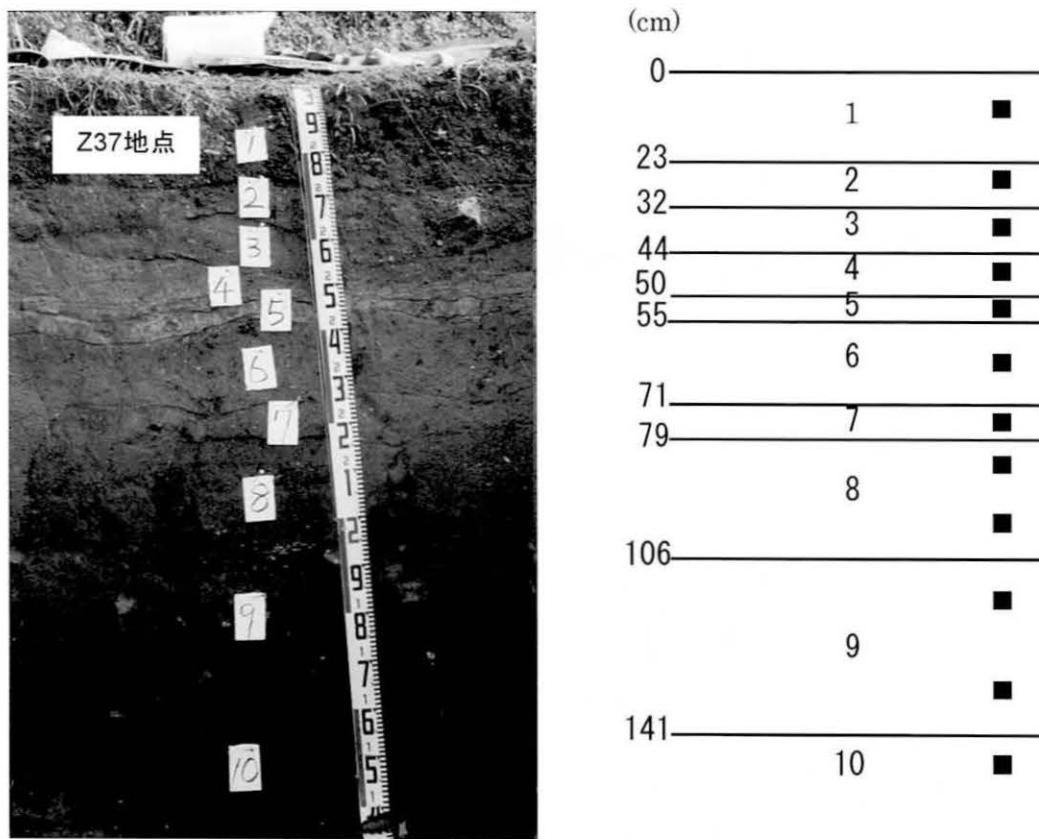
## 2. 遺跡の概要と分析試料

屋部前田原貝塚は、沖縄県名護市字屋部小字前田原地内に所在する。同遺跡は、昭和61年（1986年）に発見され、以後数回の試掘調査を経てきている。これまでの調査の結果、当該遺跡が貝塚時代後期後半からグスク時代初期（8～12世紀頃）と考えられている。また、近世期の炉跡も検出されている<sup>4)</sup>。今回は、名護市教育委員会の協力の下、5つのトレンチ（第114～119図）および炉跡（第120図）の土壤36点と土器4点（写真1）、合計40試料に分析を行った。

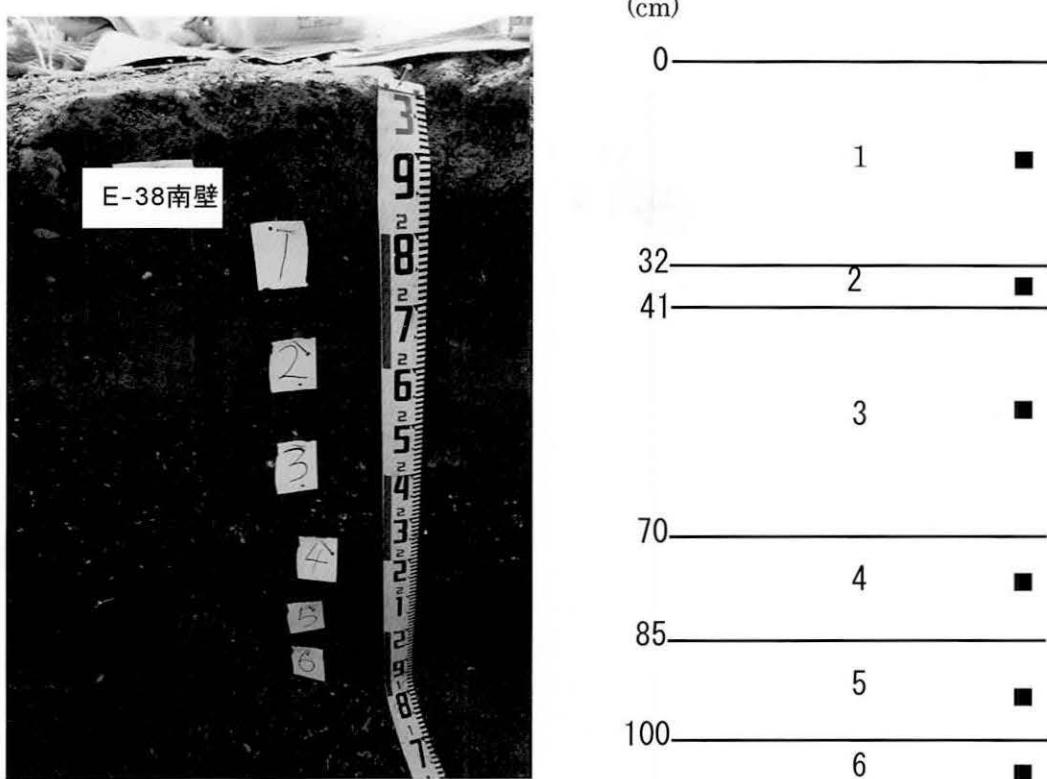
なお、分析に用いた遺跡土壤は、平成14年12月17日に教育委員会のご協力の下、現地採取したものである。



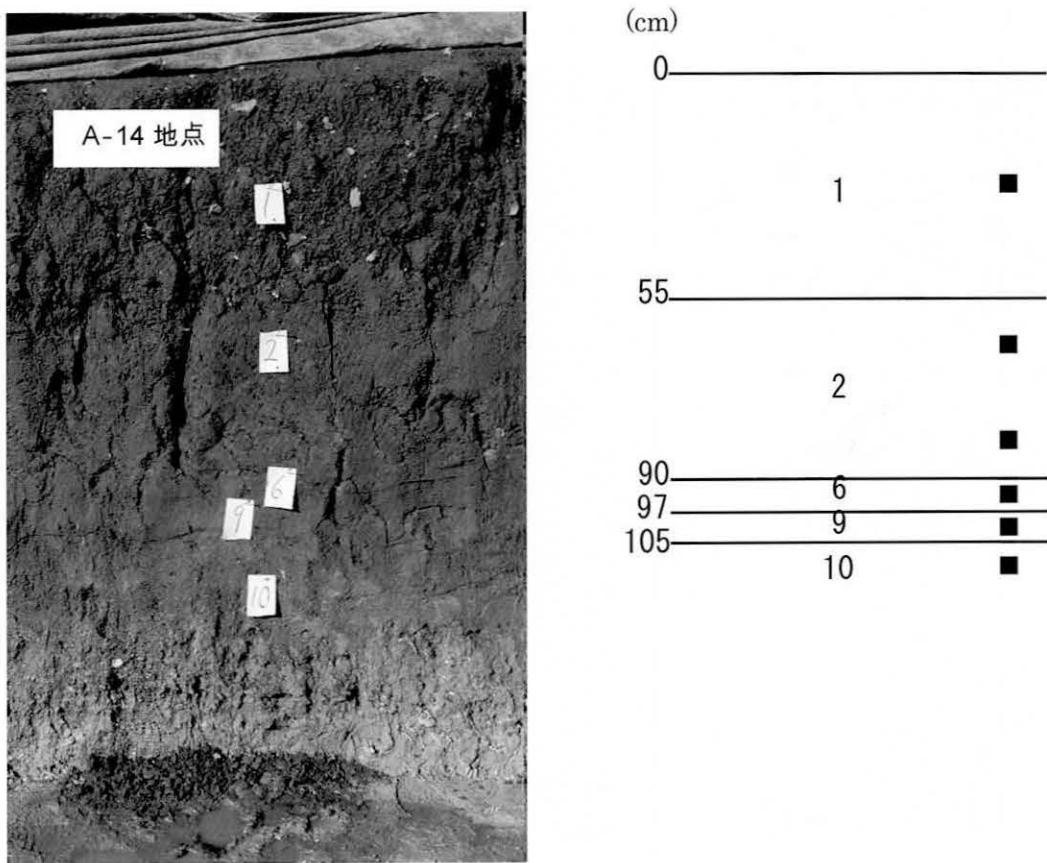
第114図 土壤資料を採取したトレーンチの位置  
(名護市教育委員会 「屋部前田原貝塚発掘調査報告書」より作成)



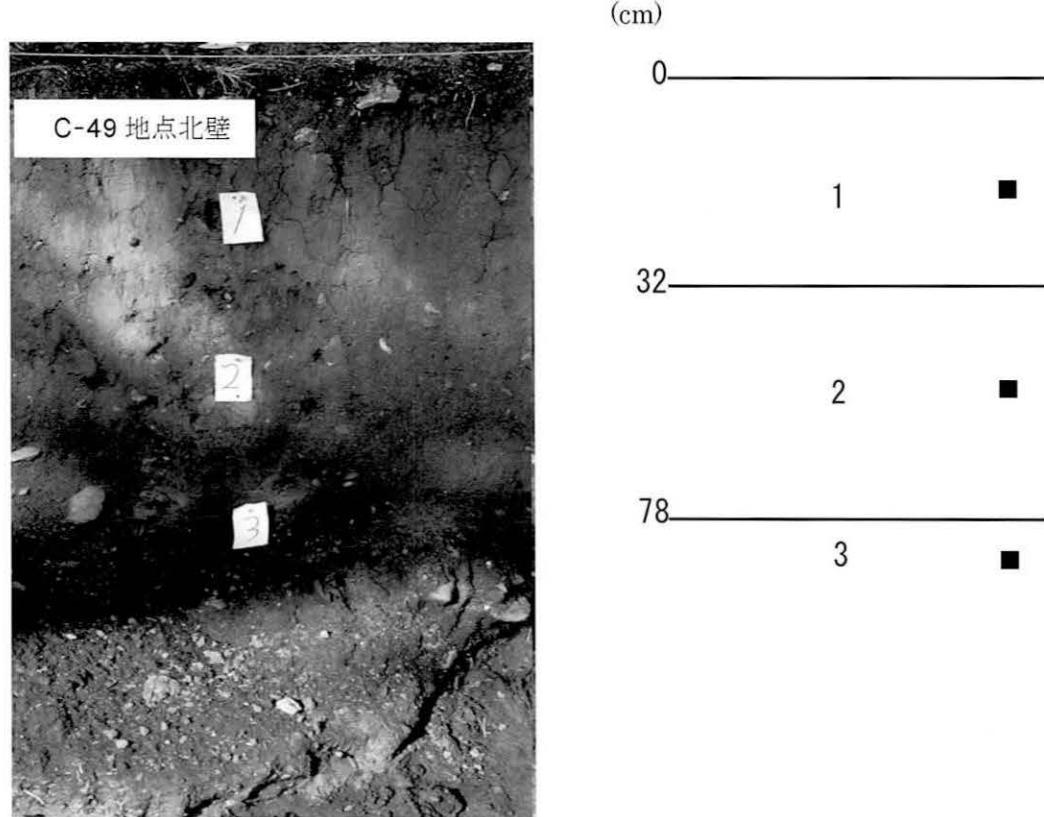
第115図 資料採取を行った土層断面 (Z-37地点)



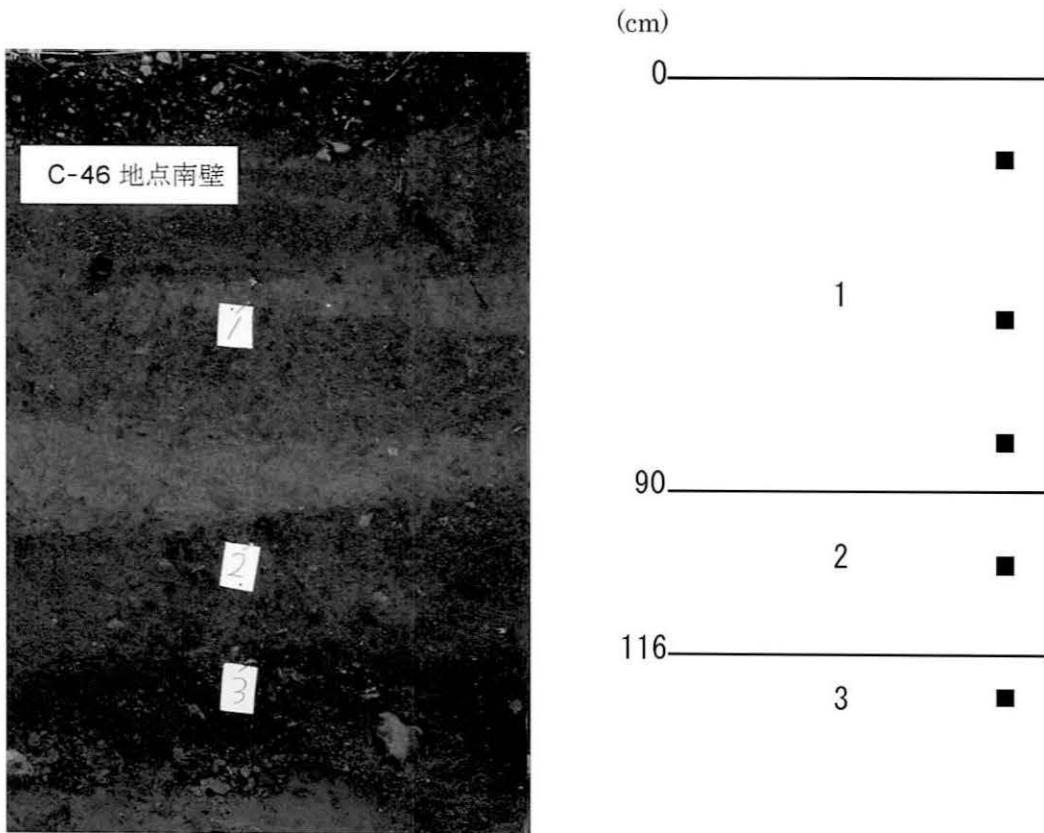
第116図 資料採取を行った土層断面 (E-38地点南壁)



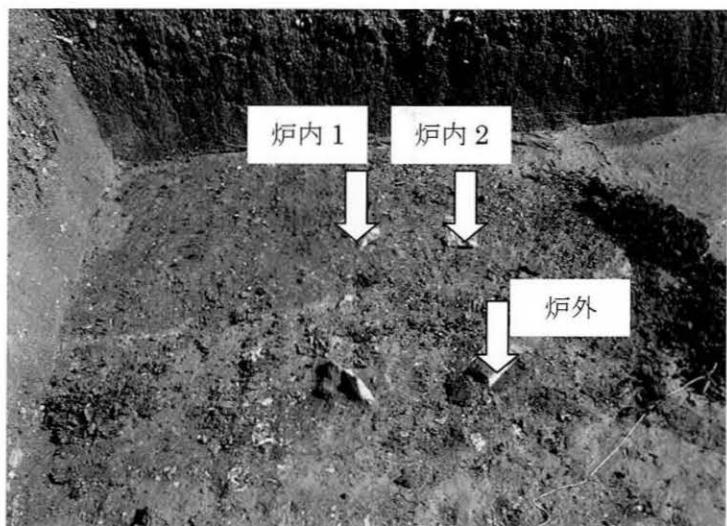
第117図 資料採取を行った土層断面 (A-14地点)



第118図 資料採取を行った土層断面 (C-49地点北壁)

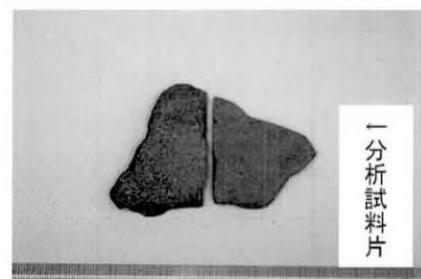
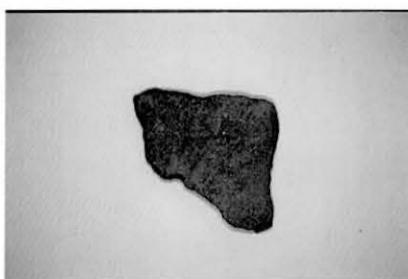


第119図 資料採取を行った土層断面 (C-46地点南壁)



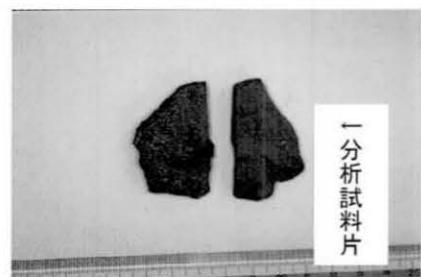
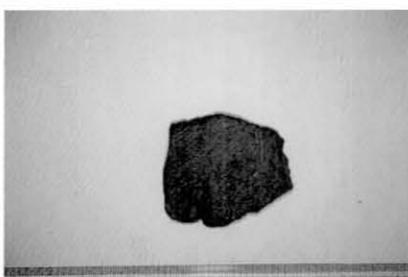
第120図 炉跡からの試料採取箇所

屋部前田原貝塚  
試料番号 1



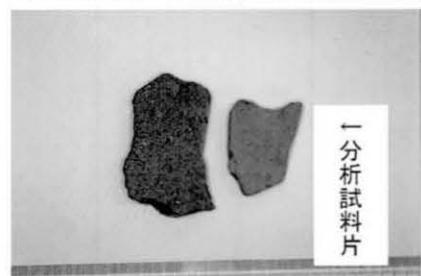
一分析試料片

屋部前田原貝塚  
試料番号 2



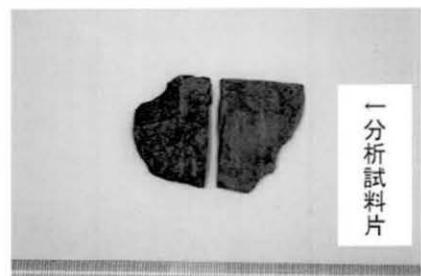
一分析試料片

屋部前田原貝塚  
試料番号 3



一分析試料片

屋部前田原貝塚  
試料番号 4



一分析試料片

写真1 分析に用いた土器（左：切断前、右：切断後）

### 3. 試料の調整と分析

分析試料は、下記のとおり、土壌は定量分析用試料に、土器は土器胎土分析用試料に調整を行い、分析を行った。

#### ①プラント・オパール定量分析法

プラント・オパール定量分析法は、風乾分析土壌 1 g 当たりに含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールを定量する方法である。

定量法には、ガラスピーズ法を用いる。ガラスピーズ法では、風乾分析土壌 1 g 当たりに約30万個のガラスピーズを混入する。混入するガラスピーズは、直径がプラント・オパールと同じ30~40ミクロンであり、組成も同じガラスである。そのため、ガラスピーズは、分析試料の調整作業にともなう物理的・化学的影響をプラント・オパールと同じように受けると考えることができる。したがって、土壌中のガラスピーズとプラント・オパールの数の比は、調整前と調整後で変化しないという仮定が成り立つ。

この仮定から、顕微鏡観察によって計数されたプラント・オパールの数とガラスピーズの数から、風乾土壌 1 g に含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールの量を算定することが可能である。土壌にガラスピーズを混入した後は、水と水ガラスを加え、超音波 (250W, 38KHZ) を20分程度、照射する。水ガラスを混入するのは粒子を分散させ、超音波処理の効果を高めるためである。また、超音波を照射することにより、プラント・オパールに付着した粘土粒子を除去することができる。超音波を照射した後、ストークス沈底法により、10ミクロン以下の粒子を除去する。その後、試料を乾燥し、定量分析用試料とする。

プラント・オパールの給源植物の同定（検出されたプラント・オパールがどの植物に由来するものを決定する）は、光学顕微鏡を用い、100倍~400倍に拡大したプラント・オパールの大きさ、形状、裏面の模様などを総合して行う。

今回、定量を行ったイネ科植物は、イネ (*Oryza sativa L.*)、ヨシ属 (*Phragmites communis*)、タケ亜科 (*Bambusaceae*)、ススキ属 (*Miscanthus sinensis*)、キビ族 (*Paniceae*) である。

#### ②プラント・オパール土器胎土分析法

土器は出土遺物の中でも、最も保存・整理が進んでいるものであり、基本的には調査の行われたほとんどの遺跡について出土土器が保存されていると考えられる。また、土器には、地域間の年代格差などの問題があるが、その分布と時代の前後関係が比較的よく整理されており、広範囲なフィールドを対象とした調査では重要な試料となる。

プラント・オパールはその組成が珪酸であることから、ガラスとほぼ同じ耐熱性を有しており、800°C以下 の温度であれば、溶融することなく原形を保っている。

この特性を利用し、焼成温度が800°C以下の土器からプラント・オパールを抽出し、その給源植物を同定することが可能である。この方法はプラント・オパール土器胎土分析法と呼ばれる。

イネプラント・オパールはイネの葉身中の細胞に由来するものである。したがって、土器にイネプラント・オパールが含まれていた場合、

- ・少なくともその土器が製作される以前にイネが存在していた。
  - ・その土器が製作・使用されていた地域内で稲作が営まれていた。
- と考えられる。

土器胎土分析では、写真1に示したように、土器の一部分を用いる。これは、分析結果によっては、再分析（場合によっては、他の研究者によるクロスチェック）が行えるようにするためである。

分析試料の作成は、まず、後代の土壤による土器の汚染を防ぐため、土器の表面を完全に除去する。さらに、低圧状態で吸水させ、土器を土壤の状態に戻す。土壤に戻した後は、前述の定量分析と同様に調整し、分析試料とする。

なお、同定を行ったイネ科植物は、定量分析と同じである。

## 4. 分析結果

### (1) 遺跡土壤の定量分析結果

第51表は定量分析の結果である。分析の結果、炉跡で採取した土壤からイネプラント・オパールが検出された（写真2）が、他の試料からは、タケやススキ、わずかにキビ族が検出されただけである。C-46やC-49トレンチを除いたトレンチについては、その立地や湧水などの関係から、ヨシ属のプラント・オパールの検出が予想されたが、結果では、むしろ比較的乾燥した環境の指標となるタケア科やススキ属が検出されている。

なお、炉跡の土壤から検出されたイネプラント・オパールについてであるが、炉内、炉外ともにほぼ同程度の密度で検出されている。これは、図120にあるように炉外といつても炉の近傍であり、おそらく、炉内にたまつた土壤や灰などが炉外に出されたものを捉えたものであろう。

第51表 屋部前田原貝塚遺跡のプラント・オパール定量分析の結果

分析試料名		イネ ( <i>O.sativa</i> )	ヨシ属 ( <i>Phrag.</i> )	タケア科 ( <i>Bamb.</i> )	ススキ属 ( <i>Miscan.</i> )	キビ族 ( <i>Pani</i> )	備考
A14 地点	I層	0	0	1,581	4,217	0	
	II層上	0	0	2,285	9,902	0	
	II層下	0	0	756	1,512	0	
	VI層	0	0	1,541	5,007	0	
	IX層	0	0	270	1,891	0	
	X層	0	0	0	0	0	
Z37 地点	I層	0	0	403	0	0	
	II層	0	0	0	226	0	
	III層	0	0	666	0	0	
	IV層	0	0	0	1,516	0	
	V層	0	0	0	0	0	
	VI層	0	0	407	2,441	0	
	VII層	0	0	0	2,161	0	
	VIII層上	0	0	0	1,976	0	
	VIII層下	0	0	0	1,487	0	
	IX層上	0	0	0	1,052	0	
	IX層下	0	0	0	561	0	
	X層	0	0	0	280	0	
C49 地点	I層	0	0	0	734	0	
	II層	0	0	0	1,627	0	
	III層	0	0	0	747	0	
E38 地点	I層	0	0	0	818	0	
	II層	0	0	0	2,564	1,710	
	III層	0	0	907	3,626	0	
	IV層上	0	0	0	1,311	0	
	IV層中	0	0	0	0	0	
	IV層下	0	0	8,167	3,630	907	
	V層	0	0	0	0	0	
C46 地点	VI層	0	0	349	0	0	
	I層上	0	0	469	469	0	
	I層中	0	0	1,595	797	0	
	I層下	0	0	0	1,049	0	
炉跡	II層	0	0	1,773	1,773	0	
	III層	0	0	1,316	2,631	439	
	炉内1	765	0	0	4,590	0	
	炉内2	590	0	590	2,361	0	
	炉外	765	0	765	9,181	0	

（単位：個/土1g）

## (2) 土器胎土分析の結果

第52表は土器胎土分析結果を示したものである。

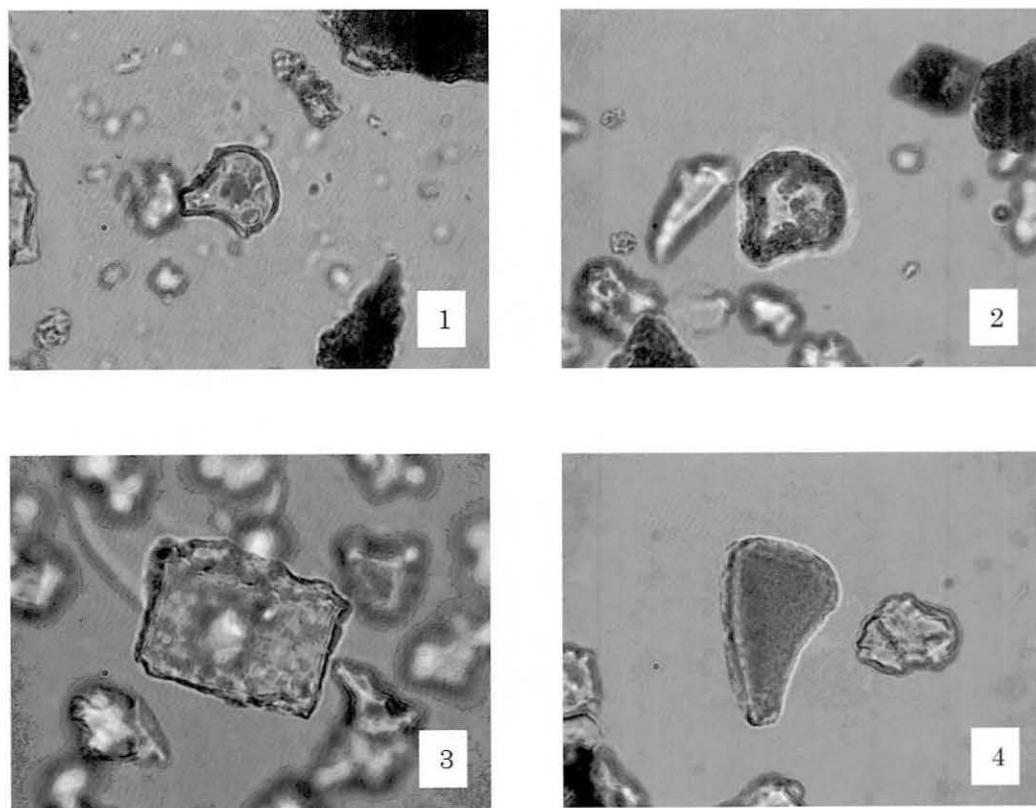
分析の結果、いずれの土器胎土からもイネプラント・オパールは検出されなかった。また、キビ族などの栽培種を含む植物のプラント・オパールも検出されず、わずかにタケ亜科とススキ属が検出されただけであった。

なお、検出密度は低いものの、プラント・オパールの風化や破損の程度は、本土や他の琉球列島の土器胎土から検出されたものと差異はなく、材料となった土壤等の影響はないと判断された。

第52表 プラント・オパール土器胎土分析の結果

分析試料名	イネ ( <i>O.sativa</i> )	ヨシ属 ( <i>Phrag.</i> )	タケ亜科 ( <i>Bamb.</i> )	ススキ属 ( <i>Misan.</i> )	キビ族 ( <i>Pani.</i> )	備考
試料番号 1	—	—	○	○	—	
試料番号 2	—	—	—	○	—	
試料番号 3	—	—	—	—	—	
試料番号 4	—	—	—	○	—	

(○：検出、—：未検出)



図版9 屋部前田原貝塚遺跡の土壤から検出されたイネプラント・オパール

1:イネ (炉内土壤) 2:イネ (炉外土壤)

3:キビ族 (E-38 2層) 4:ススキ属 (A-14 5層)

## 5. まとめ

### (1) プラント・オパール分析の結果について

分析の結果、イネのプラント・オパールが検出されたのは、近世の炉跡土壌だけであった。キビ族については、いくつかのトレンチから検出されたが、いずれも密度は低く、検出箇所からはススキ属などが比較的高い密度で検出されている点などから、栽培に関係したものである可能性を見いだすことは難しい。

また、湧水などの関係から、A14、Z37、E38トレンチの土壌からはヨシ属などの湿潤環境の指標となるイネ科植物由来のプラント・オパールの検出が考えられたが、分析の結果では、ヨシ属は全く検出されず、むしろタケ亜科やススキ属、ごく微量であるがシバなどの比較的乾燥した環境を好む植物のプラント・オパールが検出されている。

なお、当該遺跡は、ラテライト化作用（土壌中の珪酸を溶脱する作用、プラント・オパールの風化が促進される）を持つ可能性が指摘されている「国頭まあじ」の分布域に内包あるいは近接している。検出されたプラント・オパールの観察から、炉跡の外の土壌から検出されたイネのプラント・オパールが炉内の土壌から検出されたものよりも風化作用を強く受けていることが認められており（写真2の1と2）、先に述べたヨシ属の検出状況を含め、土壌による風化の可能性も視野に入れておく必要があると考える。

### (2) 稲作の可能性について

当該遺跡における稲作の存在については、今回の分析では、近世に稲作が営まれていたことを捉えることができたが、グスク時代や貝塚時代における稲作の存在を示すデータを得ることはできなかった。

これまで筆者らが行った調査の結果、宮古島、石垣島、奄美大島に所在するグスク時代の遺跡の土壌や土器からイネプラント・オパールが検出されている<sup>5), 6)</sup>。また、沖縄本島についても、伊佐前原第一遺跡のグスク時代～中世の土壌からイネのプラント・オパールが検出されており<sup>7)</sup>、これらの状況から、当該遺跡についても、その立地などから、少なくともグスク時代には稲作が営まれていた可能性は高いと考える。

なお、今回の分析結果では、未検出としているが、C-46トレンチの第Ⅲ層から極めて微量であるがイネプラント・オパールが検出されている。この結果は、土器胎土分析であれば、問題ないものであるが、土壌からの検出結果としては、上層土壌等の影響を否定できない密度であるため、今後、追加の調査分析を行い、慎重に確認を行う必要がある。特に、第Ⅲ層の時代が貝塚時代中期（縄文時代晩期相当）ということから、イネプラント・オパールの検出が確実ということになれば、琉球列島における稲作開始期が大きく遡ることになるため、C-46地点を含む範囲の本格調査とその際の追加分析の実施が期待される。

## 《引用文献》

- 1) 湖南省文物考古研究所「澧県城頭山古城水田址1997～1998年度発掘簡報」『文物』1999年第6期  
(総第517期) PP. 4-17, 1999
- 2) 宇田津徹朗・王才林・柳沢一男・佐々木章・郷江石・湯陵華・藤原宏志「中国・草鞋山遺跡における古代水田址調査（第1報）－遺跡周辺部における水田址探査－」『日本文化財科学会誌』第30号 PP. 23-36, 1994
- 3) 王才林・宇田津徹朗・藤原宏志・佐々木章・湯陵華・藤原宏志「中国・草鞋山遺跡における古代水田址調査（第2報）－遺跡土壤におけるプラント・オパール分析－」『日本文化財科学会誌』第30号 PP. 37-52, 1994
- 4) 名護市教育委員会 2007『屋部前田原貝塚発掘調査報告書－国道449号道路改築事業に伴う緊急発掘調査－』
- 5) 宇田津徹朗・藤原宏志・橋本将幸 2003「琉球列島の稻作開始期とその変遷に関する研究（II）」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』96-97
- 6) 宇田津徹朗・藤原宏志・橋本将幸 2003「奄美大島の遺跡土壤のプラント・オパール分析」『赤木名グスク遺跡』笠利町文化財報告 第26集 70-74
- 7) 宇田津徹朗・藤原宏志・橋本将幸・鄭雲飛・中谷香緒里 2001『琉球列島の稻作開始期とその変遷に関する研究（I）』日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集 PP. 78-79

## 第VII章 総括

屋部前田原貝塚は、沖縄貝塚時代前・中期、沖縄貝塚時代後期前半、沖縄貝塚時代後期後半～グスク時代初期及び近世の主に4つの時期の遺構及び遺物が重層する複合遺跡である。昭和61年（1986）2月16日、屋部の前田原にて屋部字誌づくりの地元調査によって遺跡が発見されている。

記録保存を目的とする緊急発掘調査の直接の契機は平成4年（1993）に国道449号（名護バイパス）道路整備事業区域内における埋蔵文化財の取扱いについて協議にはじまる。協議を重ねた結果、遺跡範囲において開発を免れない当該範囲の緊急発掘調査を実施したのが本報告書である。平成13年（2001）に試掘調査、平成14～17年（2002～2005）に現場における発掘調査、平成18年（2006）に資料整理を行い、前章まで詳述してきたようにⅠ地区、Ⅱ地区、Ⅲ地区の3つの調査地区において調査を実施した。以下前章までの内容をまとめ総括にかえたい。

**土器** これまで地区ごとに土器を紹介してきたが、今調査を総括するにあたり、今一度、屋部前田原貝塚出土土器を、既往の編年大系などに照らして総括しておきたい。

本報告Ⅰ群土器は、伊波式土器、荻堂式土器、大山式土器などの高宮暫定編年前IV期を代表する土器群の範疇で捉えることのできるものである。Ⅲ地区から少量出土している。小破片が多く、器形からの型式判断が困難である。なお、Ⅰ群1類を伊波式土器あるいは荻堂式土器の範疇で捉えることのできる土器とし、2類をいわゆる大山式とし、横捺刻文のみを施すものの他に、横捺刻文と凹線文や突帯文を組み合わせるものなどもみられた。

Ⅱ群土器は高宮暫定編年前IV期からV期にみられるいわゆる肥厚口縁土器の一群で、Ⅲ地区の主体的な土器群である。肥厚形態の特徴から次の4種に大別した。2類の室川式土器と3類の宇佐浜式土器が大半を占めていることから、Ⅲ地区は高宮暫定編年前IV期末から前V期にかけて盛行したものと考えられる。文様の施されない無文土器が圧倒的に多い。

Ⅲ群土器は仲原式土器の範疇で捉えることのできる土器群である。無文化が著しくなるが、外耳をつけるものや、沈線文を施すものもみられる。口縁形態は平口縁と山形口縁の両方が確認できたが、口唇部が平坦に成形されるものは少なく、波状を呈するものがほとんどである。また、有段口縁が多くみられる。有段口縁の形状は広義のカヤウチバンタ式口縁や宇佐浜式口縁に近似するが、肥厚が長大化・扁平化し有段部を強調している。

Ⅳ群土器は奄美地方を中心に分布する土器群で、口縁形態・文様・器形等の特徴から、1類の面縄西洞式土器または犬田布式土器と思われる土器。2類は喜念I式土器である。3類は1類・2類には該当しないが、文様や胎土、焼成などの特徴から奄美系土器と思われる土器となる。

Ⅴ群土器は上記の型式に該当しない高宮暫定編年後期のものと思われる土器群。1類はいわゆる尖底土器群で、器形・胎土・混入物、器面調整などの諸特徴がいわゆる沖縄貝塚時代後期前半期とされるものに含まれるもの。器形・混入物などからさらに細分できる。2類はいわゆるくびれ平底土器群で、器形・胎土・混入物、器面調整などの諸特徴がいわゆる沖縄貝塚時代後期後半期とされるものに含まれる。

VI群土器はいわゆるグスク土器と呼称されるもので、器種は甕形と鍋形になると思われるものが得られている。稀に滑石を混和材として用いるものもみられる。

VII群土器は上記の型式に該当しない型式不詳の土器。1類を高宮暫定編年前期のものに相当すると思われる土器群。2類を高宮暫定編年後期に相当すると思われる土器と仮に想定しておく。また、これらの資料の中にはいわゆる搬入土器とする奄美以北の土器と目されるものが出土している。

底部はA種平底が上記I群、II群及びIV群1類等に該当すると推察された。B種はくびれを持つ平底で、V群2類に該当すると推察される。C種は底部が丸みを持ち、立ち上がりが緩やかな、いわゆる丸底土器で、II・III群・IV群の一部がこれに該当すると考えられる。D種は底部が尖り、立ち上がりが急なものでいわゆる尖底の底部である。III・IV群の一部がこの種の底部となるものと推察される。E種は脚台で、尖底もしくは丸底の安定をはかるために、その周りに粘土板をめぐらし成形したもの。底部の裏は上げ底状になる。III群及びIV群の一部がこれに該当するものと考えられる。F種は乳房状の尖底、砲弾状の尖底で暫定編年後期に該当すると推定されるもの。V群1種に該当する。G種は底径の広い土器で、いわゆるグスク系土器、VI群に該当する。H種は特殊な底部を全て本種に含めた。

III地区にI・II・III・IV群が占有的に出土し、住居が検出される。II地区XII～XIV層はIII群及びV群1類が出土しており広い範囲で高宮暫定編年前IV・V期及び後期の初頭頃まで遺跡が形成されたと推定される。

**貝塚時代前期・中期** III地区III～IV層で主体的にみられた遺物群は伊波・荻堂から貝塚時代後期前半の土器を含み、主に室川式を主とする。また、II地区XII～XIV層は宇佐浜式や仲原式に近似する肥厚口縁のグループを主体とする。II地区は調査区の一部で限定的に確認されるとともに、一部は既存道路の盛土地下にあると推定され、残念ながら狭小の調査範囲のみでの確認でこの部分は未調査地区となっている。一方、III地区は人頭大の礫が調査区全面より確認され、幾つかの石組遺構については竪穴住居跡と推定された。具体的にみていくと、石組遺構は5基確認され、これらはいずれも竪穴住居跡と推定された。第3号石組遺構は長軸5.2m×短軸2.6m、第4号石組遺構は長軸4.7m×短軸3.0mとほぼ同規模の長方形プランの建物跡と推定された。

**石器・石材** 輝緑岩、斑レイ岩、黒曜石という明らかに外来のものがある。それ以外については、岩脈としての火山岩類が多い。例えば、斑岩、安山岩、流紋岩などは本部半島に岩脈として存在するものもあれば、無いものもある。流紋岩などは久米島に類似のものがあり、沖縄本島以外からの持ち込みの可能性が高い。また、使用石材として砂岩も多いが、これは明らかに沖縄本島北部の東海岸にみられる嘉陽層に由来する石である。それ以外に特徴的な砂岩としては、チャートの細礫を含む砂岩がある。この種の岩石は県内ではあまり知られていないため、おそらく県外からの持ち込みの可能性がある。石器に用いた石材の大半は持ち込みだと思われる。石皿に用いられた流紋岩などは遺跡の近くには見られない。徳之島あたりの火山島のものである可能性もある。

今回、黒曜石の産地推定を目的とする分析を実施している（第VII章9節）。黒曜石は石器に用いられた石材の中でも、沖縄諸島以外からの持ち込みと容易に判断できるものである。黒曜石は沖縄および奄美諸島からは産出されないことから、少なくとも北方の九州地方との交易・物流を裏付ける資料として重要な意味を持つ。本遺跡からは18点の黒曜石が検出されており、その内訳はII地区から2点、

Ⅲ地区から16点である。沖縄県内の遺跡から出土する黒曜石は大半が佐賀県の腰岳産であろうと認識されているが、過去の調査において黒曜石の産地推定分析を行った例は少なく、仲泊遺跡と伊是名貝塚、伊是名ウフジカ遺跡3例を数えるのみである。そのことから、本遺跡出土の黒曜石も腰岳産と推測されるが、科学的な裏づけを得るために18点すべての黒曜石の分析を行った。その結果、すべての試料が伊万里腰岳群産と判断された。

一方、チャートなどは遺跡の周辺（本部半島）から普通に産出されるものであるが、Ⅲ地区では482点のチャート片が回収されるとともに、多くの石鏸が出土し注目された。

**貝塚時代後期前半** 貝塚時代後期前半の遺物はⅠ地区、Ⅲ地区とともに少量出土しているが、層位的に把握できたのはⅡ地区のIX-X層のみである。明確な遺構こそ確認できなかったものの、試掘調査で出土した大当原式土器（0005）や、Ⅱ・Ⅲ地区で出土した搬入の弥生土器などが出土し、交流の一端をうかがわせた。

**貝塚時代後期後半からグスク時代初期** 特にⅡ地区において、複数の建物跡を想定する柱穴が確認され、プランのサイズについていくつかの類例遺跡との比較検討を行った。第1号掘立柱建物跡・第2号掘立柱建物跡については他遺跡の資料とほぼ同サイズであった。第4号掘立柱建物跡・第5号掘立柱建物跡は短軸が第1号掘立柱と同サイズであるものの、その長軸はやや大きい。第3号掘立柱建物跡は長軸が推定12mを超える大型のものであり、それを構成するピットのサイズも他遺跡に比べて大きかった。ただしピットの大きさはその遺跡の残存状況による可能性も否定できない。また柱穴のサイズがそのまま柱のサイズとはなりえないという観点から、今回は確認できるものは僅かであったが、やはり柱痕の確認が重要であろう。各建物跡の時期についてはピット覆土からの出土遺物により、第3号掘立柱はグスク系土器、白磁（玉縁口縁碗）、カムィヤキなどの出土により、グスク時代の前半期に位置づけることができる。

また各プランのピット切りあい状況により第2号掘立柱建物跡は第1号掘立柱建物跡・第3号掘立柱建物跡よりも古く、第3号掘立柱建物跡は第4号掘立柱建物跡より古いことが確認できた。本地区では南側で後世のかく乱によりピットの残存状況が悪かったためにプランの想定に至らず、いわゆる「吹出原型掘立柱建物」（仲宗根2003）などのような母屋と高床倉庫との組み合わせという状況は確認できなかったが、当該期で一般的な中柱を持った掘立建物跡を検出し、貴重な発見例となつた。なお、大型建物については柱穴覆土をフローテーション処理し、微細遺物（骨・貝）などの詳細な分析を行う予定である。

出土遺物はいわゆる3点セットと呼称されるグスク時代初期の遺物「カムィヤキ、玉縁白磁、滑石製品」が出土している。この他にもグスク土器、石器、土製品、骨製品、貝製品、金属製品などが得られている。グスク土器は口縁部に方形の肥手を付す滑石製石鍋模倣土器や滑石を混入するものなどが得られた。掘立柱建物跡柱穴出土の完形に近い土器は年代測定が行われ、CalAD890～1020（較正年代 $2\sigma$ ）の年代が得られている（第VII第4節）。カムィヤキはほとんどが壺形である。口縁部では内外端を強調するものとしないもの、胴部では波状文を施すものと波状文+沈線を施すものがある。陶磁器は当該期に該当するものとして中国産磁器白磁玉縁口縁碗が最も多く出土し、グスク時代で一般的に出土する青磁、青花の出土は少量であった。Ⅱ地区では滑石製品では口縁部になると思われる破

片が1点、底部片が3点得られている。骨製品では両端が磨かれる筒状の製品が得られている。貝製品では掘立柱建物跡の柱穴よりシャコガイ製の有孔製品やヤコウガイ製の螺蓋製敲打器が得られている。

**脊椎動物依存体** 脊椎動物依存体については、Ⅱ地区とⅢ地区の資料を樋泉岳二氏に分析いただいた。この結果Ⅲ地区では、ピックアップ資料、篩別資料ともに魚類が圧倒的に多く、また魚類もベラ科・ブダイ科・ハタ科・フエフキダイ科といったサンゴ礁や内湾砂底域の生息種が大半を占めるとされ、沖縄諸島の貝塚時代前期～後期の遺跡に普遍的にみられる様相であるとされる。ただし、ピックアップ資料と篩別資料とで魚類の組成に若干の相違が指摘され、そこから漁法や漁獲対象魚によって漁場が使い分けられていた可能性を指摘している。

一方Ⅱ地区でも基本的には魚類が優占し、イノシシがこれに次ぐ点で合致している。篩別資料については、Ⅲ地区の魚類以外が未分析のため詳細な比較は今後の課題だが、両地区とも魚類が卓越する点は同様である。このように、貝塚時代中期もグスク時代初期も、魚類とイノシシを中心とする動物食という基本パターンは共通している。一般にグスク時代以降の遺跡では貝塚時代に比べて魚骨の出土量が減少する傾向があるが（樋泉2002）、本遺跡ではそうした兆候は認められない。ただし、これがグスク時代初期の時代的な特徴といえるかどうかは、類例の増加を待って判断する必要がある。

魚類の内容は、Ⅲ地区で圧倒的多数を占めたベラ科が大きく減少、ブダイ科やハタ科も同様に減少すると指摘されている。Ⅱ地区では魚類組成は突出した優占種をもたず、様々な種類が少しづつ混在する多様な組成へと変化しているとされる。

加えて、篩別資料では、小型のアジ類が大きく増加し、ニシン科（おそらくミズン類）・カマス科・ダツ科なども普通となる。これらの魚類は、いずれも外海から沿岸に来遊する小型の表層回遊魚である。沿岸での表層漁業の存在を支持する。

なお、Ⅱ地区とⅢ地区を比べると、Ⅱ地区に埋蔵されていた骨に関しては、発掘現場において目視で確認できるような大型の骨（大型魚やイノシシなど）が少なく、小型骨（とくに魚骨）の占める比重が相対的に高かった可能性があると指摘する。このことから、グスク時代初期には貝塚時代中期よりも大型魚やイノシシなどの利用が衰退し、小型魚の比重が増加した可能性を考慮する。このことは、グスク時代の初期段階において、すでに貝塚時代の漁労伝統が大きく変質し、新たな漁労形態への転換が進行していたことを示すとされる。

**貝類遺存体** 貝類はⅡ地区出土資料を分析した結果、貝種では各グリット・層序・遺構ともマガキガイが筆頭で、アラスジケマンガイがこれに続くとされ、イノーや河口干潟からこれらの種を優先的に選択し、採取していたことが想定されている。また、マガキガイ・アラスジケマンガイの体長を計測から貝類遺存体の体長の組成は多少の違いはあるものの明瞭なサイズの変化は読み取れなかつたとされる。既存の分析結果と比較すると、マガキガイにおいては渡喜仁浜原貝塚の資料よりやや小さく、アラスジケマンガイにおいては今帰仁城跡の資料よりやや大きいという結果が得られている。

**近世** 注目された遺構として、近世に構築されたと思われる炉跡が複数基検出されている。Ⅲ地区で検出された炉跡については立体剥取りを行った。なお、遺物として包含層より本土産磁器等17世紀代と思われる染付、近・現代染付や金属製品がわずかに得られている。

## 《参考文献》

- 安里進1996「蒸留器と龜から見た泡盛の歴史」『泡盛浪漫—アジアの酒ロードを行く—』ボーダーインク
- 糸満市教育委員会1999「糸満市真栄里貝塚発掘調査概要(土器・骨器篇)」『真栄里貝塚』糸満市文化財調査報告書第16集
- 伊是名貝塚学術調査団(編)2001『伊是名貝塚・沖縄県伊是名貝塚の調査と研究-』勉誠出版株式会社
- 上原靜1981「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』第7号 沖縄考古学会
- 浦添市教育委員会1989『城間古墓群 城間遺跡 嘉門貝塚』浦添市文化財調査報告書
- 大野彩1999~2000「沖縄漆喰」『左官教室』no522~524 黒潮社
- 沖縄県教育委員会(編)1978『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』
- 沖縄県教育委員会(編)1985『シヌグ堂遺跡—第1・2・3次発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第65集
- 沖縄県教育委員会(編)1996『平敷屋トウバル遺跡』-ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書- 沖縄県文化財調査報告書第125集
- 沖縄県教育委員会(編)1999『喜友名貝塚・喜友名グスク-宜野湾北中城線(伊佐~普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(I)-』沖縄県文化財調査報告書第134集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター(編)2001『伊佐前原第一遺跡-宜野湾北中城線(伊佐~普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(III)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集
- 小田静夫2000「沖縄の剥片石器について-チャート・黒曜石製微小石器を中心に-」高宮廣衛先生古稀記念論集『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会(編)2001『カムィヤキ古窯群Ⅲ』伊仙町埋蔵文化財発掘報告書11
- 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会(編)2005『カムィヤキ古窯群Ⅳ』伊仙町埋蔵文化財発掘報告書12
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980『図解 石器の基礎知識』I・II 柏書房
- 金武正紀1990「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320 ニュー・サイエンス社
- 金武正紀1989年「沖縄における12・13世紀の中国陶磁」『沖縄県立博物館紀要』第15号沖縄県立博物館
- 黒住耐二1987「貝類遺存体」『石川市古我地原貝塚』沖縄県文化財調査報告書第84集
- 黒住耐二1991「貝類遺存体」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第9集
- 鈴木道之助1981『図解 石器の基礎知識』Ⅲ 柏書房
- 杉井健2003「沖縄諸島における住居形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易』熊本大学
- 北谷町教育委員会(編)2003『後兼久原遺跡-庁舎建設に係る文化財発掘調査報告書-』
- 仲宗根禎2005「屋部前田原貝塚検出の遺構について」『沖縄考古学会定例研究会発表要旨』(口頭発表)

資料)

仲宗根求2003「読谷村発見のグスク時代の掘立柱建物跡について「吹出原型掘立柱建物」の提唱」

『読谷村歴史民族資料館紀要』第27号 読谷村立歴史民族資料館

名護市教育委員会（編）1982『名護市の遺跡（2）』名護市文化財調査報告書-4

名護市教育委員会（編）1992『宇茂佐古島遺跡』名護市文化財調査報告書-10

名護市教育委員会（編）1996『部瀬名貝塚』名護市文化財調査報告書-12

名護市教育委員会（編）1999『宇茂佐古島遺跡』名護市文化財調査報告書-13

名護市教育委員会（編）2003『名護市の自然』名護市の天然記念物-5

名護市市史編さん室（編）1988『わがまち・わがむら』本編11

今帰仁村教育委員会（編）1977『渡喜仁浜原貝塚』調査報告書〔1〕

今帰仁村文化財調査報告書第1集

那覇市教育委員会（編）1997『銘苅原遺跡－那覇新都心地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告IV  
－』那覇市文化財調査報告書第35集

宮城弘樹1998「貝塚時代後期土器の研究（I）一部瀬名貝塚出土表裏面有文土器資料に着目して－」  
名護博物館紀要『あじまあ』8 名護博物館 pp.41-54

宮城 勉2003「名護市の地形」『名護市の自然』名護市教育委員会

本部町教育委員会（編）1986『具志堅貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告書第3集

屋部字誌編纂委員会（編）1986（3月）『字誌ニュース あじみち』創刊号

屋部字誌編纂委員会（編）1986（4月）『字誌ニュース あじみち』第2号

読谷村教育委員会（編）2001『タシーモー北方遺跡』読谷村文化財調査報告書第10集

読谷村教育委員会（編）1990『沖縄県読谷村字長浜吹出原遺跡 個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報  
告書』読谷村文化財調査報告書第9集



図版1 屋部前田原貝塚着手前近景



図版2 I 地区発掘調査状況



図版3 II地区の発掘調査状況



図版4 II地区全景遺構検出状況



図版5 II地区1号炉跡



図版6 II地区4・5号・6・7号炉跡



図版7 II地区2・3号炉跡



図版8 III地区完掘状況



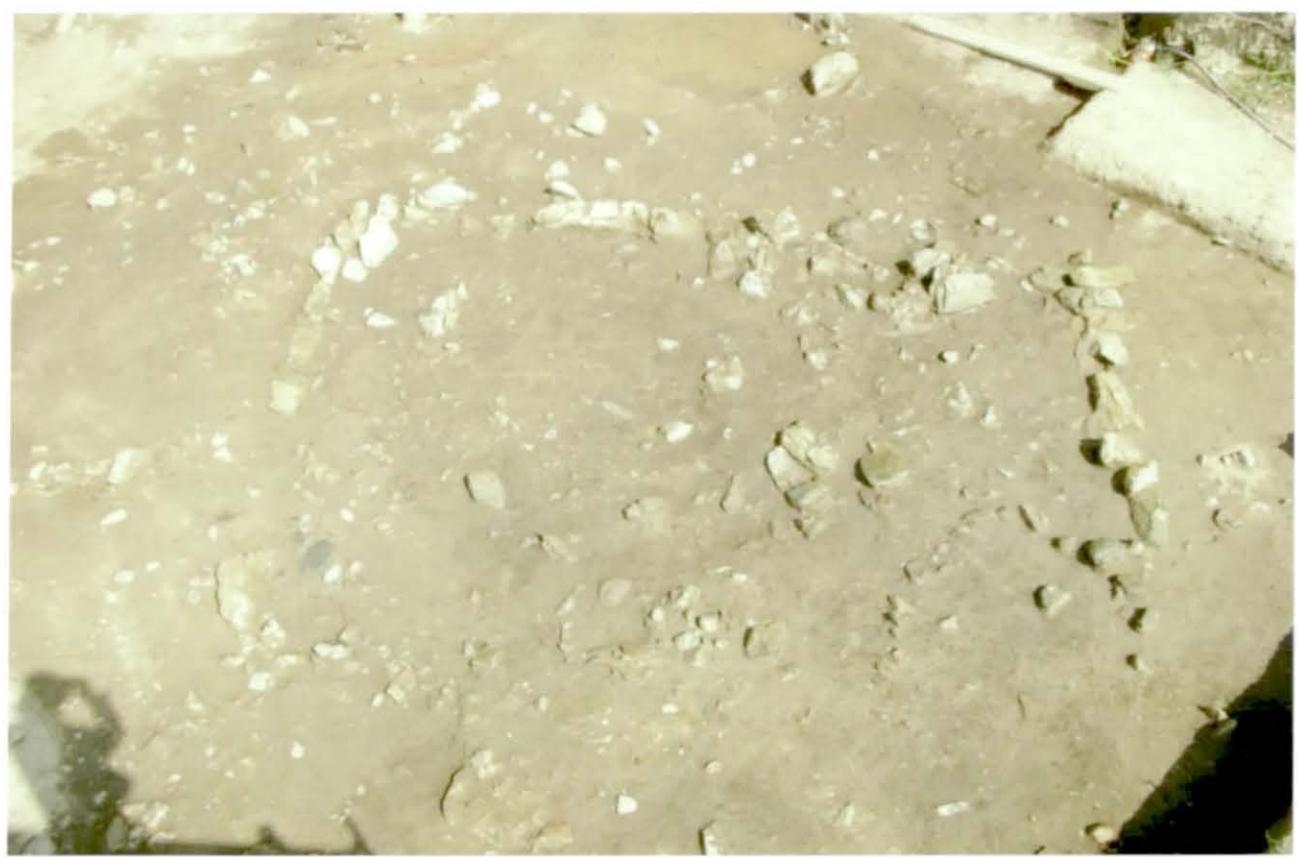
図版9 III地区埋葬人骨検出状況



図版10 III地区埋葬人骨近影



図版11 III地区検出第1号石組遺構（北西から南西）



図版12 III地区検出第3号石組遺構（南東から北西）



図版13 III地区10・11号炉跡



図版14 遺跡見学会の様子



図版15 Ⅲ地区発掘調査作業の様子



図版16 炉跡立体剥ぎ取り



図版17 Ⅱ地区出土土器 (2137)



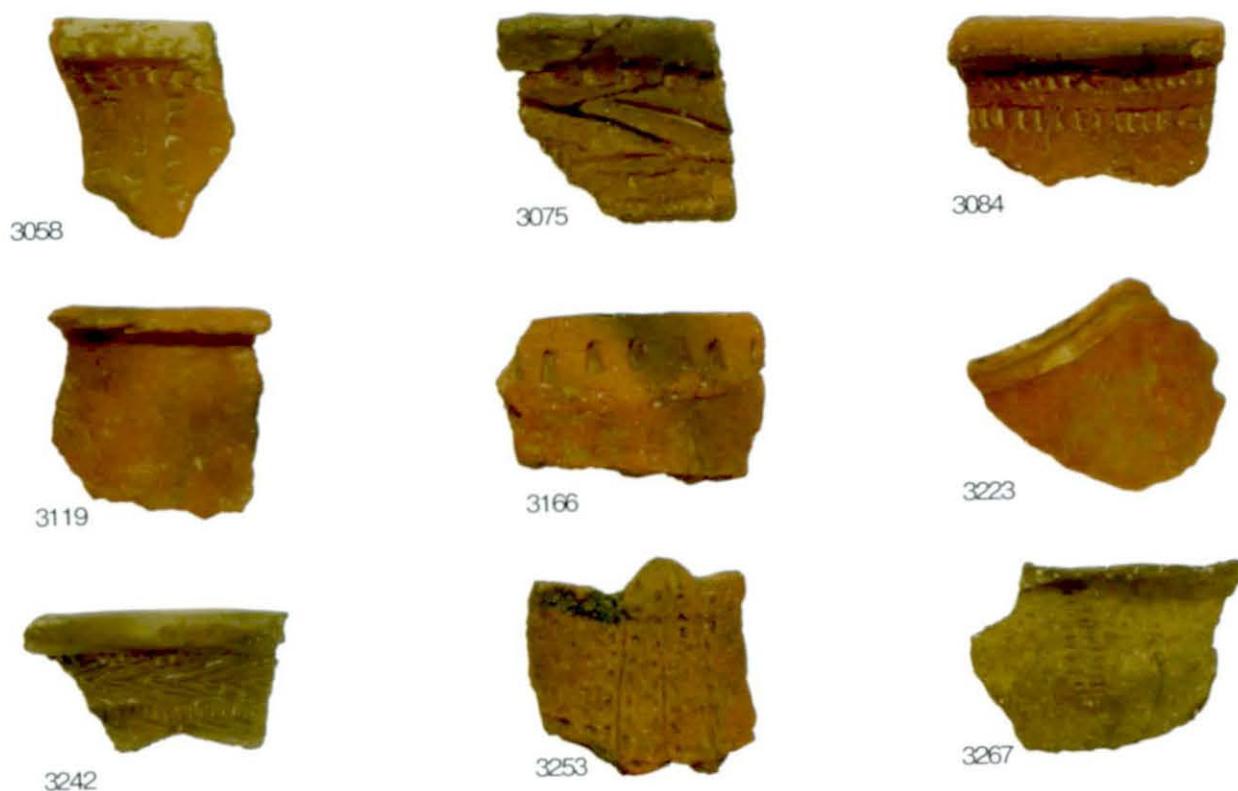
図版18 Ⅱ地区出土土器



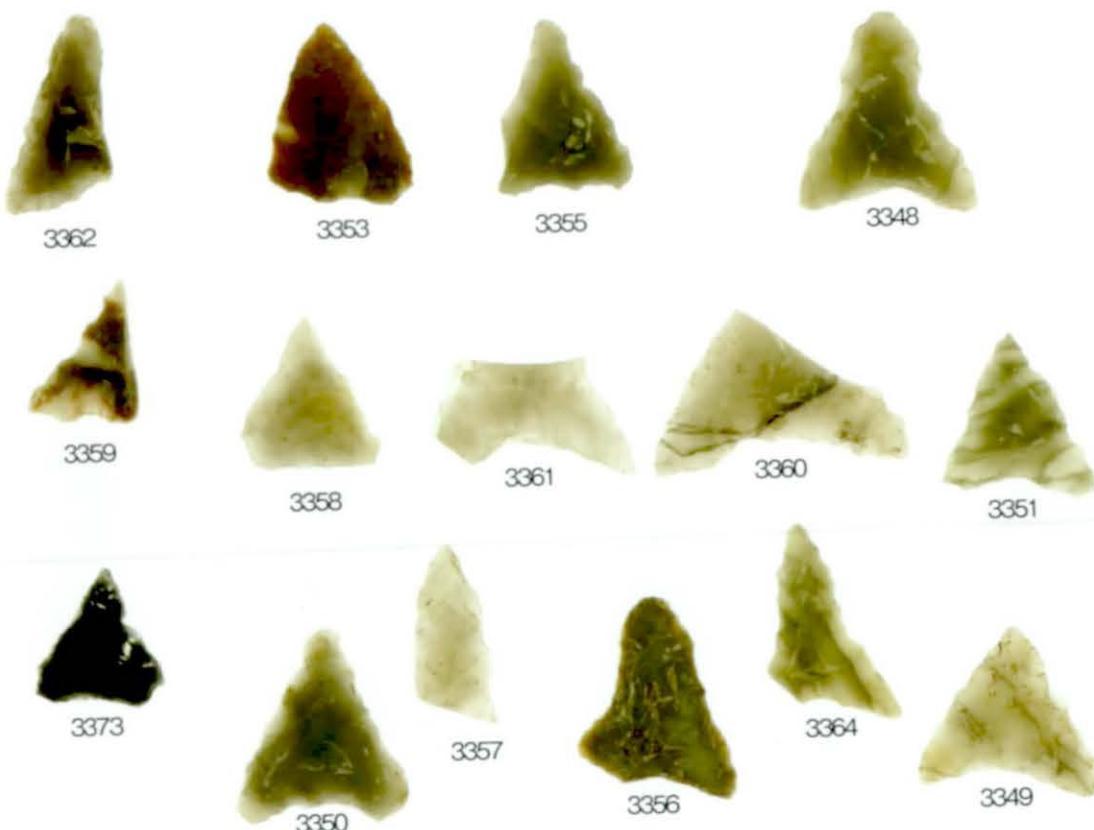
図版19 Ⅱ地区出土土製品



図版20 Ⅱ地区出土滑石製石鍋片



图版21 III地区出土土器



图版22 III地区出土石器

---

名護市文化財調査報告書-18

## 屋部前田原貝塚

発行日 2007年3月30日  
発行・編集 名護市教育委員会

〒905-0014 沖縄県名護市港二丁目1番1号  
名護中央公民館内（文化課文化財係）  
電話0980-53-3012

印刷 沖縄高速印刷株式会社  
南風原町字兼城577番地  
電話098-889-5513

---

